秋田県文化財調査報告書第338集

古館堤頭Ⅱ遺跡

——一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2002・3

秋田県教育委員会

古館堤頭Ⅱ遺跡

（ふるだてつつみがしらにいせき）

——一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書——

2002・3

秋田県教育委員会

空から見た古館堤頭Ⅱ遺跡(南→)

ＳＲ43埋設土器

ＳＩ115炉埋設土器

ＳＩ141 炉埋設土器

ＳＩ141出土土器

序

郷土の歴史と文化は、私たちがより良き未来を創造し、生きるための礎であり、先人の遺産である埋蔵文化財を保護し活用することは、現代に生きる私たちの重要な責務であります。

このたび、山本町～琴丘町間の地域交通網を支える一般県道森岳鹿渡線の踏切除却工事が計画され、その計画路線内には古館堤頭Ⅱ遺跡が確認されました。

秋田県教育委員会では、工事に先立って遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古館堤頭Ⅱ遺跡は縄文時代中期の集落跡であったことがわかりました。本書は、この発掘調査の成果をまとめたものであります。本県の歴史を研究する上で、本書がいささかでも役立ち、ひいては県民各位の文化財保護への御理解がいっそう深まることとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および本書を刊行するに至るまで、御協力をいただきました秋田県山本建設事務所、山本町教育委員会をはじめ関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成 14 年 3 月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　清

例　　言

1．本書は、一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、平成12年度(2000年度)に発掘調査した、秋田県山本郡山本町森岳字古館堤頭に所在する古館堤頭Ⅱ遺跡の調査成果を収めたものである。

3．発掘調査成果については、既にその一部が公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．本書に使用した図は、秋田県山本建設事務所・秋田県建設交通部提供の1,000分の1「工事路線計画図」、国土交通省国土地理院発行の50,000分の1地形図「森岳」と25,000分の1地形図「森岳」「鹿渡」である。

5．遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』1999年版に拠った。

6．本書に使用した航空写真は、山本町教育委員会および山本町建設課の提供によるものである。

7．本書第5章の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した分析報告である。

8．発掘調査ならびに本書の刊行にあたって、次の方々や諸機関より御指導、御助言を賜った。記して、感謝申し上げます。〔敬称略〕

伊藤種秋（秋田県文化財保護協会）、岩見誠夫（秋田県文化財保護協会）、川村正（宮城県七ヶ浜町教育委員会）、富樫泰時（秋田県立博物館）、中村良幸（岩手県大迫町教育委員会）、永瀬福男（能代市立渟城第一小学校）、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、山本町教育委員会

9．本書の草稿執筆および図面作成は、下記のように分担した。

第1～3章　はじめに・遺跡の環境・発掘調査の概要 … 石澤宏基
第4章　調査の記録 …… 利部　修・石澤宏基
第6章　まとめ …… 利部　修・石澤宏基
各種図面の作成 …… 土田　宏・横山香菜子・武田　洋
佐々木克巳・菅原廣也・内藤亜樹子

10．本書の編集は、利部修と石澤宏基が行った。

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に連番としたが、発掘調査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

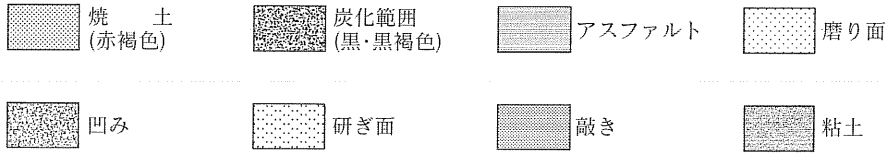
ＳＩ …… 竪穴住居跡	ＳＢ …… 掘立柱建物跡	ＳＫＩ …… 竪穴状遺構
ＳＫＦ …… フラスコ状土坑	ＳＫ …… 土　　坑	ＳＲ …… 土器埋設遺構
ＳＮ …… 焼土遺構	ＳＤ …… 溝　　跡	ＳＸＱ …… 石器集中部
ＳＫＰ …… 柱穴様ピット	ＳＸ …… 性格不明遺構	

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡に伴う柱穴、Ｓは礫を示すものである。

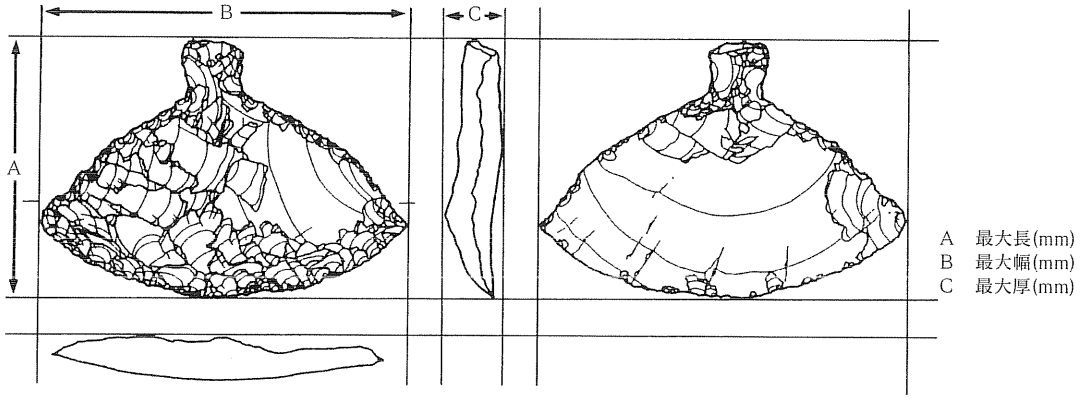
2．土層番号に用いた数字は、基本層序にローマ数字を、遺構土層に算用数字を使用して区別した。

3．挿図中の遺物番号は、土器・石器ごとに連続する番号を付した。石器の番号にはＳを付した。

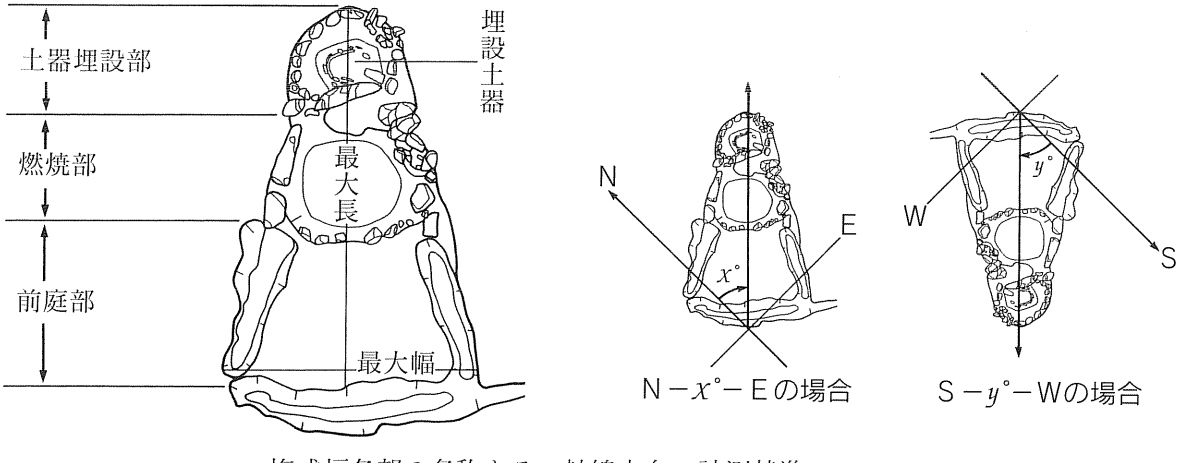
4．挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外は個々の挿図中に示した。



5．石器の計測部位は下図のとおりである。計測値の単位は長さ・幅・厚さがmm、重さがｇである。



6．複式炉の各部名称は、煩雑さを避けるため左下図のように記述した。また、複式炉の軸線方向については、炉の最大長を示す軸線と、南北の方位が交わる角度を右下図のように計測し、その値をＮ－x°－Ｅ や Ｓ－y°－Ｗ のように表した。



複式炉各部の名称とその軸線方向の計測基準

目　　次

序 …… i
例　言 …… ii
凡　例 …… iii
目　次 …… iv
挿図目次 …… v
図版目次 …… vi
表　目次 …… viii

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査要項 …… 2
第2章　遺跡の概要 …… 3
　第1節　遺跡の位置と立地 …… 3
　第2章　歴史的環境 …… 3
第3章　発掘調査の概要 …… 9
　第1節　遺跡の概観 …… 9
　第2節　調査の方法 …… 9
　第3節　調査の経過 …… 9
　第4節　整理作業の方法と経過 …… 10
第4章　調査の記録 …… 15
　第1節　基本層序 …… 15
　第2節　検出遺構と遺物 …… 15
　　1　竪穴住居跡 …… 16
　　2　竪穴状遺構 …… 75
　　3　掘立柱建物跡 …… 75
　　4　フラスコ状土坑 …… 77
　　5　土　　坑 …… 77
　　6　土器埋設遺構 …… 80
　　7　焼土遺構 …… 82
　　8　石器集中部 …… 88
　　9　溝　　跡 …… 88
　　10　性格不明遺構 …… 88
　　11　柱穴様ピット …… 150
第4章　調査の記録
　第3節　遺構外出土遺物 …… 150
　　1　遺構外出土土器 …… 150
　　2　遺構外出土石器 …… 150
第5章　自然科学分析 …… 160
　第1節　放射性炭素年代測定 …… 160
　第2節　出土炭化材の樹種同定 …… 161
第6章　まとめ …… 164

図　　版
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡の位置 …… 1
第 2 図　地形区分図 …… 4
第 3 図　周辺遺跡位置図 …… 6
第 4 図　路線と遺跡 …… 11
第 5 図　遺構配置図(１)調査区南側 …… 12
　　遺構配置図(２)調査区全体 …… 13･14
第 6 図　基本土層断面図 …… 15
第 7 図　ＳＩ01 竪穴住居跡 …… 17
第 8 図　ＳＩ05 竪穴住居跡 …… 19
第 9 図　ＳＩ07 竪穴住居跡 …… 21
第 10 図　ＳＩ08 竪穴住居跡 …… 23
第 11 図　ＳＩ09 竪穴住居跡 …… 25
第 12 図　ＳＩ10・19 竪穴住居跡 …… 27
第 13 図　ＳＩ11 竪穴住居跡 …… 28
第 14 図　ＳＩ14 竪穴住居跡 …… 30
第 15 図　ＳＩ15 竪穴住居跡 …… 32
第 16 図　ＳＩ16 竪穴住居跡 …… 34
第 17 図　ＳＩ21・34・35・36・102・110 竪穴住居跡 … 36
第 18 図　ＳＩ21・35 竪穴住居跡 …… 37
第 19 図　ＳＩ21・34・110 竪穴住居跡 …… 38
第 20 図　ＳＩ35・36・102 竪穴住居跡 …… 40
第 21 図　ＳＩ22 竪穴住居跡 …… 41
第 22 図　ＳＩ23 竪穴住居跡 …… 43
第 23 図　ＳＩ25・28 竪穴住居跡(１) …… 45
第 24 図　ＳＩ25・28 竪穴住居跡(２) …… 47
第 25 図　ＳＩ26 竪穴住居跡 …… 48
第 26 図　ＳＩ27 竪穴住居跡 …… 50
第 27 図　ＳＩ29・30 竪穴住居跡 …… 54
第 28 図　ＳＩ89・116 竪穴住居跡 …… 56
第 29 図　ＳＩ115・143 竪穴住居跡 …… 59･60
第 30 図　ＳＩ134 竪穴住居跡 …… 63
第 31 図　ＳＩ135 竪穴住居跡 …… 65
第 32 図　ＳＩ140 竪穴住居跡 …… 67
第 33 図　ＳＩ141 竪穴住居跡 …… 69･70
第 34 図　ＳＩ142 竪穴住居跡 …… 72
第 35 図　ＳＢ80 掘立柱建物跡,
　　ＳＫＦ144 フラスコ状土坑,
　　ＳＲ43 埋設土器,
　　ＳＸＱ04 石器集中部 …… 74
第 36 図　ＳＫ02・03・06・12・24・31 土坑 …… 76
第 37 図　ＳＫ42･70･131･132･137･138･139･146 土坑 … 78
第 38 図　ＳＮ17・18・20・40・41・45・51・52・90・91
　　焼土遺構 …… 81
第 39 図　ＳＮ111・112・113・114・130・133・136
　　焼土遺構 …… 83
第 40 図　ＳＸ13・147 性格不明遺構 …… 85
第 41 図　ＳＫＰ39～92 柱穴様ピット …… 86
第 42 図　ＳＫＰ93～148 柱穴様ピット …… 87
第 43 図　遺構内出土土器(１) …… 89
第 44 図　遺構内出土土器(２) …… 90
第 45 図　遺構内出土土器(３) …… 91
第 46 図　遺構内出土土器(４) …… 92
第 47 図　遺構内出土土器(５) …… 93
第 48 図　遺構内出土土器(６) …… 94
第 49 図　遺構内出土土器(７) …… 95
第 50 図　遺構内出土土器(８) …… 96
第 51 図　遺構内出土土器(９) …… 97
第 52 図　遺構内出土土器(10) …… 98
第 53 図　遺構内出土土器(11) …… 99
第 54 図　遺構内出土土器(12) …… 100
第 55 図　遺構内出土土器(13) …… 101
第 56 図　遺構内出土土器(14) …… 102
第 57 図　遺構内出土土器(15) …… 103
第 58 図　遺構内出土土器(16) …… 104
第 59 図　遺構内出土土器(17) …… 105
第 60 図　遺構内出土土器(18) …… 106
第 61 図　遺構内出土土器(19) …… 107
第 62 図　遺構内出土土器(20) …… 108
第 63 図　遺構内出土土器(21) …… 109
第 64 図　遺構内出土土器(22) …… 110
第 65 図　遺構内出土土器(23) …… 111
第 66 図　遺構内出土土器(24) …… 112
第 67 図　遺構内出土土器(25) …… 113
第 68 図　遺構内出土土器(26) …… 114
第 69 図　遺構内出土土器(27) …… 115
第 70 図　遺構内出土土器(28) …… 116
第 71 図　遺構内出土土器(29) …… 117
第 72 図　遺構内出土土器(30) …… 118
第 73 図　遺構内出土土器(31) …… 119
第 74 図　遺構内出土土器(32) …… 120
第 75 図　遺構内出土土器(33) …… 121
第 76 図　遺構内出土土器(34) …… 122
第 77 図　遺構内出土土器(35) …… 123
第 78 図　遺構内出土土器(36) …… 124
第 79 図　遺構外出土土器 …… 125
第 80 図　遺構内出土石器(１) …… 126
第 81 図　遺構内出土石器(２) …… 127
第 82 図　遺構内出土石器(３) …… 128
第 83 図　遺構内出土石器(４) …… 129
第 84 図　遺構内出土石器(５) …… 130
第 85 図　遺構内出土石器(６) …… 131
第 86 図　遺構内出土石器(７) …… 132
第 87 図　遺構内出土石器(８) …… 133
第 88 図　遺構内出土石器(９) …… 134
第 89 図　遺構内出土石器(10) …… 135
第 90 図　遺構内出土石器(11) …… 136
第 91 図　遺構内出土石器(12) …… 137
第 92 図　遺構内出土石器(13) …… 138
第 93 図　遺構内出土石器(14) …… 139
第 94 図　遺構内出土石器(15) …… 140
第 95 図　遺構内出土石器(16) …… 141
第 96 図　遺構内出土石器(17) …… 142
第 97 図　遺構内出土石器(18) …… 143
第 98 図　遺構内出土石器(19) …… 144
第 99 図　遺構内出土石器(20) …… 145
第 100 図　遺構内出土石器(21) …… 146
第 101 図　遺構内出土石器(22) …… 147
第 102 図　遺構内出土石器(23) …… 148
第 103 図　遺構内出土石器(24) …… 149
第 104 図　遺構外出土石器(１) …… 151
第 105 図　遺構外出土石器(２) …… 152
第 106 図　遺構外出土石器(３) …… 153
第 107 図　遺構外出土石器(４) …… 154
第 108 図　遺構外出土石器(５) …… 155

図　版　目　次

図版1　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(1)
1．SI01竪穴住居跡(南→)
2．SI01竪穴住居跡炉(東→)
図版2　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(2)
1．SI05竪穴住居跡(東→)
2．SI05竪穴住居跡炉(西→)
図版3　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(3)
1．SI07竪穴住居跡断面(西→)
2．SI07竪穴住居跡炉(北東→)
図版4　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(4)
1．SI08竪穴住居跡(南西→)
2．SI08竪穴住居跡炉(南西→)
図版5　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(5)
1．SI09竪穴住居跡(東→)
2．SI09竪穴住居跡炉(西→)
図版6　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(6)
1．SI10竪穴住居跡(西→)
2．SI10竪穴住居跡確認状況(西→)
図版7　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(7)
1．SI11竪穴住居跡遺物出土状況(北→)
2．SI11竪穴住居跡炉(東→)
図版8　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(8)
1．SI14竪穴住居跡(西→)
2．SI14竪穴住居跡炉(西→)
図版9　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(9)
1．SI15竪穴住居跡断面(西→)
2．SI15竪穴住居跡炉埋設土器断面(南東→)
図版10　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(10)
1．SI16竪穴住居跡断面(南→)
2．SI16竪穴住居跡炉(西→)
図版11　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(11)
1．SI19竪穴住居跡遺物出土状況(西→)
2．SI19竪穴住居跡確認状況(西→)
図版12　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(12)
1．SI21・110竪穴住居跡(南東→)
2．SI21・110竪穴住居跡炉・遺物出土状況(北東→)
図版13　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(13)
1．SI22竪穴住居跡(東→)
2．SI22竪穴住居跡炉(東→)
図版14　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(14)
1．SI23竪穴住居跡およびSKI33、SKF37(北東→)
2．SI23竪穴住居跡炉(東→)
図版15　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(15)
1．SI25竪穴住居跡(東→)
2．SI25竪穴住居跡炉(東→)
図版16　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(16)
1．SI26竪穴住居跡およびSK47・109、SKF32(南→)
2．SI26竪穴住居跡炉(東→)
図版17　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(17)
1．SI27竪穴住居跡(西→)
2．SI27竪穴住居跡炉(南→)
図版18　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(18)
1．SI28竪穴住居跡(東→)
2．SI28竪穴住居跡炉(東→)
図版19　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(19)
1．SI28竪穴住居跡炉(北→)
2．SI28竪穴住居跡遺物出土状況(南→)
3．SI28竪穴住居跡断面(南東→)
図版20　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(20)
1．SI29竪穴住居跡断面(南→)
2．SI29竪穴住居跡炉(南西→)
図版21　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(21)
1．SI30竪穴住居跡(南→)
2．SI30竪穴住居跡炉(東→)
図版22　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(22)
1．SI34竪穴住居跡炉確認状況(北東→)
2．SI34竪穴住居跡炉(北東→)
3．SI34竪穴住居跡炉断割(北西→)
図版23　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(23)
1．SI35・36竪穴住居跡(南東→)
2．SI35竪穴住居跡炉(北東→)

図版 24　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(24)
1．ＳＩ35・36 竪穴住居跡断面(南東→)
2．ＳＩ36 竪穴住居跡炉(北→)
図版 25　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(25)
1．ＳＩ89 竪穴住居跡(東→)
2．ＳＩ89 竪穴住居跡炉(南東→)
図版 26　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(26)
1．ＳＩ102 竪穴住居跡炉確認状況(東→)
2．ＳＩ102 竪穴住居跡炉(南西→)
図版 27　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(27)
1．ＳＩ115・143 竪穴住居跡(南東→)
2．ＳＩ115 竪穴住居跡断面(東→)
図版 28　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(28)
1．ＳＩ115 竪穴住居跡炉(北東→)
2．ＳＩ115 竪穴住居跡炉(南東→)
3．ＳＩ115 竪穴住居跡炉埋設土器出土状況(南西→)
図版 29　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(29)
1．ＳＩ116 竪穴住居跡(西→)
2．ＳＩ116 竪穴住居跡炉(北西→)
図版 30　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(30)
1．ＳＩ134 竪穴住居跡(東→)
2．ＳＩ134 竪穴住居跡炉断面(南東→)
図版 31　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(31)
1．ＳＩ135 竪穴住居跡(東→)
2．ＳＩ135 竪穴住居跡炉(北西→)
図版 32　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(32)
1．ＳＩ140 竪穴住居跡断面(東→)
2．ＳＩ140 竪穴住居跡炉(南東→)
図版 33　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(33)
1．ＳＩ141 竪穴住居跡(南東→)
2．ＳＩ141 竪穴住居跡炉(北西→)
図版 34　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(34)
1．ＳＩ141 竪穴住居跡炉(南西→)
2．ＳＩ141 竪穴住居跡炉(南西→)
図版 35　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(35)
1．ＳＩ142 竪穴住居跡(南東→)
2．ＳＩ142 竪穴住居跡炉(北西→)
図版 36　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(36)
1．ＳＩ143 竪穴住居跡(北東→)
2．ＳＩ143 竪穴住居跡炉(北東→)
図版 37　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(37)
1．ＳＢ80 掘立柱建物跡(南東→)
2．ＳＫＩ33 竪穴状遺構およびＳＩ23、ＳＫＦ37(北東→)
図版 38　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(38)
1．ＳＫ02 土坑(南→)
2．ＳＫ03 土坑(南東→)
3．ＳＫ06 土坑断面(西→)
図版 39　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(39)
1．ＳＫ06 土坑(西→)
2．ＳＫ12 土坑断面(南→)
3．ＳＫ24 土坑(東→)
図版 40　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(40)
1．ＳＫ31 土坑断面(東→)
2．ＳＫ31 土坑(東→)
3．ＳＫ42 土坑(東→)
図版 41　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(41)
1．ＳＫ109 土坑(南→)
2．ＳＫ131 土坑(南→)
3．ＳＫ132 土坑(北→)
図版 42　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(42)
1．ＳＫ137 土坑(北東→)
2．ＳＫ138 土坑(北→)
3．ＳＫ146 土坑(北東→)
図版 43　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(43)
1．ＳＫＦ32 フラスコ状土坑(西→)
2．ＳＫＦ37 フラスコ状土坑(東→)
3．ＳＫＦ144 フラスコ状土坑(南→)
図版 44　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(44)
1．ＳＮ17 焼土遺構遺物出土状況(北東→)
2．ＳＮ17 焼土遺構断面(北東→)
3．ＳＮ18 焼土遺構断面(南西→)
図版 45　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(45)
1．ＳＮ20 焼土遺構遺物出土状況(西→)
2．ＳＮ41 焼土遺構確認状況(南→)
3．ＳＮ45 焼土遺構確認状況(南→)

図版46　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(46)
1．SN90 焼土遺構断面(南東→)
2．SN111 焼土遺構断面(南→)
3．SN112 焼土遺構断面(西→)
図版47　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(47)
1．SN113 焼土遺構断面(東→)
2．SN114 焼土遺構断面(北西→)
3．SN118 焼土遺構確認状況(北→)
図版48　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(48)
1．SN130 焼土遺構確認状況(東→)
2．SN133 焼土遺構断面(西→)
3．SN136 焼土遺構断面(南→)
図版49　古館堤頭Ⅱ遺跡検出遺構(49)
1．SXQ04 石器集中部遺物出土状況(南→)
2．SX13 性格不明遺構遺物出土状況(東→)
3．SX147 性格不明遺構遺物出土状況(南→)
図版50　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(1)
図版51　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(2)
図版52　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(3)
図版53　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(4)
図版54　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(5)
図版55　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(6)
図版56　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(7)
図版57　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(8)
図版58　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(9)
図版59　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(10)
・遺構外出土土製品
図版60　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(11)
図版61　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内出土土器(12)
図版62　古館堤頭Ⅱ遺跡遺構内外出土磨製石斧・石製品
図版63　古館堤頭Ⅱ遺跡出土炭化材樹種(1)
図版64　古館堤頭Ⅱ遺跡出土炭化材樹種(2)

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧 …… 7
第2表　柱穴様ピット計測一覧 …… 85
第3表　石器計測一覧(1) …… 156
第4表　石器計測一覧(2) …… 157
第5表　石器計測一覧(3) …… 158
第6表　石器計測一覧(4) …… 159
第7表　放射性炭素年代測定結果 …… 161
第8表　出土炭化材樹種同定結果 …… 162

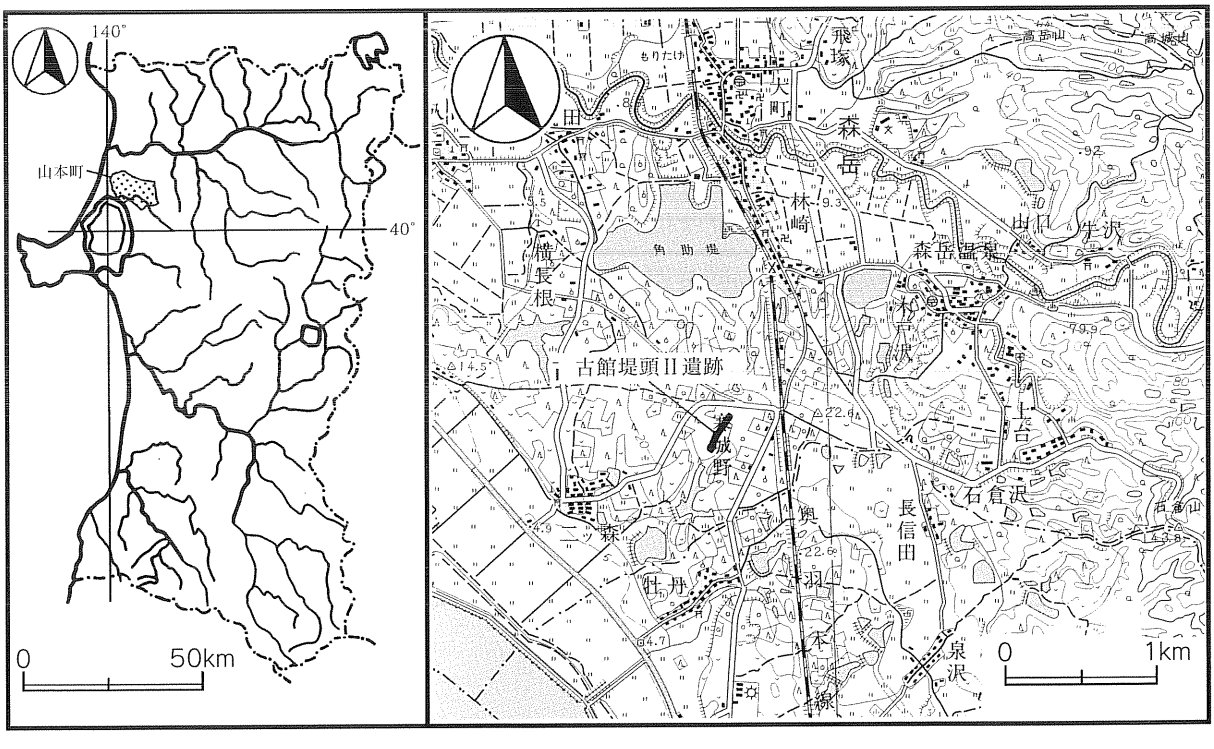
第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過（第１・４図）

一般県道森岳鹿渡線は、山本町森岳字東堤沢地内を起点とし、琴丘町鹿渡字昼寝道下地内を終点とする延長4.039kmの道路である。この県道の起点は主要地方道能代五城目線と接続し、終点は国道７号線に接続しており、地域住民にとっては日常生活の交通を支える道路として利用されている。しかし、県道とＪＲ奥羽本線が交差する森岳踏切は、常時交通量が多く幅員も狭い上に道路の進入角度が急であるため、地域交通網の安全性・利便性を高める必要から、踏切の除却工事事業が計画された。

本事業の計画路線内には、埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性があったため、工事実施者である秋田県山本土木事務所（当時：現山本建設事務所）は、文化財保護法に基づき事実確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導を依頼した。これを受けて、秋田県教育庁文化課（当時：現教育庁生涯学習課文化財保護室）は平成８年４月に遺跡分布調査を行い、埋蔵文化財包蔵地である古館堤頭Ⅱ遺跡の存在を確認した。そのため、今後は遺跡の範囲確認調査が必要なこと、範囲確認調査の結果、遺跡の記録保存が必要な場合は、発掘調査を実施すべきであることを回答した。こののち、平成11年12月および平成12年３月に、秋田県埋蔵文化財センターが遺跡の範囲確認調査を実施したところ、縄文時代の遺構と遺物が多数確認された。

以上の経過により、平成12年５月22日から10月６日までの期間、秋田県埋蔵文化財センターが古館堤頭Ⅱ遺跡の発掘調査を実施することになった。



第１図　遺跡の位置

第2節　調査要項

遺　跡　名　古館堤頭Ⅱ遺跡（ふるだてつつみがしらにいせき）：遺跡略号　3ＨＤＴＧⅡ
遺跡所在地　秋田県山本郡山本町森岳字古館堤頭10－2外
（北緯40度4分41秒、東経140度4分36秒）
調査期間　平成12年5月22日(月) ～ 10月6日(金)
調査目的　一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財発掘調査
調査面積　5,050㎡
調査主体者　秋田県教育委員会
調査担当者　利部　修（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　科　長）
石澤　宏基（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　学芸主事）
土田　宏（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　非常勤職員）
横山香菜子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　非常勤職員）
佐々木克巳（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　非常勤職員）
菅原　廣也（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　非常勤職員）
武田　洋（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　非常勤職員）
内藤亜樹子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科　非常勤職員）
総務担当者　佐藤　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課　総務課長）
佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主　事）
八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主　事）
成田　誠（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主　事）
調査協力機関　秋田県山本建設事務所　山本町教育委員会

≪参考文献≫

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』1990(平成2)年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成9)年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集　2000(平成12)年
山　本　町『山本町史』1979(昭和54)年
山本町教育委員会『古館堤頭遺跡発掘調査報告書』1977(昭和52)年
日本考古学協会『日本考古学年報29(1976年版)』1978(昭和53)年

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と立地（第１・２図）

古館堤頭Ⅱ遺跡は八郎潟残存湖の北東部、ＪＲ奥羽本線森岳駅の南方約2.5kmの地点に位置する。この八郎潟残存湖沿岸の地域では、耕作地確保のための大規模な地形改変が繰り返され、現在に至っている。農業用水を確保するため各所に残された堤は、旧来の沢筋を堰き止めて作られており、それを追うことで原地形を復元することができる。本遺跡は、古館堤と呼ばれる農業用堤の東に位置し、堤の堤頭部に立地している。堤自体は後世に沢を堰き止めて構築されているため、下刻による小谷状地形に臨む小丘陵を呈している。

本遺跡の立地する森岳段丘は、砂層（砂礫層）で構成される。これは温暖な環境下における沿岸性堆積物と考えられており、その層厚は５m以上とされている。下位の段丘面である金光寺野段丘構成層から降下火山灰（Toya）が検出されていることから、その上下関係より南関東における下末吉段丘に相当するものと考えられる。本遺跡における地山（Ⅴ層）は、段丘構成層の上に堆積する風成土であることが、平成６年の琴丘町家の下遺跡発掘調査の際に確認されている。

発掘調査前の現況は、遺跡の道路工事用地にかかる部分のほぼ全域が松の植林地であった。この松林は平成11年の範囲確認調査に先立って伐採され、調査区の東西両側にのみ林立する。また調査区の南辺は前述の堤頭部となっているため、一部水没している。

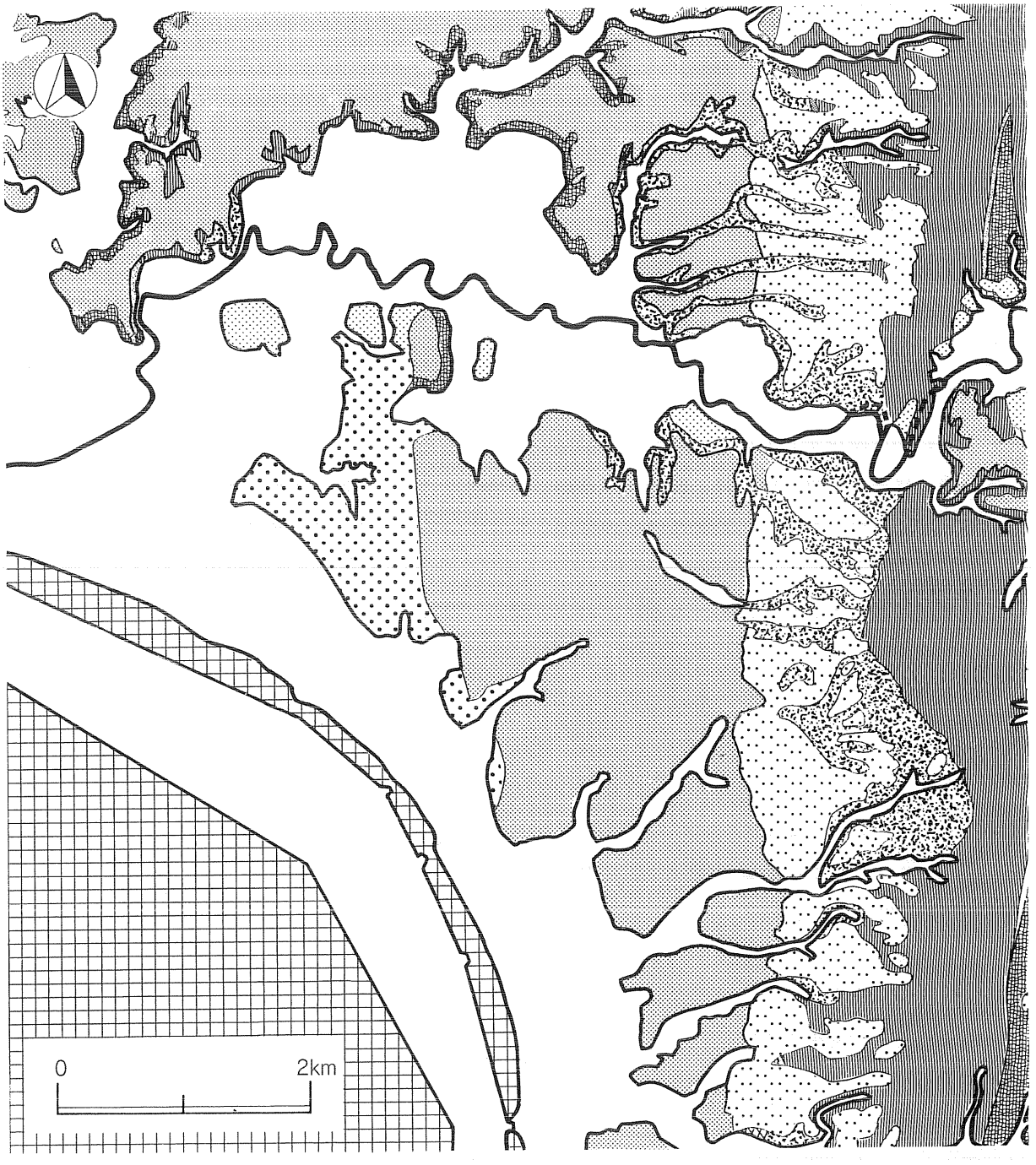
第２節　歴史的環境（第３図、第１表）

古館堤頭Ⅱ遺跡を中心とした半径15km圏内には、多数の遺跡が存在する。特に山本町に接する琴丘町では近年、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る遺跡（狐森遺跡・小林遺跡・堂の下遺跡・兵ヶ沢遺跡など）の発掘調査が行われている。

旧石器時代の遺跡としては、山本町外岡と能代市浅内にまたがる逆川遺跡がある。1981（昭和56）年の範囲確認調査で石刃・石核・剥片など約20点の石器が出土した。此掛沢Ⅱ遺跡では米ヶ森型台形石器やナイフ型石器・石刃などが出土した。館下Ⅰ遺跡では、石刃技法によって剥取された縦長剥片を使用したナイフ形石器が２点出土した。いずれも杉久保型ナイフ形石器に類似する。鴨子台遺跡では、ナイフ型石器・彫器・掻器などが出土した。家の下遺跡（Ａ）では、縦長剥片素材のナイフ形石器や米ヶ森型台形石器を主体とする石器群が出土し、ＡＴ降灰（BP25,000年前後）以前の時期が想定されている。なお、秋田県内で確認されている旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代のものと考えられ、前期～中期旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡では、草創期の資料として上述の鴨子台遺跡から出土した局部磨製石斧がある。長さ19.8cm×幅5.8cm×厚さ2.5cmの大型品で、表面の研磨は器長の１／３以上に及び裏面の研磨が刃縁から２cm程まで及んでいる。

早期の遺跡では、早期末から前期初頭の集落跡である寒川Ⅰ遺跡がある。竪穴住居跡７軒や陥し穴



r　八郎潟干拓地
t d4　礫
t d3　泥及び礫
t d2　礫・砂及び泥
t d1　砂
t S / t3　シルト岩 酸性凝灰岩及び砂質凝灰岩
t 2　酸性軽石凝灰岩及び酸性細粒
Fm　暗灰色泥岩
t 1　酸性軽石凝灰岩及び酸性細粒
O m　硬質泥岩
K m　泥岩及び酸性凝灰岩

第２図　地形区分図

などが検出され、内外両面に縄文が施された尖底土器やトランシェ様石器が出土している。兵ヶ沢遺跡（18-8）では遺構外から早稲田5・6類に並行する土器が出土し、早期末から前期初頭の様相を示している。

前期の遺跡では、県指定史跡である萱刈沢貝塚や萱刈沢Ⅱ遺跡がある。萱刈沢貝塚は前期末葉から中期前葉にかけての貝塚遺跡であり、検出されたフラスコ状土坑からは人骨や埋葬された犬の骨、ヤマトシジミの貝層が確認された。萱刈沢Ⅱ遺跡では、ＳＩ17竪穴住居跡より前期末から中期の土器が伴出している。上述の兵ヶ沢遺跡（18-8）では、前期前葉から中葉の竪穴住居跡2軒と前期の陥し穴1基が検出された。このほか米代川北岸には、大型住居跡が検出された杉沢台遺跡があり、縄文前期後半の集落像を示した貴重な遺跡として1981（昭和56）年に国指定史跡となっている。

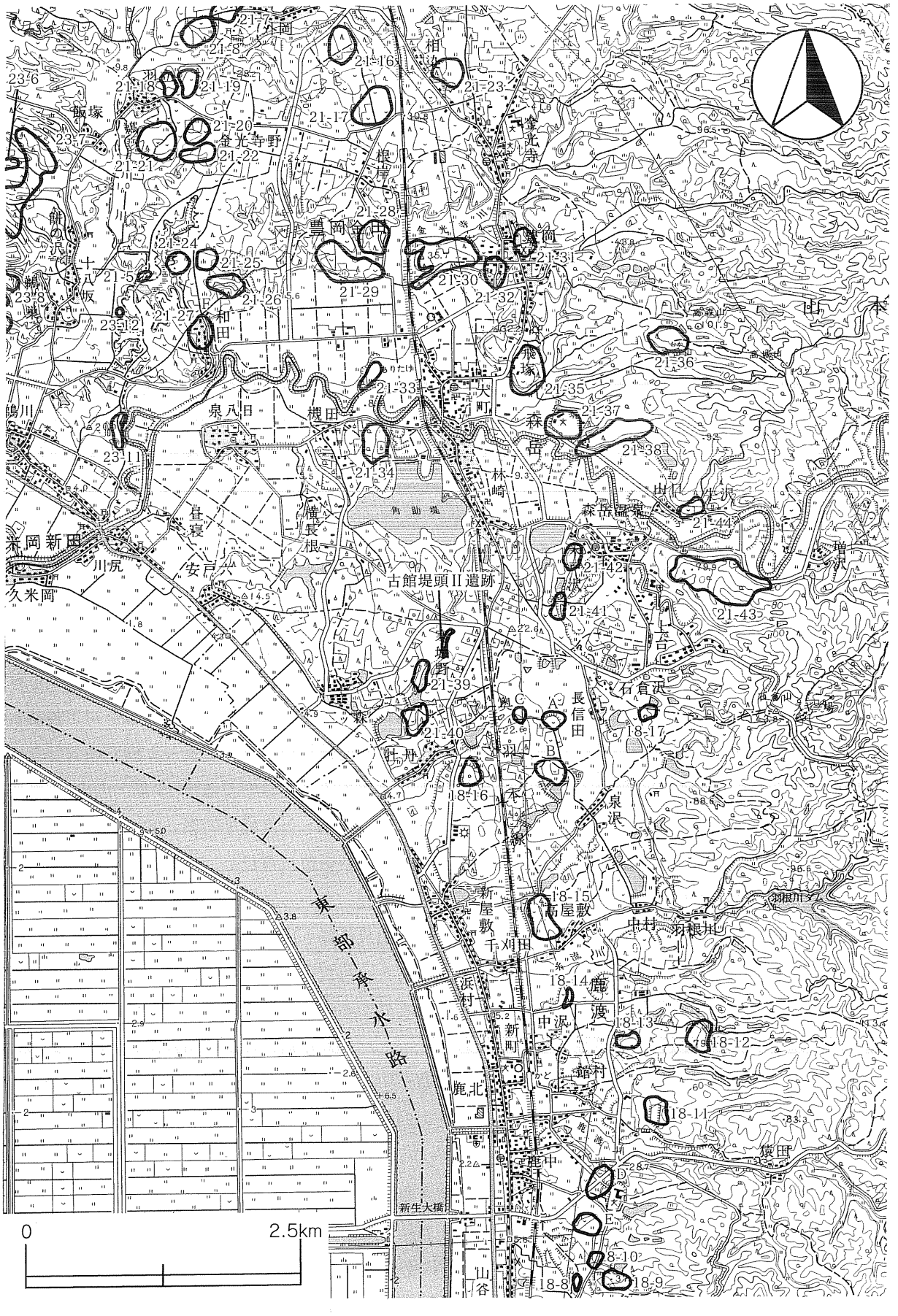
中期を主体とする遺跡では、本遺跡に最も近接する古館堤頭遺跡がある。1976（昭和51）年に山本町教育委員会によって発掘調査が行われ、竪穴状遺構1軒とフラスコ状ピット2基が検出された。遺物は、竪穴状遺構から出土した土器が大木7b式、円筒上層ｃ・ｄ式に、フラスコ状ピットから出土した土器は円筒下層ｃ・ｄ式、円筒上層ａ・ｃ・ｄ式に比定されている。遺構外からは土偶の頭部が出土した。このほかには、上述の萱刈沢貝塚、萱刈沢Ⅱ遺跡、館下Ⅰ遺跡、家の下遺跡（Ａ）などがある。

後期の遺跡では、捨て場が確認された萱刈沢Ⅰ遺跡、後期後葉から晩期前葉の遺物が出土している高石野遺跡がある。また、上述の家の下遺跡（Ａ）では、後期初頭から前葉を主体とする土坑・フラスコ状土坑が76基検出されている。

晩期の遺跡では、県指定史跡である能代市柏子所貝塚がある。土坑と貝塚が検出され、土坑からは8体の人骨が見つかったことから、当時の埋葬方法を知る貴重な資料となった。このほかに土製品として土笛が4点出土した高石野遺跡が著名である。しかし本遺跡周辺ではまとまった資料に欠ける。

晩期末葉から弥生時代の遺跡としては八竜町館の上遺跡がある。土器埋設遺構24基・土坑56基が検出され、刷毛目主体の調整を施し、平行沈線文や列点文を多用した文様を特徴とする遠賀川系土器が多く出土した。特に土器埋設遺構は大型の壺形・甕形土器を正位に埋設し、土器底部に穿孔があることから土器棺墓と判断される。この館の上遺跡と一部重複しながら隣接する館の上館遺跡でも遠賀川系土器が出土し、弥生時代終末に位置付けられる天王山式土器も出土している。また、平成12年に発掘調査された山本町東飛塚館跡や井川町越雄遺跡でも、遠賀川系土器を用いた土器棺墓が検出された。秋田県内出土の遠賀川系土器については、これまで若美町横長根Ａ遺跡や秋田市地蔵田Ｂ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、大館市諏訪台Ｃ遺跡などで確認されていたが、近年新たな出土事例が加わりつつある。能代市寒川Ⅰ遺跡では捨て場から弥生時代前葉の土器が出土した。続縄文文化期の遺跡としては能代市寒川Ⅱ遺跡がある。6基の土坑墓が検出され、その形態や配置および出土遺物から北方地域との交流が想定される遺跡である。

古代の遺跡は、古墳時代から奈良時代までに比定される明確な出土資料が、本遺跡周辺では確認されていない。平安時代の遺跡としては寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡、十二林遺跡、福田遺跡、扇田谷地遺跡（23-11）などがある。これらの遺跡からは竪穴住居跡、掘立柱建物跡のほか、土器焼成遺構が検出され、土師器や須恵器が検出されている。十二林遺跡では板塀の痕跡、地下式の須恵器窯跡および半地下式炭窯が検出された。窯跡からは須恵器の坏・長頸瓶・甕・大甕が出土した。また、製鉄関連



第3図　周辺遺跡位置図

地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物	備考
18- 8	兵ヶ沢	琴丘町鹿渡字兵ヶ沢48外	集落跡(縄文) 生産遺跡 (古代)	縄文時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、 陥し穴状遺構 古代：炭窯、焼土遺構 縄文時代：土器、石器 古代：土師器、鉄滓	秋田県文化財調査報告書第296集 『兵ヶ沢遺跡』－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－ 秋田県教育委員会 2000年
18- 9	館の越館	琴丘町鹿渡字狐森20他	館跡	空堀	秋田県文化財調査報告書第86集 『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会 1981年
18-10	狐森	琴丘町鹿渡字狐森11外	捨て場 集落跡	縄文時代：土器、石器 中世：陶器(珠洲系陶器)、瓦質土器 近世：煙管現代：銭貨 時期不明：土錘、陶錘、面子、 有孔土製品	秋田県文化財調査報告書第302集 『狐森遺跡』－県営は場整備事業（琴丘南地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－ 秋田県教育委員会 2000年
18-11	北牛潟	琴丘町鹿渡字北牛潟27-1	遺物包含地	縄文土器片	
18-12	古館城跡	琴丘町鹿渡字諏訪長根65	館跡	空堀、段築、井戸	秋田県文化財調査報告書第86集 『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会 1981年
18-13	諏訪長根	琴丘町鹿渡字諏訪長根79	遺物包含地	縄文土器片、須恵器片、石器	
18-14	鬼沢口	琴丘町鹿渡字鬼沢口184	遺物包含地	縄文土器片、石器片	
18-15	宝竜前	琴丘町鹿渡字宝竜前36	遺物包含地	住居跡、フラスコ状ピット、 縄文土器片(晩期)、石器	昭和50年第一次発掘調査 昭和51年第二次発掘調査
18-16	地蔵長根	琴丘町鹿渡字北蔵長根64	遺物包含地	フラスコ状ピット	
18-17	長信田	琴丘町鹿渡字長信田家後54-5	遺物包含地	石器	
21-7	外岡	山本町外岡字長者屋敷	遺物包含地	土師器片、鉄滓、石器	
21-8	崖ノ沢	山本町外岡字崖ノ沢	遺物包含地	土師器片	
21-16	長峰台	山本町外岡字長峰台	遺物包含地	縄文土器片、石器	
21-17	峯越	山本町外岡字峯越	遺物包含地	縄文土器片、石器	
21-18	館城	山本町豊岡金田字保竜	遺物包含地	縄文土器片、石器、仏像一体	
21-19	保竜館	山本町豊岡金田字保竜	館跡	土師器片、石器類	秋田県文化財調査報告書第86集 『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会 1981年
21-20	保竜Ⅰ	山本町豊岡金田字保竜	遺物包含地	土師器片	
21-21	保竜Ⅱ	山本町豊岡金田字保竜	遺物包含地	土師器片	
21-22	保竜Ⅲ	山本町豊岡金田字保竜	遺物包含地	土師器片	
21-23	柏柴	山本町豊岡金田字石持	遺物包含地	石器(石匙、石鋸)、土器片多数	
21-24	和田Ⅰ	山本町豊岡金田字駒ヶ鰐	遺物包含地	縄文土器片、石器類	
21-25	和田Ⅱ	山本町豊岡金田字駒ヶ鰐	遺物包含地	縄文土器片、石器類	
21-26	和田Ⅲ	山本町豊岡金田字駒ヶ鰐	遺物包含地	縄文土器片	
F	和田Ⅲ	山本町豊岡金田字和田225外	集落跡	縄文時代：竪穴住居跡、土坑、 土器埋設遺構、柱穴 古代：竪穴住居跡 時代不明：溝跡、柱列、柱穴 縄文時代：縄文土器、石器 古代：土師器、須恵器	『秋田県埋蔵文化財センター年報19(平成12年度)』秋田県埋蔵文化財センター 2001年
21-27	和田部落	山本町豊岡金田字和田	遺物包含地	縄文土器片、石槌、石皿	
21-28	根岸Ⅰ	山本町豊岡金田字根岸	遺物包含地	縄文土器片多数	
21-29	根岸Ⅱ	山本町豊岡金田字根岸	遺物包含地	土師器片、石器、石錘	
21-30	田倉館	山本町豊岡金田字田倉館	館跡	縄文土器片、石器出土	秋田県文化財調査報告書第86集 『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会 1981年
21-31	田の沢	山本町豊岡金田字田の沢	遺物包含地	縄文土器片、石器類	
21-32	豊岡	山本町豊岡金田字田倉館	遺物包含地	土師器片、石鏃、石匙	
21-33	小狭間館	山本町森岳字小狭間	館跡	古井戸、土塁	
21-34	鳥矢場	山本町森岳字鳥矢場	遺物包含地	縄文土器(晩期)、石器、石棒二本	
21-35	東飛塚館跡	山本町森岳字東飛塚118-1A外	集落跡 (弥生時代) 館跡(中世)	縄文時代：土坑、住穴 弥生時代：竪穴住居跡、土坑、 土器埋設遺構、焼土遺構、溝跡 中世：館跡 縄文時代：土器、石器 弥生時代：土器(土器棺)、石器	『秋田県埋蔵文化財センター年報19(平成12年度)』秋田県埋蔵文化財センター 2001年
21-36	ケゴ館	山本町森岳字上中沢	館跡	段築	秋田県文化財調査報告書第86集 『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会 1981年
21-37	関の台	山本町森岳字関の台	遺物包含地	縄文土器(壺)、石鏃等	
21-38	藤巻館	山本町森岳字館の沢	館跡	空堀4本	
21-39	古館堤	山本町森岳字古館堤頭	遺物包含地	縄文土器、石匙、石鏃	
21-40	古館堤頭	山本町森岳字古館堤頭	遺物包含地	竪穴状遺構、フラスコ状ピット、 土偶、縄文土器(中期)、石鏃、 石錘、石匙多数	『古館堤頭遺跡発掘調査報告書』 山本町教育委員会 1977年
21-41	東堤沢	山本町森岳字東堤沢	遺物包含地	縄文土器片、石匙、石鏃	
21-42	木戸沢	山本町森岳字木戸沢	遺物包含地	縄文土器片、石器	
21-43	木戸沢館	山本町森岳字木戸沢	館跡	空堀4本、土師器、須恵器	秋田県文化財調査報告書第86集 『秋田県の中世城館』 秋田県教育委員会1981年
21-44	塚の岱	山本町森岳字牛沢	遺物包含地	縄文土器片、石器類	
23- 5	上大沢	八竜町鵜川字上大沢	遺物包含地	弥生土器片	
23- 6	舞台沢Ⅰ	八竜町鵜川字舞台沢	遺物包含地	縄文土器片(中・後期)	
23- 7	舞台沢Ⅱ	八竜町鵜川字舞台沢	遺物包含地	縄文土器片(後期)	
23- 8	苗代沢台	八竜町鵜川字苗代沢台	遺物包含地	縄文土器片	
23-11	扇田谷地	八竜町鵜川字扇田谷地上笹岡39外	狩猟場(縄文) 集落跡 (平安・中世)	縄文時代：陥し穴 平安時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、 焼土遺構、土器焼成遺構、製鉄炉、 鍛冶遺構、炭窯跡、井戸跡、溝跡 中世：竪穴状遺構 縄文時代：土器、石器 平安時代：土師器、須恵器 中世：珠洲系陶磁器、銭貨	秋田県文化財調査報告書第283集 『扇田谷地遺跡』－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－ 秋田県教育委員会 1999年
23-12	放龍	八竜町鵜川字放竜	遺物包含地	縄縄文土器片	
A	家の下	琴丘町鹿渡字長信田家の下1-5外	集落跡(縄文)	縄文中期：竪穴住居跡 縄文後期：竪穴状遺構 縄文中期～後期：フラスコ状土坑 縄文中期～晩期：土坑、焼土遺構 縄文後期～晩期：土器埋設遺構 時期不明：溝跡 縄文時代(前期～晩期)：土器、土製品、石器	秋田県文化財調査報告書第256集 『県営は場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家の下遺跡(1)－』 秋田県教育委員会 1995年
			石器製作跡 (旧石器時代)	旧石器時代：ブロック(環状) 旧石器時代：ナイフ形石器(基部調整ナイフ、 台形様石器、米ヶ森型台形石器) 掻器、削器、抉入石器、礫器、 石刃、小型貝殻状剥片、石核	秋田県文化財調査報告書第275集 『家の下遺跡(2)』旧石器時代編－県営は場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－ 秋田県教育委員会 1998年
B	泉沢中台	琴丘町鹿渡字泉沢中台71外	集落跡(平安) 製鉄遺跡 (平安)	平安時代：掘立柱建物跡、板塀跡、柱列、井戸跡、土坑、焼土遺構、製鉄遺構、鉄滓捨場 近世：溝跡 縄文時代：土器、石器(石鏃、擦石等) 平安時代：土師器(坏、高台付坏、甕、鍋)、 須恵器(坏、皿、壺、甕)、 鞴の羽口、鉄滓、鉄塊系遺物 近世：磁器	秋田県文化財調査報告書第276集 『泉沢中台遺跡』－県営は場整備事業（琴丘地区）係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－ 秋田県教育委員会 1998年
C	中の沢	琴丘町鹿渡字中の沢48・63外	集落跡	縄文時代：土坑、フラスコ状土坑、焼土遺構、炉跡、溝跡、その他の遺構 時期不明：土坑、溝跡、その他の遺構 縄文時代：土器、石器(石鏃、石錐、石匙、石錘、打製石斧、不定形石器、微小剥離痕がある石器、石核、石錘、凹石、敲石、磨石、石皿)	秋田県文化財調査報告書第255集 『中の沢遺跡』 秋田県教育委員会 1995年
D	盤若台	琴丘町鹿渡字盤若台117-2外、 琴丘町鹿渡字盤若台121外	集落跡 墓域 生産跡	縄文中期：竪穴住居跡、土坑、 土器埋設遺構、陥し穴 平安時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、 竪穴状遺構、製鉄関連遺構 中世：方形周溝、火葬墓、井戸、鍛冶炉 近世・近代：耕作跡、溝 縄文中期：最花式土器、大木10式土器、石器 平安時代：土師器、須恵器、鉄滓、羽口 中世：中国製磁器、国産陶磁器、銭貨、木器 近世・近代：人骨、馬骨	秋田県文化財調査報告書第319集 『盤若台遺跡』－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－ 秋田県教育委員会 2001年
	盤若台	琴丘町鹿渡字盤若台141-1外、 琴丘町鹿渡字盤若台144-1外	集落跡 生産跡	中世：竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、 製鉄関連遺構、井戸跡、溝跡、 性格不明遺構 近世：性格不明遺構 中世：土師器、珠洲系陶器、陶磁器	秋田県文化財調査報告書第331集 『盤若台遺跡』－主要地方道琴丘上小阿仁線高速交通関連整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－ 秋田県教育委員会 2001年
E	金仏	琴丘町鹿渡字金仏31外 (第１次調査)	集落跡	竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、焼土遺構 掘立柱建物跡、柱列、溝状遺構、柱穴様ピット 性格不明遺構 縄文時代：土器、石器　平安時代：土師器 中世：須恵器系中世陶器　時代不明：土錘	『秋田県埋蔵文化財センター年報18(平成11年度)』 秋田県埋蔵文化財センター　2000年
		琴丘町鹿渡字金仏1外 (第２次調査)	墓域(縄文) 集落跡(中世)	縄文時代：土坑　古代以降：掘立柱建物跡、土坑 溝跡、火葬墓、鍛冶関連遺構・焼土遺構、井戸跡 時代不明：柱穴 縄文土器、石器、陶磁器、鉄製品、鍛冶関連遺物	『秋田県埋蔵文化財センター年報19(平成12年度)』 秋田県埋蔵文化財センター　2001年

第１表　周辺遺跡一覧

遺構が検出された遺跡には、寒川Ⅰ遺跡、扇田谷地遺跡（23-11)、泉沢中台遺跡（Ｂ)、盤若台遺跡（Ｄ)、堂の下遺跡、小林遺跡がある。

中世の遺跡としては、館の上館遺跡、館の上遺跡、金仏遺跡、狐森遺跡、堂の下遺跡、小林遺跡などがある。

【参考文献】

秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査 森岳・羽後浜田』1984（昭和59）年

通商産業省工業技術院地質調査所『森岳地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1図幅)』1985(昭和60)年

栗山知士「広域テフラからみた能代平野南部の中位段丘区分」『秋田地学』第46号　1996(平成8)年

内藤博夫「秋田県能代平野の段丘地形」『第四紀研究』第16巻第2号　1977(昭和52)年

秋田県教育委員会『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第62集　1979(昭和54)年

秋田県教育委員会『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第83集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57）年

秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集　1984（昭和59）年

秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第167集　1988（昭和63）年

秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』秋田県文化財調査報告書第178集　1989（平成元）年

秋田県教育委員会『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－鴨子台遺跡・八幡台遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第230集　1992（平成4）年

秋田県教育委員会『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第231集　1992（平成4）年

秋田県教育委員会『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－館の上館遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第240集　1994（平成6）年

秋田県教育委員会『県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　－家の下遺跡（1）－』
秋田県文化財調査報告書第256集　1995（平成7）年

秋田県教育委員会『家の下遺跡（2）　旧石器時代編　－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』
秋田県文化財調査報告書第275集　1998（平成10）年

秋田県教育委員会『泉沢中台遺跡－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』
秋田県文化財調査報告書第276集　1998（平成10）年

秋田県教育委員会『扇田谷地遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』
秋田県文化財調査報告書第283集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会『館の上遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』
秋田県文化財調査報告書第298集　2000（平成12）年

山　　本　　町『山本町史』1979（昭和54）年

山本町教育委員会『古館堤頭遺跡発掘調査報告書』1977（昭和52）年

能　　代　　市『能代市史 資料編 考古』1995（平成7）年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観（第５・６図）

古館堤頭Ⅱ遺跡は出羽山地の北東辺に立地し、その標高は20m前後である。本遺跡の発掘調査区は一般県道森岳鹿渡線の工事路線区域にあたり、南北方向に細長い5,050㎡の広さである(第５図)。なお、調査区の中央からやや南には、標高20m以下の沢が位置し、降雨時はこの沢部分が水没して発掘調査区を南北に二分した。よって、発掘調査時は、この沢部分より南側を「調査区南側」と呼び、同様に沢部分から北側を「調査区北側」と呼称した。これは本報告書中においても同様とした。

検出された遺構は、竪穴住居跡を主体として掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・フラスコ状土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・柱穴様ピットなどである。調査区内での遺構分布は、調査区南側で住居跡を中心に遺構が集中的に検出された。調査区北側でも遺構は検出されるものの、その密度は南側に比べて希薄である。出土した遺物は、ほとんどが縄文時代中期に属するものであった。

第２節　調査の方法

調査の方法は、一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事の路線中心杭 STA-No.66 を基点として真北方向をとり、４m四方の方眼（以下、グリッドと呼称する）杭を打設して、検出した遺構の位置を把握するグリッド法に拠った。基点杭にはMA50の名称を付し、西に行くに従いMB・MC・MD…、東に行くに従いLT・LS・LR…、北に行くに従い51・52・53…、南に行くに従い49・48・47…と、二桁のアルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を４m置きの各杭に明記した。この組み合わせた番号を示した各グリッドの名称は、南東隅の杭の番号を用いた。調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付して把握した。発掘調査中、精査による新知見によって欠番となった遺構番号もある。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成12年５月22日から同年10月６日までの期間に実施された。以下、調査日誌を基に調査の経過を簡潔に記す。

５月22日：五月晴れのなか、本日より発掘調査を開始した。調査は８月11日までに秋田県山本建設事務所に引き渡しが必要な調査区南側から粗堀りを着手した。この時点で、範囲確認調査時の試掘トレンチから既に土器片が散見されていた。

６月１日：ＳＩ01竪穴住居跡を確認し、最初の検出遺構とした。この後、調査区南端から徐々に標高の高い側に精査を進めると多数の土器片が出土し、竪穴住居跡のプランが確認されていった。

７月25日：ＳＩ28竪穴住居跡の精査を行っていたところ、住居の覆土中には多量の土器片が含まれ、完掘に近くなったところで炉(複式炉)が確認された。このころから、他の竪穴住居跡でも炉

が次々確認され、多数の柱穴様ピット群の中からＳＢ80掘立柱建物跡も検出された。

8月11日：当初の予定通り、調査区のＭＥ41杭～ＬＴ41杭ライン以南を秋田県山本建設事務所に引き渡した。この引き渡した調査区は、お盆明けに道路の建設工事が着手された。

8月14日～18日：お盆休み期間のため、現場作業を5日間休止した。

8月21日：現場の発掘調査作業を再開し、調査区北側の沢部分以北の粗堀りを開始した。

8月31日：ＳＩ115竪穴住居跡を検出した。この時点でかなり大きな住居跡となることが予想された。精査を進めたところＳＩ143と重複していることが確認された。

9月11日：ＳＩ141竪穴住居跡を検出した。精査を進めたところ炉が複数あることが確認された。

10月6日：発掘発掘調査機材を埋蔵文化財センターに発送し、リース物品を業者に返却して現場を撤収した。

第4節　整理作業の方法と経過

整理作業は、平成12年10月9日から秋田県埋蔵文化財センター本所にて行った。出土した遺物の洗浄・注記・分類・接合を開始し、この工程が終了した遺物から実測・採拓・トレースなどの作業を行った。遺構図面の浄書は、現場で記録した実測図（原図）とトータルステーションによる計測図を組み合わせて第2原図を作成した。第2原図の縮尺は基本的に20分の1とし、住居の炉のみ10分の1縮尺で作図を行った。また、報告書原稿を執筆するにあたって、例言に挙げた方々より多くの御教示をいただいた。

平成13年3月3日、鷹巣町・たかのす風土館を会場に開催された「平成12年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」にて、利部修調査第三科長が古館堤頭Ⅱ遺跡の発掘調査成果を発表した。会場では、古館堤頭Ⅱ遺跡から出土した遺物の展示を行った。

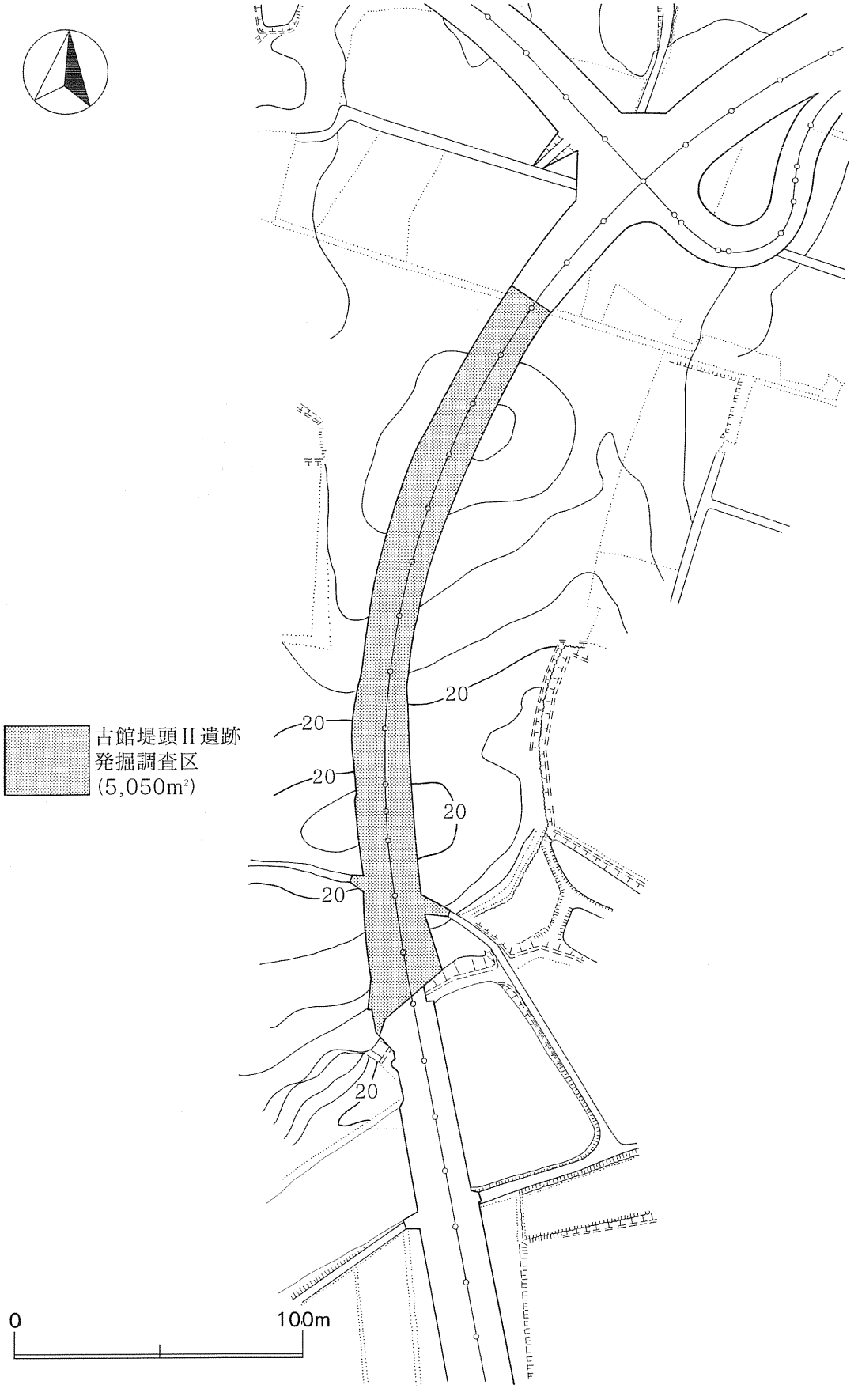
平成13年4月、人事異動および秋田県埋蔵文化財センターの組織改編に伴い、利部が秋田市にある中央調査課（旧：秋田中央分室）に勤務となり、石澤は仙北町にある南調査課（旧：調査課調査第一・二・三科）勤務となった。そのため、古館堤頭Ⅱ遺跡の整理作業は、引き続き本所にある南調査課で行った。利部と石澤が各々の勤務地で連絡を取りつつ協力して整理作業を進めた。

報告書の作成にあたって、遺跡の時期がほぼ縄文時代中期のなかに収まるため、遺構の掲載順序を検討した。その結果、まず種別毎の帰属を優先し、次に遺構番号の小さい順に配列することとした。遺構番号は検出順に付したものであるが、調査の工程は調査区南端から北端に向かって、北上しながら進めたことから、概ね北に行くほど遺構番号の数値が大きくなる。遺物については、遺構内出土遺物を先に掲載して遺構外出土遺物を後とした。また、平成13年の整理作業では、遺物実測の一部と遺物写真撮影を委託した。以上の経過を経て、多くの上司・同僚の指導と協力を受けつつ、古館堤頭Ⅱ遺跡の発掘調査成果を本書にまとめることができた。

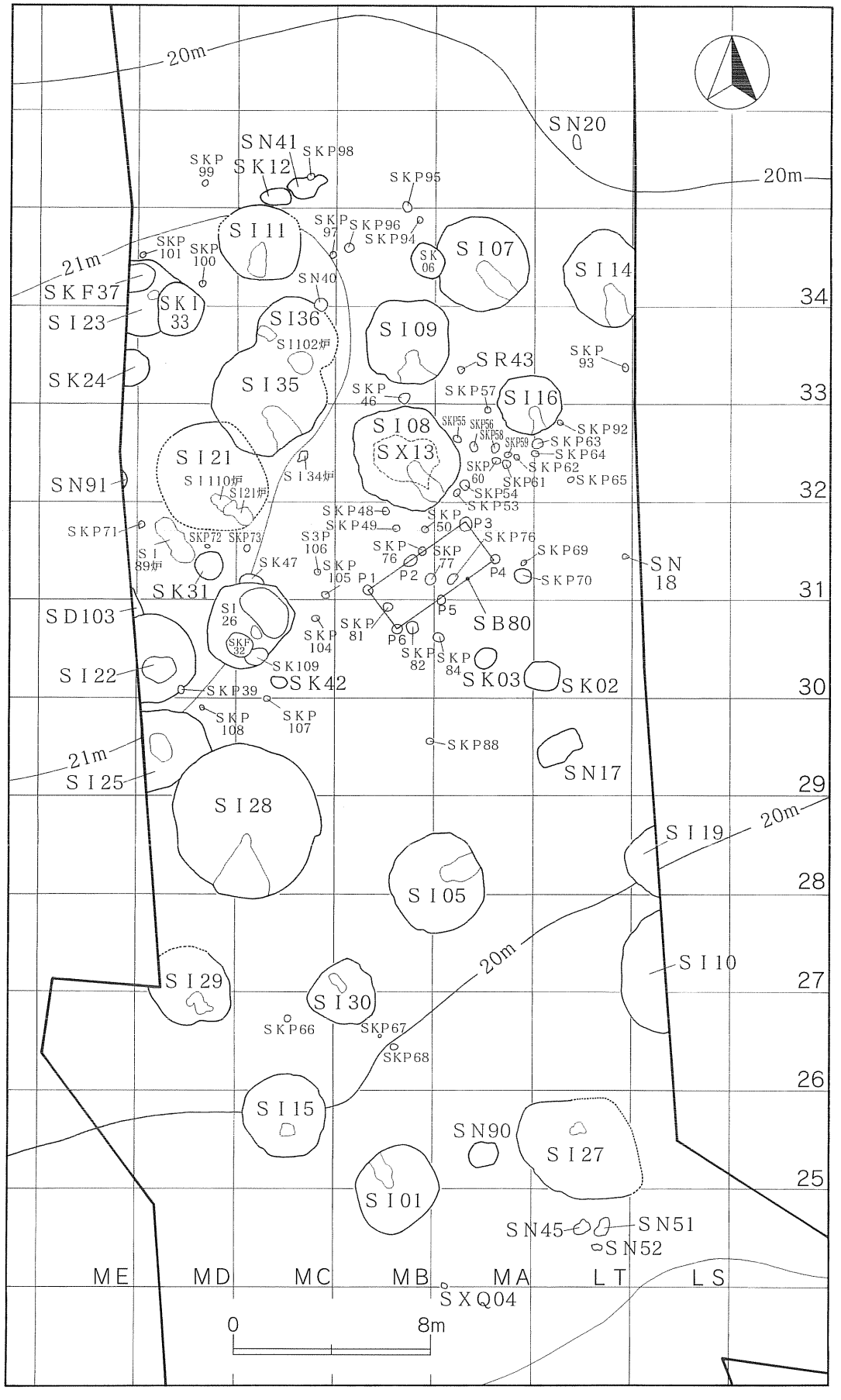
【参考文献】

秋田県埋蔵文化財センター『平成12年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』2001(平成13)年3月

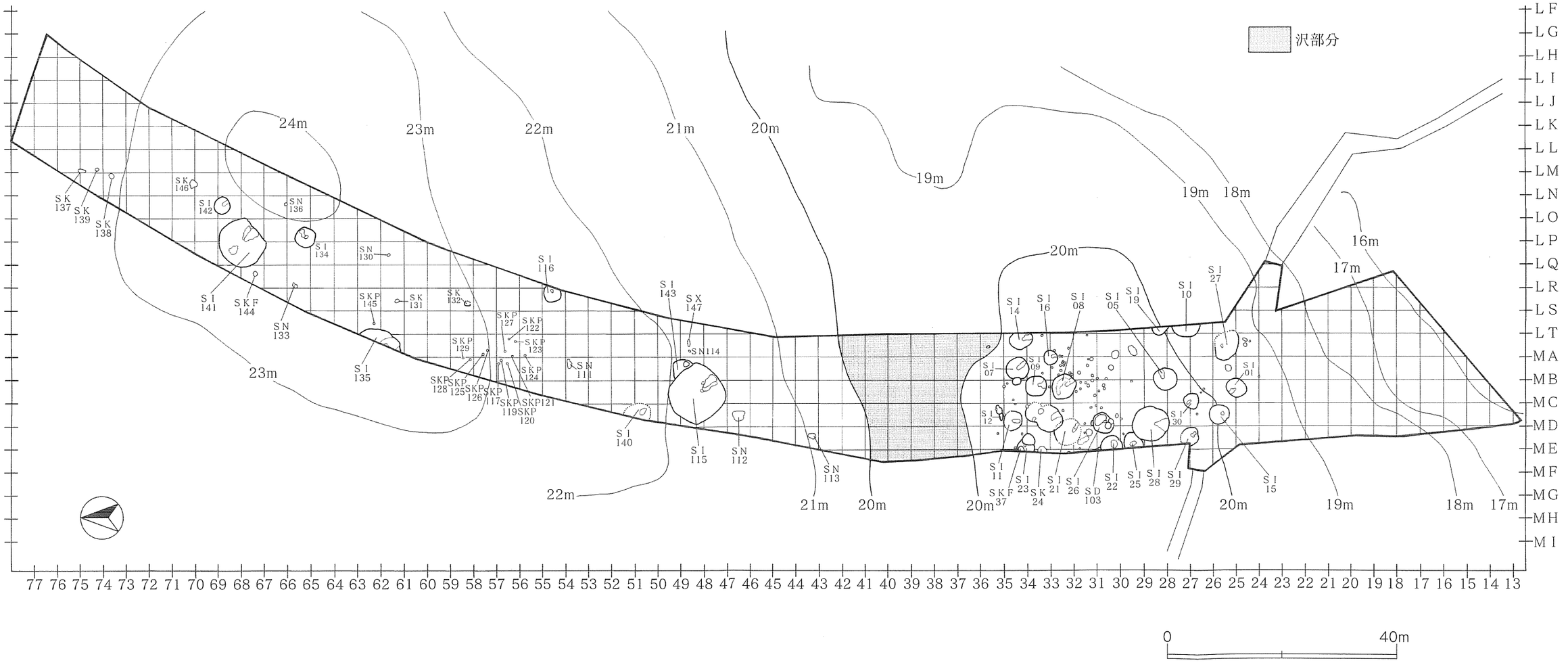
秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』第19号　2001(平成13)年3月



第4図　路線と遺跡



第５図　遺構配置図（１）調査区南側



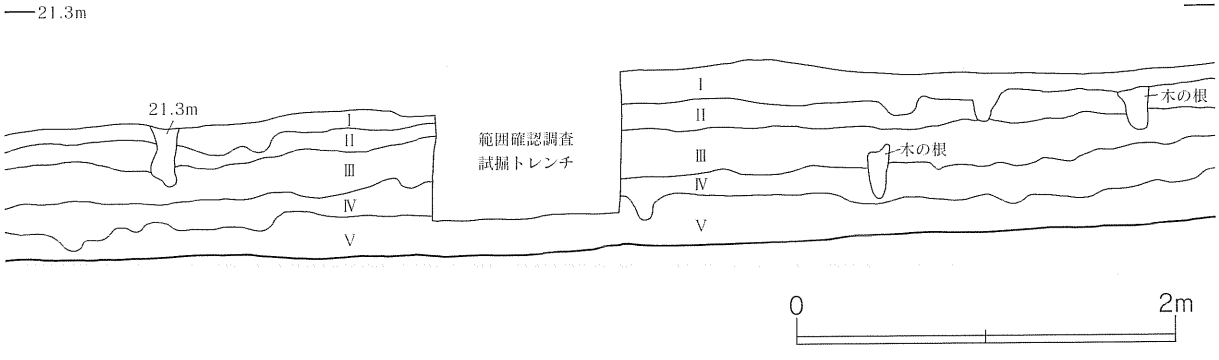
第５図　遺構配置図（２）調査区全体

第４章　調査の記録

第１節　基本層序（第６図）

古館堤頭Ⅱ遺跡の基本層序は、前年度（平成11年12月）実施の範囲確認調査時に試掘されたトレンチを精査・観察して確認した。その確認地点は、調査区南側のＭＣ29グリッド杭からＭＣ31グリッド杭のラインである。このライン内に試掘トレンチの交差があるため土層の中央が一部欠けている。発掘調査前の現況は松および杉の林野であった。確認した基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：黒色土　（10ＹＲ２／１）　表土・盛土。
Ⅱ層：黒色土　（10ＹＲ２／１）　締まり中、粘性中、粒径２～３mmの炭化物微量混入。
Ⅲ層：黒褐色土（10ＹＲ２／３）　締まりやや強、粘性やや強、粒径２～３mmの炭化物微量混入。
Ⅳ層：褐色土　（10ＹＲ４／４）　締まりやや強、粘性やや強、地山粒土・黒褐色土が微量混入。
Ⅴ層：黄褐色土（10ＹＲ５／６）　締まり強、粘性強、地山。
以上のうち、検出遺構の確認面は概ねⅢ層上面であった。



第６図　基本土層断面図

第２節　検出遺構と遺物

発掘調査の結果、古館堤頭Ⅱ遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡を中心に総数134遺構である。出土した遺物は、縄文土器および石器など整理用コンテナで130箱分である。発掘調査区（5,050㎡）内で検出した遺構の内訳は以下の通りである。

竪穴住居跡	34軒	竪穴状遺構	1基
掘立柱建物跡	1棟	フラスコ状土坑	3基
土坑	16基	土器埋設遺構	1基
焼土遺構	18基	石器集中部	1基
溝跡	1条	性格不明遺構	2基
柱穴様ピット	56基	【検出遺構数	計134遺構】

1　竪穴住居跡

ＳＩ01（第7・43・44・80・81図、図版1・50）

《位置と確認》　調査区南側のＭＡ24・25区およびＭＢ24・25区に位置し、Ⅲ層で確認した。本遺跡の中で最も南に位置する。

《規模と平面形》　平面形は楕円形を呈し、規模は長軸3.32ｍ×短軸3.14ｍ・深さ0.36ｍである。

《重　複》　重複はない。

《土　層》　4層に分層した。壁際で暗灰黄色土が堆積する以外は黒褐色土が主体を占める。

《壁》　壁はやや緩く傾斜して立ち上がる。

《床　面》　全体的に水平で、堅く締まっている。

《柱　穴》　柱穴は東壁寄り床面に1基だけ確認された。規模は長軸ｍ0.2×短軸0.18ｍ・深さ0.17ｍである。

《炉》　住居跡北西側に炉が付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成される複式炉である。規模は最大長1.28ｍ×最大幅0.68ｍ・最深部は0.26ｍで、平面形は燃焼部が大きく膨らむ不整形を呈する。炉の軸線方向はＳ－29°－Ｅある。

〈土器埋設部〉　口縁部を欠損した深鉢の胴部（第43図1）が、正立した状態で埋設されていた。この埋設土器の下端が土器埋設部の最深部になる。土器の周囲上面から燃焼部にかけて強く焼けていた。

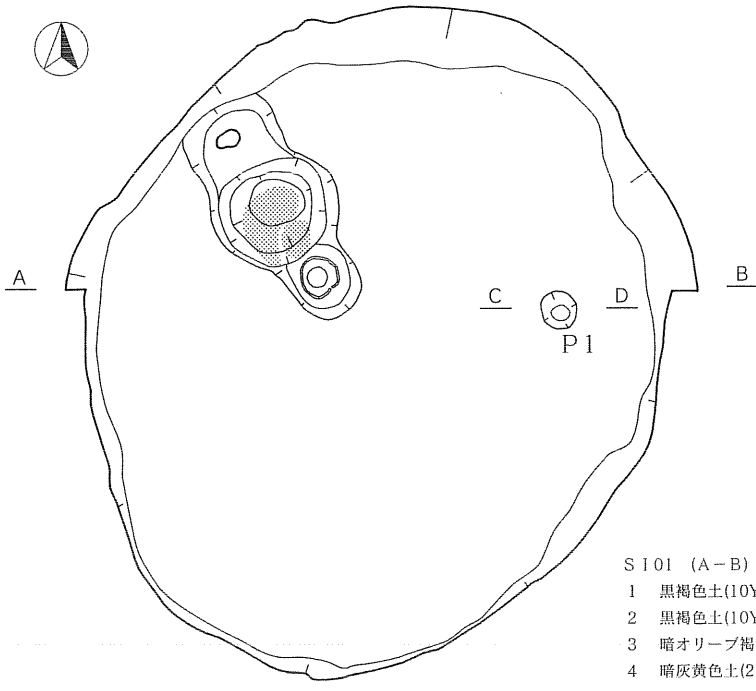
〈燃焼部〉　掘り方の平面形は略楕円形で、平坦な底面から土器埋設部や前庭部にかけて緩やかに立ち上がる。

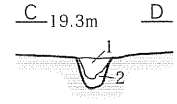
〈前庭部〉　住居の北西壁に接している。底面は平坦で、炉の中では最も浅い。

《出土遺物》　出土遺物には、第43・44図の土器と第80・81図の石器がある。土器は、深鉢（1～20）・壺(26)・ミニチュア土器(21～25・27～29)が出土した。

深鉢は、2～10が口縁部、11～13が胴部、1・14～20が底部破片である。1は胴部上位が張り、直線的に底部に至る。現存高22.9cm・底径7.5cmである。2～4は波状を呈する口縁で、2には刺突文がある。5～10は平口縁で無文帯をもつもの(5・8～10)、胴部には沈線で区画した無文帯と(10・11・14)、斜縄文のみを施すものがある。ほかに底面全体に多数の直線的な痕跡を示す例が多い(1・14～16・18～20)。壺は胴部下方が膨らむ形態である(26)。ミニチュア土器は、深鉢（21～25）・器台（27）・鉢（28）・台付浅鉢（29）がある。底面全体に、多数の直線的な痕跡を示すもの（21・23）がある。

石器は、石鏃（Ｓ1・Ｓ2）・石匙（Ｓ3）・掻器（Ｓ4）・削器（Ｓ5・Ｓ6）・擦石（Ｓ7）・石皿（Ｓ8・Ｓ9）が出土した。Ｓ1の石鏃は、全体に粗い調整を施すが、基部を両面から薄く仕上げている。裏面に主要剥離面を残す。Ｓ2は両面に丁寧な調整を施し、薄く仕上げている。Ｓ3の石匙は、表面の右側縁が膨らみ左側縁が直線的である。撮み部が双頭状をなす。Ｓ4の掻器は、主として刃部の裏面に細かい調整を施し、全体を丸く整えている。Ｓ5の削器は、表面左側縁に細かな調整を施し、薄い刃部を形成する。Ｓ6は、表面の両側縁に粗い調整を施す。Ｓ7は、礫の一面が広い範囲で擦り面として利用され、平坦面を形成する。Ｓ8は、扁平な礫周縁以外を平坦に加工したもので、縁は低く立ち上がる。Ｓ9は、平坦な礫を浅く彫り窪めたもので、約半分が欠損しており、本来楕円

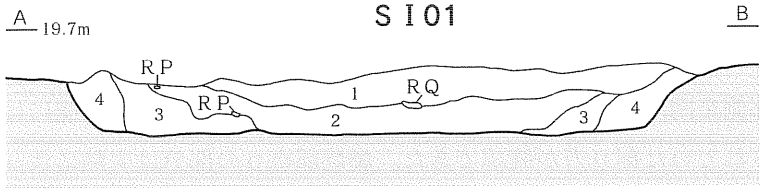


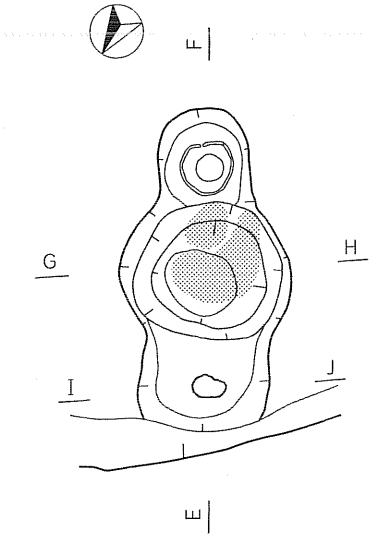


S I 01　P1(C－D)
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。

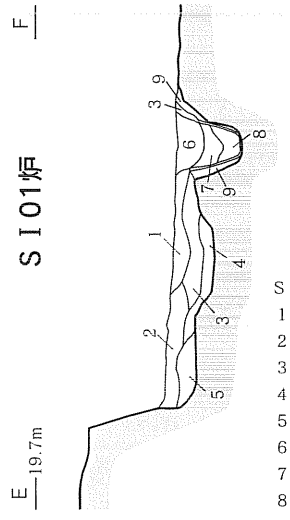
S I 01　(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗オリーブ褐色土(2.5YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　暗灰黄色土(2.5YR4/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。

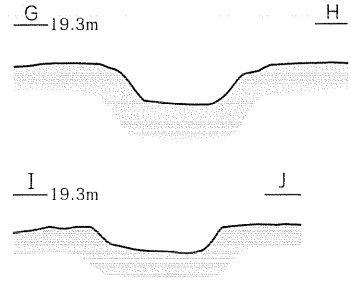
S I 01



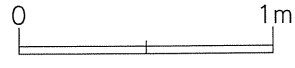


S I 01炉





S I 01　炉(E－F)
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒・炭・含む。粘性・しまりあり。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒・炭・含む。粘性・しまりあり。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒・炭・含む。粘性・しまりあり。
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
6　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
7　褐色土(5Y2/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
8　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



第７図　ＳＩ01竪穴住居跡

形と推定される。現存する低い脚の底面は浅く窪む。この反対側には、2つの脚が付いていたと推定される。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ05（第8・45・46・81・82図、図版2・50）

《位置と確認》　調査区南側のＭＡ27・28区とＭＢ27・28区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形を呈し、規模は長軸3.94m×短軸3.78m・深さ0.56mである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　7層に分層した。壁際で褐色や暗褐色土が堆積する以外は、黒色土や黒褐色土が主体を占める。

《　　壁　　》　壁は、炉が取り付く東側を除いて、外側に開いて立ち上がる。

《　床　　面　》　床面は、中央から壁際に進むほど高くなる。底面は比較的堅くしまっている。

《　柱　　穴　》　Ｐ1・Ｐ3が主柱穴と考えられる。規模はＰ1が長軸0.34m×短軸0.28m・深さ0.27m、Ｐ3が0.25m×0.22m・0.34mである。Ｐ2・Ｐ4・Ｐ5は浅く窪んでいる。

《　　炉　　》　住居跡北東側の壁際に付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。規模は最大長1.46m×最大幅0.90m・最深部0.30mで、平面形はやや南側が膨らんだ隅丸長方形を呈する。炉の軸線方向はＳ－67°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　北側には口縁部側を南向きにした深鉢（第8図）が横位に設置され、南側には深鉢が正位に設置されていた掘り方が確認できた。燃焼部寄りの部分は火熱によって硬化し、壁が焼土化していた。

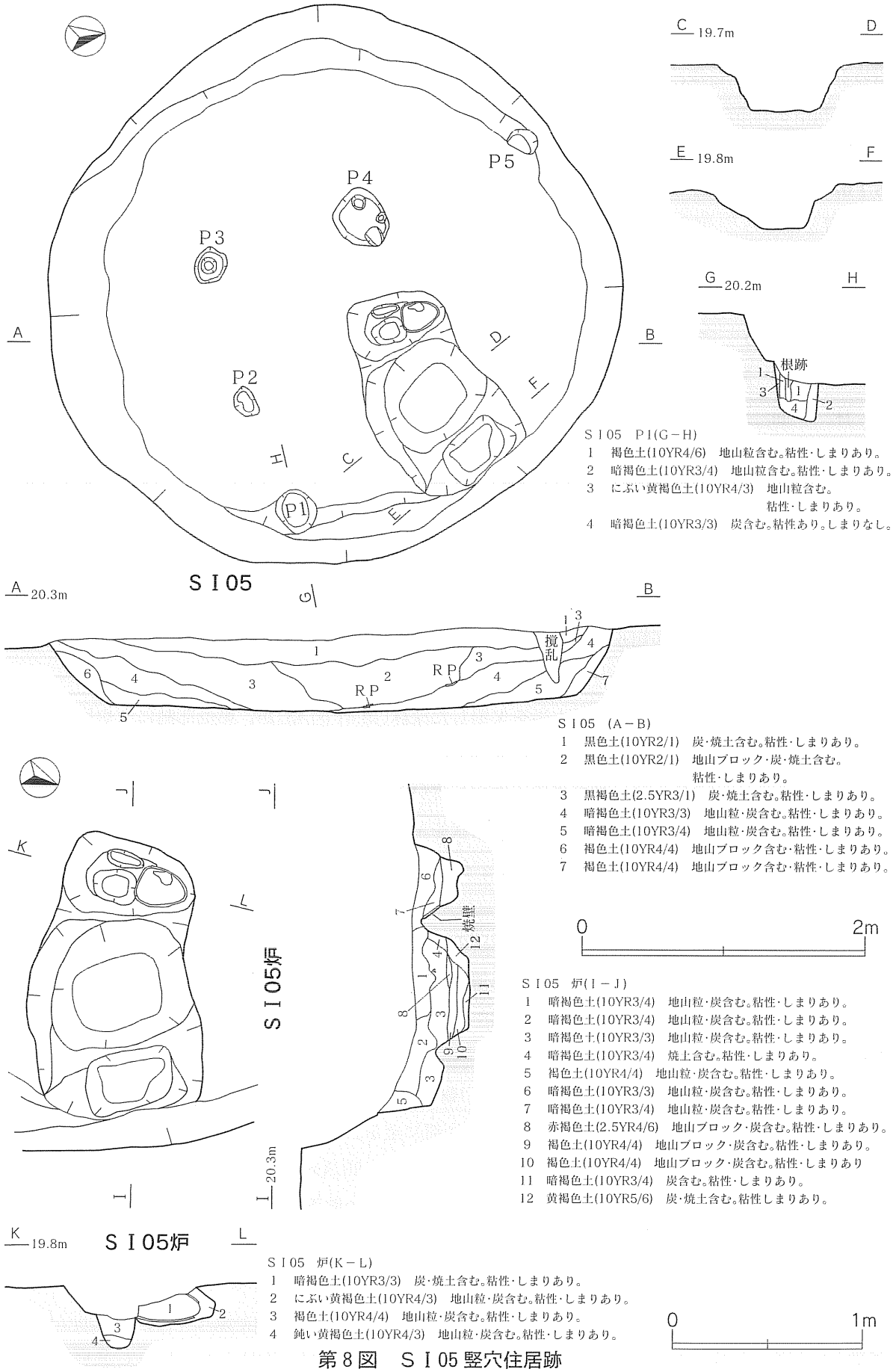
〈燃焼部〉　掘り方の平面形は隅丸方形で、平坦な底面からやや強い角度で立ち上がる。覆土下方には、多量の焼土と炭化物が含まれていた。数点の礫と土器片が出土した。

〈前庭部〉　住居跡の北東壁に接している。底面は壁際側に向かって高くなり、燃焼部の底面よりも高くなる。

《　出土遺物　》　中央下位の覆土から、ややまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第45・46図の土器と第81・82図の石器がある。土器は、深鉢（30～43）・鉢（44）・ミニチュア土器（45～47）が出土した。

深鉢は、30～36が口縁部、37～41が胴部、42・43が底部の破片である。30は、口縁部が内湾し胴部上位が最大径になる平口縁の土器で、現存高14cm・推定口径24.7cmである。口縁は無文で、沈線で区画した無文帯は「Ｊ」字文を描く。31は波状口縁で、32～36は平口縁である。31・32の口縁部は無文帯である。35は、口縁部が僅かに内傾し、胴部中央部に最大径をもつ。現存高33.8cm・推定口径28.7cmである。無文の口縁部～胴部上半と斜縄文を施す胴部は、窪み部及びボタン状突起の刺突文で画され、胴部には逆「Ｕ」字状の沈線が垂下する。胴部破片には、条線を施すもの（37）、沈線で区画した無文帯の中に刺突文を入れたもの（38）、斜縄文を施すものがある。39・40は胴部下半に最大径をもち、41は上位から底部まで直線的である。外底面には、全体的に多数の直線的な痕跡を示すもの（42・43）がある。44の鉢は、斜縄文を施す薄い作りである。ミニチュア土器には深鉢がある（45～47）。

石器は、石鏃（Ｓ10）・凹石（Ｓ11）・擦石（Ｓ12）・石皿（Ｓ13）が出土した。Ｓ10の石鏃は、



SI05　P1(G－H)
1　褐色土(10YR4/6)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性あり。しまりなし。

SI05　(A－B)
1　黒色土(10YR2/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黒色土(10YR2/1)　地山ブロック・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(2.5YR3/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む・粘性・しまりあり。
7　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む・粘性・しまりあり。

SI05　炉(I－J)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　焼土含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
8　赤褐色土(2.5YR4/6)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
9　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
10　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり
11　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
12　黄褐色土(10YR5/6)　炭・焼土含む。粘性しまりあり。

SI05　炉(K－L)
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　鈍い黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。

第8図　SI05竪穴住居跡

両面に丁寧な調整を施し薄く仕上げる。裏面基部中央にアスファルトの痕跡を僅かに留める。S11の凹石は、表面に縦長状で浅いあばた状の凹部を形成する。表裏面に鋭利で細長い明瞭な溝の痕跡を留める。S12の擦石は、礫の側面を中心にあばた状の凹部が所々に見られる。裏面の全面が磨り面として利用される。S13の石皿は、礫を加工して縁を高く整えている。縁の外側が面取りされる。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

SI07（第9・47・48・82・83図、図版3・51）

《位置と確認》　調査区南側のMA34区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形を呈し、規模は長軸3.86m×短軸3.70m・深さ0.48mである。

《　重　　複　》　住居跡の東壁でSK06と重複するが本住居跡が古い。

《　土　　層　》　7層に分層した。壁際で暗褐色土が堆積する以外は黒褐色土が主体を占める。

《　　壁　　》　壁は南側で緩く立ち上がる。

《　床　　面　》　中央部が緩く窪み全体にやや軟らかい。

《　柱　　穴　》　炉の南西脇に接してP2を、炉軸線方向の北西壁際にP1を確認した。規模はP2が長軸0.30m×短軸0.26m・深さ0.12m、P1が0.33m×0.28m・深さ0.23mである。

《　　炉　　》　住居跡南東の壁に付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。規模は最大長1.56m×最大幅0.66m・最深部は0.20mで、平面形は燃焼部の南西側が僅かに膨らむ不整楕円形を呈する。炉の軸線方向はN－42°－Wである。

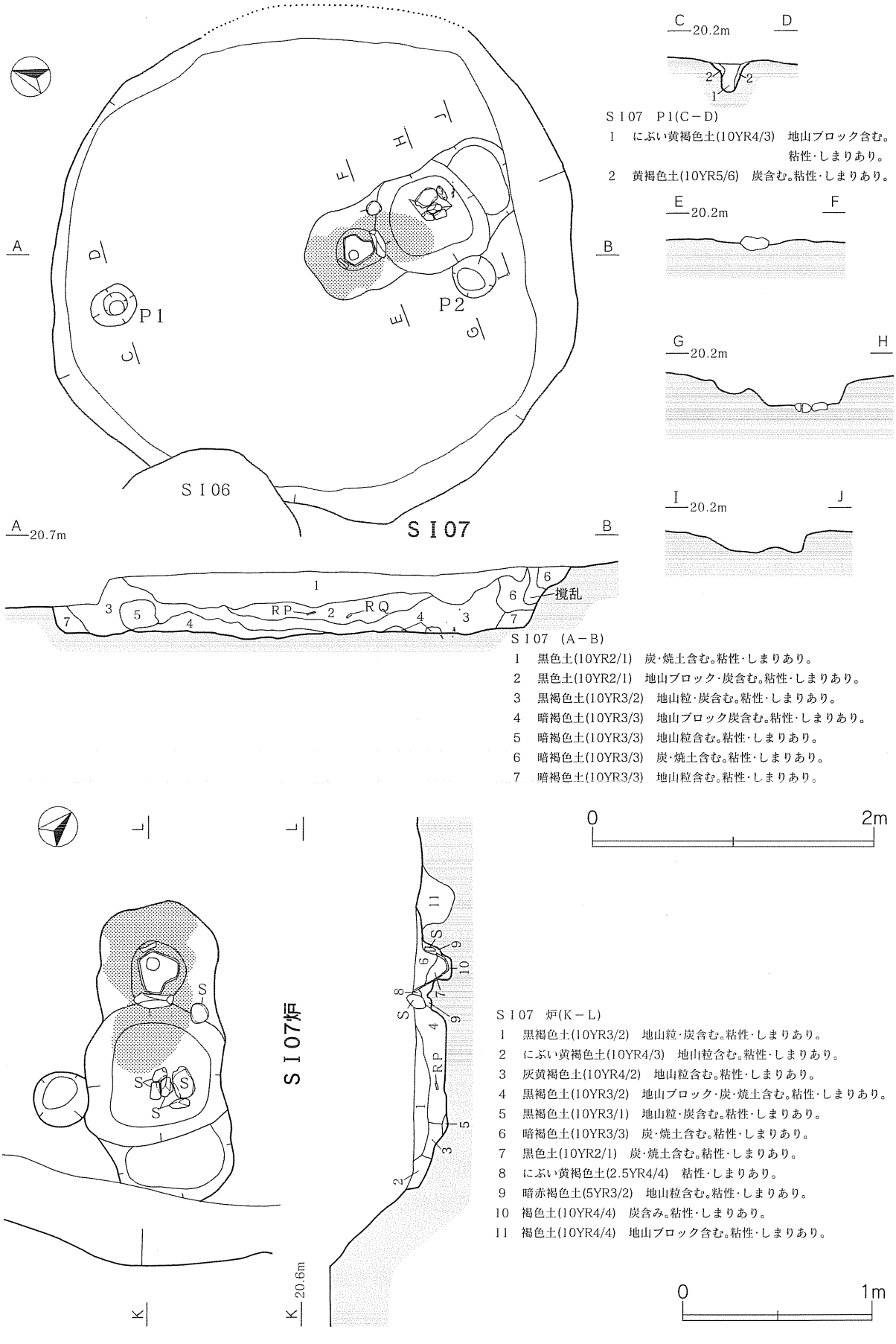
〈土器埋設部〉　口縁部から胴部上半を欠損した深鉢(第47図48)が、燃焼部側にやや傾いて埋設されていた。埋設土器と燃焼部境には、大型の礫が配置されていた。埋設土器の周辺の床面は、被熱で赤く硬化していた。

〈燃焼部〉　掘り方の平面形は不整方形状を呈し、底面は平坦で、中央部に5個の礫が設置される。壁は緩く立ち上がる。底面から土器埋設部側の壁面にかけては、被熱により赤く硬化していた。

〈前庭部〉　長軸が壁際に沿い、住居跡の南東壁に接している。底面は壁際側が高くなる。

《　出土遺物　》　覆土よりややまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第47・48図の土器と第82・83図の石器がある。土器は、深鉢（48～65・67～69）・壺（70）・ミニチュア土器(66)・土製品（71）が出土した。

深鉢は、49が口縁部～胴部下半、50～59が口縁部、60～64が胴部、48・65・67～69が底部破片である。48は、胴部下半の最大径部から直線的に底部に至る。現存高18.2cm・底径8.7cmである。49は、口縁部がやや外反し胴部下半に最大径をもつ。現存高35.2cm・口径28cmである。粘土紐に沿った割れ口が顕著である。50は口縁が直立気味に外反し、その直下に胴部最大径がある。51～58は平口縁で、口縁部が無文のもの（51～53・55)、沈線文をもつもの（52・55）がある。59は波状口縁で、口縁部が無文帯である。胴部破片には、沈線で無文帯を区画したもの（60・62・63)、刺突文を施すもの（61・63)、斜縄文を施すものがある。64には綾絡文状の文様が縦走する。外底面全体には、多数の直線的な痕跡を示すもの（65・68・69）がある。壺の70は、胴部下半が膨らむ底径の大きな



第9図　SI07竪穴住居跡

形態である。細い沈線で縄文と無文帯を区画する。胴部最下端には、無文に縦の沈線を施す。ミニチュア土器の66は深鉢である。71の土製品は、一辺3cm程の三角形で上面に小さな刺突文を充填する。

石器は、掻器（S14）・石錐（S15）・削器（S16）・石斧（S17）・敲石（S18）・凹石（S19）が出土した。S14の掻器は、刃部をやや粗く整えている。S15の石錐は、中央の断面が三角形をなし、両側縁を粗く整える。先端は折損してから、粗く調整したようである。S16の削器は、両側縁の表裏面に丁寧な調整を施し尖頭状に整える。S17の石斧は、蛤刃状で全体を丁寧に磨く。裏面の刃部は特に入念である。S18の敲石は、底辺を除く下端がささくれ立って、両端に径0.7～0.9cmの盲孔がある。見た目より軽い。S19の凹石は、内外面に小さな凹み部を作る。両面を貫通する径1cmの穿孔がある。軽石を利用している。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ08（第10・49・50・84図、図版4・51）

《位置と確認》　調査区南側のＭＡ・ＭＢ32およびＭＢ31区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は隅丸五角形を呈し、規模は長軸4.44ｍ×短軸3.98ｍ・深さ0.52ｍであり、北西側を拡張した可能性がある。

《　重　　複　》　中央がＳＸ13に切られる。

《　土　　層　》　8層に分層した。中央底面には黒色土が薄く堆積し、この上に黄褐色土が故意に投げ込まれている。

《　　壁　　》　北西側が緩く立ち上がる他は、やや強い角度で立ち上がる。

《　床　　面　》　全体に平坦で、硬くしまっている。南西壁際に、幅約0.2ｍ・深さ約0.2ｍの周溝が検出された。

《　柱　　穴　》　住居跡の外側に3基（ＳＫＰ48･53･55）、内側に2基（Ｐ１・Ｐ２）検出した。規模はＳＫＰ48が長軸0.33ｍ×短軸0.30ｍ・深さ0.14ｍ、ＳＫＰ53が0.27ｍ×0.26ｍ・0.22ｍ、ＳＫＰ55が0.29ｍ×0.25ｍ・0.20ｍ、Ｐ１が0.25ｍ×0.22ｍ・0.17ｍ、Ｐ２が0.34ｍ×0.24ｍ・0.21ｍである。

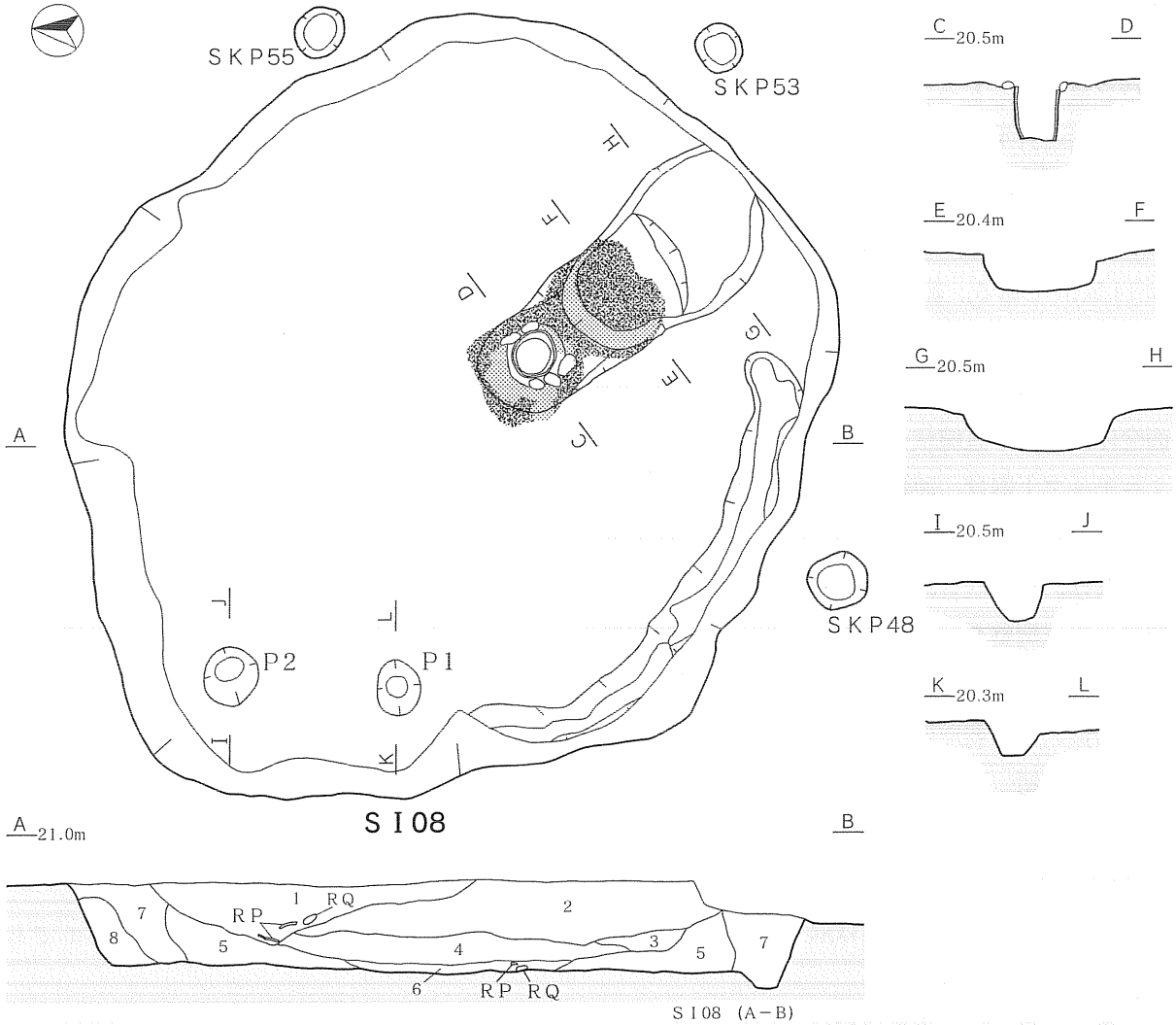
《　　炉　　》　住居跡南東側の壁に接して付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。規模は最大長1.80ｍ×最大幅0.80ｍ・最深部は0.32ｍで、平面形は前庭部がやや膨らんだ不整楕円形を呈する。炉の軸線方向はＮ－43°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　底部を欠損した深鉢（第49図72）が正位に埋設されていた。深鉢の外縁には、北東側に2個、南西側に3個の礫を配置する。埋設土器の周辺は被熱で赤く硬化していた。

〈燃焼部〉　掘り方の平面形は不整楕円形で、底面は土器埋設部側に高くなる。壁は軸線方向で緩く、その他はやや急に立ち上がる。土器埋設部側の底面と壁面が、被熱で赤く硬化していた。

〈前庭部〉　底面は南東側に緩く傾斜した後、壁際で緩やかに立ち上がる。

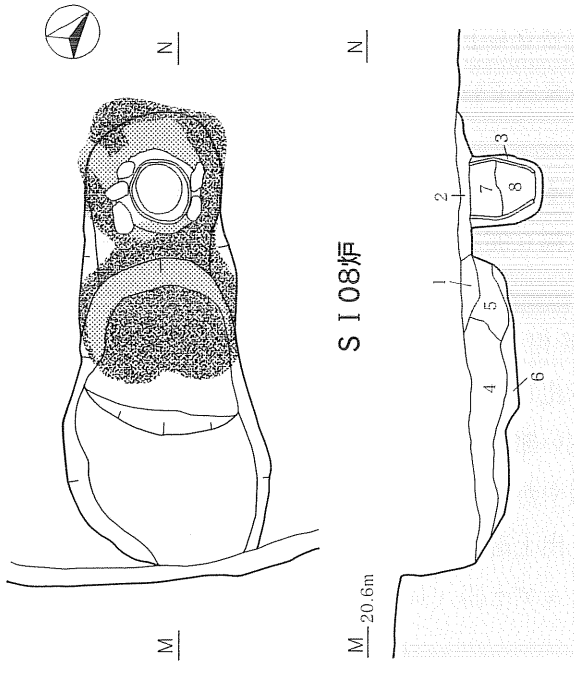
《　出土遺物　》　炉付近より遺物がまとまって出土した。出土遺物には、第49・50図の土器と第84図の石器がある。土器は、深鉢（72～80・82・83）・壺（84）・ミニチュア土器（81）が出土し



SI08　(A－B)

1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　黄褐色土(10YR5/6)　地山粒・炭・褐色土含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・含む。粘性・しまりあり。
6　黒色土(10YR2/1)　炭・焼土・褐色土含む。粘性・しまりあり
7　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
8　黄褐色土(10YR5/6)　炭含む。粘性・しまりあり。

0　2m



SI08　炉(M－N)

1　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック・褐色土含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/6)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
6　褐色土(10YR4/4)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(7.5YR3/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。

0　1m

第10図　SI08竪穴住居跡

た。

深鉢は、72～77が口縁部、79・82・83が胴部、78が底部である。72は口縁部が直立気味で、胴部上位に最大径をもつ。現存高27cm・推定口径24.2cmである。全面にＲＬの斜縄文を施すが、原体の端が口縁直下に見られる。胴部下半は故意に打ち欠く。73～77は平口縁で、外反するもの（73・75・77）と内反するもの（74・76）がある。文様には、沈線による区画文(73・74）・刺突文（73・76）・綾絡文状の文様（77）・斜縄文がある。胴部破片の79は、胴上位から直線的に底部に至る。現存高は14.5cmである。縄文と無文帯を沈線で区画し、無文地で左右逆の「Ｊ」字文が2単位認められる。アーチ状の小さな貼付文もある。他の破片には、鰭状文（82）・無文帯と刺突文（83）・斜縄文がある。底部をもつ78は、胴部上位から丸みをもって底部に至る。現存高14cm・底径8.3cmである。外底面全体に多数の直線状の痕跡がある。壺の84は、胴部下半が膨らむ底径の大きな形態である。81のミニチュア土器は、波状口縁の深鉢である。器高8.9cm・底径3cmである。上部の平面観は方形状を呈し、胴部では縄文・沈線の複合した文様と無文帯が縦の稜線で区画される。

石器は、石篦（Ｓ20・Ｓ21）・掻器（Ｓ22）・削器（Ｓ23）が出土した。Ｓ20の石篦は、小型で両側縁に粗い調整を施す。刃部は、裏面の主要剥離面よりも古い面を残す。Ｓ21は、全面に丁寧な剥離を施し、両端に同じような刃部をもつ。Ｓ22の掻器は、湾曲する先端に丁寧な調整を施す。Ｓ23の削器は、縦長剥片の両側縁を丁寧に調整し、刃部と右側縁の一部には素材面を残す。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ09（第11・50・84図、図版5）

《 位置と確認 》　調査区南側のＭＡ・ＭＢ33及びＭＢ34区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は隅丸方形状を呈し、規模は長軸3.50ｍ×短軸3.35ｍ・深さ0.38ｍである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　8層に分層した。東側に黒色土や黒褐色土、西側に黄褐色土が堆積している。

《　　壁　　》　東側は直立気味に、他は強い角度で立ち上がる。

《　床　　面　》　全体に細かな凹凸が多く、硬くしまっている。

《　柱　　穴　》　認められない。

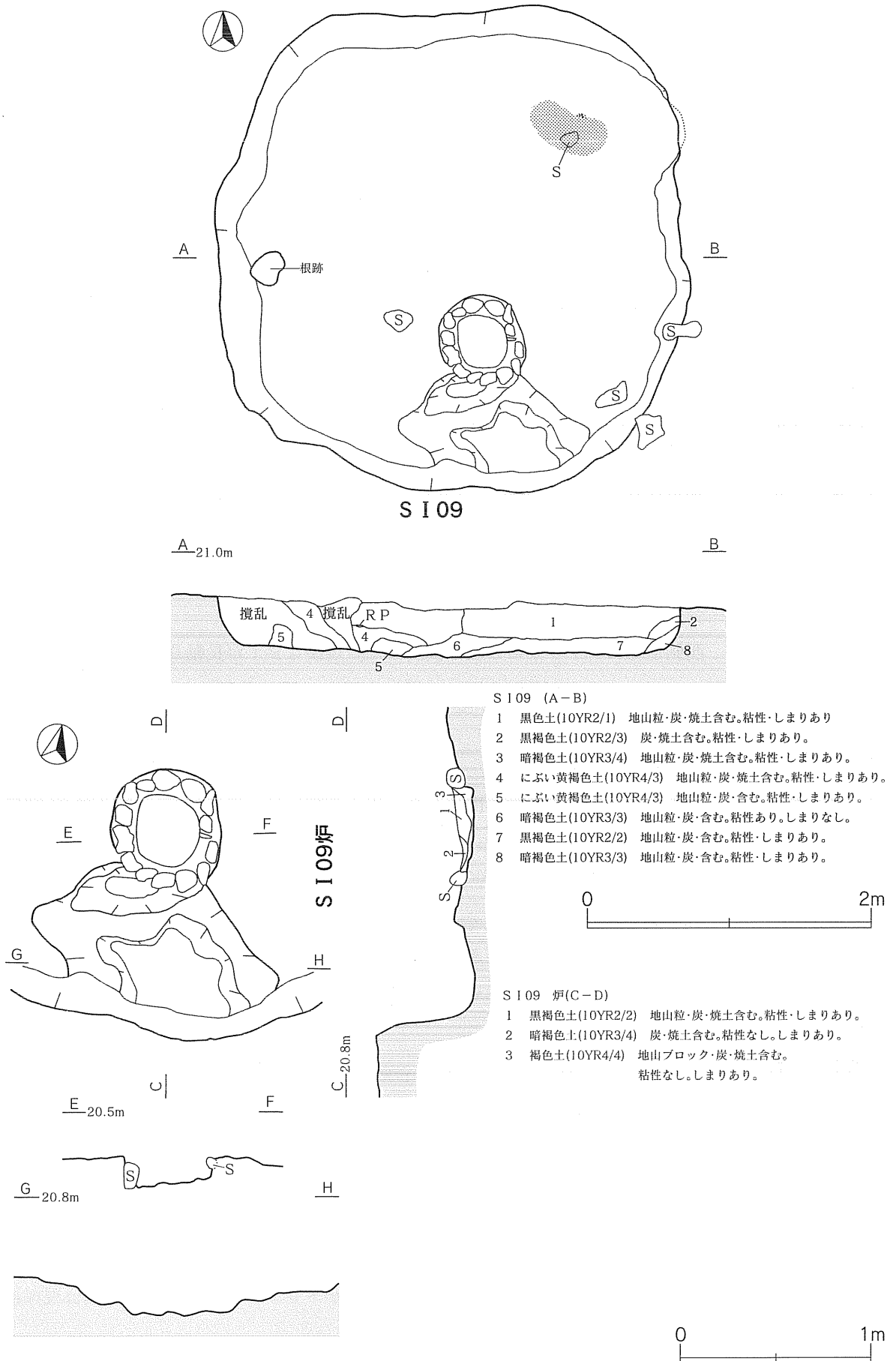
《　　炉　　》　住居跡南側の壁に接して付設される。石囲い部・掘り込み部で構成された複式炉である。規模は最大長1.42ｍ×最大幅0.96ｍ、最深部0.11ｍで、炉の軸線方向はＮ－15°－Ｗである。

〈 石囲い部 〉　床を掘り窪め、壁に15点の円礫を楕円形に配置した炉である。底面は凹凸が著しく、被熱で硬化していた。礫も赤化していた。底面に多量の焼土が検出された。

〈掘り込み部〉　住居跡の南側に接している。石囲い部の狭い窪みと壁際の大きな窪みがある。どちらも底面の凹凸が著しく、浅く緩やかである。底面に多量の焼土が検出された。

《　出土遺物　》　覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第50図の土器と第84図の石器がある。土器は、深鉢（86～93）・鉢（85）・ミニチュア土器（94）・円盤状土製品（95）が出土した。

深鉢は、86・87が口縁部、88～91が胴部、92・93が底部破片である。86・87は平口縁で、86は



第11図　S I 09竪穴住居跡

外反し87は直立する。胴部破片は沈線・刺突文・無文・斜縄文で文様を描く。90は、縄文の地文に上下逆の「U」字文を連結させている。91は、無文部に粘土紐を張り付けその上に撚糸文を押圧し、次に縄文以外に刺突を施したものである。92・93の底部はやや突出し、外底面全体に多数の直線状の痕跡を残す。85の鉢は、口縁が内反し胴部に無文帯を沈線で区画した文様を施す。ミニチュア土器の94は、底部が突出した深鉢である。円盤状土製品の95は、縄文土器の破片を円盤状に仕上げたものである。

石器は、石斧（S24）が出土した。小型の製品で、断面は楕円形である。全体を丁寧に磨き上げ、表面下端は刃部に近い部分である。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

SI10（第12・51・84図、図版6・52）

《位置と確認》　LS26・27区及びLT26・27区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形もしくは略円形と推定され、東側の半分以上は調査区の範囲外にある。規模は、現存長軸5.10m×短軸1.76m・深さ0.38mである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　8層に分層した。中央上位は黒褐色土、床面から壁際は暗褐色土である。

《　　壁　　》　緩やかに立ち上がる。

《　床　　面　》　全体が比較的軟らかい。

《　柱　　穴　》　西側壁際にP1～3の3基を検出した。規模はP1が長軸0.31m×短軸0.26m・深さ0.49m、P3が長軸0.32m×短軸0.25m・深さ0.28mである。P2は浅く窪んでいる。

《　　炉　　》　炉は確認されなかった。

《出土遺物》　覆土中から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第51図の土器と第84図の石器がある。土器は、深鉢（96～103）が出土した。

深鉢には、96～98の口縁部、99の胴部、100～103の底部破片がある。96は波状、97・98は平口縁である。96の内外面の波頂部には、鰭状文が認められる。97は、口縁部がやや外反し胴部上位が少し膨らむ。無文帯の口縁直下に平行沈線があり、綾絡文状の文様が縦走する。99の胴部破片は、縄文と無文帯が沈線で区画される。底部にはやや突出するもの（102)があり、底面に直線状の痕跡を残すもの（101～103）がある。

石器は、掻器(S25)・敲石（S26）が出土した。S25の掻器は、両側縁に丁寧な調整を施したもので、刃部右側に素材面を残す。S26の敲石は、下端に平坦なあばた状の痕跡がある。礫は、握りの具合が丁度良い大きさである。

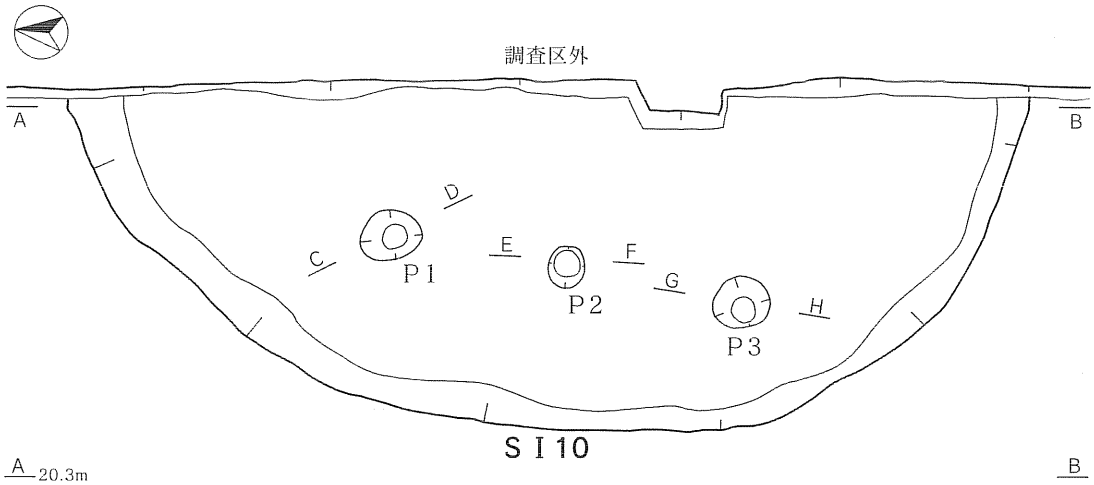
《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

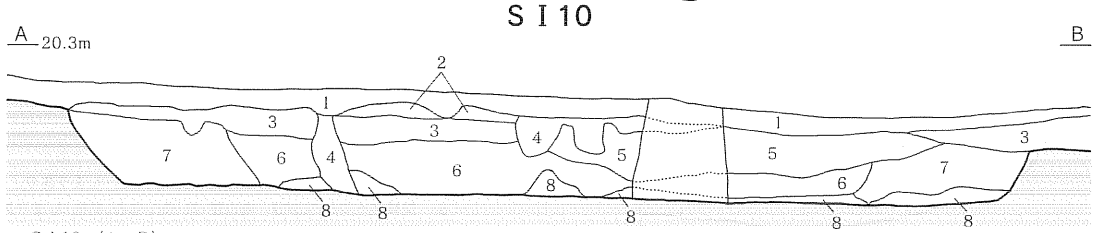
SI11（第13・52図、図版7・52）

《位置と確認》　調査区南側のMC・MD34区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形と推定され、北側の一部がトレンチで切られる。規模は現存長軸3.34m×短軸2.40m・深さ0.37mである。

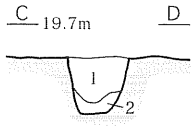
《　重　　複　》　SK12と重複したと考えられる。





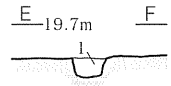
S I 10　(A－B)

1　黒褐色土(10YR2/2)
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/1)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土(10YR3/1)　粘性あり。しまりなし。
5　黒色土(10YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。



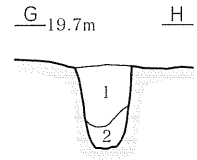
S I 10　P1(C－D)

1　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。
　　粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘性・しまりあり。



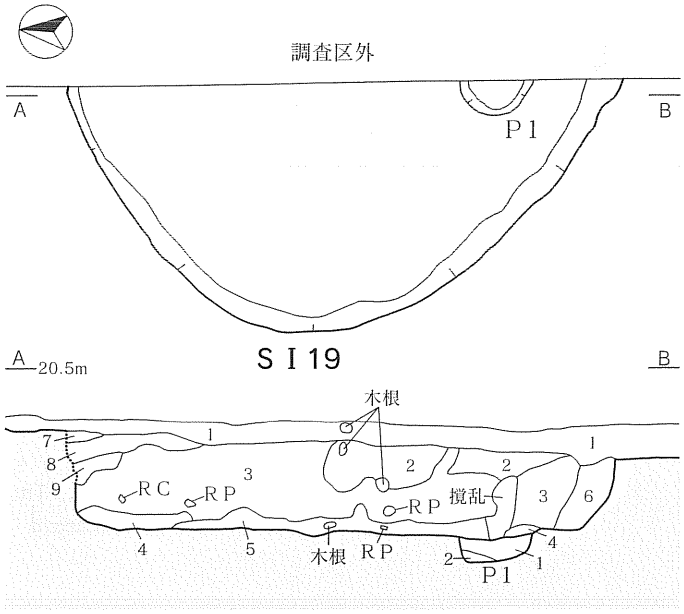
S I 10　P2(E－F)

1　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。
　　粘性・しまりあり。



S I 10　P3(G－H)

1　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。
　　粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。
　　粘性・しまりあり。

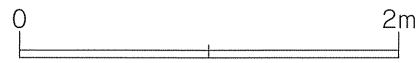


S I 19　(A－B)

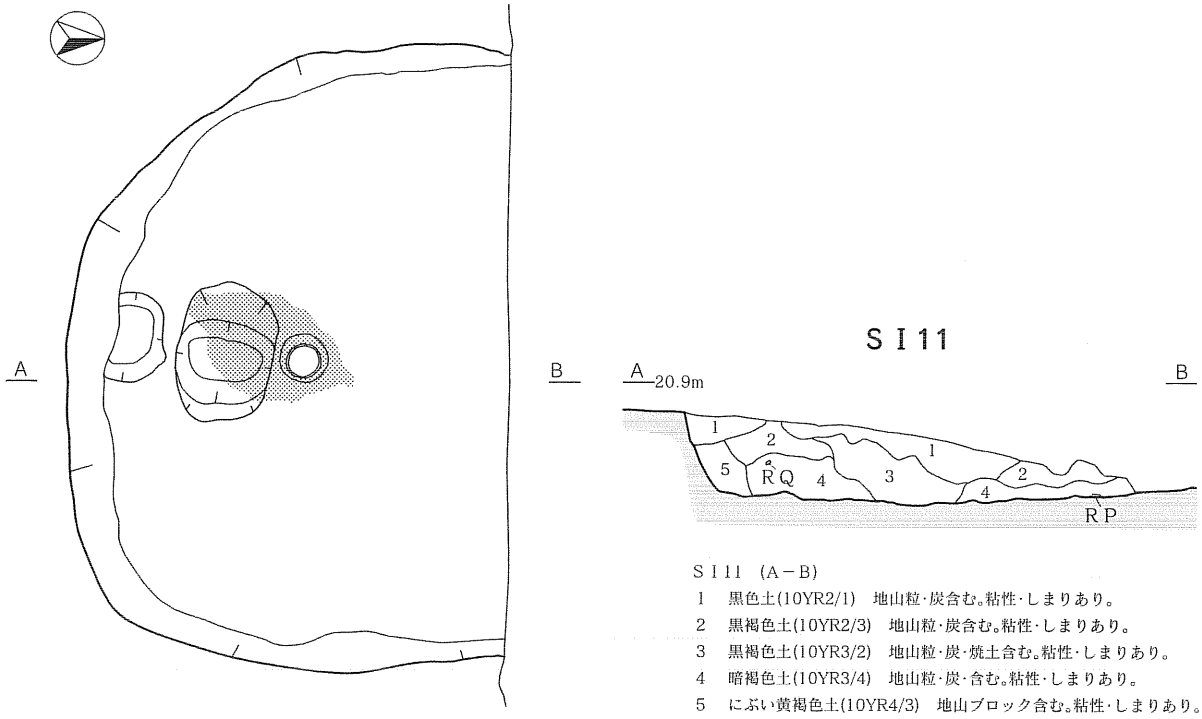
1　黒色土(10YR2/1)　表土
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。根生・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
7　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
8　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
9　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
10　黄褐色土(10YR5/6)　炭含む。粘性・しまりあり。

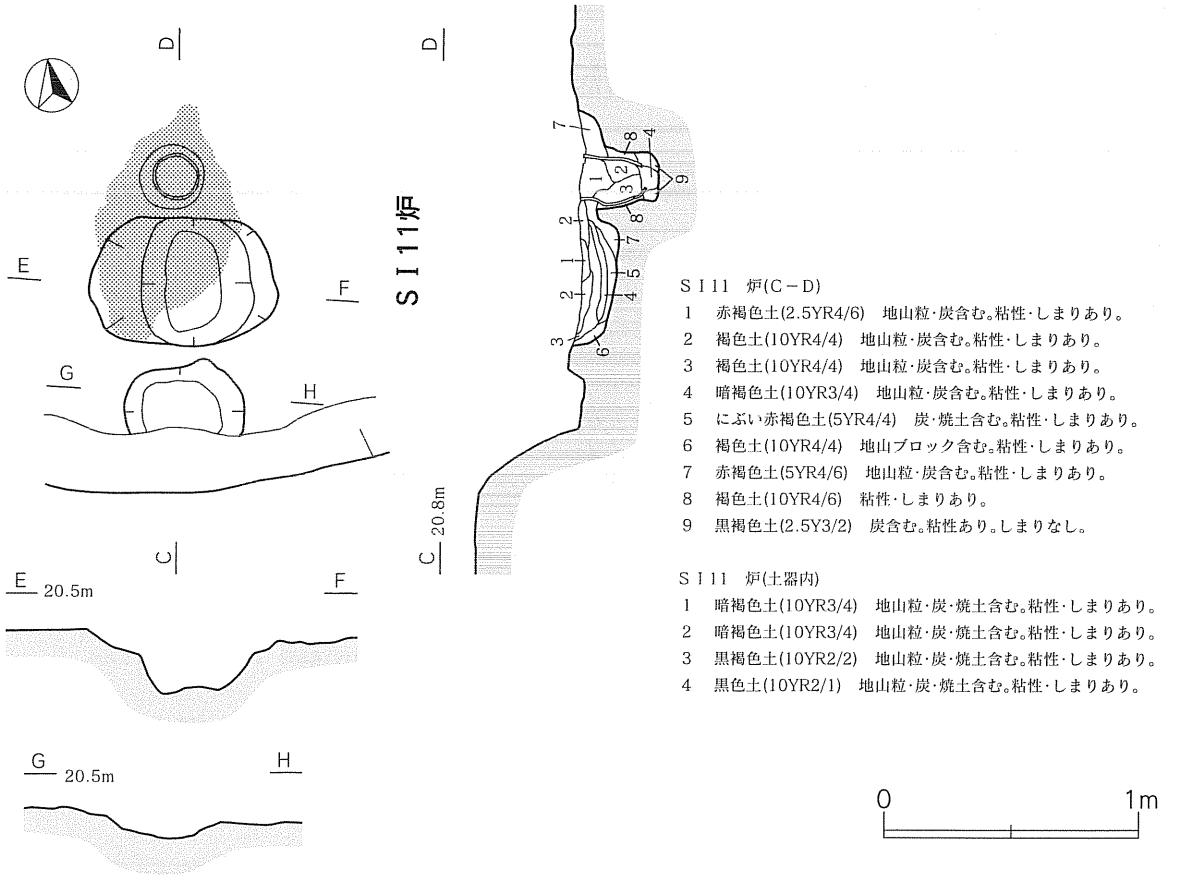
S I 19　P1

1　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)　地山ブロック・炭含む。
　　粘性・しまりあり。



第 12 図　S I 10・19 竪穴住居跡





第13図　ＳＩ11竪穴住居跡

《 土　　層 》　5層に分層した。南壁際でにぶい黄褐色土が堆積する以外は黒色土や暗褐色土が主体を占める。

《　　壁　　》　やや急角度で立ち上がる。

《 床　　面 》　底面は小さな凹凸が著しく、硬くしまっている。

《 柱　　穴 》　確認されなかった。

《　　炉　　》　住居跡南側の壁に接して付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。規模は最大長1.12m×最大幅0.72m・最深部は0.31mで、平面形は不整な二等辺三角形状を呈する。炉の軸線方向はN－6°－Eである。

〈土器埋設部〉　深鉢の胴部（第51図104）がほぼ正立した状態で埋設されていた。土器の周囲から燃焼部にかけて、被熱で赤く硬化していた。

〈 燃 焼 部 〉　掘り方の平面形は東西に長い楕円形で、東西に2段の掘り込みがある。底面中央が僅かに高く、壁は緩く立ち上がる。

〈 前 庭 部 〉　東西方向に掘り込みをもつ。燃焼部との境は明瞭で、それよりも底面が高い。また底面は東西で緩く立ち上がる。

《 出土遺物 》　床面から2個体の深鉢が出土した。出土遺物には、第51・52図の土器があり、深鉢（104～115）が出土した。

深鉢は、106～111が口縁部、104・113・114が胴部、112が胴部上半～底部、115が底部破片である。105は、口縁がやや外反し胴中央やや下位で最大径になる。器高21.6cm・推定口径14.7cm・底径6.1cmである。全面にＬＲの斜縄文を施し、外底面全体に多数の直線状の痕跡をもつ。106は波状、107～111は平口縁である。106は、口唇直下に波頂に沿う隆帯があり、沈線で区画する。波頂部直下に垂下する渦巻き文がある。107は、口縁部に平行な沈線に沿って刺突文が見られる。109・111の口縁部は無文である。104の胴部破片は、胴部中央やや下位が膨らむ形態である。現存高24.8cmである。全体にＬＲの斜縄文が施され、綾絡文状の文様が縦走し、それを部分的に擦り消している。上端を除いて炭化物が付着する。113は無文帯が隆起して縄文と区画される。114は沈線に沿って刺突文が連続する。112の土器は、胴部中央で膨らむ形態である。現存高16.3cm・底径5.7cmである。全面にＬＲの縄文を施す。115の外底面全体に多数の直線状の痕跡がある。

《 時　　期 》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ14（第14・52・53・85図、図版8）

《 位置と確認 》　調査区南側のＬＴ33・34区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形を呈し、東側の一部は調査区の範囲外になる。規模は長軸3.96m×短軸2.94m・深さ0.29mである。

《 重　　複 》　重複はない。

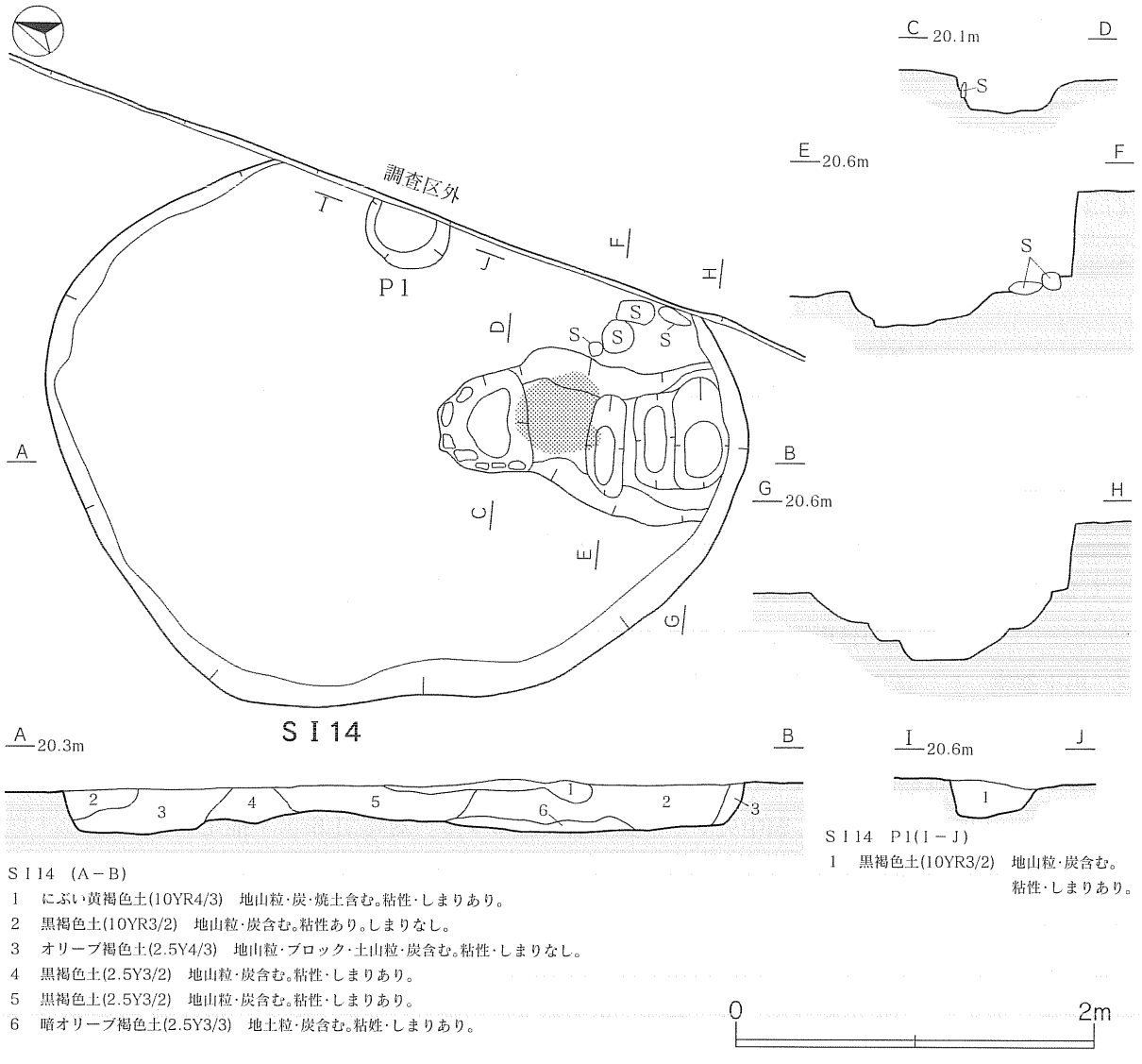
《 土　　層 》　6層に分層した。中央で主体を占めるのは黒褐色土である。

《　　壁　　》　全体が急角度で立ち上がる。

《 床　　面 》　中央がやや高く、全体に凹凸が著しい。床面は比較的軟らかい。

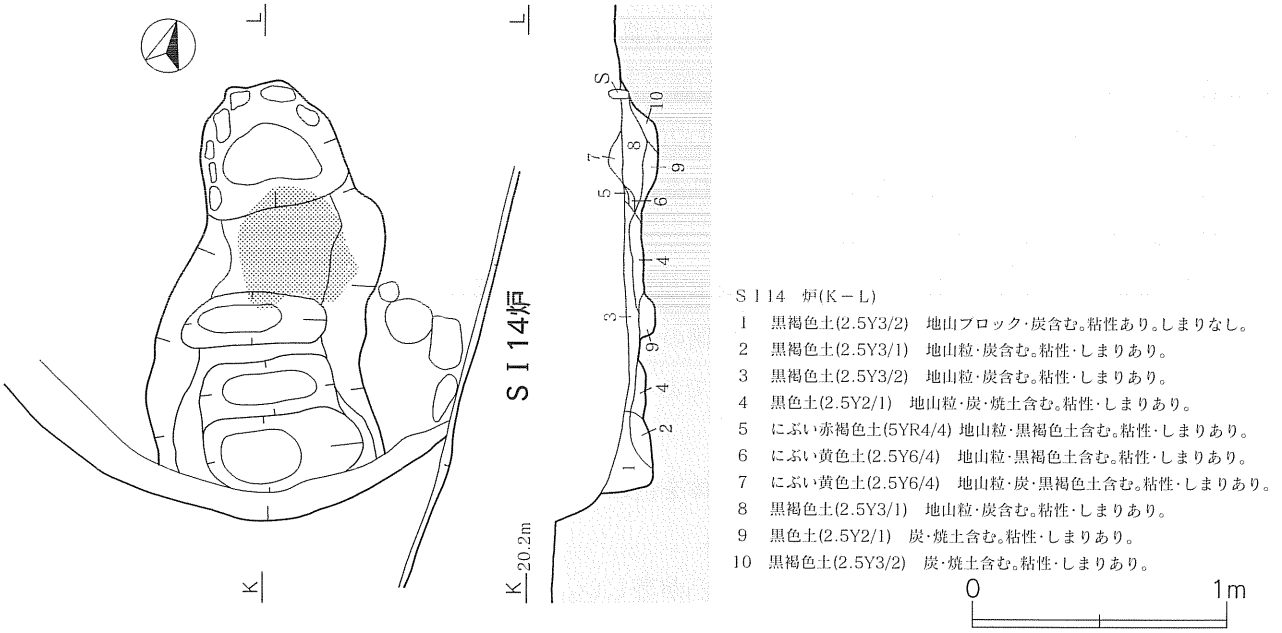
《 柱　　穴 》　調査区境界に1基のみ確認した。

《　　炉　　》　住居跡南側の壁に付設される。石囲い部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉で



S I 14　(A－B)
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
3　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　地山粒・ブロック・土山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
4　黒褐色土(2.5Y3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(2.5Y3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　地土粒・炭含む。粘姓・しまりあり。

S I 14　P1(I－J)
1　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。



S I 14　炉(K－L)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。
2　黒褐色土(2.5Y3/1)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(2.5Y3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　黒色土(2.5Y2/1)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　地山粒・黒褐色土含む。粘性・しまりあり。
6　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　地山粒・黒褐色土含む。粘性・しまりあり。
7　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　地山粒・炭・黒褐色土含む。粘性・しまりあり。
8　黒褐色土(2.5Y3/1)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
9　黒色土(2.5Y2/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
10　黒褐色土(2.5Y3/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。

第14図　S I 14竪穴住居跡

ある。石囲いの内部に埋設土器は確認されなかった。規模は最大長1.64m×最大幅0.88m・最深部0.20mで、平面形は左右に捻れた不整形を呈する。炉の軸線方向はN－12°－Wである。

〈石囲い部〉　蒲鉾状の形態で、掘り方の壁に7つの礫を配置する。底面と壁は被熱しており、そこに焼土と炭化物層が堆積していた。

〈燃焼部〉　掘り方の平面形は平行四辺形状を呈し、底面は被熱で赤く硬化していた。

〈前庭部〉　方形状を呈し、東西に細長い3つの窪みをもつ。これらは東西に2ないし3段の掘り込みをもち、中央部が最も浅い。全面に被熱の影響がある。

《出土遺物》　覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第52・53図の土器と第85図の石器がある。土器は、深鉢（116～129）・ミニチュア土器(130)・円盤状土製品（131)が出土した。

深鉢は、116～118が口縁部、119～123が胴部、124～129が底部破片である。117は強く、116は直立気味に外反する。118は内傾する。117は無文で、他は斜縄文を施す。胴部破片の119・120は、無文帯と縄文とを沈線で区画し、曲線文を描く。123には沈線と刺突文が見られる。縄文に、沈線が縦走するもの（121)、綾絡文状の文様が縦走するもの（122）がある。底部は、127を除いて僅かに突出する。ほか、底面は124・126が木葉文、125に多数の直線上の痕跡を残す。ミニチュア土器の130は深鉢である。円盤状土製品の131は、縄文土器の破片を丸く仕上げたものである。

石器は、石鏃（S28)・削器（S29)・凹石（S30・S31）が出土した。S28の石鏃は、基部がやや湾曲した形態で、全体に分厚い。S29の削器は、表面右下端側縁と裏面右側縁に特に丁寧な調整を施す。表面右側縁中央の大きな湾曲には使用痕が残る。S30の凹石は、略円形の扁平な礫を利用し、片面の中央部に浅いあばた状の凹みがある。裏面には円形に擦り面が認められる。S31は、全体が棒状に整えられ、表裏面に凹みが見られる。両端は平坦で、一端を除き石器全体に擦り面が認められる。

《時　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。

SI-15（第15・53・84図、図版9・52）

《位置と確認》　調査区南側のMC25・26区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は円形もしくは楕円形と推定され、推定規模は長軸3.46m×短軸3.37m・深さ0.46mである。

《重　複》　重複はない。

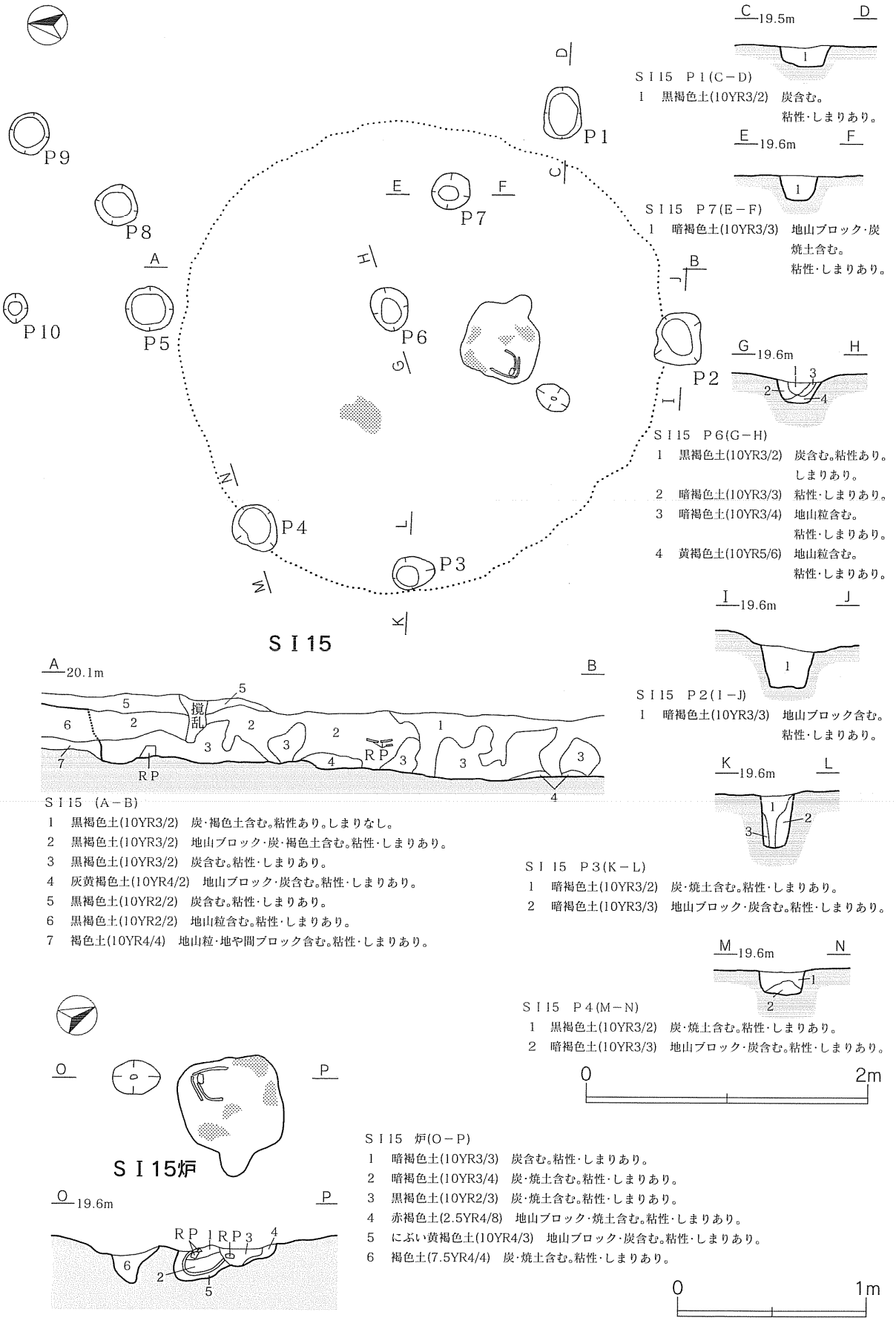
《土　層》　7層に分層したが、覆土の範囲が不明瞭であった。

《壁》　不明瞭である。

《床　面》　凹凸が著しく、炉付近は硬くしまるが他は軟らかい。

《柱　穴》　P1～P7が柱穴と思われる。規模はP1が長軸0.38m×短軸0.26・深さ0.16m、P2が0.40m×0.33m・0.31m、P3が0.30m×0.22m・0.40m、P4が0.36m×0.31m・0.17m、P5が0.35m×0.32m・0.22m、P6が0.34m×0.26m・0.17m、P7が0.28m×0.26m・0.25mである。

《炉》　中央やや南側にあり、規模は最大長0.62m×最大幅0.52m・最深部0.18mである。平面形は不整形を呈する。炉の軸線方向はN－27°－Eである。南東側に浅い



第 15 図　ＳＩ 15 竪穴住居跡

窪みをもつ。西側に深鉢(第53図132)が斜めに設置され、底面は北側に緩く立ち上がる。

《　出土遺物　》　覆土から僅かな遺物が出土した。出土遺物には、第53図の土器と第84図の石器がある。土器は深鉢（132 ～134）が、石器は石鏃(S27) が出土した。

132は、胴部中央やや上位に最大径をもち、底部にかけて窄まる。現存高22.9cm・底径6.5cmである。口縁部直下に平行沈線があり、その下に刺突文を施す。胴部中央には、上下逆の「U」字状沈線文を連結させ、その下を波状沈線文で区画する。133は、胴部から窄まり突出した底部に至る形態である。現存高9.4cm・底径6.5cmである。縄文の地文に、2本1組の沈線文が垂下する。

S27は基部に突起をもち、全体に丁寧な調整が及んでいる。突起は折損するが、内外面にアスファルトの痕跡を留める。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ16（第16・54・55図、図版10・53）

《位置と確認》　調査区北側のＬＴ・ＭＡ32区及びＬＴ・ＭＡ33区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形を呈し、規模は長軸2.60m×短軸2.44m・深さ0.26mである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　12層に分層した。中央から東側が黒褐色土・暗褐色土が主体で、西側ににぶい黄褐色土が目立つ。壁際は暗褐色土である。

《　　壁　　》　南東側を除いて概ね緩い傾斜で立ち上がる。

《　床　　面　》　凹凸が著しく、全体に硬くしまる。

《　柱　　穴　》　確認されなかった。

《　　炉　　》　住居跡南側の壁に付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。規模は最大長0.88m×最大幅0.46m・最深部0.24mで、平面形は不整楕円形状を呈する。炉の軸線方向はＮ－18°－Ｗである。

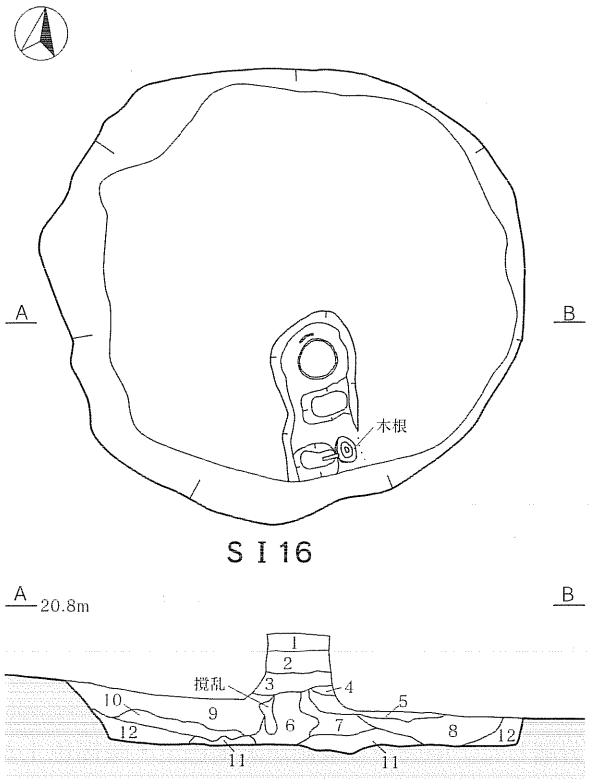
〈土器埋設部〉　底面を欠損した深鉢（第54図135）が、正立した状態で埋設されていた。土器の周囲は狭い範囲で赤化している。

〈燃焼部〉　掘り方は長方形で東側に偏在する。底面は平坦で浅く、土器埋設部と前庭部側に明瞭な境を造る。

〈前庭部〉　東側を木の根で攪乱されるが、楕円形の窪みが西側に偏在し底面は丸い。

《　出土遺物　》　出土遺物には、第54・55図の土器がある。深鉢（135～141）が出土し、炉に近い東壁際床近くから、ほぼ完形になる深鉢（第54図136）が出土した。

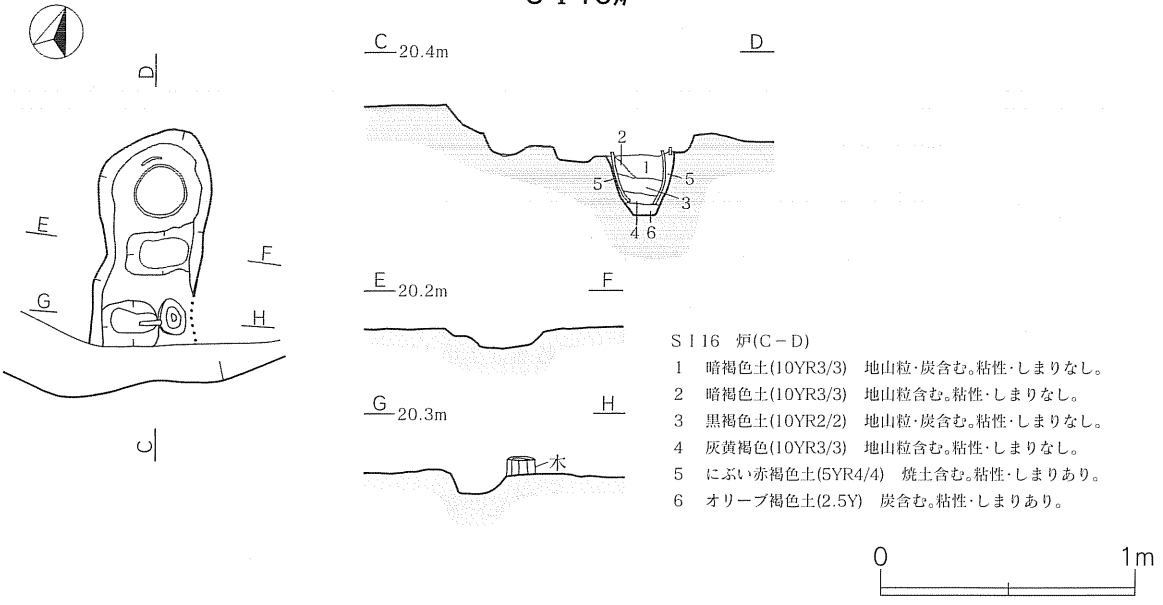
137・138・140・141は口縁部、139は底部破片である。135は口縁部が直立気味で、胴部中央に最大径をもち底部に至る。器高36.6cm・推定口径19.7cm・底径8.6cmである。底部は穿孔され、1／3の高さまで炭化物が付着する。136は口縁部は緩く外反し、胴部中央が膨らんでやや突出した底部に至る。無文の地文に、5条1組みを基本にした条線文が縦走する。一部これらが重なる部分があるが、最低22の単位が確認できる。胴部上位の一部に炭化物が付着する。口縁部破片は、140が波状であることを除けば平口縁である。また138が直立するのを除けば、すべて外反する。縄文の地文に綾絡文状の文様が縦走するもの（138)、沈線で縄文と無文を区画するもの（141)、斜縄文を施すも



ＳＩ16(A－B)

1　黒褐色土(10YR3/1)　表土
2　黒褐色土(10YR3/1)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/1)　地山粒・炭・灰黄褐色土含む。粘性・しまりあり。
4　にぶい赤褐色土(5YR4/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
7　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
10　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
11　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
12　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性・しまりあり。

0　2m



ＳＩ16　炉(C－D)

1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりなし。
3　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
4　灰黄褐色(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりなし。
5　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　焼土含む。粘性・しまりあり。
6　オリーブ褐色土(2.5Y)　炭含む。粘性・しまりあり。

0　1m

第16図　ＳＩ16竪穴住居跡

のがある。139は胴部から直線的に底部に至る。現存高14.2cm・底径11.2cmである。底部が無文の他は、ＬＲの斜縄文を施す。外底面全体に多数の直線状の痕跡を残す。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ19（第12・55・86図、図版11）

《位置と確認》　調査区南側のＬＳ・ＬＴ29区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形と推定され、東側の半分以上は調査区の範囲外にある。規模は長軸2.94m×短軸1.32m・深さ0.50mである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　10層に分層した。黒褐色土が主体である。

《　　壁　　》　急な角度で立ち上がる。

《　床　　面　》　平坦で硬くしまっている。

《　柱　　穴　》　調査区境界に1基あり、現存長軸0.33m×現存幅0.18m・深さ0.17mである。

《　　炉　　》　炉は確認されなかった。

《　出土遺物　》　覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第55図の土器と第86図の石器がある。土器は、深鉢(142・144)・台付深鉢(145)・ミニチュア土器(143)が出土した。

深鉢の142は口縁部が無文で外反する。144は丸底風である。台付深鉢の145は、胴部に縄文を施す。ミニチュア土器の143は、台付深鉢の台部と考えられる。

石器は、凹石（Ｓ32）が出土した。礫の平坦な面にあばた状の痕跡がある。同面を中心に、焼けた赤い面が認められる。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ21（第17～19・56・57・86図、図版12・53）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ31・32区及びＭＤ31・32区に位置し、Ⅳ層で確認した。

《規模と平面形》　北側を除き住居跡のプランは不明である。炉や遺物の広がり、覆土断面図から、規模は長軸4.80m×短軸4.40m程の大きさと推定される。

《　重　　複　》　ＳＩ110・ＳＩ35を切り込んでいると判断される。

《　土　　層　》　10層に分層した。中央北側床面上に、にぶい黄褐色土の広がりをもつ以外は、黒褐色土や暗褐色土が主体を占める。推定住居範囲外の東側は5層である。

《　　壁　　》　北側で僅かな立ち上がりが確認できた。

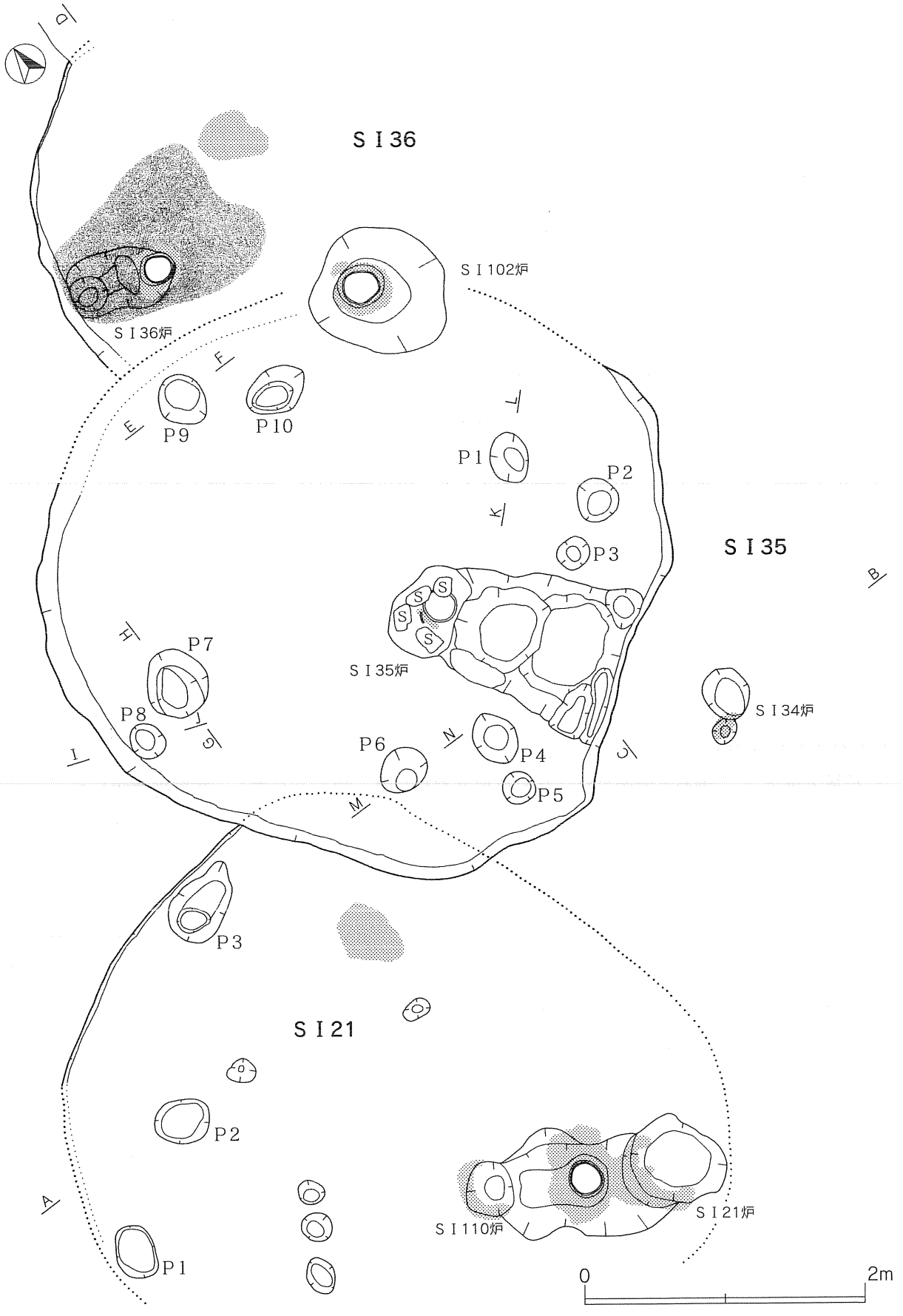
《　床　　面　》　不明瞭である。

《　柱　　穴　》　Ｐ1～Ｐ3が柱穴と考えられる。規模はＰ1が長軸0.38m×短軸0.28・深さ0.56m、Ｐ2が0.40m×0.30m・0.15m、Ｐ3が0.60m×0.40m・0.23mである。

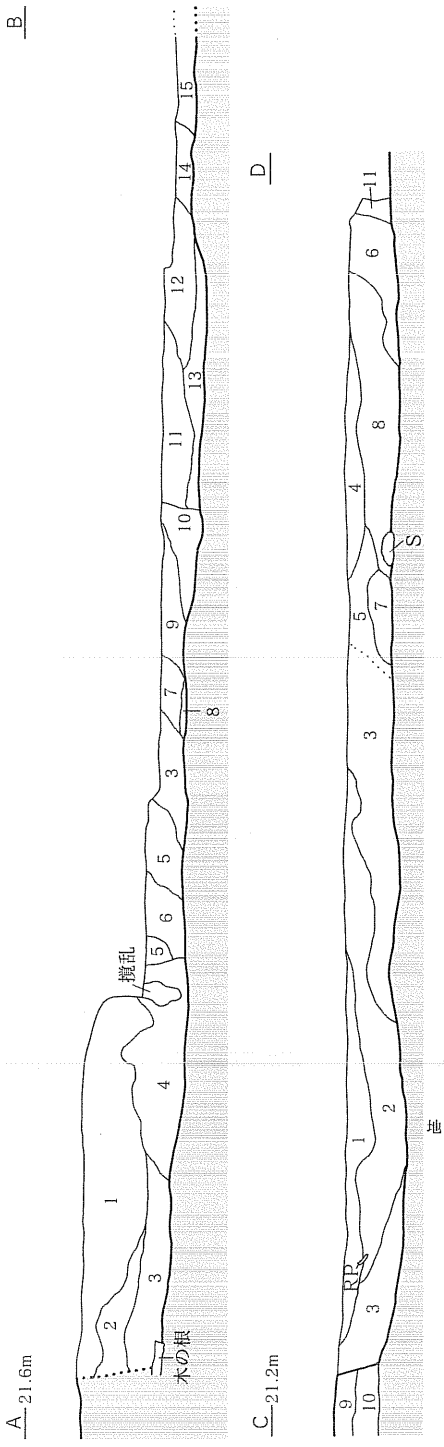
《　　炉　　》　住居跡南東側壁に付設されたと考えられる。土器埋設部・燃焼部で構成された複式炉である。規模は最大長1.28m×最大幅0.68m・最深部0.38mで、平面形は細長い不整形である。炉の軸線方向はＮ－64°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　口縁部と底部が欠損した深鉢(第57図166～168)が、正立した状態で埋設されていた。土器の周辺上面から燃焼部にかけて被熱で赤化していた。

〈燃焼部〉　掘り方は不整楕円形を呈し、底面は丸みをもち、壁は強い角度で立ち上がる。

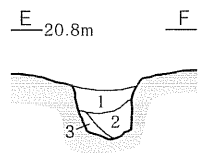


第 17 図　ＳＩ21・34・35・36・102・110 竪穴住居跡

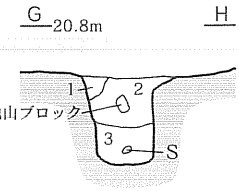


S I 21(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・炭・黒褐色土含む。粘性あり。しまりなし。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性あり。しまりなし。
7　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
8　黄褐色土(10YR5/6)　暗褐色土含む。
9　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
10　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
12　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
13　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
14　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
15　暗褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。

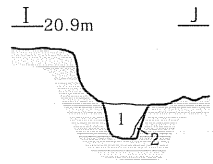
S I 35　(C－D)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
8　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
10　褐色土(10YR4/4)　地山粒・ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
11　にぶい黄褐色(10YR4/3)　地山粒・ブロック含む。粘性・しまりあり。



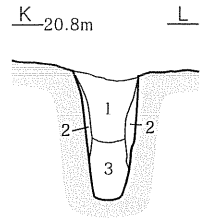
S I 35　P 9(E－F)
1　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘性・しまりなし。
3　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。しまりなし。



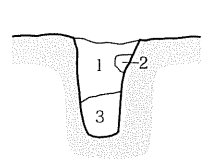
S I 35　P 7(G－H)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりなし。



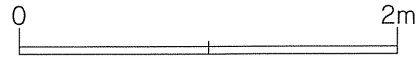
S I 35　P 8(I－J)
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
2　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性なし。しまりあり。



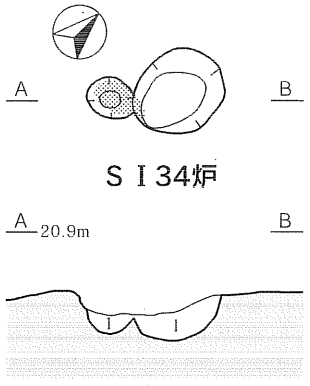
S I 35　P 1(K－L)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。



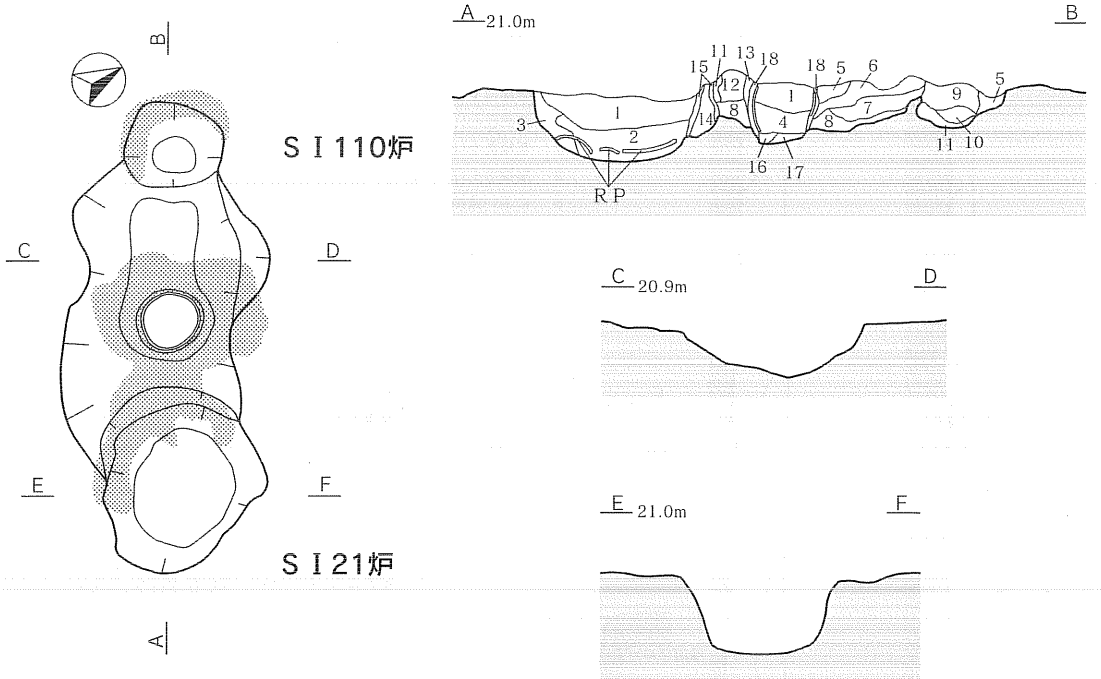
S I 35　P 6(M－N)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性しまりなし。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりなし。



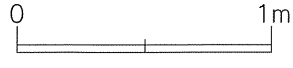
第18図　S I 21・35 竪穴住居跡



S I 34　炉(A－B)
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性なし。しまりあり。



S I 21･110　炉(C－D)
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒･炭含む。粘性･しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック･地山粒･炭･焼土含む。粘性･しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　地山粒･炭含む。粘性･しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック･炭含む。粘性･しまりあり。
5　赤褐色土(2.5YR4/8)　にぶい黄褐色土含む。焼壁。粘性･しまりあり。
6　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性･しまりあり。
7　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック･地山粒･炭含む。
8　褐色土(10YR4/4)　地山粒･炭･焼土含む。粘性･しまりあり。
9　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック･地山粒･炭含む。粘性･しまりあり。
10　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒･炭含む。粘性･しまりあり。
11　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック含む。粘性･しまりあり。
12　黄褐色土(10YR5/6)
13　赤褐色土(5YR4/6)　褐色土含む。粘性･しまりあり。
14　赤褐色土(5YR4/6)　粘性･しまりあり。
15　明赤褐色土(5YR5/8)　焼けている。粘性なし。しまりあり。
16　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　地山粒含む。粘性･しまりあり。
17　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性･しまりあり。
18　赤褐色土(5YR4/6)　粘性･しまりあり。



第19図　S I 21・34・110 竪穴住居跡

《　出土遺物　》　燃焼部からまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第56・57図の土器と第86図の石器が出土した。土器は、深鉢（157～174）が出土した。

158～165が口縁部、166～168が胴部、157・170～174が底部破片である。口縁部は、内反するもの（158・159・161）、直立するもの（161・162）、外反するもの（160・163 ）がある。159は鰭状の隆帯が口縁部にあり、164は緩い波状を呈する。これ以外は平口縁で、158・161は縄文の地文に綾絡文状の文様が縦走する。160・163の口縁部は無文で、直下に浅い沈線をもつ。162は、粘土紐に沿った割れ口が顕著である。166～168の胴部破片は、無文帯を沈線で区画した曲線文で構成する。底部破片の157は、胴部の上位が大きく膨らみ底部に至る。現存高28.3cm・底径7.7cmである。胴部下端を除く全面に撚糸文を施す。内外面の一部に炭化物が付着する。171は胴部中央が大きく膨らみ底部に至る。現存高25.8cm・底径11.1cmである。胴部の全面にＬＲの斜縄文を施し、下端には削りを施す。173の底部破片は突出する。170は底面に直線的な痕跡をもつ。

石器は、石篦（Ｓ33）・削器（Ｓ35）・２次加工ある剥片（Ｓ34）・石斧（Ｓ36）が出土した。Ｓ33の石篦は、小型の製品で全体に粗い調整を施す。Ｓ35の削器は、表面右側縁に粗い調整を施す。Ｓ35の２次加工ある剥片は、表面右側縁に使用痕と思われる痕跡を留める。Ｓ36の石斧は、全体を丁寧に磨いているが、裏面に素材面を残す。基部はやや丸く仕上げる。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ22（第21・55・87図、図版13）

《位置と確認》　調査区南側のＭＤ30区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形と推定され、西側の約半分は調査区の範囲外にある。規模は長軸3.46ｍ×短軸2.30ｍ・深さ0.28ｍである。

《　重　　複　》　北側でＳＤ103を切り込んでいる。

《　土　　層　》　９層に分層した。黒褐色土が主体を占めている。

《　　壁　　》　緩く立ち上がる。

《　床　　面　》　底面は不安定で凹凸が顕著である。

《　柱　　穴　》　内外に径0.2ｍ前後のピットが16基検出されたが、柱穴は不明である。

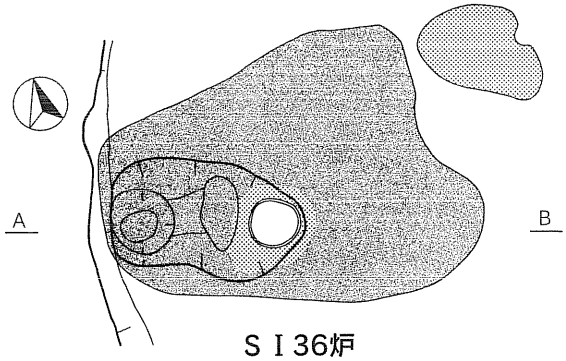
《　　炉　　》　規模は最大長1.34ｍ×最大幅1.10ｍ・最深部0.26ｍで平面形は不整形を呈する。底面には凹凸があり、西側底面から壁にかけて被熱で赤化している。北西壁には、やや大きめの礫が配置され、これらも赤化していた。炉の軸線方向はＮ－74°－Ｗである。

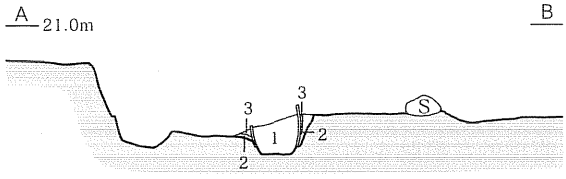
《　出土遺物　》　覆土から僅かな遺物が出土した。出土遺物には、第55図の土器と第87図の石器がある。土器は深鉢（146）が出土した。

146は、胴部がやや丸みをもって底部に至る。現存高12cm・底径7cmである。撚糸文の地文に１～３条の沈線が間隔をおいて垂下する。

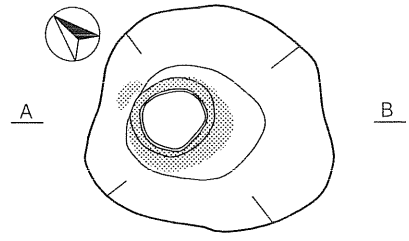
石器は、石皿（Ｓ37）が出土した。方形で、縁が低く内面は緩く傾斜する。現状では、低い２つの脚をもつことから、本来は４つの脚が想定される。

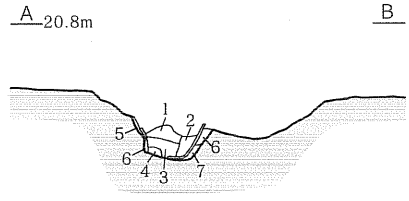
《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。



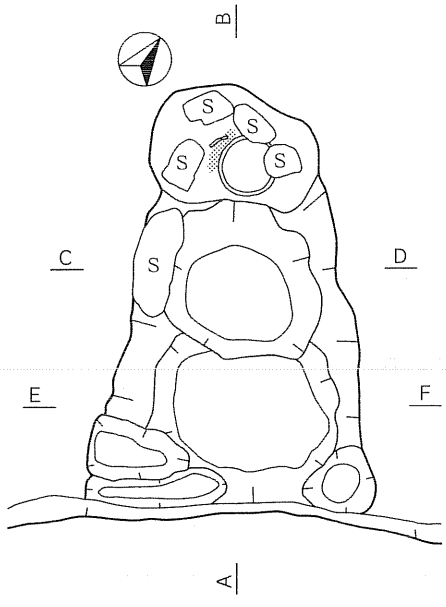


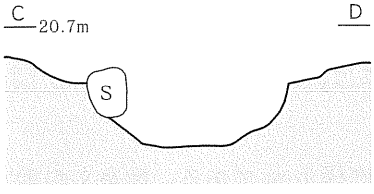
S I 36　炉(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
2　暗赤褐色土(5YR3/4)　地山赤化部分
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック含む。しまりなし。

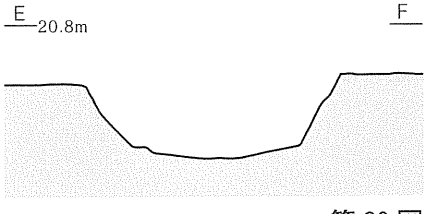




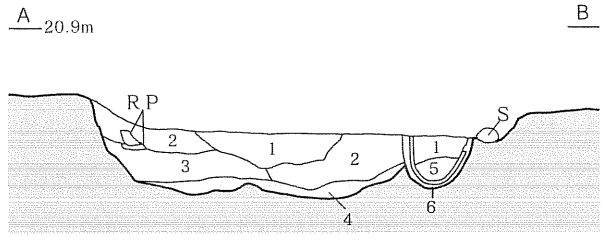
S I 102　炉(A－B)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/1)　炭含む。粘性なし・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。粘性なし。しまりあり。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　地山粒含む。粘性なし。しまりあり。
5　赤褐色土(2.5YR4/6)　炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(7.5YR3/2)　炭含む。粘性あり。しまりなし。
7　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　炭含む。粘性・しまりあり。



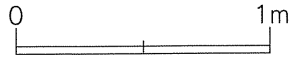




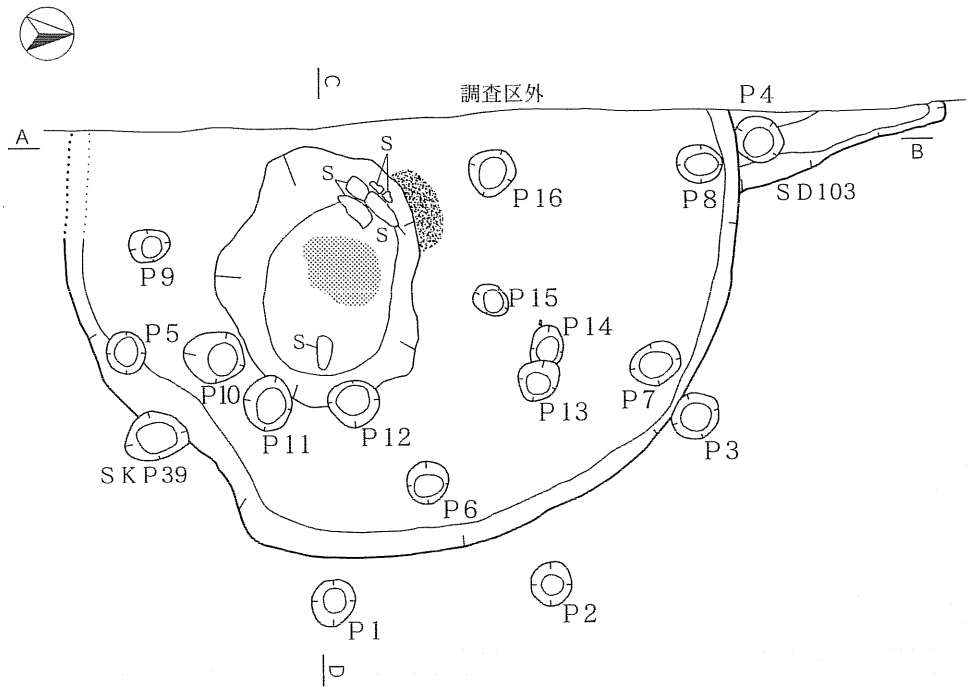
S I 35炉



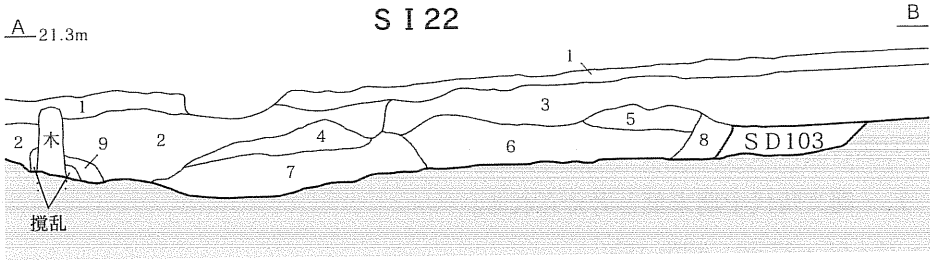
S I 35　炉(A－B)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土(2.5Y3/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(2.5Y3/1)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。

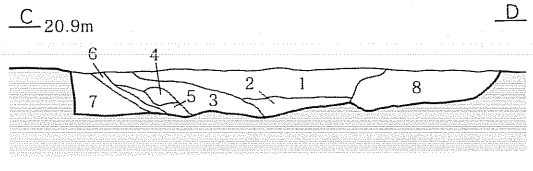


第20図　S I 35・36・102 竪穴住居跡



SI22

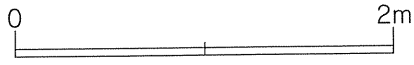




SI22(C－D)
1　黒褐色土(10YR2/3)　しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/1)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。しまりなし。
5　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
7　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山ブロック含む。しまりなし。
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒含む。しまりあり。
9　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・黒褐色土含む。しまりあり。

SI22(A－B)
1　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭・焼土含む。しまりあり。
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)　地山ブロック・炭含む。しまりなし。
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・炭・焼土含む。しまりなし。
4　黒褐色土(10YR3/1)　炭・焼土含む。しまりなし。
5　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック含む。しまりあり。
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒含む。しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック含む。しまりなし。
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック含む。しまりあり。

SD103
1　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒含む。しまりあり。



第21図　SI22竪穴住居跡

ＳＩ23（第22・55・87図、図版14）

《位置と確認》　調査区南側のＭＤ33・34区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は不整の楕円形と推定され、西側の一部は調査区の範囲外にある。規模は現存長軸3.12ｍ×現存短軸2.18ｍ・深さ1.02ｍである。

《重　複》　住居東側でＳＫＩ33に切られ、西側の調査区際でＳＫＦ32を切り込んでいる。

《土　層》　10層に分層した。黒褐色土や暗褐色土が主体を占める。

《壁》　現存部分ではやや急な角度で立ち上がる。

《床　面》　ほぼ平坦で炉付近を除くと軟らかい。

《柱　穴》　確認できなかった。

《炉》　土器埋設炉で、規模は最大長0.54ｍ×最大幅0.37ｍ・最深部0.11ｍで、平面形はは不整の楕円形を呈する。炉の軸線方向はＮ－62°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　深鉢の胴部（第55図147）が、掘り方の中央にほぼ正立した状態で設置される。

《出土遺物》　埋設土器の他数片の遺物が出土した。出土遺物には、第55図の土器や第87図の石器がある。土器は、深鉢(147～149）・ミニチュア土器（150・151）が出土した。

深鉢は、148が口縁147・149が胴部破片である。148の口縁は強く外反する。147の胴部は、ＲＬの斜縄文を施す。149は縄文に縦位の沈線を施す。ミニチュア土器は深鉢である（150・151)。

石器は、石匙（Ｓ38）が出土した。横長剥片を加工したもので、特に表面左側縁に丁寧な調整を施す。同右側縁と刃部右側に素材面を残す。撮み部の表裏にアスファルトの痕跡を留める。

《時　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ25（第23・24・55・87図、図版15）

《位置と確認》　調査区南側のＭＤ29区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形と推定され、西側の半分近くは調査区の範囲外にある。規模は現存長軸3.25ｍ×短軸3.22ｍ・深さ0.22ｍである。

《重　複》　南東部でＳＩ28と切り合うが、新旧関係は不明である。

《土　層》　4層に分層した。黒褐色が主体を占めている。

《壁》　緩やかに立ち上がる。

《床　面》　軟らかく不明瞭である。

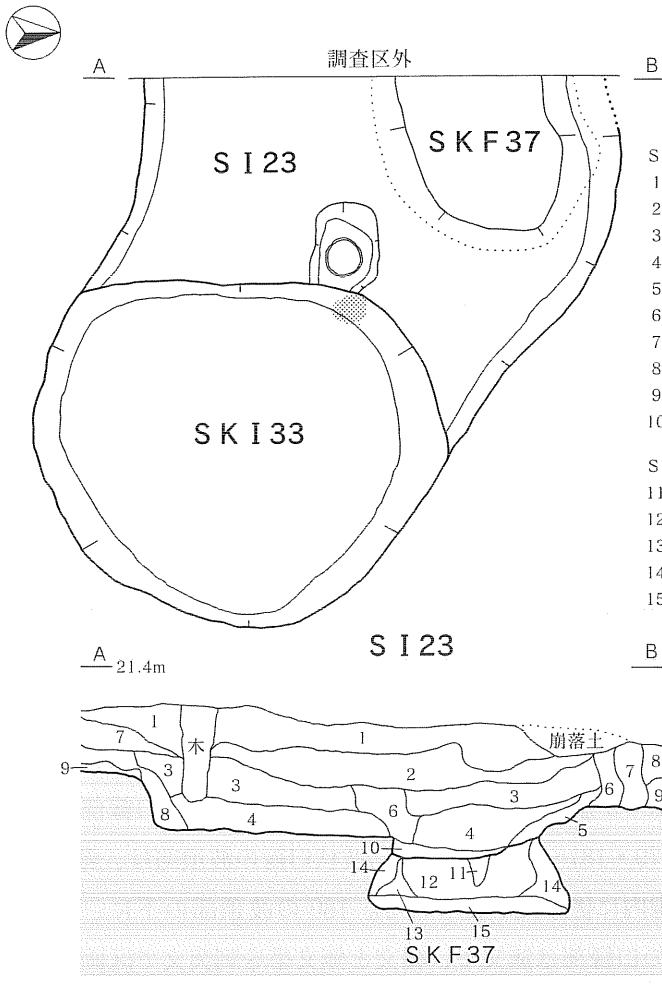
《柱　穴》　内外に径0.2ｍ～0.3ｍのピットを14基検出したが、柱穴は不明瞭である。

《炉》　住居跡の中央に位置する。規模は最大長1.16ｍ×最大幅0.80ｍ、最深部0.12ｍで、平面形は略楕円形を呈する。掘り方の底面に2つの土器埋設炉があり、その北西側に焼土が見られた。炉の軸線方向はＮ－27°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　深鉢は底面を掘り窪めて、正立した状態で設置されていた。

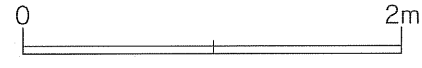
《出土遺物》　土器埋設部から深鉢が出土した。出土遺物は第55図の土器と第87図の石器がある。土器は、深鉢（152）が出土した。152は全面に複節の斜縄文を施す。石器は、削器（Ｓ39）が出土した。両側縁にやや粗い調整を施し、打点側が折損している。

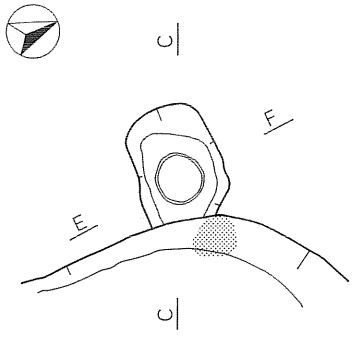
《時　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。



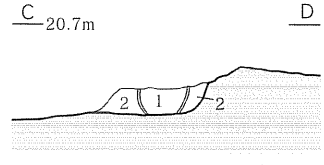
ＳＩ23(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　表土
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
7　黒褐色土(10YR2/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
8　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭含む。粘性・しまりなし。
10　褐色土(10YR4/4)　炭・焼土・暗褐色土含む。粘性・しまりあり。

ＳＫＦ37
11　褐色土(10YR4/4)　炭・焼土・暗褐色土含む。粘性・しまりあり。
12　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
13　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
14　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む。粘性あり。しまりなし。
15　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭含む。粘性・しまりあり。

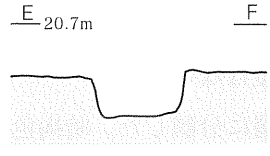


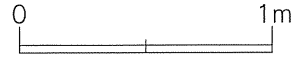


ＳＩ23炉



ＳＩ23　炉(C－D)
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/4)　粘性・しまりあり。





第 22 図　ＳＩ23 竪穴住居跡

ＳＩ26（第25・58・59・87図、図版16・53）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ30・31区及びＭＤ30・31区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形を呈し、規模は長軸3.74ｍ×短軸3.12ｍ・深さは0.77ｍである。

《重　複》　北側でＳＫ47を切り、南側でＳＫ109とＳＫＦ32を切り込んでいる。

《土　層》　13層に分層した。床面上の覆土は、黒褐色土・暗褐色土が主体を占める。

《壁》　西側が緩く立ち上がる以外は、急な角度で立ち上がる。

《床　面》　ほぼ平坦で軟らかい。北東側には半月状の大きな土坑を伴う。規模は長軸2.30ｍ×短軸1.40ｍ・深さ0.50ｍである。

《柱　穴》　内外に径0.2ｍ～径0.4ｍのピットが14基検出されたが、柱穴は不明瞭である。

《炉》　土器埋設炉で、中央やや南東よりに設置される。規模は最大長0.57ｍ×最大幅0.37ｍ・最深部0.21ｍで、平面形は楕円形を呈する。炉の軸線方向はＮ－33°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　掘り方の中央に深鉢（第58図175）が、正立した状態で設置される。土器の周囲は被熱で赤化している。

《出土遺物》　炉や覆土からややまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第58・59図の土器や第87図の石器がある。土器は、深鉢（178～194・195）・ミニチュア土器（193）が出土した。

深鉢は、176～183が口縁部、175・184～187が胴部、188～192が底部破片である。口縁部には、波状口縁（176・178・180）、平口縁（177・179・181～183）がある。波状口縁の波頂部は、鰭状の隆帯になる。176は隆帯に刺突文が、178は沈線内に撚糸文が見られる。180の波頂部の下に、無文帯を沈線で区画した「Ｏ」字状文を施す。178の口縁部は無文で、縄文と無文帯を刺突文で区画する。これ以外の平口縁は、口縁部までＲＬの斜縄文を施す。184・185・187の胴部破片は、縄文・無文帯以外に沈線・刺突文を施す。184・185・186は撚糸文である。底部破片は、189の底部が突出する以外は、胴部から底部まで直線的に移行する。189の底面は全面を削り込む。188・189・195の底面には、直線状の痕跡が認められる。193のミニチュア土器には、撚糸文を施す。

石器は、凹石（Ｓ40）が出土した。楕円形の素材の一端に浅い凹みをもつ。その裏面側に明瞭な擦り面が認められる。

《時　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ27（第26・55・88図、図版17）

《位置と確認》　調査区南側のＬＴ24・25区及びＭＡ25区に位置し、Ⅳ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形と推定され、東側は確認できなかった。規模は推定長軸5.80ｍ×推定短軸4.20ｍ・深さ0.19ｍである。

《重　複》　重複はない。

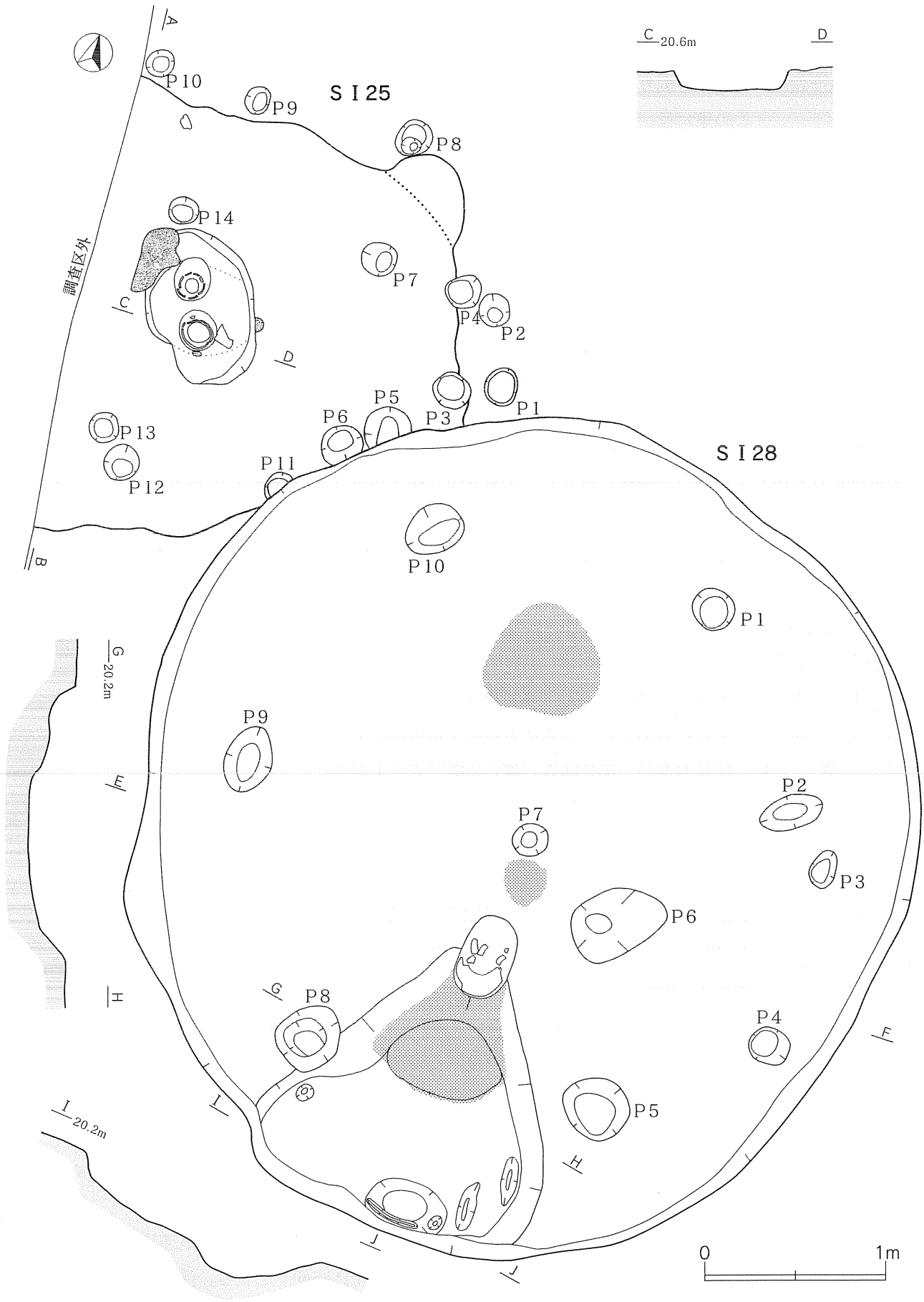
《土　層》　6層に分層した。暗褐色土が主体を占める。

《壁》　緩やかに立ち上がる。東側は不明瞭である。

《床　面》　比較的平坦で、やや硬くしまっている。

《柱　穴》　径0.2ｍ～0.55ｍのピットが22基検出されたが、柱穴は不明瞭である。

《炉》　中央やや北西側に土器埋設炉が設置される。規模は最大長0.36ｍ×最大幅0.30



第 23 図　ＳＩ 25・28 竪穴住居跡（１）

m、最深部0.17mで、平面形は不整形を呈する。炉の軸線方向はN－77°－Wである。

〈土器埋設部〉　円形の掘り方に、正立した状態で深鉢の口縁部が埋設されていた（第55図154）。この東には、覆土に焼土を伴う楕円形のピットが伴い、そばに礫が配置されている。土器埋設部の西側には、床面上に希薄な焼土が堆積していた。

《　出土遺物　》　埋設土器と覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第55図の土器や第88図の石器がある。土器は、深鉢（153～156）が出土した。153～155は口縁部、156は底部破片である。153・154は直立し、155は無文帯の口縁で直立気味に外反する。156の底部はやや突出気味で、複節の斜縄文を施す。

石器は、石篦（S42・S43）・石匙（S44）・石笛（S45）が出土した。

S42の石篦は、全体に粗い調整を施し刃部は摩滅している。S43は、刃部が丸く全体が三角形状を呈する。両側縁の調整は粗いが、刃部は丁寧に整える。S44の石匙は、正面刃部と摘み部は裏面に粗い調整を施す。摘みが大きい特徴をもつ。S45は石笛と考えられる。扁平な素材を加工し、現状の形態に作り出している。一側縁に沿って、正面下端で径8mm上端で6mmの穿孔を施す。上端に指を当てたものであろうか。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ28（第23・24・60～62・89・90図、図版18・19・54・59・60）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ28・29区及びＭＤ28・29区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形を呈し、規模は長軸6.15m×短軸5.85m・深さ0.46mである。

《　重　　複　》　ＳＩ25と重複するが、新旧関係は不明である。

《　土　　層　》　7層に分層した。全体に黒褐色土が主体を占める。

《　　壁　　》　壁は西側の一部を除き、強い角度で立ち上がる。

《　床　　面　》　ほぼ平坦で中央部が僅かに低くなる。床は硬くしまっている。

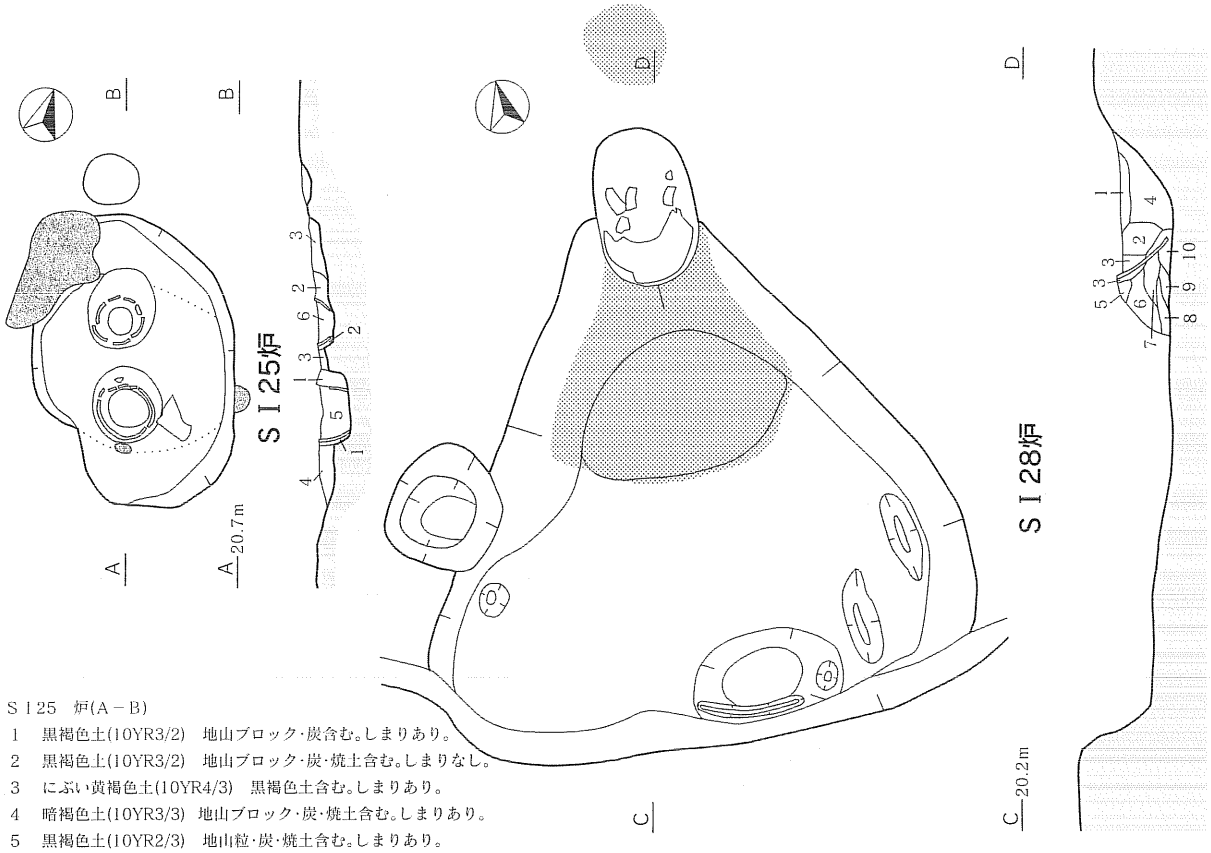
《　柱　　穴　》　Ｐ1～Ｐ10の10基を確認した。規模はＰ1が長軸0.32m×短軸0.30m・深さ0.55m、Ｐ2が0.50m×0.24m・0.22m、Ｐ3が0.30m×0.20m×・0.68m、Ｐ4が0.30m×0.26m・0.12m、Ｐ5が0.50m×0.44m・0.78m、Ｐ6が0.72m×0.48m・0.32m、Ｐ7が0.28m×0.24m・0.10m、Ｐ8が0.50m×0.42m・0.93m、Ｐ9が0.50m×0.36m・0.76m、Ｐ10が0.45m×0.35m・0.58mである。

《　　炉　　》　住居跡南側の壁に付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。燃焼部と前庭部が1つの掘り方で連続する。規模は最大長2.48m×最大幅2.20m・最深部0.20mで、平面形は埋設土器を頂部とする二等辺三角形を呈する。炉の軸線方向はＮ－1°－Ｅで、ほぼ真北である。

〈土器埋設部〉　深鉢の胴部の半分が(第60図196)が、燃焼部側に残存していた。燃焼部との境界が最も強く火熱を受けていた。

〈燃焼部〉　共有する掘り方の中央から北側が強い被熱を受けており、焼土が連続していた。

〈前庭部〉　共有する掘り方の中央から南側の範囲で、全体が硬くしまる。住居壁際の軸線上には、長軸0.62m×短軸0.34m・深さ0.06mの浅い掘り込みが見られる。



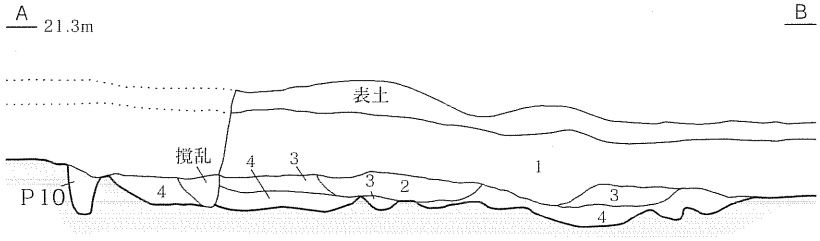
SI25　炉(A－B)

1　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭・焼土含む。しまりなし。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黒褐色土含む。しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭・焼土含む。しまりあり。
5　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭・焼土含む。しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。しまりなし。

SI28　炉(C－D)

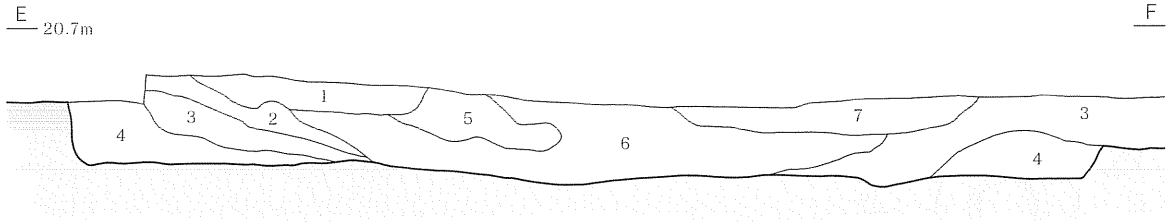
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭含む。粘性・しまりなし。
2　褐色土(10YR4/6)　粘性・しまりなし。
3　暗褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
5　黄褐色土(10YR5/6)　焼土含む。
6　暗褐色土(10YR3/4)　粘性・しまりあり。
7　褐色土(10YR4/6)　粘性・しまりあり。
8　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　焼土含む。
9　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　焼土含む。
10　褐色土(10YR4/6)　地山粒含む。

0　1m



SI25(A－B)

1　黒褐色土(10YR2/3)　炭含む。しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりなし。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・地山粒炭含む。しまりなし。

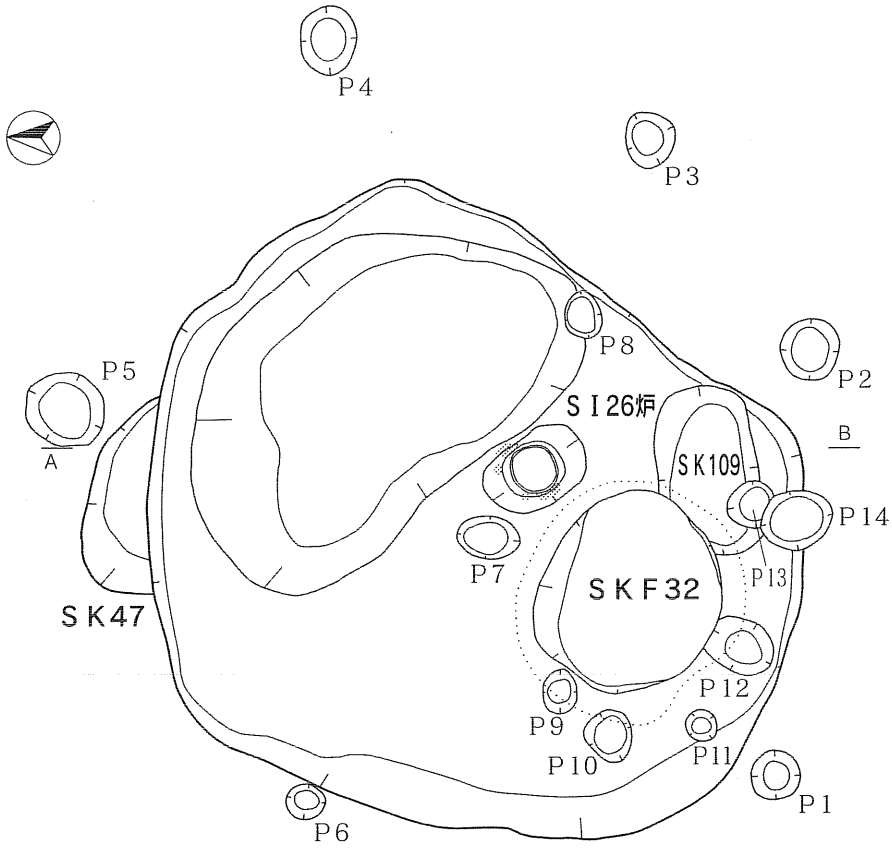


SI28(E－F)

1　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/3)　粘性・しまりあり。

0　2m

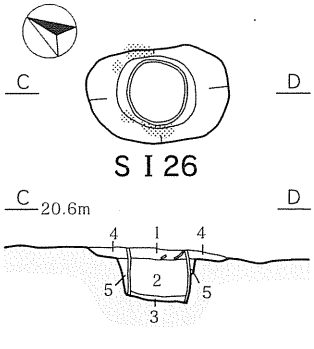
第24図　SI25・28竪穴住居跡（2）



S I 26(A－B)

1　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/4)　粘性・しまりあり。
6　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
8　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
9　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
10　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
11　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
12　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
13　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
※　北端の12・13層はSK47の覆土

0　2m



S I 26　炉(C－D)

1　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりなし。
2　暗赤褐色土(2.5YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりなし。
3　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。しまりあり。
5　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　炭・焼土含む。しまりあり。

0　1m

第25図　S I 26竪穴住居跡

《　出土遺物　》　覆土から多量の遺物が出土した。出土遺物には、第60～62図の土器や第89・90図の石器がある。土器は、深鉢（196～224）・壺（225）が出土した。

深鉢は、197・201～212が口縁部、213～223が胴部破片、224が底部破片である。口縁部は、204が波状を呈する他は平口縁である。197と198は胴一個体である。197は現存高14cm・口径25cmである。これらは、口縁部が緩く外反し胴部中央に最大部をもつ。文様は、ＲＬ縄文と無文帯を区画する隆帯等で構成される。無文帯が、口縁部から胴部中央にかけて横位に展開し、胴最大部で渦巻きを作る。201は、口縁部が直立気味に外反し、その直下が胴部の最大径になる。現存高26.8cm・口径26cmである。口縁部は無文で、胴部最大部には円形の浅い窪みが巡り、更にその上下に刺突文を施す。胴部全体にＬＲの縄文を施し、上に沈線による上下逆「U」字文を単独もしくは2重に隣接させて描く。202は、201と同様の特徴をもつが浅い窪みをもたない相違がある。口縁部には、外反するもの（203・207・208・211）、内湾するもの（204・205 ）、直立するもの（206・209・210・212）がある。文様は、斜縄文の他に沈線を施すもの（204・206・210・212）がある。胴部破片では、無文帯を沈線で区画するもの（196・198～200・213・216・217・220）、刺突文を施すもの（199・215・220）、斜縄文を施すものがある。219は綾杉状の文様を描き、223は撚糸文が施される。196は口縁部が内湾すると考えられる。現存高は26.4cmである。ＲＬの斜縄文に、幅の狭い上下逆「U」字状の沈線文を連続して配置するもので、逆「U」字文間に狭い無文帯を挟む。胴上位の一部には、横位に展開する沈線も認められる。199は胴部上位に最大部があり口縁が内傾する。文様は、口縁部と胴部の境に平行沈線があり、直下に刺突文を配置する。その下には、縄文地に逆「U」字状の沈線文を連続させ、逆「U」字文間に沈線を描く。200は口縁部が直立気味で、胴部上位に最大部がある。口縁部と胴部の境に平行沈線を描き、その下に2本の沈線で上下逆「U」字状の文様を連結させている。これらは縄文の上に描かれる。224の底部は、胴部下端が無文の他はＲＬの縄文を施す。壺の225は、胴部下半が膨らみ底径が最大になる形態で、現存高5cm・底径8 cmである。

石器は、尖頭器（Ｓ48・Ｓ49）・石錐（Ｓ50）・石核（Ｓ51）・凹石（Ｓ52～Ｓ54）が出土した。Ｓ48とＳ49は、先端が折損した尖頭器と理解した。Ｓ48の基部は太く、Ｓ49の基部は薄い。両石器とも石錐の可能性もある。Ｓ50の石錐は、刃部側を細く基部側を厚く作り出している。刃部の断面は三角形である。Ｓ51の石核は、礫面を半分ほど残した頁岩で、中に不純物を含む粗悪な素材である。不定方向に転移して、小さな剥片を得ている。Ｓ52とＳ53の凹石は、表裏両面にやや広い範囲であばた状の痕跡をもつ。Ｓ54は、楕円形の素材の下方にあばた状の痕跡を留める。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ29（第27・63・88図、図版20・54・55）

《 位置と確認 》　調査区南側のＭＤ26・27区に位置し、Ⅲ層で確認した。

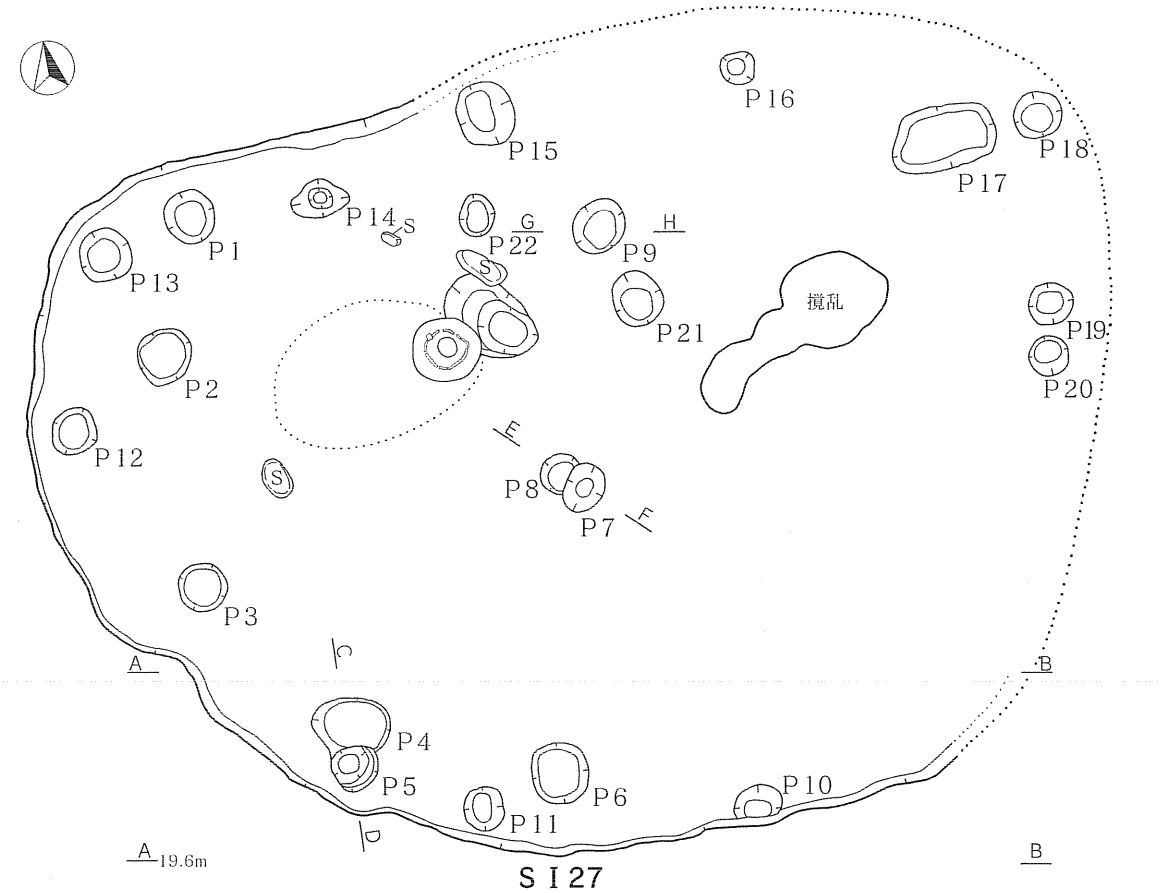
《規模と平面形》　平面形は楕円形と推定され、北と南側が風倒木によって攪乱を受ける。現存の規模は長軸3.00ｍ×短軸2.10ｍ・深さ0.38ｍである。

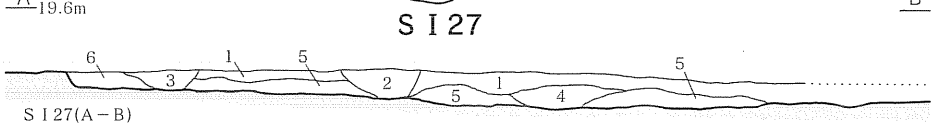
《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　3層に分層した。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土である。

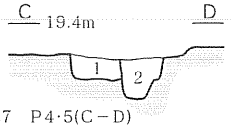
《　　壁　　》　残存する部分は直立気味に立ち上がる。

《　床　　面　》　全体に硬くしまっている。

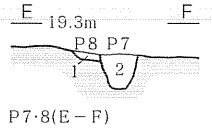




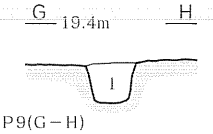
S I 27(A－B)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。しまりなし。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒含む。しまりなし。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。しまりあり。



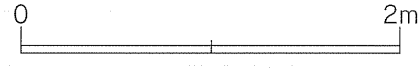
S I 27　P4・5(C－D)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。しまりあり。

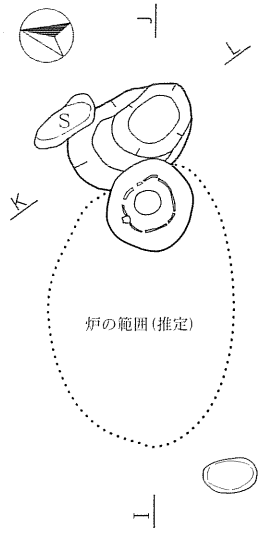


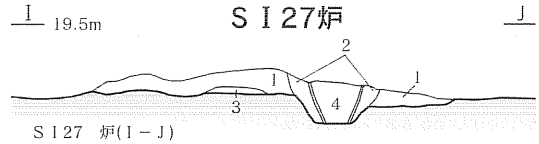
S I 27　P7・8(E－F)
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。しまりあり。



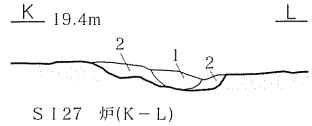
S I 27　P9(G－H)
1　暗褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。しまりあり。



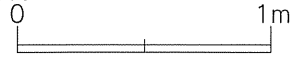




S I 27　炉(I－J)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭・焼土含む。しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。しまりあり。
4　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。しまりあり。



S I 27　炉(K－L)
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。しまりあり。



第 26 図　S I 27 竪穴住居跡

《 柱　穴 》　Ｐ１～Ｐ４の４基の柱穴を検出した。規模はＰ１が長軸0.20m×短軸0.15m・深さ0.10m、Ｐ２が0.20m×0.16m・0.11m、Ｐ３が0.22m×0.15m・0.06m、Ｐ４が現存で0.15m×0.14m・0.12mである。

《 炉 》　住居跡の南壁際に位置する。土器埋設部・燃焼部で構成される複式炉である。規模は最大長0.92m×最大幅0.48m、最深部0.15mで、平面形は不整楕円形を基調にしている。炉の軸線方向はＮ－26°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　深鉢の胴部（第63図226）が、正位に設置される。埋設土器の周辺は被熱で赤く硬化していた。西側に埋設土器の抜き取り痕が検出された。

〈 燃 焼 部 〉　0.3m×0.3mの方形の範囲で、主に北西と北東側に隆帯上の低い壁を巡らす。内部の底面も含め被熱で赤く硬化していた。

《 出土遺物 》　炉と覆土からややまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第63図の土器や第88図の石器がある。土器は、深鉢（226～229）・ミニチュア土器（230）が出土した。

深鉢は、227が口縁部226が胴部破片である。226は胴部上位が大きく膨らむ。現存高17cmで、胴部にＲＬの斜縄文を施す。227は口縁部が直立気味に外反し、胴部中央に最大径をもつ。現存高28.5cm・口径29cmである。口縁部は無文で、直下に低い段を形成する。胴部にはＲＬの斜縄文を施す。228は口縁部が大きく開き、胴部は上位に最大径がある。器高19.8cm・推定口径18cm・底径6.1cmである。全面にＬＲの斜縄文を施す。229は口縁部が直立し、胴部上位に最大径をもつ。器高13.1cm・口径13.2cm・底径8.6cmである。全面にＲＬの斜縄文を施す。230のミニチュア土器は、胴部が無文で底面に木葉痕をもつ。

石器は、石匙（Ｓ46）・凹石（Ｓ47）が出土した。Ｓ46の石匙は、両側縁にやや粗い調整を施し、刃部には明瞭な加工痕をもたない。素材を得る打点に礫皮面を残す。Ｓ47の凹石は、表裏面と側面にあばた状の凹みをもつ。側縁の半分ほどに、被熱で赤く焼けた痕跡を留める。

《 時　期 》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ30（第27・63・64・91図、図版21）

《 位置と確認 》　調査区南側のＭＢ26・27区及びＭＣ26・27区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形略円形を呈し、西側から南側にかけて木の根による攪乱を受ける。規模は長軸2.56m×短軸2.56m・深さ0.36mである。

《 重　複 》　重複はない。

《 土　層 》　６層に分層した。黒色土と暗褐色土が主体を占めている。

《 壁 》　緩やかに立ち上がる。

《 床　面 》　凹凸が著しく硬くしまっている。

《 柱　穴 》　北側に１基だけ検出した。規模は長軸0.25m×短軸0.17m・深さ0.13mである。

《 炉 》　中央やや北西側に位置する。土器埋設部・燃焼部で構成される複式炉である。規模は最大長0.84m×最大幅0.40m、最深部0.17mで、平面形は瓢箪形を呈する。炉の軸線方向はＳ－40°－Ｅである。

〈土器埋設部〉　小さな楕円形の掘り方で、土器片が出土した。

〈 燃 焼 部 〉　底面は北西側が最も低く、南東側は平坦である。

《　出土遺物　》　炉や覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第63・64図の土器や第91図の石器がある。土器は、深鉢（231～236）・ミニチュア土器（237・238）が出土した。

深鉢は231が口縁部、232・233が胴部、234～236が底部破片である。231の口縁部は外反し、斜縄文を施す。胴部の232には穿孔があり、233には無文帯を沈線で区画した文様がある。234～236の胴部下端を除いて、斜縄文を施す。これらの外底面全体には、多数の直線状の痕跡が残る。ミニチュア土器には、台付鉢の台部（237）・底の丸い無文の鉢（238）がある。

石器は、石鏃（S55・S56）・削器（S57）・石製品（S58)が出土した。S55の石鏃は、全体に丁寧な調整を施し、表裏面に広い範囲で明瞭なアスファルトの痕跡を留める。S56は、石鏃の未製品と判断したが、石錐の可能性がある。S57の削器は、正面の左側縁と隣り合う側縁に丁寧な調整を施す。右側縁には素材面を残す。S58の石製品は、断面四角形の稜線沿いに粗削りした後、一側縁と上端を擦り込んでいる。さらに上端に、径9mm長さ1.1mmの円錐状の孔を穿っている。孔の内壁には同心円状の痕跡を留める。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ34（第17・19・64図、図版22・55）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ32区に位置し、Ⅳ層で確認した。

《規模と平面形》　住居跡のプランは不明である。

《　重　　複　》　ＳＩ35と重複すると考えられるが不明である。

《　床　　面　》　炉の周囲が硬くしまっている。

《　柱　　穴　》　不明である。

《　　炉　　》　炉のみを確認した。規模は最大長0.56m×最大幅0.34m、最深部0.24mで、平面形は不整形を呈する。炉の軸線方向はＳ－44°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　深鉢の口縁部破片（第64図241）が、正立した状態で設置される。この南側が被熱で赤化している。

〈燃焼部〉　楕円形を呈しピットの攪乱を受ける。長軸0.40m×短軸0.30m・深さ0.22mで、壁は擂り鉢状に立ち上がる。

《　出土遺物　》　覆土から少量遺物が出土した。出土遺物には、第64図の土器がある。土器は、深鉢（241）・ミニチュア土器（239・240）が出土した。

深鉢の241は、口縁が直立し条間の開いたＬＲ斜縄文を施す。ミニチュア土器には深鉢がある。239は、口縁部が僅かに外反し筒形を呈する。器高14.3cm・推定口径10.9cm・底径7cmである。口縁部は折り返し状に低い段をもつ。口縁部から粘土紐を貼付した「Ｖ」字状の文様がある。全体に斜縄文を施す。240は口縁部が直立し、胴部中央が大きく膨らんで、底部は突出する。器高9.25cm・推定口径9.7cm・底径5.7cmである。口縁部には狭い無文帯をもち、全面にＬＲの斜縄文を施す。外底面全体に多数の直線状の痕跡が認められる。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ35（第17・18・20・64～66・91・92図、図版23・56）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ32・33区及びＭＤ31・32区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形を呈し、規模は長軸4.25m×短軸4.16m・深さ0.30mである。

《 重　複 》　ＳＩ21・36を切り込んでいると判断された。ＳＩ102との重複関係は不明である。

《 土　層 》　3層に分層した。中央がにぶい黄褐色土で、壁際が褐色土である。

《 壁　 》　やや急な角度で立ち上がる。

《 床　面 》　凹凸が著しく、硬くしまっている。

《 柱　穴 》　Ｐ1～Ｐ10まで確認した。規模はＰ1が長軸0.33m×短軸0.28m・深さ0.77m、Ｐ2が0.32m×0.30m・0.34m、Ｐ3が0.24m×0.20m・0.19m、Ｐ4が0.4m×0.30m・0.14m、Ｐ5が0.24m×0.20m・0.20m、Ｐ6が0.36m×0.30m・0.55m、Ｐ7が0.48m×0.43m・0.50m、Ｐ8が0.25m×0.20m・0.22m、Ｐ9が0.40m×0.32m・0.32m、Ｐ10が0.48m×0.32m・0.62mである。

《 炉　 》　住居跡南東側に炉が付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成される複式炉である。規模は最大長1.62m×最大幅1.16m、最深部0.36mで、平面形は二等辺三角形状を呈する。炉の軸線方向はＮ－35°－Ｗである。

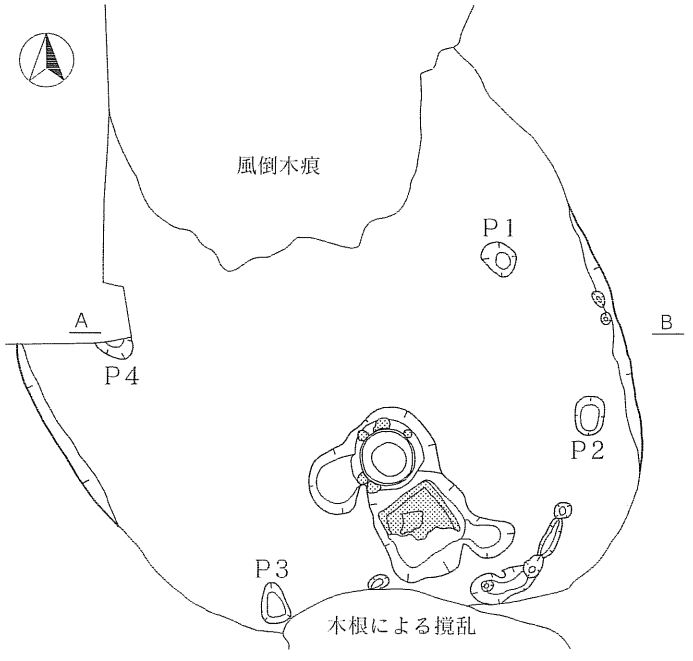
〈土器埋設部〉　深鉢の底部（第65図245）が正立した状態で埋設され、周囲には4個の礫がやや不規則に配置される。

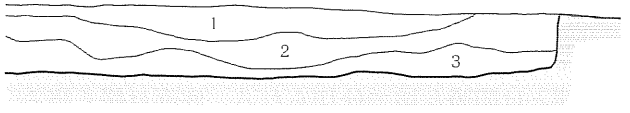
〈 燃 焼 部 〉　掘り方の平面形は略円形で、平坦な底面から擂り鉢状に立ち上がる。北西の壁に長い大型の礫が設置される。

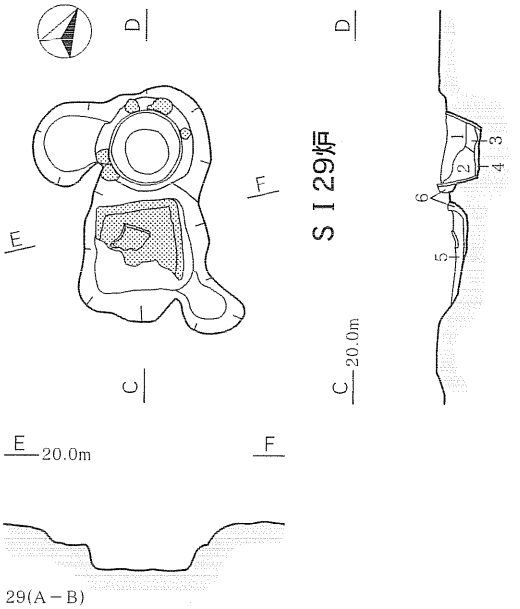
〈 前 庭 部 〉　隅丸方形状の掘り方で、燃焼部とは明瞭な境で仕切られる。底面は緩く窪み、壁はやや急な角度で立ち上がる。東隅に小さなピット1基、南隅に溝状のピット2基を検出した。

《 出土遺物 》　覆土からややまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第64～66図の土器や第91・92図の石器がある。土器は、深鉢（244～247・252～258）・壺（248～250）・土製品（259）・円盤状土製品（260）が出土した。

深鉢は、244～246が口縁部、251・252が胴部、242 ・253～258が底部破片である。243は口縁部が直立し、胴部中央に最大径をもつ。器高17.1cm・口径12.2cm・底径5.5cmである。口唇部に山形の小さな突起をもち、無文の口縁部に刺突文が巡る。所々に口縁部から降りる沈線の区画文があり、中に刺突文を配置する。胴部下端が削られている以外は、ＬＲの縄文を施す。247は波状口縁で内湾し、突出する底部に直線的に連続する。器高19.1cm・推定口径22.3cm・底径7cmである。口縁部と胴部下端が無文で、これ以外はＲＬの斜縄文を施す。外底面全体に多数の直線状の痕跡を認める。244は口縁部が緩く外反し、胴部上半が筒状になり下半部で窄まる。現存高20.2cm・推定口径23.1cmである。口縁部は無文で、縄文との境に浅い窪みと刺突文を施す。胴部はＲＬの斜縄文に、上下逆「U」字状の沈線文を連結させる。逆「U」字状文間の上位にも浅い窪みと刺突文を配置する。逆「U」字状文の下にも上下逆「U」字状の沈線文を施す。口縁部と胴部文様間には、斜めに突き刺した刺突文が見られる。245は口縁部が外反し、胴部下半から窄まる。現存高30.6cm・口径26cm である。口縁部は無文で、全体にＲＬの斜縄文を施す。246は無文の口縁部が緩い波状を呈し、縄文との境に浅い平行沈線を施す。その下に、無文帯を沈線で区画した文様構成が配置する。252の胴部破片は、胴部最大部で斜縄文の上に無文帯を沈線で区画した文様が縦走する。外面に炭化物が顕著に付着する。251は粘土紐を貼付して、撚り糸文を押圧する。底部は胴部下端以外に斜縄文を施す（253・

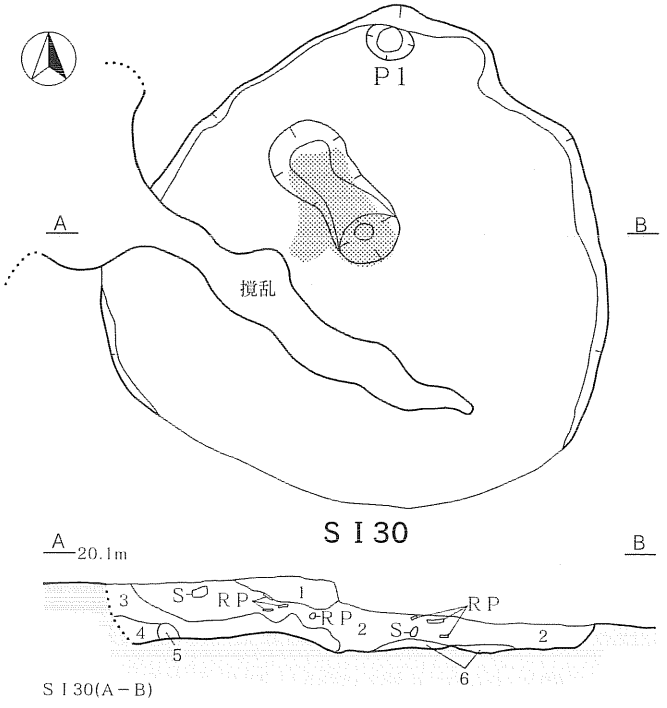




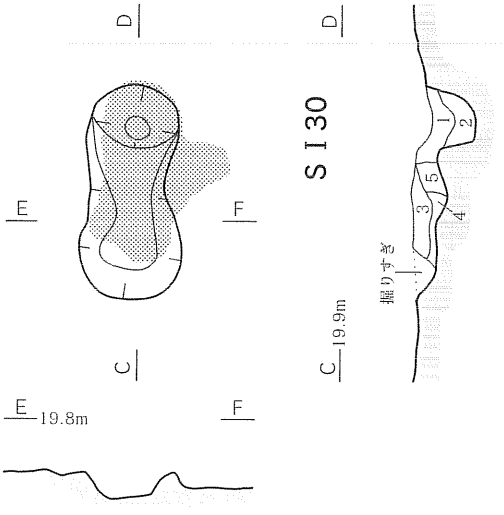


S I 29(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。

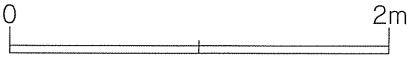
S I 29　炉(C－D)
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。
2　黒褐色土(10YR2/3)　粘性あり。
3　赤褐色土(5YR4/8)　焼土含む。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性あり。
5　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。粘性あり。
6　赤褐色土(5YR4/8)　被熱で硬質化した焼土

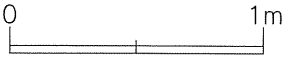


S I 30(A－B)
1　黒色土(10YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。
5　黒褐色土(10YR2/2)　粘性・しまりあり。
6　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。



S I 30　炉(C－D)
1　黒褐色土(10YR2/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　焼土含む。粘性なし。しまりあり。





第27図　S I 29・30 竪穴住居跡

254・257・258)。壺の243は口縁部が短く直立し、胴部が丸く膨らむ。縄文と無文帯を沈線で区画する。249は壺の把手で、250にはボタン状の突起が付く。259は柱状の一部と思われる。260は、縄文の破片を円盤状に仕上げたものである。

石器は、削器（S59）・2次加工のある剥片（S60）・使用痕のある剥片（S61）が出土した。S59の削器は、正面右側縁と刃部にやや粗い調整を施す。左側縁には使用痕を留める。S60は、裏面上端に丁寧な剥離を留めており、そこを摘み部にした石匙の未製品の可能性がある。S61は、裏面右上側縁に使用痕を留める。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ36（第17・18・20・66・67・92図、図版24・56）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ33・34区に位置し、一部はⅢ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は不明であり、規模は現存長軸2.20ｍ×現存短軸1.50ｍ・深さ0.18ｍである。

《　重　　複　》　ＳＩ35に切られると判断されるが、ＳＩ102との関係は不明である。

《　土　　層　》　4層に分層した。黒褐色土や暗褐色土が主体を占める。

《　　壁　　》　北西側のみ確認され、緩く立ち上がる。

《　床　　面　》　凹凸があり、硬くしまっている。

《　柱　　穴　》　不明である。

《　　炉　　》　住居跡の西壁に接して炉が付設される。規模は最大長0.82ｍ×最大幅0.54ｍ・最深部0.16ｍで、平面形は略楕円形を呈する。炉の軸線方向はＳ－72°－Ｅである。

〈土器埋設部〉　深鉢の胴部（第66図263）がほぼ正立した状態で埋設されていた。土器の周囲は被熱で赤化している。

〈燃焼部〉　掘り方の平面形は、方形状を呈し、わずかに窪んでいる。

〈前庭部〉　燃焼部より深く、略円形の窪みをもつ。底面は燃焼部側に緩く傾斜する。

《　出土遺物　》　炉と覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第66・67図の土器や第92図の石器がある。土器は、深鉢（261～267）が出土した。

土器の261・262・264は口縁部、263・265・266は胴部、267は底部破片である。261・262の口縁部は外反する平口縁で、264は直立し平口縁に山形の突起が付く。261・264は縄文と無文帯を沈線で区画する。262は、全体にＬＲの斜縄文を施し部分的に擦り消す。263の胴部には撚り糸文を施す。265は、縄文の上に綾絡文状の文様が縦走する。266は縄文に沈線文が縦走する。267の底部は胴部下端を除き縄文を施す。

石器は、擦石（S62・S63）が出土した。両石器とも円形の礫を素材にして、表裏両面（S62）と片面（S63）を擦り面として利用している。

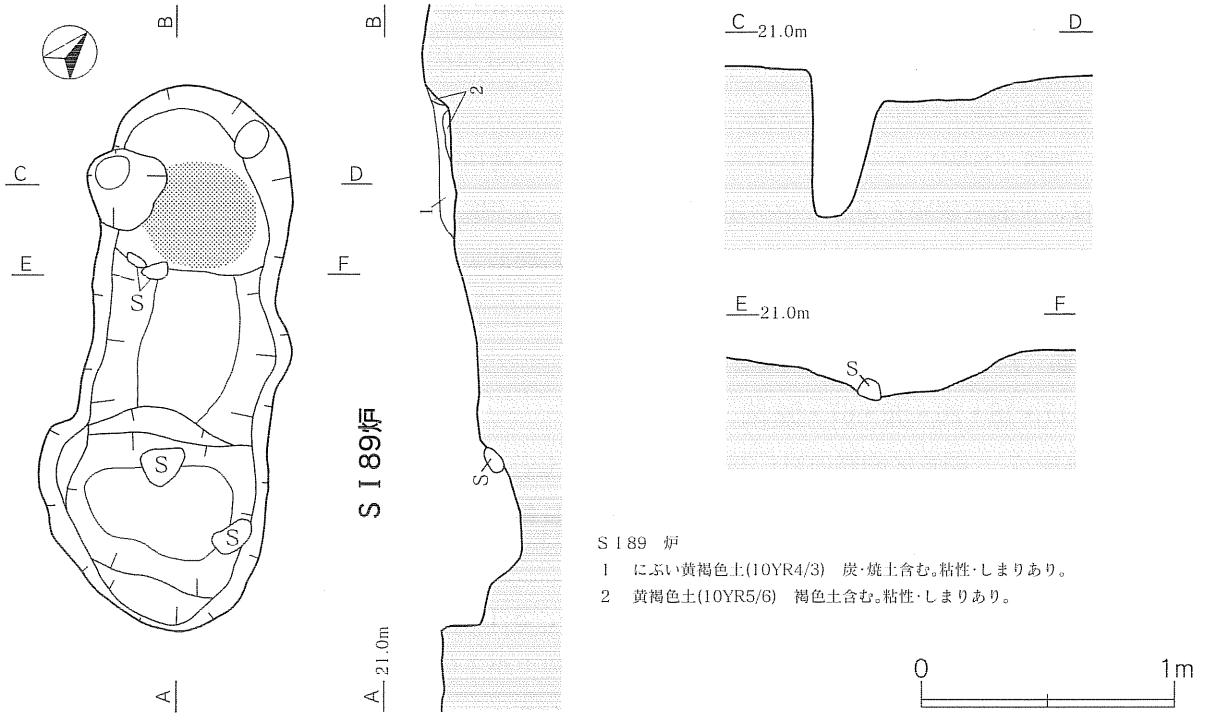
《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ89（第28図、図版25）

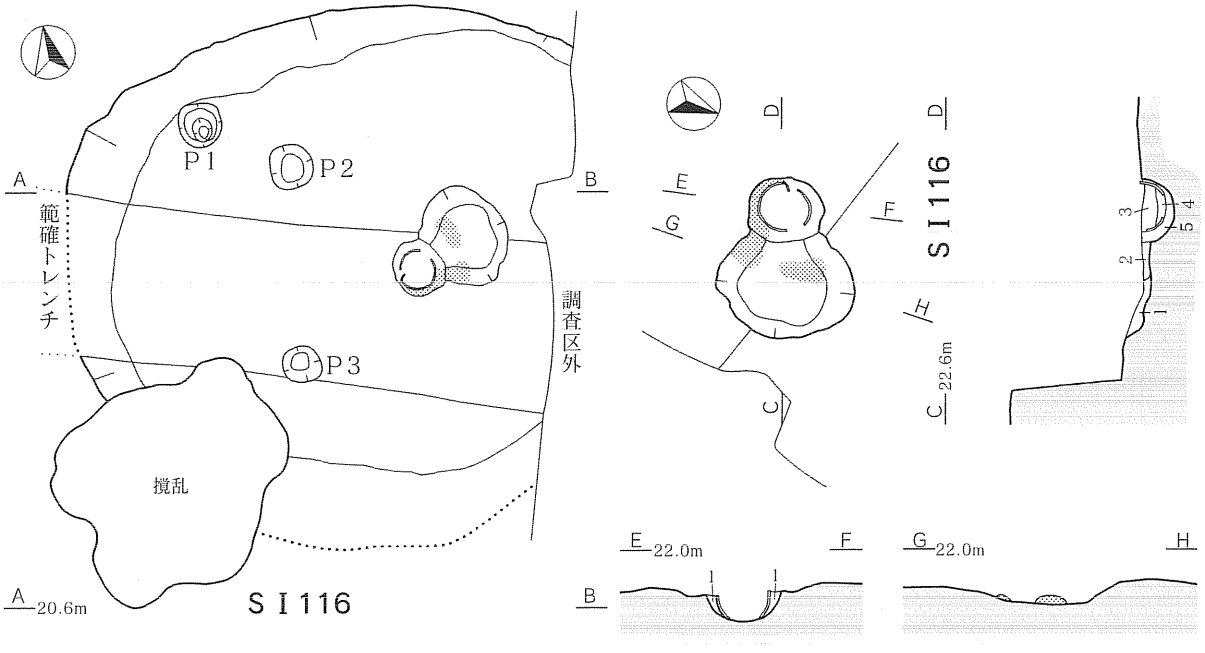
《位置と確認》　調査区南側のＭＤ31区に位置し、Ⅳ層で炉のみ確認した。

《規模と平面形》　規模は長軸2.16ｍ×短軸0.92ｍ、深さ0.36ｍで、不整な長楕円形を呈する。

《　重　　複　》　ピットに切られている。



S I 89　炉
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黄褐色土(10YR5/6)　褐色土含む。粘性・しまりあり。



S I 116(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
※　撹乱層…黒褐色土(10YR2/2)　粘性・しまりあり。

S I 116　炉(C－D)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。

S I 116　炉(E－F)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。

0　2m　　0　1m

第28図　S I 89・116 竪穴住居跡

《 床　　面 》　炉の周囲が硬くしまっている。

《 柱　　穴 》　炉の北東側の焼土脇に1基確認したが、同時期の柱穴ではないと判断される。

《　　炉　　》　本来、住居の南東側壁に付設された炉と推定される。石囲い部・燃焼部・前庭部で構成される複式炉であったと考えられる。炉の軸線方向はＳ－38°－Ｅである。

〈 石囲い部 〉　略円形を呈し、浅い掘り方の壁に礫を抜き取った痕跡が見られる。底面は被熱で赤化しており、燃焼部側に緩く傾く。

〈 燃 焼 部 〉　掘り方の平面形は方形を呈し、中央が僅かに窪んで前庭部側に緩く傾斜する。両側の壁は緩やかに立ち上がる。

〈 前 庭 部 〉　略円形を呈し、底面は丸底で壁は擂り鉢状を呈する。底面が最も低くなる。

《 出土遺物 》　遺物は出土していない。

《 時　　期 》　不明である。しかし、炉の形態や周辺の遺構・遺物の分布状況から中期末葉であることが想定される。

ＳＩ102（第17・20・67図、図版26）

《 位置と確認 》　調査区南側のＭＣ33区に位置し、ＳＩ35・ＳＩ36の精査中に炉のみ確認した。

《規模と平面形》　規模は長軸1.10ｍ×短軸0.87ｍ・深さ0.20ｍで、平面形は略楕円形を呈する。

《 重　　複 》　ＳＩ35・ＳＩ36と重複するが、重複関係は不明である。

《　　炉　　》　土坑状の掘り方底面に、深鉢（第67図268）がやや斜めに埋設された土器埋設遺構である。土器の周りは被熱で赤化している。炉の軸線方向はＳ－12°－Ｅである。

《 出土遺物 》　埋設土器と僅かな遺物が出土した。出土遺物には、第67図の土器がある。深鉢（268～270）が出土した。268・268は胴部、270は底部破片である。268は胴部上位が膨らみ、全面にＲＬの斜縄文を施す。269は撚糸文である。270は無文である。

《 時　　期 》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ110（第19図、図版12）

《 位置と確認 》　調査区南側のＭＤ31・32区に位置し、Ⅳ層で炉のみ確認した。

《規模と平面形》　ＳＩ21に切られ全体の詳細は不明である。

《　　炉　　》　炉のみ確認された。南東がＳＩ21の複式炉に切られ、土器埋設部と燃焼部の一部が残存していた。現存の規模は最大長0.68ｍ×最大幅0.60ｍである。炉の軸線方向はＮ－53°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　浅い抜き取り痕跡が認められた。

〈 燃 焼 部 〉　土器埋設部から南東側に緩く降る。

《 出土遺物 》　遺物は出土しなかった。

《 時　　期 》　不明である。しかし、重複するＳＩ21や周辺の遺構・遺物の分布状況から縄文時代中期末葉と想定される。

ＳＩ115（第29・70～73・93～95図、図版27・28・57）

《位置と確認》　調査区中央のＭＡ47・48区、ＭＢ47～49区、ＭＣ47～49区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は南東壁がほぼ直線の蒲鉾断面形もしくは隅丸五角形状を呈し、規模は長軸9.46ｍ×短軸9.24ｍ・深さ0.86ｍである。

《重　複》　ＳＩ143を切り込んでいる。

《土　層》　11層に分層した。黒褐色土が主体を占めている。

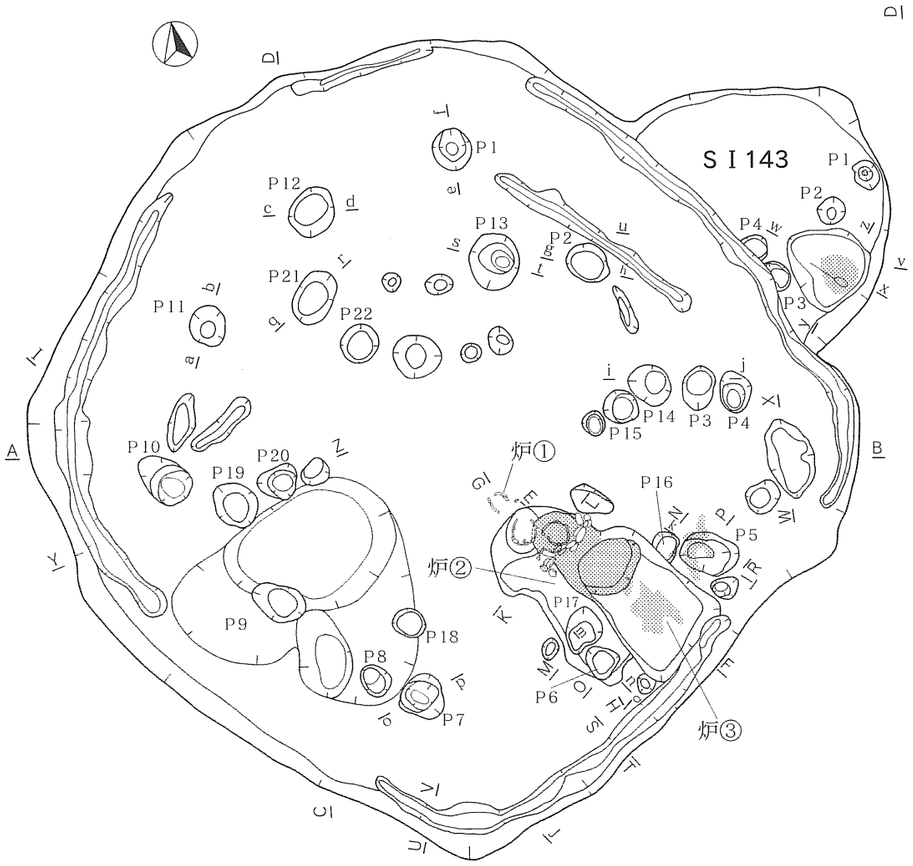
《壁》　強い角度で立ち上がる。

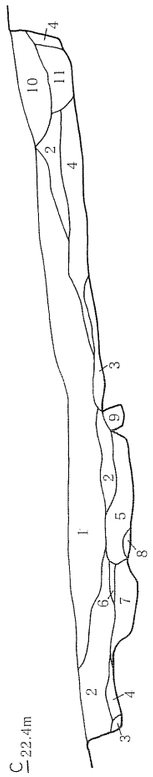
《床　面》　全体に凹凸が著しく、硬くしまっている。北西・南西・東側の一部を除いて、幅約0.2 ～0.3 ｍ・深さ0.1～0.2ｍの周溝が巡る。北東側にも浅い周溝の一部が確認できた。南西側に擂り鉢状の落ち込みを検出した。

《柱　穴》　大小多くのピットが存在するが、大きさ・深さを考慮した主な柱穴はＰ１～Ｐ22である。Ｐ１が長軸0.50ｍ×短軸0.47ｍ・深さ0.53ｍ、Ｐ２が0.60ｍ×0.48ｍ・0.80ｍ、Ｐ３が0.56ｍ×0.38ｍ・0.43ｍ、Ｐ４が0.51ｍ×0.40ｍ・0.25ｍ、Ｐ５が0.70ｍ×0.50ｍ・0.43ｍ、Ｐ６が0.40ｍ×0.30ｍ・0.87ｍ、Ｐ７が0.58ｍ×0.53ｍ・0.41ｍ、Ｐ８が0.46ｍ×0.32ｍ・0.54ｍ、Ｐ９が0.70ｍ×0.46ｍ・0.48ｍ、Ｐ10が0.60ｍ×0.50ｍ・0.71ｍ、Ｐ11が0.50ｍ×0.46ｍ・0.77ｍ、Ｐ12が0.65ｍ×0.55ｍ・0.86、Ｐ13が0.70ｍ×0.62ｍ・0.71ｍ、Ｐ14が0.57ｍ×0.50ｍ・0.60ｍ、Ｐ15が0.48ｍ×0.45ｍ・0.31ｍ、Ｐ16が0.40ｍ×0.30ｍ・0.35ｍ、Ｐ17が0.60ｍ×0.45ｍ・0.48ｍ、Ｐ18が0.42ｍ×0.35ｍ・0.44ｍ、Ｐ19が0.63ｍ×0.53ｍ・0.82ｍ、Ｐ20が0.46ｍ×0.44ｍ・0.31ｍ、Ｐ21が0.76ｍ×0.48ｍ・0.36ｍ、Ｐ22が0.50ｍ×0.45ｍ・0.31ｍである。後述する炉③に、Ｐ１～Ｐ３もしくは Ｐ４・Ｐ５～Ｐ７・Ｐ９～Ｐ12が伴うと考えられる。また配列の規則性から、炉①もしくは炉②に、Ｐ13・Ｐ15もしくはＰ14・Ｐ18～Ｐ21が伴うと考えられる。

《炉》　南東壁際に３つの炉が存在する。壁と周溝に付随するのが炉③で、炉③に切られやや南側に位置するのが炉②、炉②に切られ北西側に土器埋設部だけ残存するのが炉①である。炉②と③は、土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。炉①の規模は、残存最大長0.40ｍ×残存最大幅0.60ｍ・最深部0.20ｍで、残存する平面形は半円状を呈する。土器埋設部には土器が残されるが、燃焼部や前庭部が炉②に壊されている可能性がある。炉②の規模は、最大長2.80ｍ×最大幅1.38ｍ・最深部0.40ｍで、平面形は不整な二等辺三角形状を呈する。軸線方向はＮ－40°－Ｗである。土器埋設部には土器が残され、燃焼部と前庭部には礫の抜き取り痕が確認される。炉③の規模は、最大長2.52ｍ×最大幅1.28ｍ・最深部0.39ｍで、平面形は不整な二等辺三角形を呈する。炉の軸線方向はＮ－45°－Ｗである。土器埋設部には土器が残され、燃焼部との境に礫を設置している。

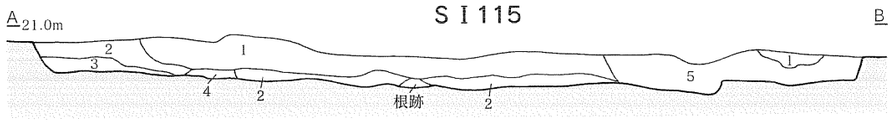
〈土器埋設部〉　炉①では、深鉢の胴部破片が正位に設置され、周囲が被熱で赤変していた。炉②でも、深鉢（第70図298）が正位に設置され、周囲が被熱で強く焼けていた。

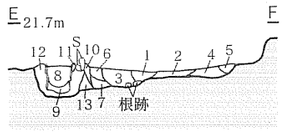


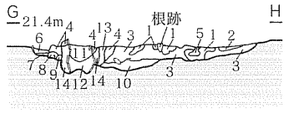


SI115(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性なし。しまりあり。
3　黒褐色土(2.5Y3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性なし。しまりあり。
4　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・炭・暗褐色土含む。粘性なし。しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりなし。

SI115(C－D)
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・炭含む。粘性なし。しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性なし。しまりあり。
4　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。
5　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりなし。
8　暗オリーブ褐色土(2.5YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりなし。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック含む。粘性・しまりなし。
10　黒褐色土(10YR3/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
11　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性なし。しまりあり。

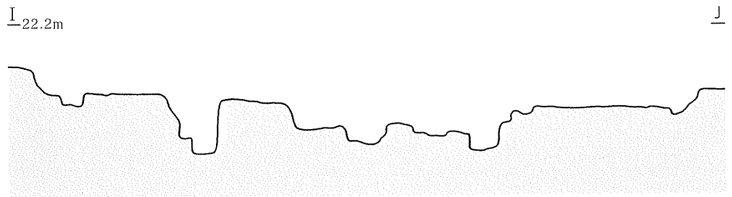




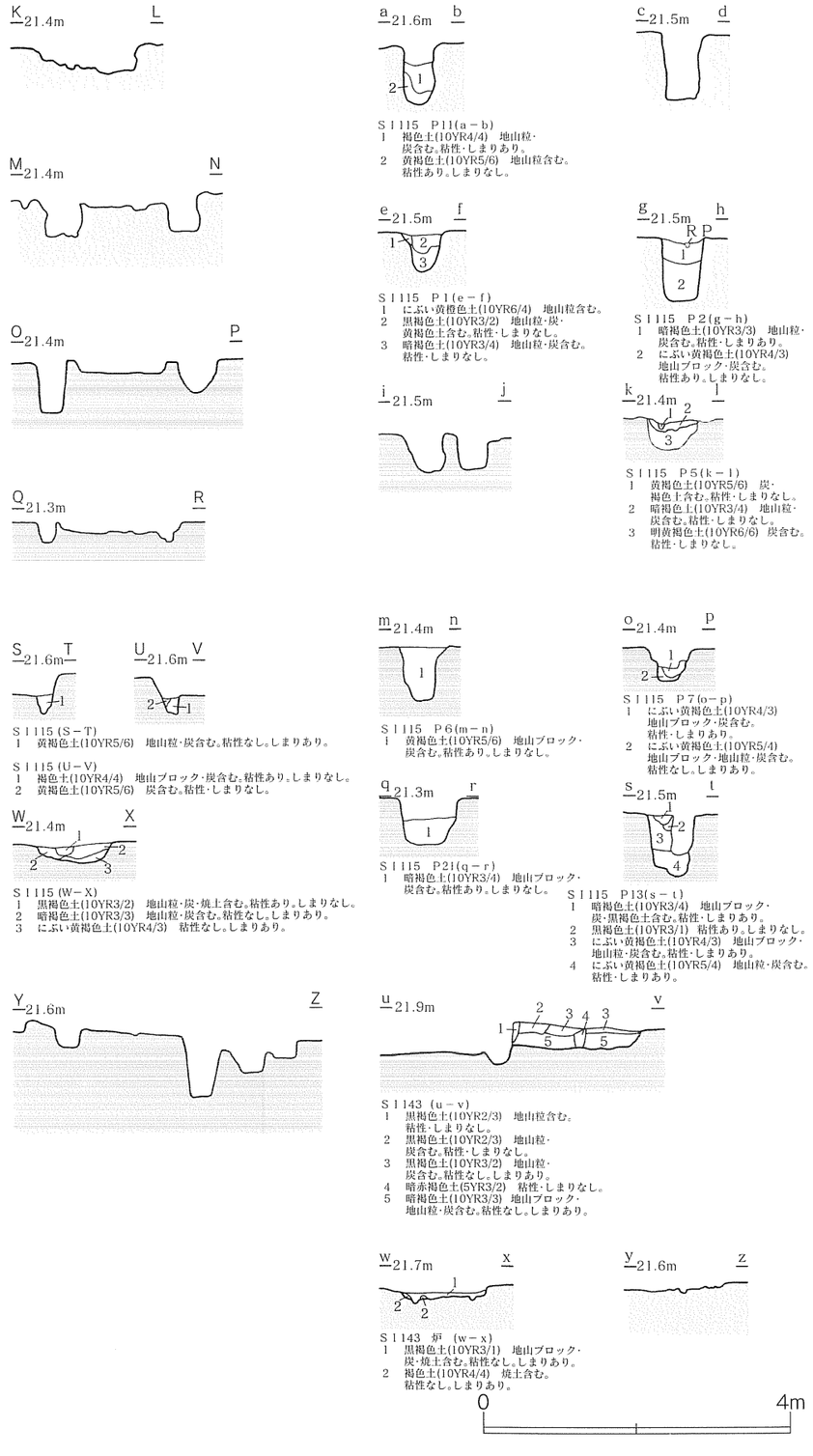


SI115　炉(E－F)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　地山ブロック・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性なし。しまりあり。
7　黒褐色土(10YR2/3)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性なし。しまりあり。
8　黒色土(10YR2/1)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
9　黒色土(10YR1.7/1)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
10　赤褐色土(2.5YR4/6)　焼土含む。粘性なし。しまりあり。
11　黒色土(10YR2/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりなし。
12　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性なし。しまりあり。
13　褐色土(10YR4/4)　炭・焼土含む。粘性なし。しまりあり。

SI115　炉(G－H)
1　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性なし。しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(7.5YR4/4)　地山ブロック・炭・焼土含む。粘性なし。しまりあり。
5　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりなし。褐色土(10YR4/6)　地山粒含む。粘性なし。しまりあり。
8　暗褐色(10YR3/4)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりなし。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
10　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
11　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりなし。
12　黒色土(10YR1.7/1)　地山ブロック・地山粒・焼土含む。粘性なし。しまりあり。
14　赤褐色土(2.5YR4/8)　焼土含む。粘性・しまりあり。



第 29 図　ＳＩ115・143 竪穴住居跡



SI115 (S－T)
1　黄褐色土(10YR5/6)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。

SI115 (U－V)
1　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。
2　黄褐色土(10YR5/6)　炭含む。粘性・しまりなし。

SI115 (W－X)
1　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭・焼土含む。粘性あり。しまりなし。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性なし。しまりあり。

SI115　P11(a－b)
1　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。

SI115　P1(e－f)
1　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　地山粒含む。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭・黄褐色土含む。粘性・しまりなし。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。

SI115　P2(g－h)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。

SI115　P5(k－l)
1　黄褐色土(10YR5/6)　炭・褐色土含む。粘性・しまりなし。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
3　明黄褐色土(10YR6/6)　炭含む。粘性・しまりなし。

SI115　P6(m－n)
1　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。

SI115　P7(o－p)
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。

SI115　P2i(q－r)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・炭含む。粘性あり。しまりなし。

SI115　P13(s－t)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・炭・黒褐色土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/1)　粘性あり。しまりなし。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。

SI143　(u－v)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒含む。粘性・しまりなし。
2　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりなし。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
4　暗赤褐色土(5YR3/2)　粘性・しまりなし。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。

SI143　炉　(w－x)
1　黒褐色土(10YR3/1)　地山ブロック・炭・焼土含む。粘性なし。しまりあり。
2　褐色土(10YR4/4)　焼土含む。粘性なし。しまりあり。

炉③でも深鉢（第71図301）が正位に設置され、特に北側が被熱で赤く硬化していた。南西側に扁平な礫を縦に配置し、燃焼部と区画していた。

〈燃焼部〉　炉②は楕円形状を呈したと推定され、底面が丸く立ち上がりは擂り鉢状を呈する。炉③は不整の略円形状を呈し、底面はやや平坦で立ち上がりは擂り鉢状を呈する。底面は被熱で赤く硬化していた。

〈前庭部〉　炉②は台形状を呈したと推定され、底面は燃焼部より高く凹凸はある。炉③は略方形状を呈し、底面は燃焼部よりも高く平坦である。被熱で硬くしまっている。

《出土遺物》　炉や覆土からまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第70～73図の土器と第93～95図の石器がある。土器は、深鉢（298～311・313・317・322・323）・壺（314～320）・ミニチュア土器（312）・土製品（321）が出土した。

深鉢は298・299・302～305が口縁部、301・306～310が胴部、300・311・313・317・322・323が底部破片である。298は口縁部がやや内傾し、胴部中央が大きく膨らみ最大径になる。現存高35.6cm・口径33.3cmである。全体にＬＲの斜縄文を施し、口縁部から胴部上位にかけて無文帯を沈線で区画した「Ｊ」字状文を4単位配置する。299は口縁部が緩く外反し、胴部中央で大きく膨らむ。現存高25.7cm・口径30cmである。全体にＬＲの斜縄文を施す。302・305は波状を呈し、303・304は平口縁である。302・303・305に刺突文を施している。胴部の301は、胴部上半で大きく膨らむ。現存高37.7cmで、全体に斜縄文を施す。他の文様には、刺突文（306）・沈線文（308）・撚糸文（307）がある。300の底部は、胴部上位が膨らみ窄まって突出した底部に至る。現存高14cm・底径5.6cmである。底部は胴部下端を除いて縄文を施す。323の底面には直線状の痕跡が、322には木葉文が残る。壺の314は、口縁部が大きく内傾し胴部中央が大きく膨らむ。現存高23.9cm・口径15.8cmである。口縁直下には、平行する隆帯と共に渦巻きの橋状把手があり、本来4単位であった。胴部には、隆帯によって無文帯や縄文を曲線状に区画した文様が全体を覆う。315の口縁部は直立するが、314と同様の形態である。4つの橋状把手をもち、隆線で縄文や無文帯を区画する。赤彩を施している。316・318～320は、胴部下半が膨らみ底径が最大径になる形態である。すべて口縁部を欠くが、320は徳利形である。刺突文（316・319）や隆線文（318）を施す。316の底面には木葉文が認められる。土製品の321は、2本の同心円状の沈線内に刺突文を施す。

石器は、石鏃（Ｓ64～Ｓ66）・石篦（Ｓ67・Ｓ68）・石匙（Ｓ69）・掻器（Ｓ70）・削器（Ｓ71）・石錐（Ｓ72）・石斧（Ｓ73）・石製品（Ｓ74）・石皿（Ｓ75）・台石（Ｓ76）・石棒（Ｓ77）・凹石（Ｓ78・Ｓ79）が出土した。Ｓ64の石鏃は、全体に丁寧な調整を施し、基部が緩く凹んでいる。Ｓ65も、全体に丁寧な調整を施す。基部が2股に分かれる突起部をもち、その表裏面に明瞭なアスファルトが付着する。Ｓ66は、全体にやや粗い調整を施し三角形状を呈する。基部側が粗い作りである。Ｓ67の石篦は、両側縁に粗い調整を施し、両端に刃部を作るような調整はない。Ｓ68は、素材を得る時の打面を残す。打面以外は、表裏面とも丁寧な調整を施し刃部を丸く収める。Ｓ69の石匙は、正面右側縁の表裏面に丁寧な調整を施し、先端は鋭く尖る。摘み部は丁寧に調整し、アスファルトの痕跡を留める。Ｓ70の掻器は、上部を除く両側縁に丁寧な調整を施す。Ｓ71の削器は、正面左側縁にやや丁寧な調整を施す。Ｓ72の石錐は、先端側を細く整えており、その断面は三角形である。Ｓ73の石斧は、小型で基部をのぞき丁寧に磨かれる。正面左側縁に素材擦り切り時の、直線的

な稜線が見られる。S74の石製品は、棒状素材の軸方向に沿って溝が切られ、その両端に径8mmの穿孔を施す。さらに素材の両端側から、溝両端にある穿孔部と連結するように、径10mmの穿孔を施す。紐を通して、吊り手の把手として使用したものか。S75の石皿は、縁の周縁を全て欠くが、内側底面の台形状の形状と、縁が面を作って緩く立ち上がる状態から、ほぼ底面の形状を呈していたと推定される。底の外面は丸く膨らみ、4隅に外側が直線で内側が丸い半月状の脚をもつ。S76の台石は、表裏面と側縁に擦られた痕跡を留める。分厚く扁平な自然石を利用している。S77の石棒は、両端が折損したもので、正面中央に細長い凹みを伴う。表面の全域と下端の上半分に、炭化物の付着が認められる。炭化物付着後に、3～7cm幅で細かく分割されている。輪切り状に接合面が見られることから、故意に行った可能性強い。S78の凹石は、扁平な楕円形の礫が素材で、表裏両面に浅いあばた状の凹みをもつ。両側縁には、擦られた痕跡を留める。S79は、扁平な楕円形の礫が素材で、片面に凹み部を一側縁に擦り面を留める。片側端に敲きの痕跡も微かに認められる。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ116（第28・67図、図版29・56）

《位置と確認》　調査区中央のＬＲ54区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形を呈し、東側の1／3が調査区外にあり、南西側は風倒木の攪乱を受ける。規模は長軸2.92m×短軸2.84m、深さ0.26mである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　4層に分層した。上位には黒褐色土、下位にはにぶい黄褐色土がある。

《　　壁　　》　全体に緩やかに立ち上がる。

《　床　　面　》　凹凸が著しく、全体に軟らかい。

《　柱　　穴　》　Ｐ1～Ｐ3までを検出した。規模はＰ1が長軸0.24m×短軸0.22m・深さ0.16m、Ｐ2が径0.22m・深さ0.06m、Ｐ3が径0.20m・深さ0.06mである。

《　　炉　　》　住居跡の中央に位置する。土器埋設部・燃焼部で構成する複式炉である。規模は最大長0.64m×最大幅0.56m、最深部0.12mで、平面形はを呈する。炉の軸線方向はＳ－68°－Ｗである。

〈土器埋設部〉　深鉢の胴部が正位で設置される。その周辺は被熱で赤く硬化していた。

〈燃焼部〉　略楕円形を呈し、底面にはやや凹凸がある。

《　出土遺物　》　炉と覆土から僅かな遺物が出土した。出土遺物には、第67図の土器がある。深鉢（271）が出土した。271は底部が極端に窄まる形態で、ＲＬの斜縄文に沈線が縦走する。沈線は、2本もしくは3本が1単位になり、交互に配置される部分もある。2本の沈線が上位で連結する例もある。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

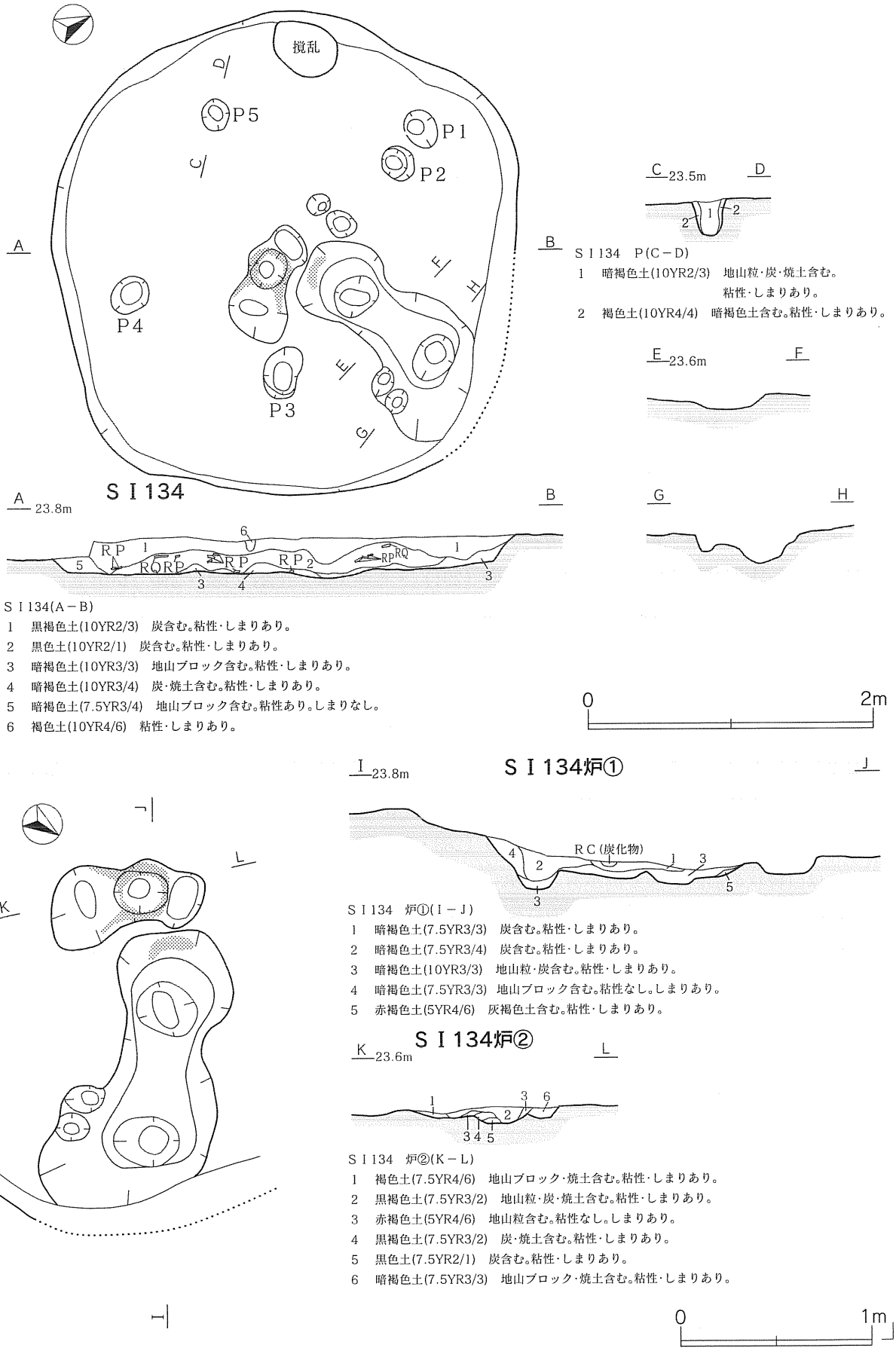
ＳＩ134（第30・67～69・95図、図版30・56）

《位置と確認》　調査区北側のＬＯ64・65区及びＬＰ64・65区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は略円形であり、規模は長軸3.60m×短軸3.52m・深さ0.28mである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　6層に分層した。大きく上位の黒・黒褐色土、下位の暗褐色土に分かれる。



SI134(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒色土(10YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(7.5YR3/4)　地山ブロック含む。粘性あり。しまりなし。
6　褐色土(10YR4/6)　粘性・しまりあり。

SI134　P(C－D)
1　暗褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/4)　暗褐色土含む。粘性・しまりあり。

SI134　炉①(I－J)
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(7.5YR3/3)　地山ブロック含む。粘性なし。しまりあり。
5　赤褐色土(5YR4/6)　灰褐色土含む。粘性・しまりあり。

SI134　炉②(K－L)
1　褐色土(7.5YR4/6)　地山ブロック・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　赤褐色土(5YR4/6)　地山粒含む。粘性なし。しまりあり。
4　黒褐色土(7.5YR3/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　黒色土(7.5YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(7.5YR3/3)　地山ブロック・焼土含む。粘性・しまりあり。

第30図　SI134 竪穴住居跡

《　壁　》　全体に緩い角度で立ち上がる。

《床　面》　僅かに凹凸があり、全体に軟らかい。

《柱　穴》　Ｐ１～Ｐ５まで検出した。規模はＰ１が長軸0.28m×短軸0.22m・深さ0.42m、Ｐ２が0.26m×0.22m・0.48m、Ｐ３が0.36m×0.24m・0.59m、Ｐ４が0.28m×0.24m・0.64m、Ｐ５が0.20m×0.16m・0.20mである。

《　炉　》　中央部に位置するものと、住居跡東壁に付設するものとがある。どちらも土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成される複式炉である。前者の規模は最大長0.80m×最大幅0.44m・最深部0.08mで、後者の規模は最大長1.48m×最大幅0.84m・最深部0.20mである。平面形はどちらも細長い不整形を呈する。炉の軸線方向は前者がＮ－31°－Ｗ、後者がＳ－60°－Ｗである。中央部の炉が古いと考えられる。

〈土器埋設部〉　中央部の炉は小さな窪みをもち、周辺が赤く硬化していた。壁際の炉は、略円形を呈し、燃焼部側に土器埋設部の痕跡がある。

〈燃焼部〉　中央では略円形状の小さな窪みである。壁際では方形状を呈する。

〈前庭部〉　どちらも楕円形状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

《出土遺物》　覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第67～69図の土器や第95図の石器がある。土器は、深鉢（272～288）・壺（291）・ミニチュア土器（289・290）が出土した。

深鉢は、272～276が口縁部、277～272が胴部、283～288が底部破片である。口縁部は平口縁で外反し、縄文と無文帯を沈線で区画しているもの（272～274・276）や斜縄文を施すものがある。272～274は同一個体で口縁部に縄文を施す。277の胴部は胴部上位が膨らみ、口縁部と胴部の境に低い段を形成する。直下には、浅い窪みのある刺突文を配置する。その下には、上下逆「U」字状の沈線文が近接して描かれる。この文様間の上部にも、浅い窪みのある刺突文が配置される。他に、無文帯・沈線・縄文の文様が施される（277・279・281・282）ものもある。280は断面が三角形の隆帯文で、渦巻き状の文様を描く。底部は突出するもの（283・285・287）があり、胴部下端を除き縄文を施す。底面には直線状の痕跡を残す例がある（283～285）。壺の291は、口縁部が内傾し胴部が極端に膨らみ、橋状把手が付く。ミニチュア土器は深鉢で無文である（289・290）。

石器は、石鏃（Ｓ80）・石匙（Ｓ81）・石製品（Ｓ82）が出土した。Ｓ80の鏃は、全面に丁寧な調整を施し、基部が凹んだ薄い作りである。アスファルト付着の痕跡を留める。Ｓ81の石匙は、横長剥片を素材にしたもので、素材剥離時の打点面を裏面左側縁に留める。打点面以外の側縁には丁寧な調整を施すが、摘み部に素材面を残す。Ｓ82の石製品は、細い棒状素材の一端に径5mmの穿孔を施すが、その部分は砕かれている。穿孔部の深さは現状で6mmである。全体に浅く磨かれている。

《時　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。

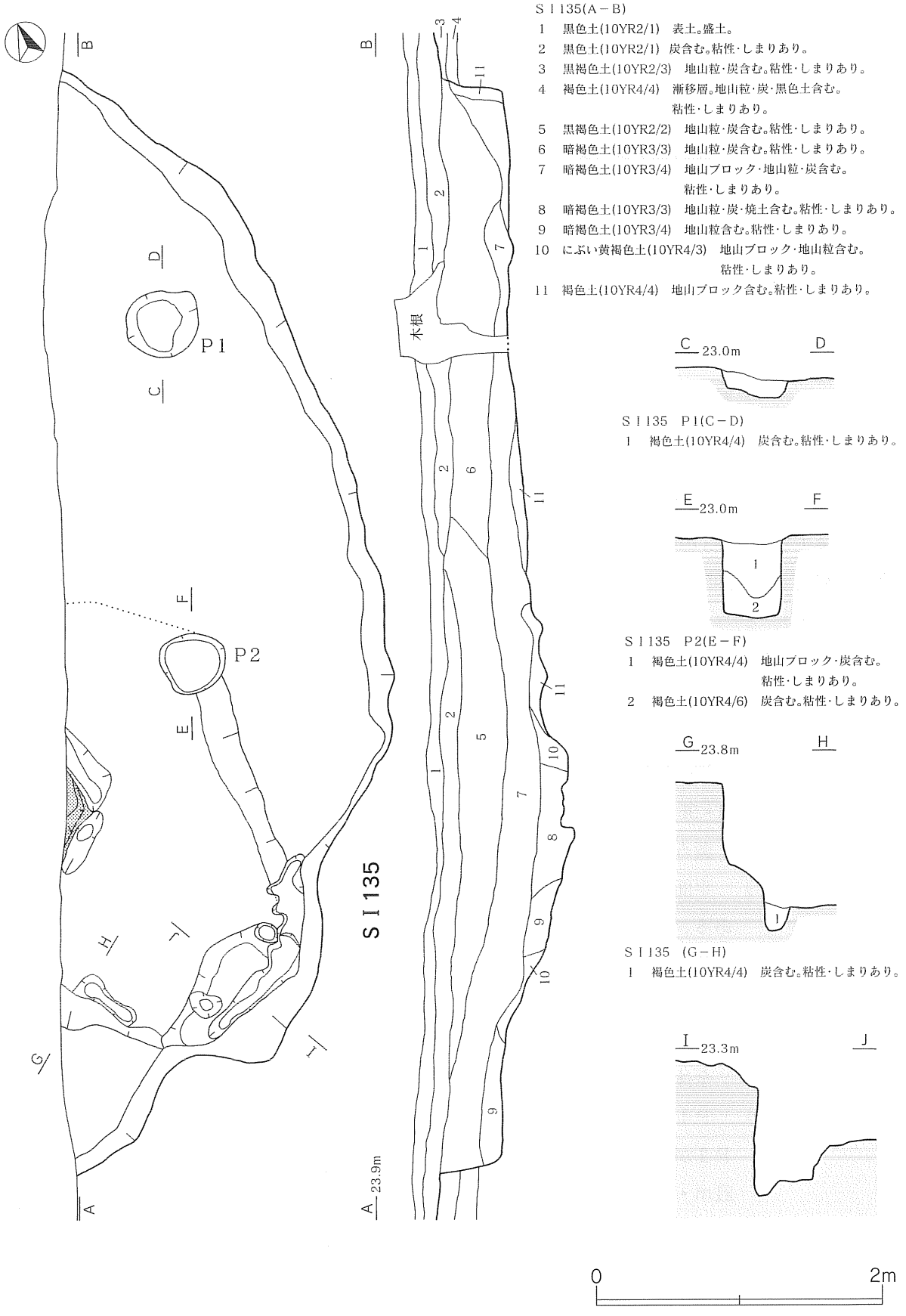
ＳＩ135（第31・69・96図、図版31）

《位置と確認》　調査区北側のＬＳ61・62区及びＬＴ61・62区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形と推定され、西側の半分以上が調査区外にある。規模は長軸7.78m×短軸2.28m・深さ0.80mである。

《重　複》　重複はない。

《土　層》　11層に分層した。黒褐色と暗褐色が主体を占めている。



SI135(A－B)
1　黒色土(10YR2/1)　表土。盛土。
2　黒色土(10YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　漸移層。地山粒・炭・黒色土含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
9　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
10　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
11　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。

SI135　P1(C－D)
1　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。

SI135　P2(E－F)
1　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/6)　炭含む。粘性・しまりあり。

SI135　(G－H)
1　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。

第31図　SI135竪穴住居跡

《　壁　》　急な角度で立ち上がる。複式炉側に緩く傾斜する。

《床　面》　全体にそれほど硬くはない。

《柱　穴》　Ｐ１・Ｐ２を検出した。規模はＰ１が長軸3.40ｍ×短軸0.30ｍ・深さ0.21ｍ、Ｐ２が0.30ｍ×0.25ｍ・0.68ｍである。

《　炉　》　住居跡南側の壁に付設される。土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成される複式炉と考えられる。規模は最大長1.28ｍ×最大幅0.68ｍ・最深部0.26ｍで、平面形は燃焼部が東西に広がる不整形を呈する。炉の軸線方向はＳ－24°－Ｗである。

〈燃焼部〉　掘り方の軸線上に、礫を抜き取ったと思われる方形状の炉があり、内面に焼土が充填していた。

〈前庭部〉　台形状の範囲で、底面は被熱で硬くなる。前庭部が取り付く壁は外に張り出し、直下に深さ約0.2ｍの溝が構築される。

《出土遺物》　覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第69図の土器や第96図の石器がある。土器は、深鉢（292～296）が出土した。

292は口縁部、293・294は胴部、295・296は底部破片である。292はＬＲの斜縄文に、綾絡文状の文様が縦走する。293の胴部は、無文・沈線・刺突文・縄文を施す。294は細かい縄文に綾絡文状の文様が縦走する。295の底部は突出する。296は縄文に沈線が縦走し、外底面全体に多数の直線状の痕跡がある。

石器は、石鏃（Ｓ83）・石錐（Ｓ84）が出土した。Ｓ83の石鏃は、全面に丁寧な調整を施し基部が凹んでいる。表裏面にアスファルトが広い範囲で付着する。先端が再加工され基部の両端が短く折損しており、錐として再利用されたものであろう。Ｓ84の石錐は、先端を細く整えるが折損する。

《時　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ140（第32・73・96図、図版32・58）

《位置と確認》　調査区南側のＭＣ50・51区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は楕円形もしくは円形と推定され、西側の半分以上は調査区の範囲以外にある。規模は長軸4.94ｍ×短軸2.00ｍ・深さ0.46ｍである。

《重　複》　重複はない。

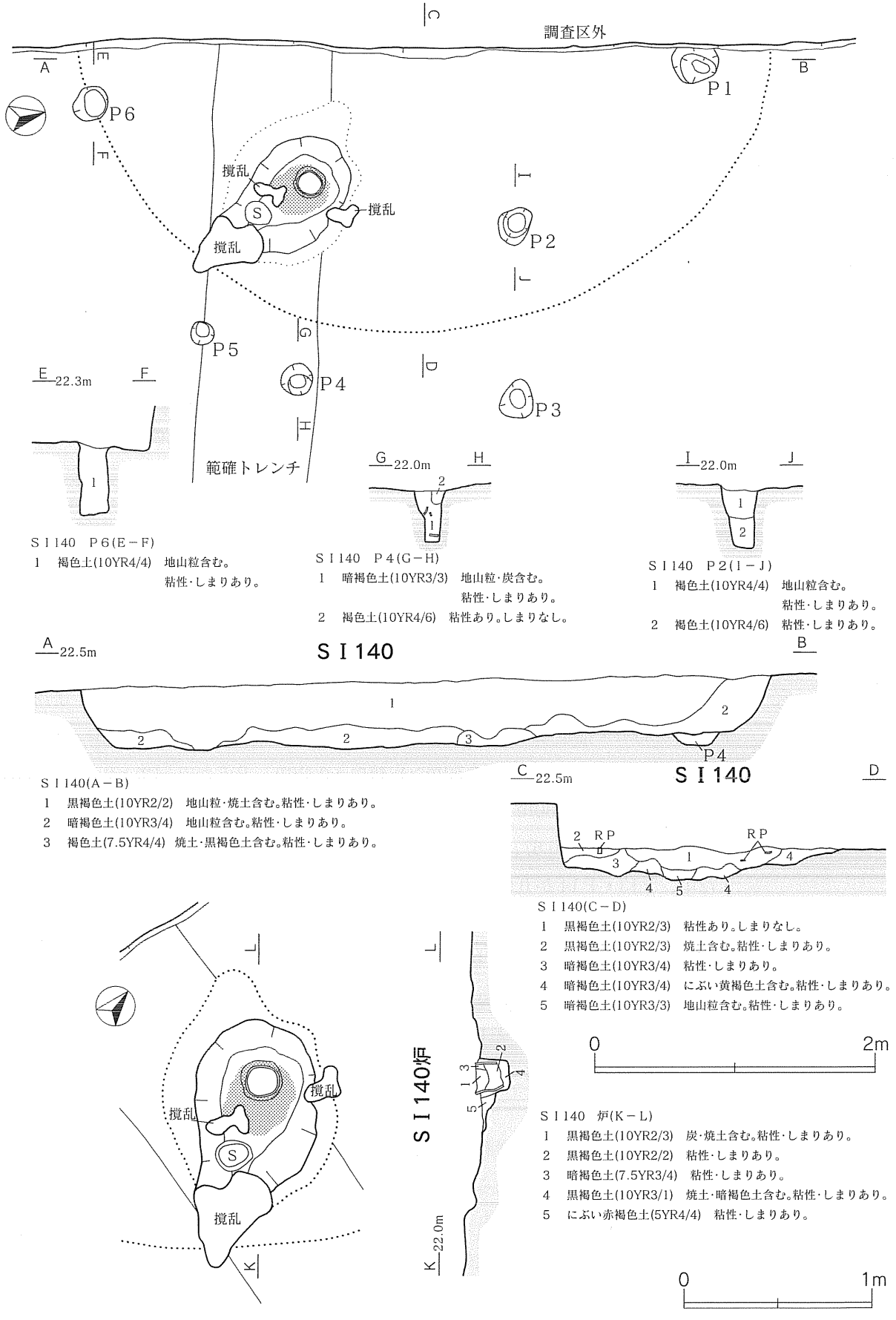
《土　層》　５層に分層した。大きく上位が黒褐色土、下位が暗褐色土に分けられる。

《　壁　》　緩やかに立ち上がる。

《床　面》　全体に凹凸が著しく、軟らかい。

《柱　穴》　Ｐ１～Ｐ６まで検出した。規模はＰ１が長軸0.32ｍ×短軸0.20ｍ・深さ0.17ｍ、Ｐ２が0.29ｍ×0.24ｍ・0.40ｍ、Ｐ３が0.28ｍ×0.23ｍ・0.16ｍ、Ｐ４が0.22ｍ×0.21ｍ・0.20ｍ、Ｐ５が0.18ｍ×0.16ｍ・0.17ｍ、Ｐ６が0.27ｍ×0.22ｍ・0.54ｍである。

《　炉　》　住居跡南東側の壁際に位置するが、攪乱を受けている。土器埋設炉と判断した。規模は最大長1.24ｍ×最大幅0.86ｍ、最深部0.18ｍで、平面形は不整形を呈する。掘り方の北西側に深鉢（第73図328）が正位に設置され、土器の周囲が著しく焼けていた。土器埋設炉の軸線方向はＮ－27°－Ｗである。



S I 140　P6(E－F)
1　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。
　　粘性・しまりあり。

S I 140　P4(G－H)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。
　　粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/6)　粘性あり。しまりなし。

S I 140　P2(I－J)
1　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。
　　粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/6)　粘性・しまりあり。

S I 140(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(7.5YR4/4)　焼土・黒褐色土含む。粘性・しまりあり。

S I 140(C－D)
1　黒褐色土(10YR2/3)　粘性あり。しまりなし。
2　黒褐色土(10YR2/3)　焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　にぶい黄褐色土含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。

S I 140　炉(K－L)
1　黒褐色土(10YR2/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性・しまりあり。
4　黒褐色土(10YR3/1)　焼土・暗褐色土含む。粘性・しまりあり。
5　にぶい赤褐色土(5YR4/4)　粘性・しまりあり。

第32図　S I 140 竪穴住居跡

《　出土遺物　》　炉と覆土から少量の土器が出土した。出土遺物には、第73図の土器と第96図の石器がある。土器は、深鉢（325～328）・鉢（324）が出土した。

325は口縁部、326～328が胴部、323・324が底部破片である。口縁部の325は外反し、全体に斜縄文を施す。326・327はＬＲの斜縄文に沈線を施す。328は胴部上位が筒状で底部に至る。ＲＬの斜状文の上に、無文帯を沈線で区画した「Ｊ」字状文を4単位配置する。下半には炭化物が顕著に認められる。底部の323は、外底面全体に多数の直線状の痕跡を残す。鉢の324は、胴部から小さい底部に直単に窄まる。無文で全体が磨かれる。

石器は、台石（Ｓ85）が出土した。分厚い自然礫を使用し、一面が緩く凹み、磨かれている。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ141（第33・73～76・96～99図、図版33・34・58・60）

《位置と確認》　調査区北側のＬＯ67・68区及びＬＰ67・68区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は南東壁が直線で断面蒲鉾形を呈し、西側の一部が風倒木の攪乱を受ける。規模は長軸8.09ｍ×短軸7.36ｍ・深さ0.54ｍである。南東側壁の外で炉と対応する位置に、低い段をもつ不整形の掘り方が付設される。

《　重　　複　》　重複はない。

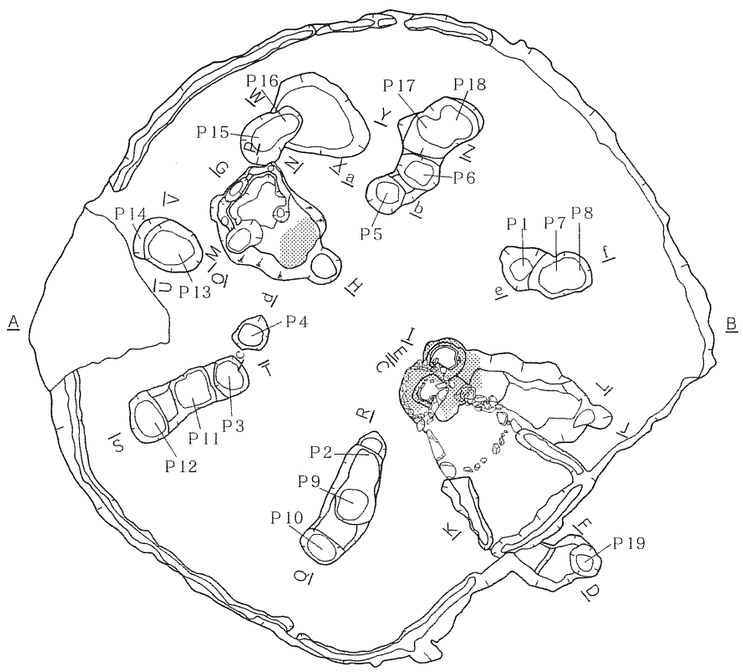
《　土　　層　》　13層に分層した。黒褐色土・暗褐色土が主体を占める。

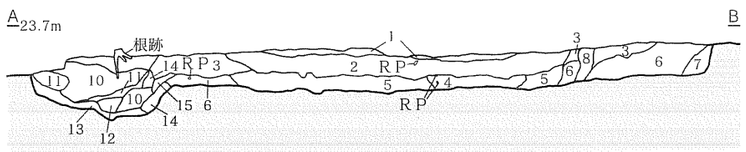
《　　壁　　》　急な角度で立ち上がる。

《　床　　面　》　ほぼ平坦で僅かに凹凸がある。中央は硬く、壁際はそれほど硬くない。東側を除いて、幅約0.2ｍ・深さ0.2ｍ前後の周溝が巡る。

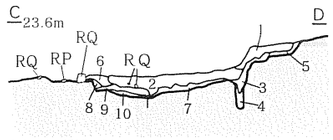
《　柱　　穴　》　Ｐ１～Ｐ19まで検出した。規模はＰ１が長軸0.60ｍ×短軸0.50ｍ・深さ0.72ｍ、Ｐ２が0.50ｍ×推定0.45ｍ・0.61ｍ、Ｐ３が0.50ｍ×0.44ｍ・0.55ｍ、Ｐ４が0.50ｍ×0.40ｍ・0.37ｍ、Ｐ５が0.50ｍ×0.45ｍ・0.48ｍ、Ｐ６が0.54ｍ×0.40ｍ・0.54ｍ、Ｐ７・Ｐ８が0.80ｍ×0.50ｍ・0.71ｍ、Ｐ９が0.64ｍ×0.50ｍ・0.62ｍ、Ｐ10が0.55ｍ×0.35ｍ・0.67、Ｐ11が0.50ｍ×0.48ｍ・0.57ｍ、Ｐ12が0.64ｍ×0.45ｍ・0.72ｍ、Ｐ13・Ｐ14が0.90ｍ×0.60ｍ・0.77ｍ、Ｐ15が0.70ｍ×0.55ｍ・0.67ｍ、Ｐ16が推定0.40ｍ×0.35ｍ・0.70ｍ、Ｐ17が0.70ｍ×0.50ｍ・0.71ｍ、Ｐ18が0.65ｍ×0.60ｍ・0.76ｍである。後述する炉①にＰ１～Ｐ６が、炉②にＰ７・Ｐ９・Ｐ11・Ｐ13・Ｐ15・Ｐ17が、炉③にＰ８・Ｐ10・Ｐ12・Ｐ14・Ｐ16・Ｐ18が伴う可能性がある。Ｐ９・Ｐ10とＰ11・Ｐ12には、柱穴を連結するような掘り方が見られた。住居跡の外側の炉③軸線上に長軸4.40ｍ×短軸0.36ｍ・深さ0.29ｍのＰ19がある。

《　　炉　　》　北西壁際の炉①、南東壁際の炉②、南東壁に取り付く炉③がある。周溝に伴う炉③が最も新しく、それに切られ周溝よりやや離れる炉②が炉③の次に新しく、周溝からかなり離れる炉①が最も古いと考えられる。これらの炉は、土器埋設部・燃焼部・前庭部で構成された複式炉である。炉①の規模は、最大長1.76ｍ×最大幅1.18ｍ・深さ0.18ｍで、平面形は不整な楕円形状を呈する。土器埋設部の土器はなく、燃焼部と前庭部に礫の抜き取り痕が確認できた。軸線方向はＳ－45°－Ｅである。

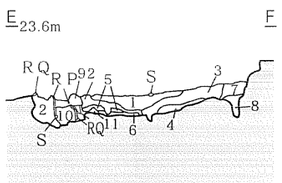




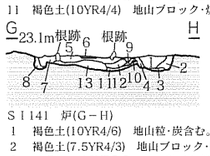
SＩ141 (A－B)
1　黒色土(10YR2/1)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒色土(10YR2/1)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック含む。
7　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
9　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
10　褐色土(10YR4/4)　褐色土含む。粘性・しまりあり。
11　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック含む。粘性あり。しまりなし。
12　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック含む。粘性あり。しまりなし。
13　黄褐色土(10YR5/6)　褐色土含む。粘性あり。しまりなし。



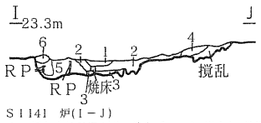
SＩ141　炉(C－D)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
4　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性あり・しまりなし。
5　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
9　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
10　黒褐色土(10YR2/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



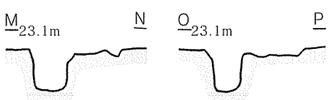
SＩ141　炉(E－F)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土(10YR3/2)　焼土含む。粘性・しまりあり。
7　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
8　褐色土(10YR4/4)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
9　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
10　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
11　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・焼土含む。粘性・しまりあり。

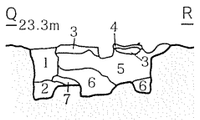


SＩ141　炉(G－H)
1　褐色土(10YR4/6)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(7.5YR4/3)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　黄褐色土(10YR5/6)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(7.5YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
6　黄褐色土(10YR5/6)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
8　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
9　褐灰色土(10YR4/1)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
10　褐色土(7.5YR4/6)　焼土含む。粘性なし。しまりあり。
11　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
12　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
13　黄褐色土(10YR5/8)　褐灰色土含む。粘性・しまりあり。

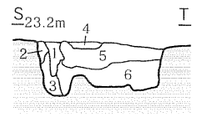


SＩ141　炉(I－J)
1　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/3)　焼土含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・焼土含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土(10YR2/3)　地山粒・焼土含む。粘性あり。しまりなし。

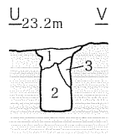




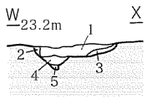
SＩ141　P2･9･10(Q－R)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　黄褐色土(10YR5/8)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
6　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
7　褐色土(10YR4/4)　粘性・しまりあり。



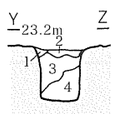
SＩ141　P3･11･12(S－T)
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/6)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　黄褐色土(10YR5/8)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
6　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
7　褐色土(10YR4/4)　粘性・しまりあり。



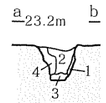
SＩ141　P13･14(U－V)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/6)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。



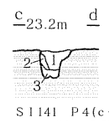
SＩ141　P15･16(W－X)
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山粒・地山ブロック含む。粘性あり。しまりなし。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。



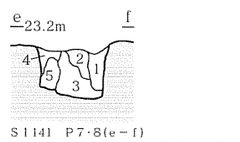
SＩ141　P17(Y－Z)
1.黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
2.暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。
3.暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・地山ブロック含む。粘性あり。しまりなし。
4.褐色土(10YR4/6)　地山ブロック含む。粘性あり・しまりなし。



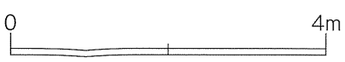
SＩ141　P5(a－b)
1　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性なし。しまりあり。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/6)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。



SＩ141　P4(c－d)
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。



SＩ141　P7･8(e－f)
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
2　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
3　褐色土(10YR4/6)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
4　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。
5　黄褐色土(10YR5/8)　地山粒・褐色土含む。粘性・しまりあり。



第 33 図　ＳＩ141 竪穴住居跡

炉②の規模は、最大長2.32m×最大幅0.90m・最深部0.30mで、平面形は不整な二等辺三角形を呈する。土器埋設部には土器が残され、燃焼部と前庭部に礫の抜き取り痕が確認できた。軸線方向はN－72°－Wである。炉③の規模は、最大長2.76m×最大幅1.64m・最深部0.40mで、平面形は二等辺三角形を呈する。土器埋設部には、土器が残され周囲に礫が配置される。燃焼部にも礫が配置され、前庭部側壁は礫の抜き取り痕が確認できた。軸線方向はN－39°－Wである。

〈土器埋設部〉　炉③では、深鉢（第73図329）が正位で設置され、大小20点の円礫で囲われている。埋設土器土器と礫の内側は著しく被熱を受けていた。また、前庭部側の仕切りに用いた大きな礫は埋設土器土器を押し潰すように配置されていた。炉②では深鉢（第76図337）が正位に埋設されていた。

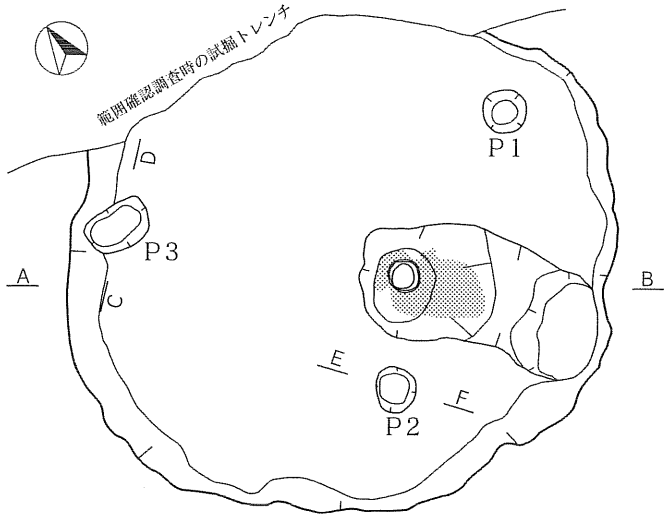
〈燃焼部〉　炉③は台形状を呈し、四方を川原石と砕礫で囲っている。南西側の側壁は2つの大きな礫で構築され、北東側の側壁は意図的に破砕した礫を2段に重ねていた。前庭部との境には溝が掘られ、小礫7点が配置されていた。底面は平坦で、そこから焼土や炭化物が確認された。

〈前庭部〉　炉③は、台形状を呈し、末端は周溝を含んで住居跡の南東壁に接する。南西と北東の側壁は溝状を呈するが、炉の礫が抜き取り痕と考えられる。底面は燃焼部より高位にあり、僅かな凹凸が見られた。焼土や炭化物も認められたが、土器埋設部・燃焼部に比べ希薄である。

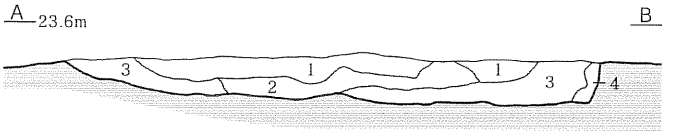
《出土遺物》　炉や覆土よりまとまった遺物が出土した。出土遺物には、第73～76図の土器と第96～99図の石器がある。土器は、深鉢（329～335・337）・土製品（336）が出土した。

331は口縁部、332・334・335・337は胴部破片である。329は口縁部が外反し、胴部中央が膨らみ最大径になる。現存高37.5cm・口径28.4cmである。口縁部は無文で、ＲＬの縄文を施す胴部との境に平行沈線をもつ。文様帯は胴部上半と同下半に分かれ、上半には上下逆「U」字状の沈線文が連結した状態で連続する。逆「U」字状間の上部には円形沈線文を配置する。胴部下半にも上位文様単位に沿って、上下逆「U」字状の沈線文が描かれる。同じように文様単位間の上部に小さな沈線文を配置する。330は波状の口縁部が外反し、胴部中央部が膨らみ最大径になる。現存高47.2cm・口径40.6cmである。口縁部は無文で、地文の縄文の上に、「Ｊ」字状文の無文帯末端から枝文の付く横「Ｓ」字状文が横位に展開する。331は口縁部が短く直立し、胴部中央が大きく膨らむ。現存高19.3cm・口径29.8cmである。ＬＲの斜縄文を施し、口縁部直下の一部に原体の異なる文様を配している。333は、波状を呈する口縁部が外反し胴部中央で膨らみ、そこから底部まで極端に窄まる。器高53.8cm・口径36.7cm・底径11.4cmである無文の口縁部と胴部の境には、緩い段が形成される。胴部全体にＲＬの斜縄文が施され、部分的に綾絡文状の文様が縦走する。底面に直線状の痕跡を残す。胴部の332は胴部上位で膨らみ、全体に縄文を施す。337は胴部上位が大きく膨らむ。現存高は23.6cmである。ＲＬの斜縄文の上に細長い楕円状文を配置する。334は縄文と無文帯を沈線で区画する。335は隆帯で渦巻き文を描く。土製品の336は、縄文土器の破片を円盤状に仕上げる。

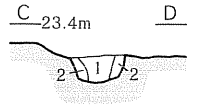
石器は、石鏃（Ｓ86～Ｓ88）・石錐（Ｓ89）・石匙（Ｓ90）・削器（Ｓ91・Ｓ92）・石斧（Ｓ93）・石棒（Ｓ94・Ｓ95）・台石（Ｓ96～Ｓ98）が出土した。Ｓ86・87の石鏃は、全面に丁寧な調整を施し



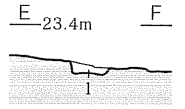
SI142



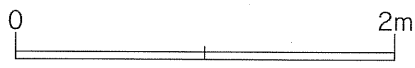
SI142(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。

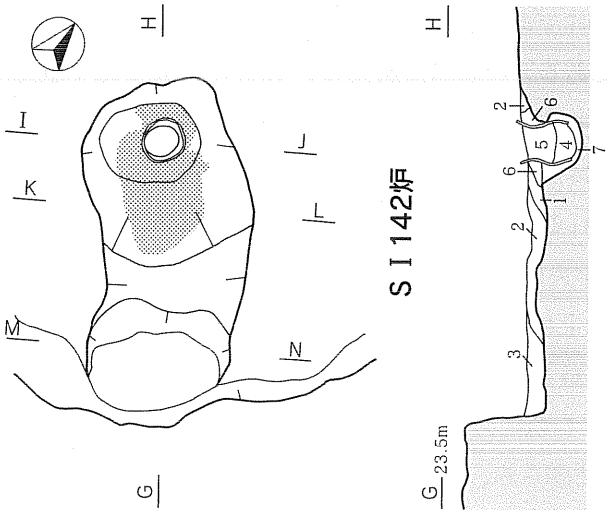


SI142　P1(C－D)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。

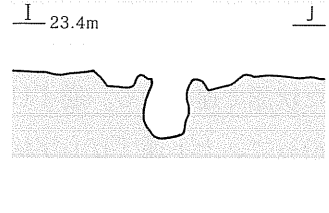


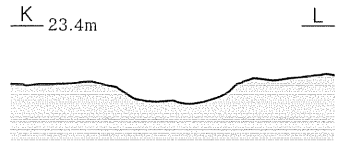
SI142　P2(E－F)
1　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。粘性・しまりあり。

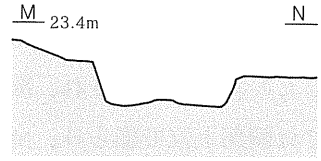




SI142　炉(G－H)
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭・焼土含む。粘性あり。しまりなし。
6　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性あり。しまりなし。
7　赤褐色土(5YR4/8)　粘性・しまりあり。







第34図　SI142竪穴住居跡

基部が僅かに凹む。S87は先端を折損するが、表裏両面にアスファルトが付着する。S88は粗い調整で、折損している。S89の石篦は、小型品で調整は粗い。S90の石匙は、横長剥片を素材にし両側縁にやや粗い調整を施す。摘み部の調整は入念である。S91の削器は、正面左側縁に粗い調整を施す。S92は、両側縁に丁寧な調整を施す。S93の石斧は、刃部が蛤刃を呈し全体を磨き上げる。S94・S95の石棒は、素材や形状が類似し、同一個体の両端部分と考えられる。端部面には同心円状の文様を施し、S94は周縁の内側と中央をS95は周縁の内側だけを彫り窪めている。S96の台石は、細長い大型の自然礫で断面が三角形状を呈する。3面のうち2面の中央が緩く窪み、細長い磨り面を形成する。他の一面は、皿状の凹みを作らないが全体に擦れる。最も顕著な擦り面（図の右）は、上下に小さな擦り面を伴う。S97は、扁平な自然礫の両面が広範に擦られる。被熱の影響で赤色を呈する。S98は、大型の分厚く扁平な自然礫を加工したものである。正面の全体と、裏面の左端と下端が、平坦に磨かれた状態を呈する。

《　時　　期　》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ142（第34・76図、図版35・58・59）

《位置と確認》　調査区北側のＬＮ68・69区に位置し、Ⅲ層で確認した。本遺跡の住居跡の中で最も北に位置する。

《規模と平面形》　平面形は楕円形を呈し、北側の一部がトレンチで削平される。規模は長軸2.88ｍ×短軸2.76ｍ・深さ0.24ｍである。

《　重　　複　》　重複はない。

《　土　　層　》　4層に分層した。上位に黒褐色土、下位に暗褐色土がある。

《　　壁　　》　南東側は急な角度で立ち上がり、他は緩い傾斜で立ち上がる。

《　床　　面　》　全体に凹凸があり、軟らかい。

《　柱　　穴　》　Ｐ1～Ｐ3まで検出した。規模はＰ1の長軸が0.23ｍ×短軸0.21ｍ・深さ0.09ｍ、Ｐ2が0.24ｍ×0.21ｍ・0.07ｍ、Ｐ3が0.34ｍ×0.23ｍ・0.14ｍである。

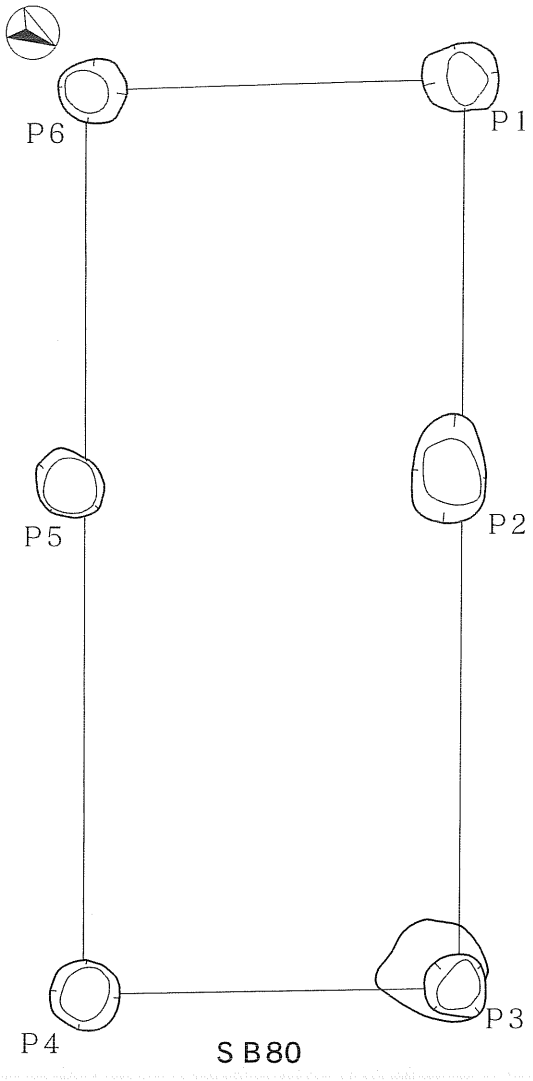
《　　炉　　》　住居跡南東側の壁に付設される。土器埋設部・燃焼部で構成される複式炉である。規模は最大長1.29ｍ×最大幅0.62ｍ・最深部0.22ｍで、平面形は捻れた楕円形を呈する。炉の軸線方向はＮ－40°－Ｗである。

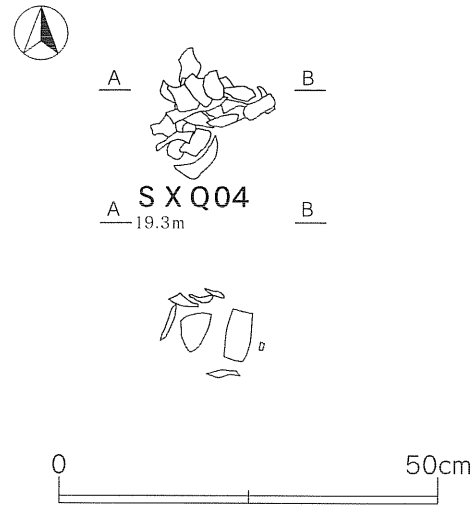
〈土器埋設部〉　方形の掘り方で、北側に深鉢（第76図338）が正位に設置される。この南側の底面は緩く窪む。

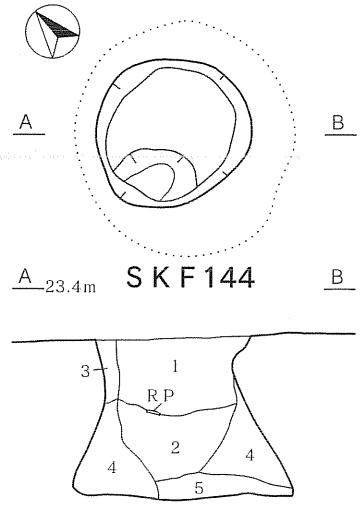
〈燃焼部〉　楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。土器埋設部とは0.1ｍ～0.2ｍの幅で境を造る。

《出土遺物》　炉と覆土から少量の遺物が出土した。出土遺物には、第76図の土器がある。深鉢（338～343）が出土した。

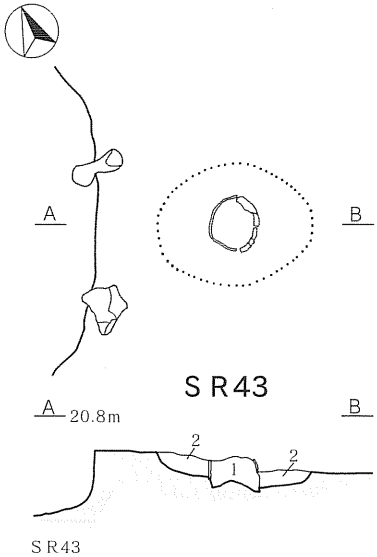
339・341・342は胴部、343は底部破片である。338は口縁部が緩く外反し、胴部中央で最大径になる。現存高20.3cm・口径18.25cmである。全体にＲＬの斜縄文を施し、胴部上位に無文帯を沈線で4区画する。区画内には、左右逆の「Ｊ」字状文を配置する。339は胴部中央が膨らみ、全体に縄文を施す。破片の上部には「Ｕ」字状の沈線文が、同下部には上下逆の「Ｕ」字状文を描く。両文様の間に刺突文を施す。ボタン状突起が1つ見られる。341は縄文・無文帯を沈線で区画し、342は断面三角形の隆帯で文様を作る。340は胴部上位が膨らみ、直線的に底部に至る。全面に縄文を施し、







SKF144
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　炭含む。粘性あり。しまりなし。
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒含む。粘性あり。しまりなし。
5　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性あり。しまりなし。



SR43
1　黒褐色土(10YR2/3)　粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　粘性・しまりあり。

第35図　SB80 掘立柱建物跡, SKF144 フラスコ状土坑, SR43 埋設土器, SXQ04 石器集中部

胴部上位に無文帯を沈線で区画する文様を配置する。部分的に綾絡文状の文様が縦走する。343は底面を削り込んでいる。

《時　　期》　縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＩ143（第29図、図版36）

《位置と確認》　調査区中央のＭＡ48・49区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》　平面形は円形もしくは楕円形と推定され、南西側はＳＩ115によって、東側はトレンチで削平される。規模は長軸3.60m×現存短軸2.24m・深さ0.32mである。

《重　　複》　ＳＩ115に切られる。

《土　　層》　5層に分層した。上位が黒褐色土、下位が暗褐色土である。

《壁　　》　南側を除いてやや強い角度で立ち上がる。

《床　　面》　北側は比較的平坦で、それ以外は凹凸が著しい。全体に軟らかい。

《柱　　穴》　Ｐ1～Ｐ4まで検出した。規模はＰ1が長軸0.36m×短軸0.32m・深さ0.21m、Ｐ2が0.37m×0.33m・0.11m、Ｐ3が0.40m×現存0.20m・0.06m、Ｐ4が0.32m×現存0.25m・0.10mである。

《炉　　》　住居跡の南東際に位置する。略円形の掘り方の底面が被熱で赤く硬化していた。

〈土器埋設部〉壁は住居跡の中央側が緩く立ち上がる。

《出土遺物》　遺物は出土しなかった。

《時　　期》　不明である。重複するＳＩ115以前であると推定される。

2　竪穴状遺構

ＳＫＩ33（第22・77図、図版37）

調査区南側のＭＤ33・34区に位置し、Ⅲ層で確認した。ＳＩ23の南東側を切り込んでいる。形態は、長軸2.20m×短軸1.80m・0.61mの略楕円形である。底面は平坦で、壁は強く傾斜して立ち上がる。底面や壁の状態や規模の大きな点から竪穴状遺構として扱った。ＳＩ23の覆土として掘り上げたため、断面が残せなかった。

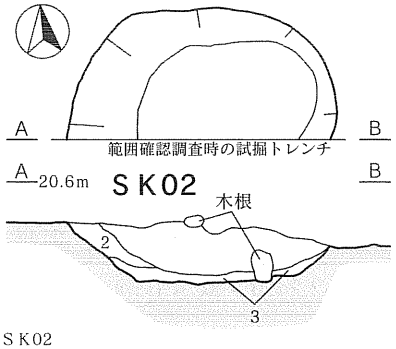
出土遺物には、第77図の土器がある。深鉢（344・345）が出土した。

344は胴部破片で、浅い窪み・刺突文・沈線・無文帯・縄文が見られる。345は胴部から、直線的に底部に至る。現存高13cm・底径5.7cmである。全体にＲＬの斜縄文を施す。

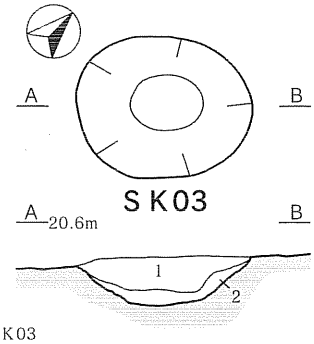
3　掘立柱建物跡

ＳＢ80（第35図、図版37）

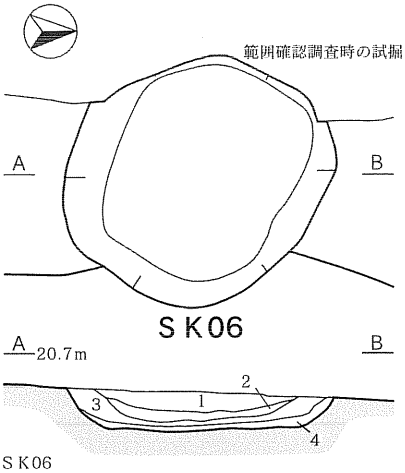
調査区南側のＭＡ30・31区とＭＢ30・31区に位置し、Ⅲ層で確認した。梁行2間×桁行1間で、長軸方向は北東―南西を指す。Ｐ3はＳＫＰ75に切られる。規模は、Ｐ1―Ｐ2が2.10m、Ｐ2―Ｐ3が2.63m、Ｐ3―Ｐ4が1.88m、Ｐ4―Ｐ5が2.70m、Ｐ5―Ｐ6が2.08m、Ｐ6―Ｐ1が1.95mである。柱穴の規模はＰ1が長軸42cm×短軸40cm・深さ36.2cm、Ｐ2が長軸58cm×短軸40cm・深さ48.7cm、Ｐ3が長軸60cm×短軸52cm・深さ33.2cm、Ｐ4が径38cm・深さ46.3cm、Ｐ5が長軸40cm×短軸34cm・深さ38cm、Ｐ6が径35cm・深さ43.9cmである。



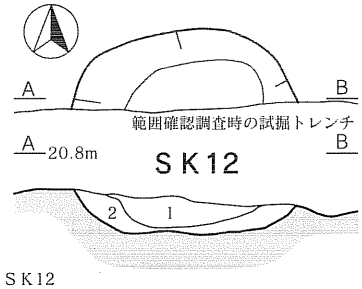
SK02
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭・褐色土含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭含む。粘性あり。しまりなし。
3　黒色土(10YR2/1)　炭含む。粘性あり。しまりなし。



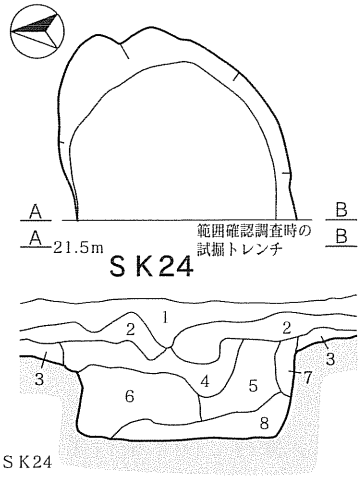
SK03
1　黒色土(7.5YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒含む。粘性・しまりあり。



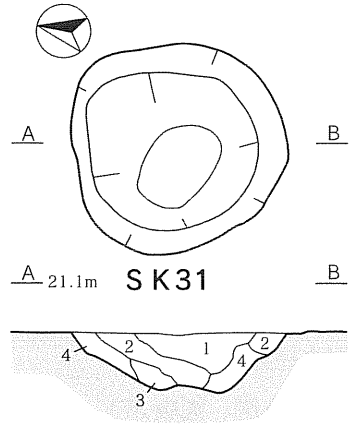
SK06
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒色土(10YR2/1)　地山ブロック・地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



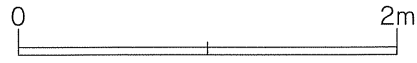
SK12
1　黒色土(10YR1.7/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/1)　炭含む。粘性・しまりあり。



SK24
1　暗褐色土(10YR3/3)
2　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック・炭含む。
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
7　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　地山粒含む。
8　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　地山粒含む。



SK31
1　黒褐色土(10YR3/2)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
4　褐色土(10YR4/4) 地山ブロック・地山粒含む。粘性・しまりあり。



第36図　SK02・03・06・12・24・31土坑

4　フラスコ状土坑

ＳＫＦ32（第25・88図、図版43）

調査区南側のＭＣ・ＭＤ30区に位置し、ＳＩ26調査時に確認した。ＳＩ26の南側を切り込んでいる。開口部は長軸1.10ｍ×短軸0.95ｍの略楕円形、底面は長軸1.30ｍ×短軸1.16ｍの略楕円形で、深さは0.85ｍである。底面は平坦で、壁は南西底面付近で僅かに張り出す以外は直線的に内傾する。

覆土は暗褐色土が主体であるが、断面図を取れなかった。出土遺物は、第88図の磨製石斧（Ｓ41）が出土した。

ＳＫＦ37（第22図、図版43）

調査区南側のＭＤ34区に位置し、ＳＩ23に切られている。西側の１／４は調査区外である。開口部は推定長軸1.00ｍ×0.74ｍの略楕円形、底面は推定長軸1.15ｍ×推定短軸1.05ｍの略楕円形で、深さは0.40ｍである。底面は平坦で、壁は直線的に内傾する。覆土は黒褐色土が主体であるが、底面にはにぶい黄褐色土が６～７cm均一の厚さで堆積する。

ＳＫＦ144（第35図、図版43）

調査区北側のＬＱ67区に位置し、Ⅲ層で確認した。開口部は長軸0.86ｍ×短軸0.77ｍの楕円形、底面は長軸1.25ｍ×短軸1.17ｍの楕円形で、深さは0.86ｍである。底面は中央部が僅かに窪み、壁は直線的に内傾する。西側の壁際には浅い窪みを造る。覆土は全体に黒褐色土が主体を占める。

5　土　坑

ＳＫ02（第36図、図版38）

調査区南側のＬＴ・ＭＡ30区に位置し、Ⅲ層で確認した。南側の約半分が、範囲確認トレンチで切られている。形態は平面楕円形と推定され、規模は推定長軸1.42ｍ×推定短軸1.06ｍ・深さ0.32ｍである。壁は東側が強く傾斜し、その両側から反対側にかけて徐々に緩やかになる。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土が主体であるが、底面には炭粒を多量に含んだ黒色土が全面に堆積する。

ＳＫ03（第36図、図版38）

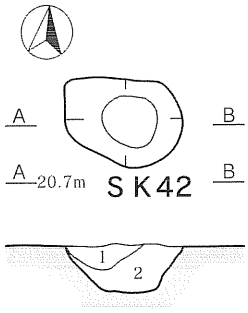
調査区南側のＭＡ30区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は平面楕円形、規模は長軸0.94ｍ×短軸0.77ｍ・深さ0.22ｍである。壁は全体が擂り鉢状に緩く傾斜している。底面は小さく中央が最も低い。覆土は黒色土が主体で、底面には黒褐色土が薄く堆積する。

ＳＫ06（第36図、図版38・39）

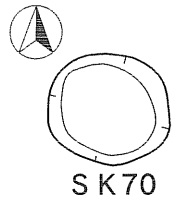
調査区南側のＭＡ・ＭＢ34区に位置し、Ⅲ層で確認した。ＳＩ07の西端を切り込んでいる。形態は平面隅丸長方形と推定され、規模は現存長軸1.34ｍ×短軸1.34ｍ・深さ0.24ｍである。壁は緩く傾斜し、底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土が主体であるが、中位に黒色土が薄く堆積する。

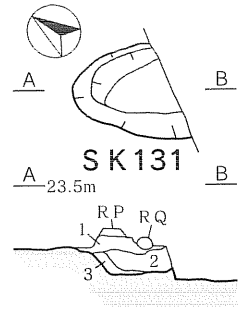
ＳＫ12（第36図、図版39）

調査区南側のＭＣ35区に位置し、Ⅲ層で確認した。南側の約半分が、範囲確認トレンチで切られている。形態は平面楕円形と推定され、規模は現存長軸1.24ｍ×現存短軸0.44ｍ・深さ0.24ｍである。壁は緩く傾斜し、底面には凹凸がある。覆土は黒色土と黒褐色土に分層された。

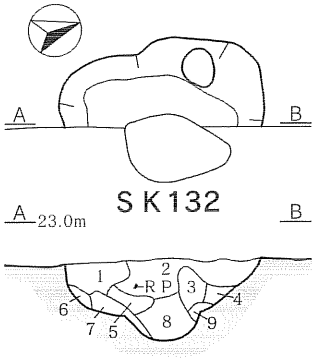


SK42
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック含む。しまりなし。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック含む。しまりなし。

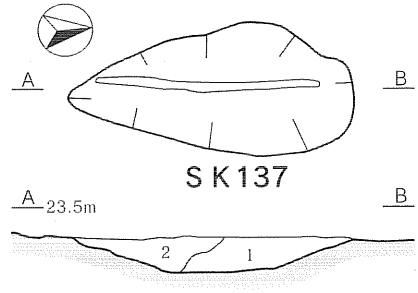




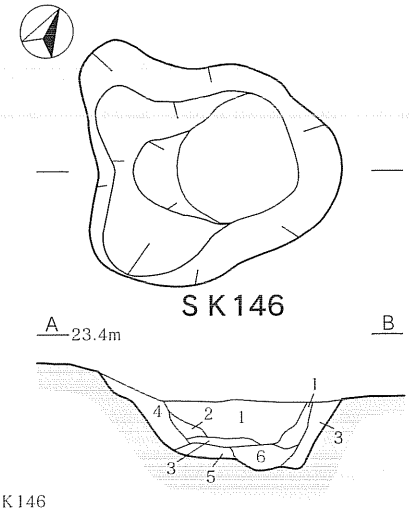
SK131
1　暗褐色土(10YR3/3)　粘性なし。しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　炭含む。粘性なし。しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　地山ブロック含む。粘性・しまりあり。



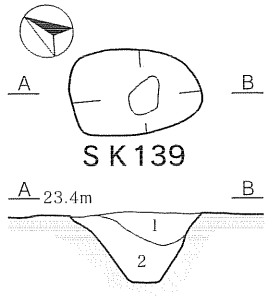
SK132(A－B)
1　黒褐色土(10YR2/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/4)　炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
6　褐色土(10YR4/4)　地山粒含む。粘性・しまりあり。
7　褐色土(10YR4/6)　炭含む。粘性・しまりあり。
8　暗褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
9　褐色土(10YR4/6)　粘性・しまりあり。



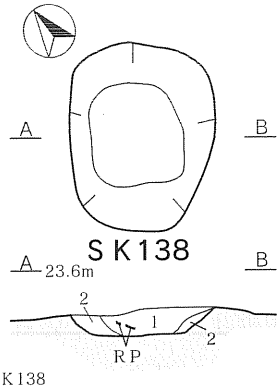
SK137
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。



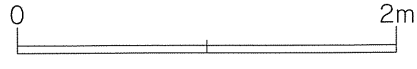
SK146
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭・褐色土含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/4)　炭・褐色土含む。粘性・しまりあり。
3　褐色土(10YR4/6)　炭・暗褐色土含む。粘性・しまりあり。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黄褐色土含む。粘性・しまりあり。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山ブロック・黄褐色土含む。
　　粘性なし。しまりあり。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック・炭含む。粘性・しまりあり。



SK139
1　黒褐色土(10YR3/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭含む。
　　粘性・しまりなし。



SK138
1　黒色土(10YR2/1)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山ブロック含む。
　　粘性・しまりあり。



第37図　SK42・70・131・132・137・138・139・146土坑

ＳＫ24（第36・77図、図版39）

調査区南側のＭＤ33区に位置し、Ⅲ層で確認した。西側の約1／3が調査区外に延びている。形態は平面不整な楕円形と推定され、規模は現存長軸1.30ｍ×短軸1.17ｍ・深さ0.55ｍである。壁は北東側が緩い傾斜で、長軸に沿う南側は急な傾斜を示し、北側は上位が少し内側に迫り出す。大きく上位が褐色土であるが、下位に地山を含む褐色土が目立つ。

出土遺物は、第77図の深鉢(346)が出土した。胴部上位が膨らむ形態で、全体にＬＲの斜縄文を施す。現存高15.5cmである。

ＳＫ31（第36・77図、図版40）

調査区南側のＭＤ31区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は平面不整な楕円形、規模は長軸1.18ｍ×短軸1.15ｍ・深さ0.32ｍである。壁は緩く凹凸があり、底面の中央部は僅かに高まる。覆土は黒褐色土が主体を占め、壁際には褐色土が堆積する。

出土遺物には、第77図の深鉢（347）が出土した。底部資料でやや突出した資料である。底面に直線状の痕跡を残す。

ＳＫ42（第37図、図版40）

調査区南側のＭＣ30区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は平面不整な楕円形、規模は長軸0.67ｍ×0.48ｍ・深さ0.25ｍである。壁は、北西側がかなり緩く傾斜する以外は緩く傾斜する。覆土は黒褐色土が主体を占める。

ＳＫ47（第25図、図版16）

調査区南側のＭＣ31区に位置し、Ⅲ層で確認した。南側の半分をＳＩ26に切られる。形態は平面楕円形と推定され、規模は現存長軸1.18ｍ×現存短軸4.60ｍ・深さ0.15ｍである。現存する底面から壁にかけて、緩く傾斜する。覆土は暗褐色土が主体である。

ＳＫ70（第37図）

調査区南側のＭＡ32区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は平面楕円形、規模は長軸0.66ｍ×短軸0.61ｍ・深さ0.10ｍである。壁は緩く傾斜し、底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土が主体を占める。断面図を取れなかった。

ＳＫ109（第25図、図版41）

調査区南側のＭＣ30区に位置し、Ⅲ層で確認した。ＳＩ26の南端を切り、西側の一部をＳＫＦ32に切られる。形態は平面楕円形、規模は長軸0.92ｍ×短軸0.52ｍ・深さ0.23ｍである。底面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がる。覆土は暗褐色土が主体を占める。

ＳＫ131（第37・77図、図版41）

調査区北側のＬＲ61区に位置し、Ⅲ層で確認した。南東側の約1／3が、範囲確認トレンチで切られている。形態は平面楕円形と推定され、現存長軸0.62ｍ×短軸0.54ｍ・深さ0.24ｍである。壁は緩く傾斜するが、北側では弱い段を形成している。底面には僅かに凹凸がある。覆土は暗褐色土が主体を占め、底面から壁際に褐色土が堆積する。

出土遺物には、第77図の深鉢（348）・台付深鉢（349）が出土した。348は無文である。349の深鉢部分には微かな縄文が認められる。

ＳＫ132（第37・99図、図版41）

調査区北側のＬＲ58区に位置し、Ⅲ層で確認した。南東側の約半分が、範囲確認トレンチで切られ、またＳＫＰ148に中央部分を切られる。形態は平面不整な楕円形と推定され、長軸1.08ｍ×現存短軸0.56ｍ・0.30ｍである。壁は緩く傾斜して徐々に底面中央に至る。上位は暗褐色土が主体を占め、底面には褐色土が堆積する。

出土遺物には、第99図の石製品（99）が出土した。小さな礫の両端に、両側から円錐状に施した2つの穿孔がある。径が5～7mmである。

ＳＫ137（第37図、図版42）

調査区北端のＬＬ74・75区に位置し、Ⅳ層で確認した。形態は溝状の不整な楕円形、規模は長軸1.51ｍ×短軸0.70ｍ・深さ0.19ｍである。長軸方向の壁は比較的傾斜が強く、短軸方向では緩い「Ｖ」字状を呈している。覆土は暗褐色土と黒褐色土に分層される。

ＳＫ138（第37・77図、図版42）

調査区北端のＬＭ73区に位置し、Ⅳ層で確認した。形態は平面不整な楕円形、規模は長軸0.10ｍ×短軸0.78ｍ・深さ0.15ｍである。底面は隅丸方形状を呈する。壁は緩く傾斜し、底面はほぼ平坦である。覆土は黒色土と暗褐色土に分層される。

出土遺物には、第77図の深鉢（350・351）が出土した。350の口縁部はやや内湾し、波状の突起がある。頂部から「の」の字状の隆帯が延び、それに刺突文が沿って施される。351の口縁部は直立気味に内湾し、やはり隆帯に沿った刺突文がある。350と同一個体と考えられる。

ＳＫ139（第37図）

調査区北端のＬＬ74区に位置し、Ⅳ層で確認した。形態は平面不整な楕円形、規模は長軸0.70ｍ×短軸0.46ｍ・深さ0.38ｍである。壁は緩く傾斜し、底面は平坦である。覆土は黒褐色土が主体を占める。

ＳＫ146（第37図、図版42）

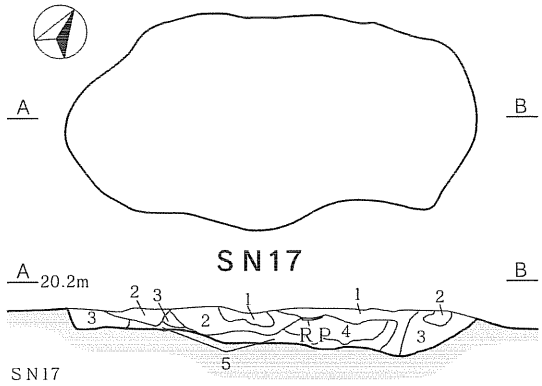
調査区北側のＬＭ69・70区に位置し、Ⅳ層で確認した。形態は平面隅丸三角形状の不整形、規模は長軸1.38ｍ×短軸1.35ｍ・深さ0.52ｍである。壁は南西側がかなり緩く傾斜する他は、緩く傾斜する。底面は北東側ほど低くなる。覆土は暗褐色土が主体を占めるが、底面から壁際に褐色土や黄褐色土が堆積する。

6　土器埋設遺構

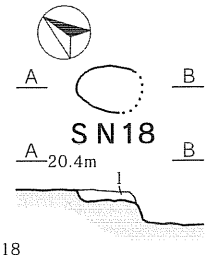
ＳＲ43（第35・77図）

調査区南側のＭＡ33区に位置し、Ⅲ層で確認した。西側でＳＩ09と重複するが、切り合い関係は不明である。平面では不明だが、断面の観察で0.82ｍの掘り込みが確認でき、その中央に深鉢を埋設している。西側ＳＩ09壁際に2つの礫が置かれてあり、深鉢と関連すると考えられる。覆土は掘り方に暗褐色土が、深鉢内には黒褐色土が堆積する。

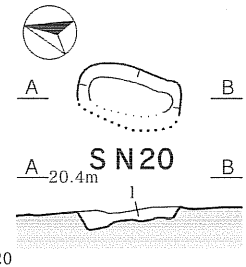
出土遺物は、第77図の深鉢（353）が出土した。口縁部には6つの波頂部があり、口縁は直立気味に内湾する。現存高35.1cm・口径27.4cmである。胴部との境がやや括れ、僅かな張りをもって底部に至る。口縁部は幅の狭い無文帯を作り、沈線で区画される。胴部には全面に縄文が施され、波頂



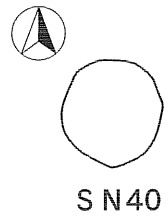
SN17
1　黒褐色土(10YR2/3)　焼土含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(10YR4/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
4　明赤褐色土(5YR5/6)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/4)　地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。



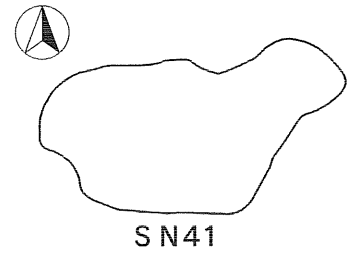
SN18
1　明赤褐色土(5YR3/2)　焼土含む。
粘性・しまりあり。



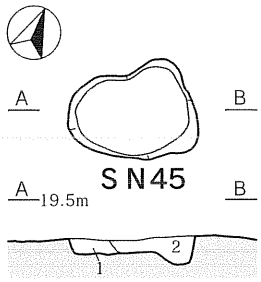
SN20
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



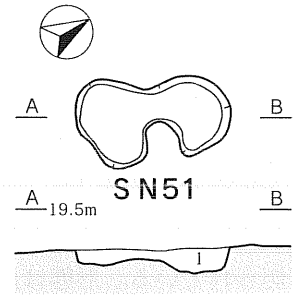
SN40
1　暗赤褐色土(5YR3/4)
炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



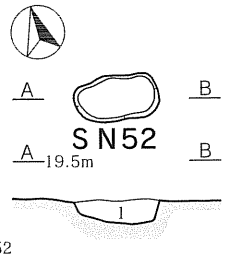
SN41
1　暗赤褐色土(5YR3/3)
炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



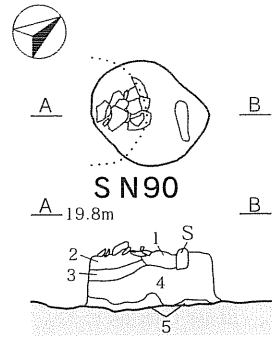
SN45
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭含む。しまりなし。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　炭含む。しまりあり。



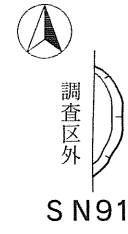
SN51
1　黒褐色土(10YR2/3)　にぶい黄褐色土・炭含む。
しまりあり。



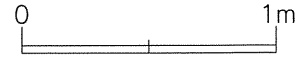
SN52
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭・焼土含む。
しまりあり。



SN90
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　褐色土(7.5YR4/6)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。
3　明赤褐色土(5YR5/6)　焼土含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(10YR3/4) 地山粒・炭含む。粘性・しまりあり。
5　褐色土(10YR4/6)　暗褐色土含む。粘性・しまりあり。



SN91
1　暗赤褐色土(5YR3/4)
焼土含む。粘性・しまりあり。



第38図　SN17・18・20・40・41・45・51・52・90・91焼土遺構

部の下に左右逆の「S」字状文やそれを連結させた様な文様が垂下する。それらの単位文様間は、左上から右下へ数本の沈線が連結する。

7　焼土遺構

SN17（第38・77図、図版44）

調査区南側のLT29区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸2.18m×短軸1.13m・深さ0.26mの不整な楕円形の範囲である。東側に明赤褐色土のブロックが確認され、広い範囲で焼土や炭が確認された。全体にしまりのある堆積層であり、明確な掘り方は確認できない。

出土遺物には、第77図の土器深鉢（354）が出土した。354は縄文と無文帯を浅い沈線で区画し、そこに刺突文を施す。

SN18（第38図、図版44）

調査区南側のLT31区に位置し、Ⅲ層で確認した。南東側がトレンチで切られる。形態は長軸0.35m×短軸0.24m・深さ0.07mで、楕円形の範囲と考えられる。焼土は明赤褐色土である。明確な掘り方は確認できない。

SN20（第38図、図版45）

調査区南側のLT35区に位置し、Ⅲ層で確認した。西側の半分程を削平してしまった。形態は長軸0.56×短軸0.34m・深さ0.11mの楕円形の範囲である。焼土は炭を含んだ暗褐色土である。

SN40（第38図）

調査区南側のMC33・34区に位置し、Ⅲ層で確認した。南西側でSI36を切り込んでいる。形態は長軸0.57m×短軸0.53m・深さ0.20mの略楕円形の範囲である。薄い焼土の広がりとして把握でき、暗赤褐色土を示す。明確な掘り方は確認できない。

SN41（第38図、図版45）

調査区南側のMC35区に位置し、Ⅲ層で確認した。南側が範囲確認トレンチで切られ、西端をSK12に切られている。形態は長軸1.65m×短軸0.92m・深さ0.10mの不整形である。薄い焼土の広がりとして把握でき、暗赤褐色土を示す。明確な掘り方は確認できない。

SN45（第38図、図版45）

調査区南側のLT24区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸0.69m×短軸0.51m・0.15mの不整形の範囲である。焼土は炭を含んだ暗褐色土である。

SN51（第38図）

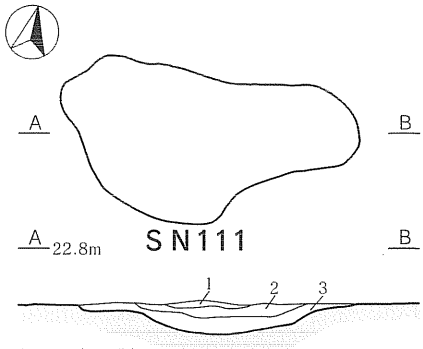
調査区南側のLT24区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸0.82m×短軸0.46m・深さ0.13mの不整形の範囲である。焼土は炭を含んだ黒褐色土である。

SN52（第38図）

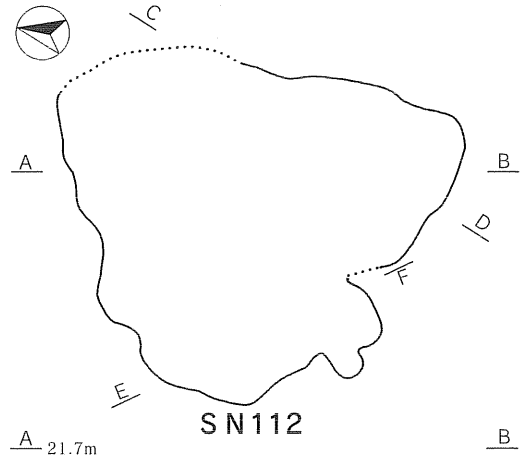
調査区南側のLT24区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸0.46m×短軸0.24m・深さ0.12mの略楕円形の範囲である。焼土は炭を含んだ暗褐色土である。

SN90（第38図、図版46）

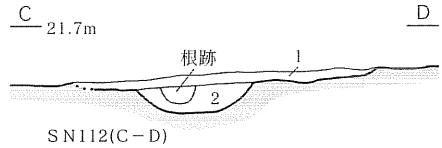
調査区南側のMA25区に位置し、Ⅲ層で確認した。削平が著しく、現状では0.48m×0.30m・深さ0.15mの範囲である。下位に明瞭な明赤褐色の焼土ブロックが確認され、上位には炭が含まれる。



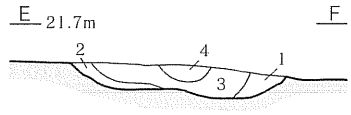
SN111(A－B)
1　暗赤褐色土(5YR3/6)　炭・焼土含む。しまりなし。
2　赤褐色土(5YR4/6)　炭・焼土含む。しまりあり。
3　暗褐色土(7.5YR3/4)　炭・焼土含む。しまりあり。



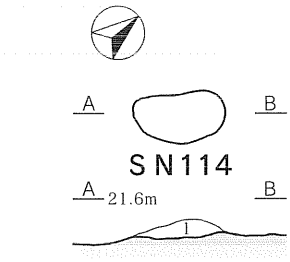
SN112(A－B)
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。しまりあり。
2　褐色土(7.5YR4/4)　焼土含む。しまりあり。
3　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。しまりなし。



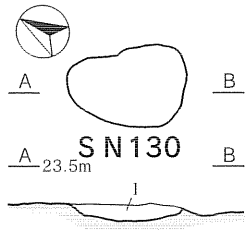
SN112(C－D)
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。しまりあり。
2　褐色土(7.5YR4/4)　焼土含む。しまりあり。



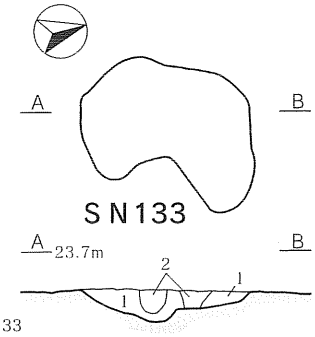
SN112(E－F)
1　黒褐色土(10YR3/2)　炭・焼土含む。しまりなし。
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭・焼土・明褐色土含む。しまりあり。
3　褐色土(7.5YR4/4)　焼土含む。しまりあり。
4　褐色土(7.5YR4/3)　焼土含む。しまりあり。



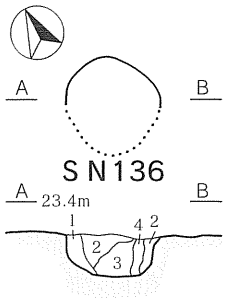
SN114
1　暗褐色土(5YR3/6)　炭・焼土・黒褐色土含む。しまりあり。



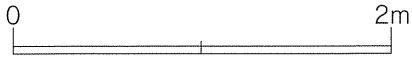
SN130
1　暗赤褐色土(5YR3/4)　炭含む。粘性なし。しまりあり。



SN133
1　黒褐色土(5YR3/2)　炭含む。粘性・しまりあり。
2　暗赤褐色土(10YR3/4)　炭・焼土含む。粘性・しまりあり。



SN136
1　暗褐色土(7.5YR3/4)　炭含む。粘性あり。しまりなし。
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　炭含む。粘性・しまりなし。
3　赤褐色土(5YR4/6)　炭含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭含む。粘性・しまりあり。



第39図　SN111・112・113・114・130・133・136焼土遺構

最上位には割れた礫が密集して出土した。本来は掘り方が存在したと思われる。

ＳＮ91（第38図）

調査区南側のＭＤ32区に位置し、Ⅳ層で確認した。西側が調査区外に延びている。現状では、長軸0.6m×短軸0.16mの範囲である。焼土は暗赤褐色土である。

ＳＮ111（第39図、図版46）

調査区中央のＭＡ53区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸1.55m×短軸1.47m・深さ1.80mの不整形の範囲である。焼土は中央が赤褐色土の最も純粋なもので、全体に炭が含まれる。

ＳＮ112（第39図、図版46）

調査区中央のＭＣ46区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸2.13m×短軸1.98m・深さ0.30mの不整な三角形状の範囲である。焼土は褐色土を示し目立たない。上位に炭を含む層がある。底面は南側ほど低く、北側に緩く傾斜する。

ＳＮ113（第39図、図版47）

調査区中央のＭＤ43区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸1.41m×短軸0.88m・深さ0.34mの不整な楕円形の範囲である。覆土は黒色や黒褐色土が主体であるが、全体に赤みがさし焼土遺構として把握した。底面には凹凸があり、壁は南で強く傾斜するが北側は緩く立ち上がる。

ＳＮ114（第39図、図版47）

調査区中央のＬＴ48区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸0.49m×短軸0.29m・深さ0.09mの不整な楕円形の範囲である。焼土は炭を含んだ暗褐色土である。明確な掘り方は確認できない。

ＳＮ118（図版47）

調査区中央のＭＢ48区に位置し、ＳＩ115覆土上位で確認した。ＳＩ115覆土を切り込んでいる。形態は長軸0.58m×短軸0.34m・深さ0.05mの不整な楕円形の範囲である。暗赤褐色の薄い広がりで、明確な掘り方は確認できない。

ＳＮ130（第39図、図版48）

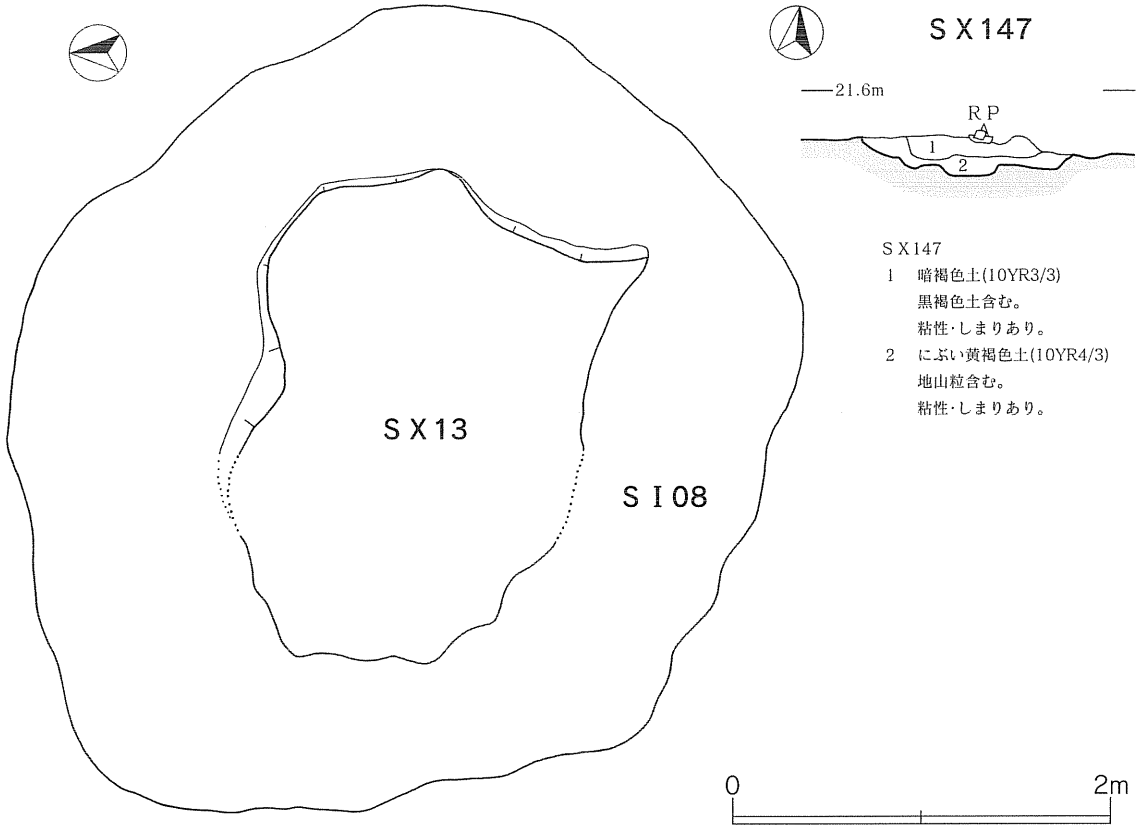
調査区北側のＬＰ61区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸0.62m×短軸0.46m・深さ0.09mの不整形の範囲である。焼土は炭を含んだ暗赤褐色土である。

ＳＮ133（第39図、図版48）

調査区北側のＬＱ65区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸1.00m×短軸0.71m・深さ0.18mの不整形の範囲である。焼土は炭を含んだ暗赤褐色土が主体である。

ＳＮ136（第39図、図版48）

調査区北側のＬＮ66区に位置し、Ⅲ層で確認した。形態は長軸0.50m×短軸0.48m・深さ0.23mの楕円形の範囲である。焼土は中央部が最も純粋で、全体に炭を含んでいる。底面は中央が最も低く、丸みをもつ壁際から直立して立ち上がる。

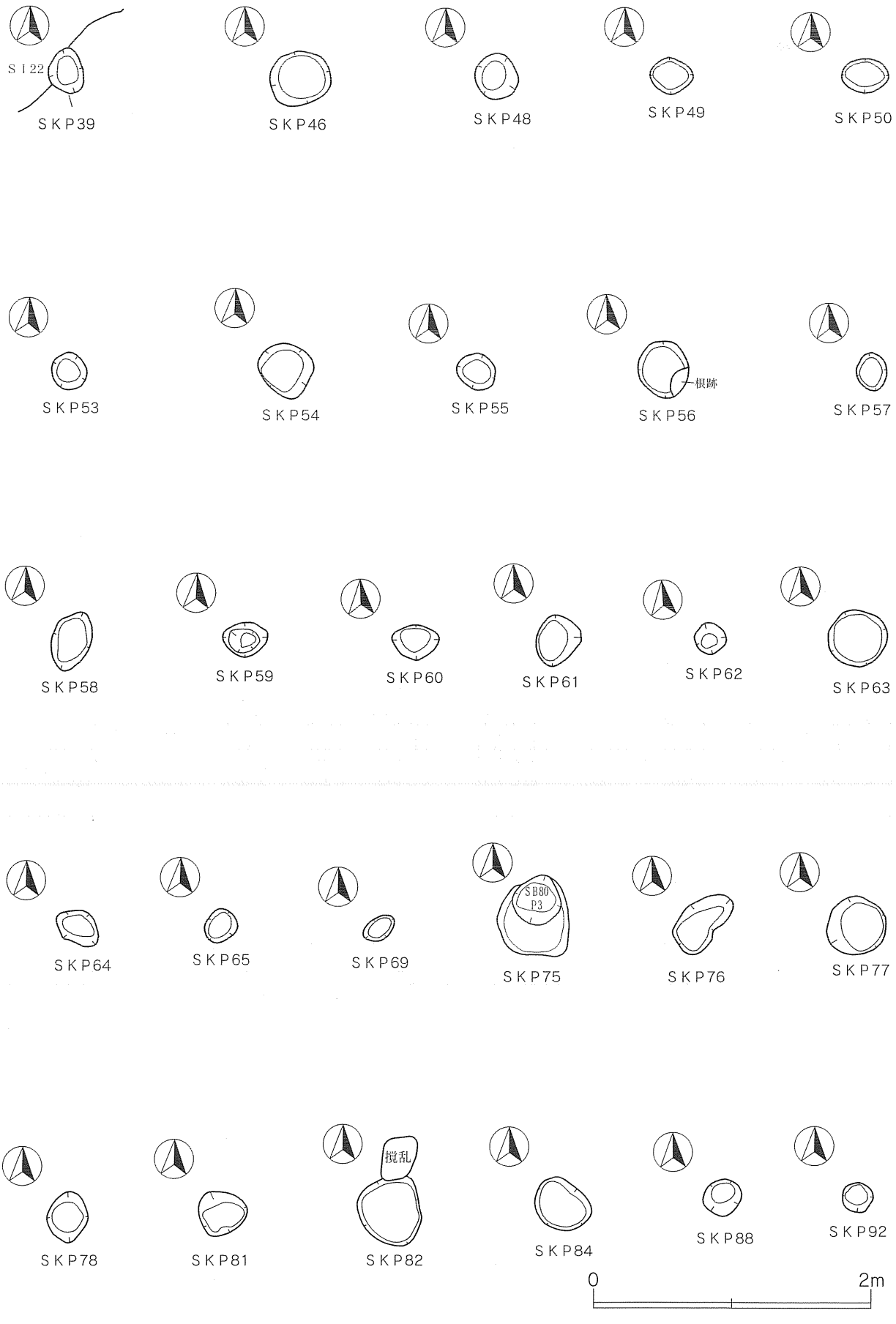


第40図　SX13・147 性格不明遺構

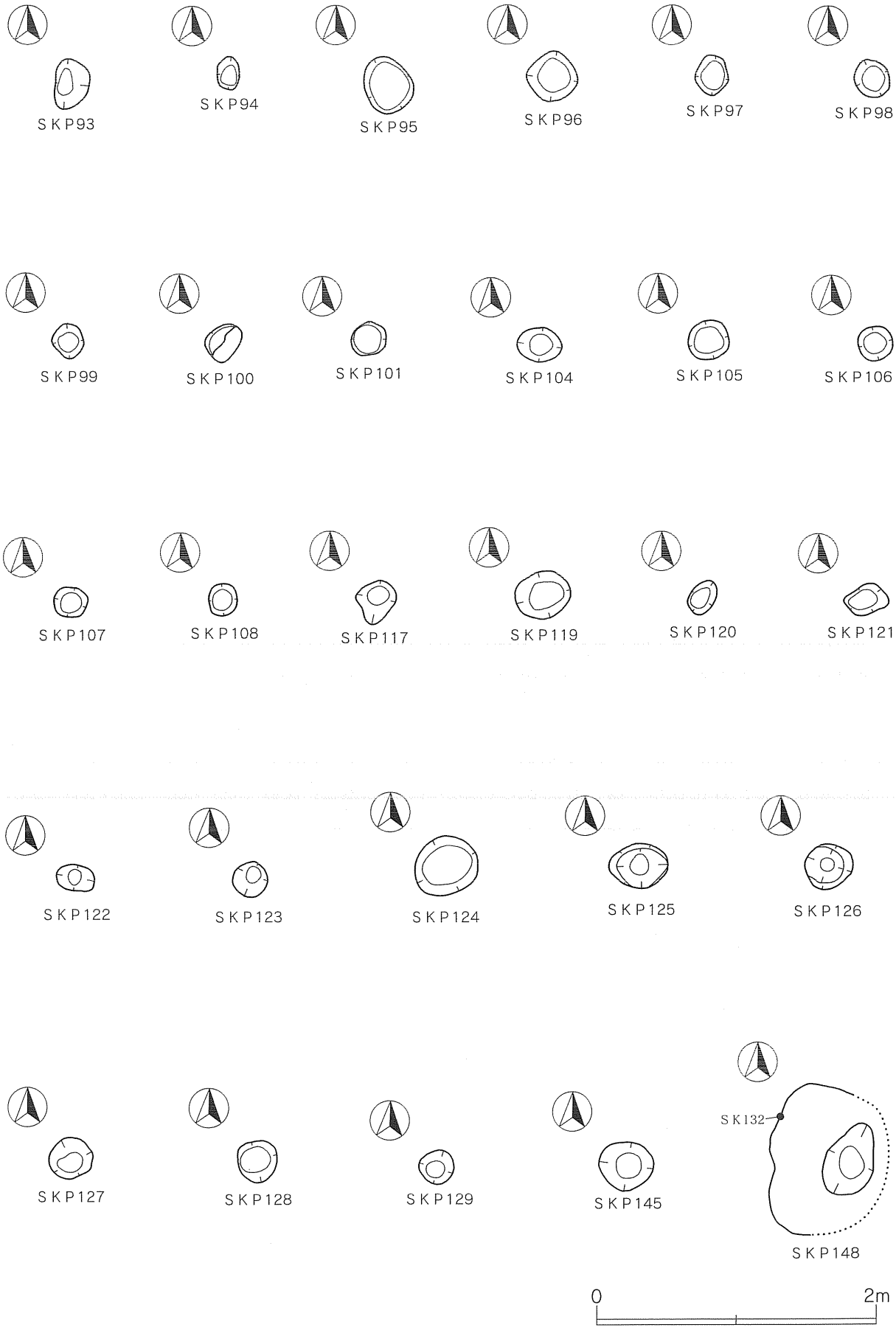
遺構番号	長　軸	短　軸	深　さ	平 面 形	遺構番号	長　軸	短　軸	深　さ	平 面 形
SKP39	0.33m	0.26m	0.17m	不整な楕円形	SKP93	0.35m	0.25m	0.37m	不整な楕円形
SKP46	0.44m	0.38m	0.24m	隅丸方形	SKP94	0.24m	0.16m	0.18m	不整な楕円形
SKP48	0.33m	0.30m	0.14m	隅丸方形	SKP95	0.40m	0.34m	0.16m	楕円形
SKP49	0.32m	0.26m	0.18m	楕円形	SKP96	0.34m	0.33m	0.22m	隅丸方形
SKP50	0.34m	0.24m	0.20m	楕円形	SKP97	0.30m	0.24m	0.16m	不整な楕円形
SKP53	0.27m	0.26m	0.22m	円形	SKP98	0.29m	0.25m	0.20m	楕円形
SKP54	0.40m	0.36m	0.15m	不整な隅丸方形	SKP99	0.25m	0.23m	0.15m	不整な円形
SKP55	0.29m	0.25m	0.20m	楕円形	SKP100	0.28m	0.22m	0.21m	楕円形
SKP56	0.41m	0.38m	0.16m	楕円形	SKP101	0.25m	0.23m	0.23m	不整な円形
SKP57	0.28m	0.23m	0.13m	楕円形	SKP104	0.33m	0.26m	0.12m	楕円形
SKP58	0.45m	0.28m	0.17m	楕円形	SKP105	0.30m	0.29m	0.17m	円形
SKP59	0.35m	0.26m	0.32m	不整な楕円形	SKP106	0.26m	0.25m	0.13m	円形
SKP60	0.34m	0.25m	0.18m	不整な楕円形	SKP107	0.25m	0.21m	0.06m	隅丸方形
SKP61	0.38m	0.32m	0.22m	不整な楕円形	SKP108	0.23m	0.21m	0.17m	円形
SKP62	0.24m	0.23m	0.29m	円形	SKP117	0.32m	0.28m	0.20m	不整な楕円形
SKP63	0.44m	0.42m	0.22m	円形	SKP119	0.40m	0.34m	0.11m	楕円形
SKP64	0.34m	0.24m	0.16m	不整な楕円形	SKP120	0.26m	0.18m	0.09m	楕円形
SKP65	0.25m	0.22m	0.13m	楕円形	SKP121	0.27m	0.20m	0.11m	隅丸方形
SKP69	0.25m	0.15m	0.15m	楕円形	SKP122	0.27m	0.19m	0.22m	楕円形
SKP75	(0.60m)	0.50m	0.26m	楕円形	SKP123	0.26m	0.25m	0.12m	円形
SKP76	0.51m	0.30m	0.16m	不整な楕円形	SKP124	0.48m	0.42m	0.13m	楕円形
SKP77	0.45m	0.43m	0.19m	円形	SKP125	0.43m	0.32m	0.19m	楕円形
SKP78	0.37m	0.30m	0.10m	楕円形	SKP126	0.34m	0.32m	0.25m	不整な円形
SKP81	0.35m	0.33m	0.20m	不整な楕円形	SKP127	0.32m	0.29m	0.13m	不整な円形
SKP82	(0.52m)	0.45m	0.14m	不整な楕円形	SKP128	0.31m	0.30m	0.14m	不整な円形
SKP84	0.42m	0.35m	0.17m	楕円形	SKP129	0.25m	0.24m	0.13m	円形
SKP88	0.29m	0.27m	0.30m	円形	SKP145	0.40m	0.36m	0.22m	不整な円形
SKP92	0.22m	0.22m	0.20m	円形	SKP148	0.56m	0.36m	0.23m	楕円形

＊（　　）の中の数値は、推定値である。

第2表　柱穴様ピット計測一覧



第41図　ＳＫＰ39～92 柱穴様ピット



第42図　ＳＫＰ93～148 柱穴様ピット

8　石器集中部

ＳＸＱ04（第35・100～103図、図版49）

調査区南側のＭＡ23・24区に位置、Ⅲ層で確認した。頁岩の剥片17点が、径0.35m・深さ0.25mの範囲に集中して出土した。道具を加工する石器の素材を、まとめて置いておいたものと思われ、それらが重なって出土した。土坑状の落ち込みは確認できなかった。

出土石器には、第100～103図の接合資料及び剥片がある。剥片の総数は17点で、Ｓ104・Ｓ108・Ｓ112・Ｓ115・Ｓ120が接合資料である。Ｓ104はＳ105～Ｓ107が、Ｓ108はＳ109～Ｓ111が、Ｓ112はＳ113・Ｓ114が、Ｓ115はＳ116～Ｓ119が、Ｓ120はＳ121・Ｓ122がそれぞれ接合した。

9　溝跡

ＳＤ103（第21図、図版13）

調査区南側のＭＤ30区に位置し、Ⅲ層で確認した。南側でＳＩ22に切られる南北方向に長い溝である。規模は、現存長1.10m×現存幅は0.45m・深さmである。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。南側がＳＩ22のＰ4に切られている。

10　性格不明遺構

ＳＸ13（第40・78・99図、図版49・59）

調査区南側ＳＩ08の覆土内であるが、不整な形状の範囲に遺物がまとまって出土したので、性格不明遺構として別途扱った。ＳＩ08の中央部には、にぶい黄褐色土の広がりがあり、それを切り込むように溝状の落ち込みがある。規模は、長さ1.96m×幅0.54m・深さ0.20mである。にぶい黄褐色土を覆土として故意に埋める時に、溝状の形状として何らかの機能があったと推定される。

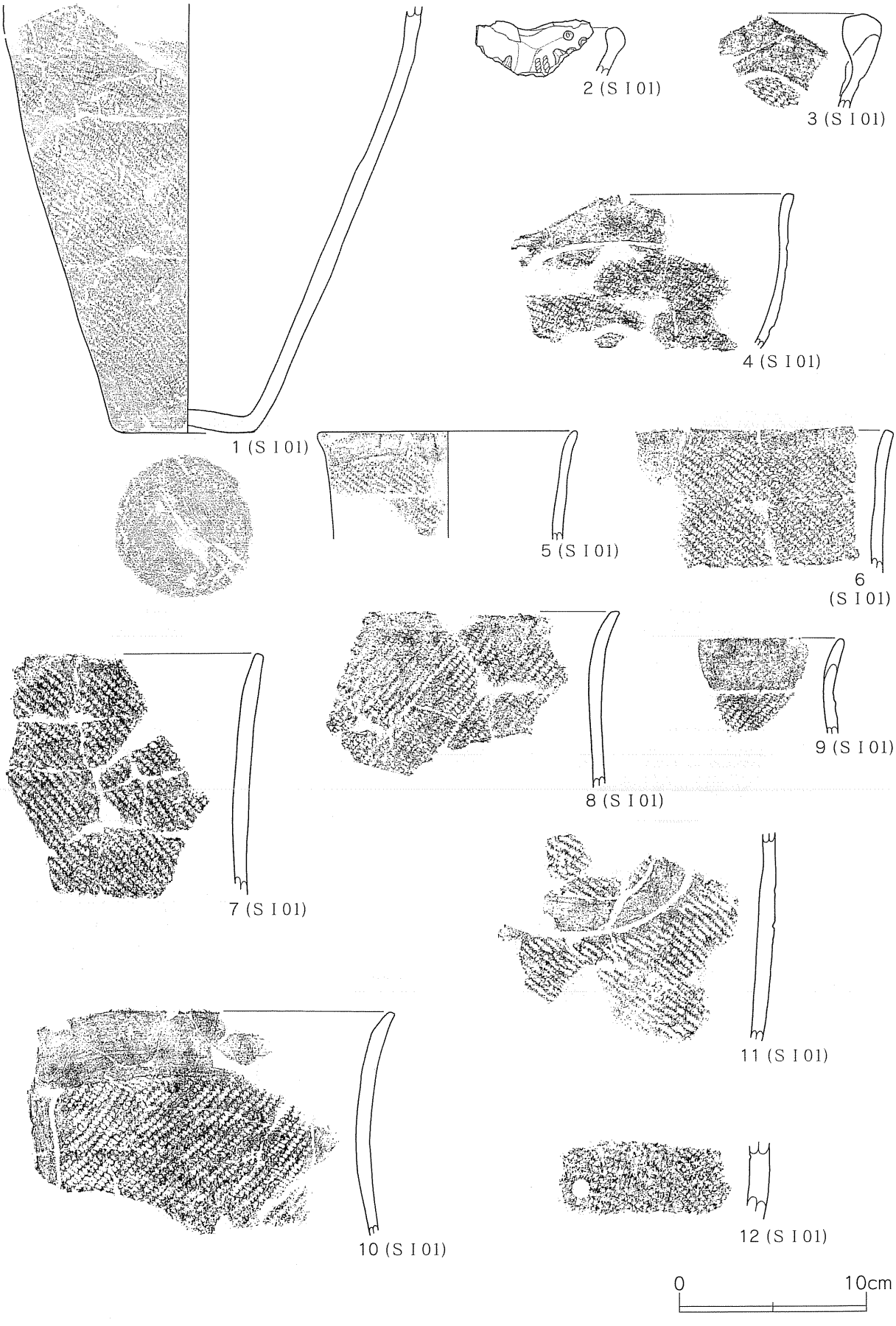
出土遺物には、第78図の土器と第99図の石器がある。土器は、深鉢（355～357・359・360）が出土した。356が口縁部、357～360が底部破片である。355は口縁部が緩く外反し、直下で緩く窪んで底部に至る。現存高18.5cm・口径23.6cmである。口縁部の無文帯と胴部のＲＬ斜縄文を沈線で区画する。無文帯を沈線が区画する文様は、口縁部も含んでだ「Ｊ」字文や、横位に展開する「Ｓ」字状文がある。所々に刺突文の集合が認められる。口縁内面には突起が付き、本来4つ存在した。356は波頂部が二重になり、直下に多きな孔を作る口縁部である。縄文と無文帯を刺突文で区画する。底部は胴部下端を除いて、縄文を施す。358の底部は突出する。359・360の底面には、直線状の痕跡が残る。

石器は、石鏃（Ｓ100）・掻器（Ｓ101）・石斧（Ｓ103）・石核（Ｓ102）が出土した。Ｓ100の石鏃は、横長剥片の正面をやや粗く調整する。Ｓ101の掻器は、刃部と正面右側縁に丁寧な調整を施す。Ｓ102の石核は、小さな剥片をいくつか剥離している。Ｓ103の石斧は、小型で全体が磨かれる。刃部は折損している。

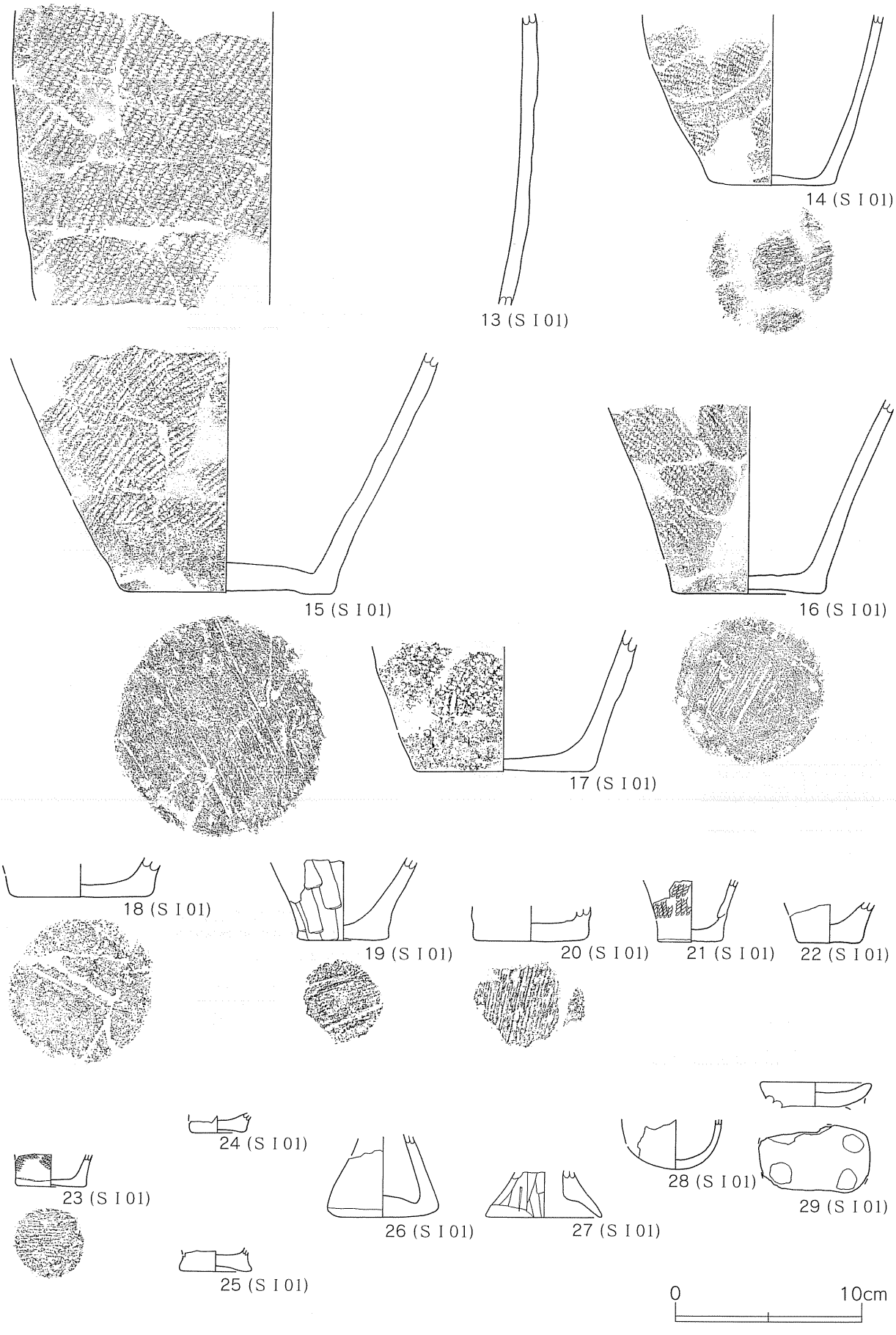
ＳＸ147（第40・78図、図版49・59）

調査区中央のＬＴ48区に位置し、Ⅳ層で確認した。平面形は不明であり、断面では底面の凹凸が著しい。土坑状に掘り込みがあったかは不明だが、緩く窪み、覆土上位から土器片が出土した。

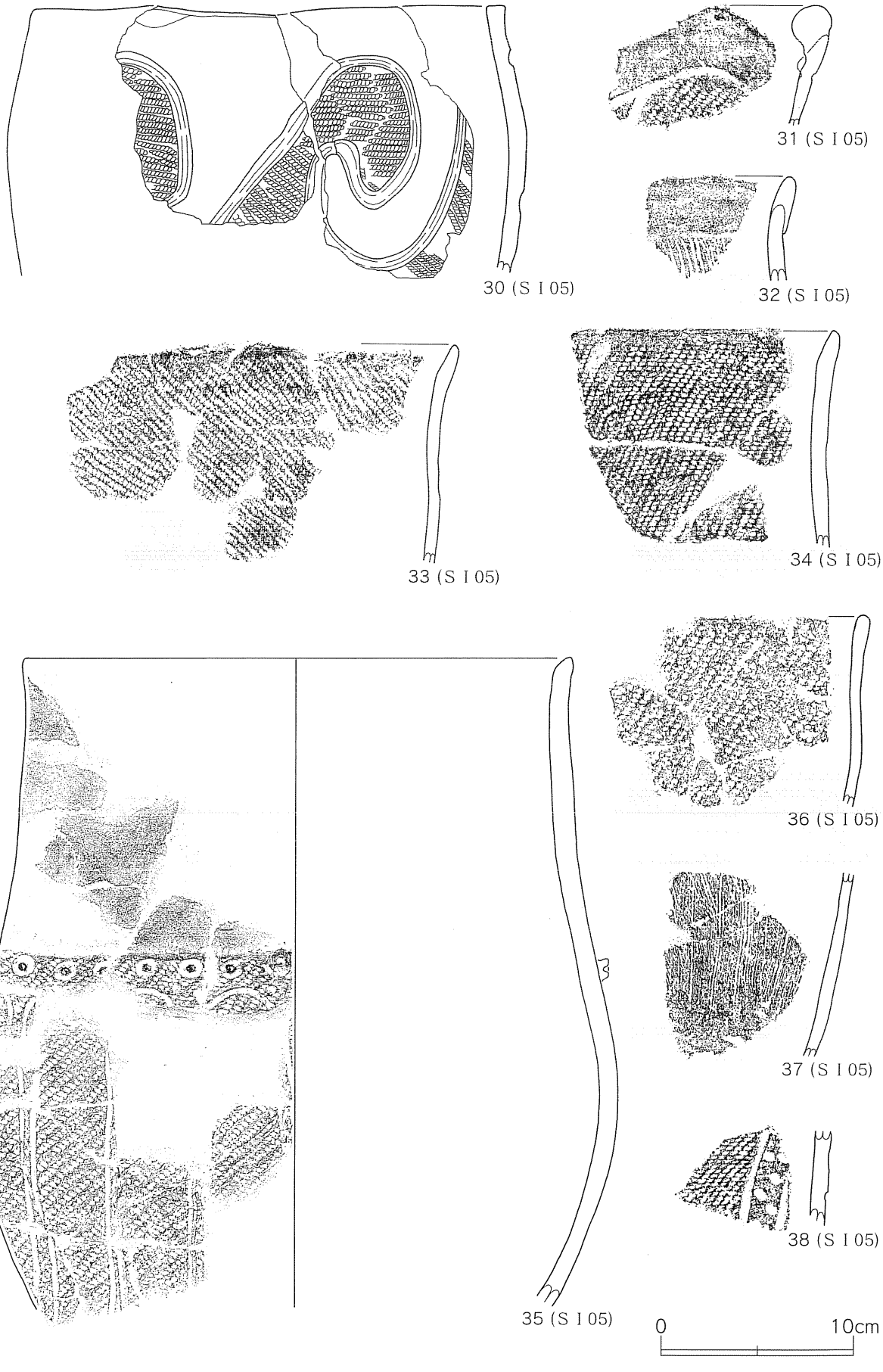
出土遺物には、第78図の土器がある。深鉢（361）が出土した。361は大波状と小波状の突起をもち、口縁部は外反する。胴部中央で大きく膨らみ底部に至る。現存高19.5cm・推定口径25.2cmで



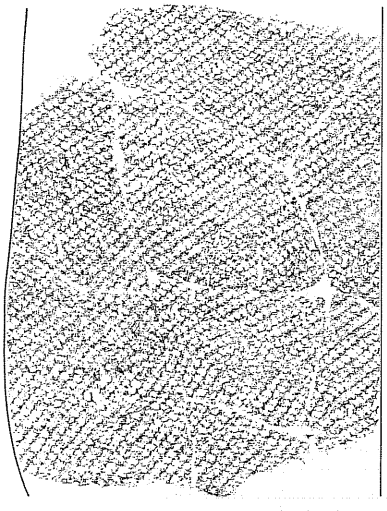
第43図　遺構内出土土器（1）

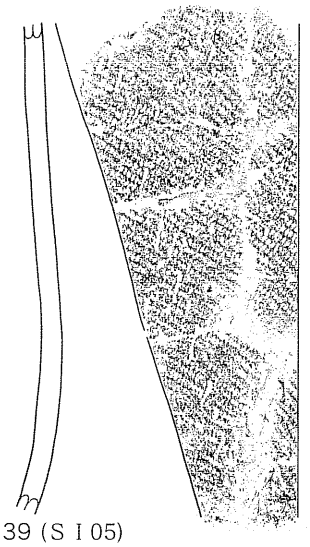


第44図　遺構内出土土器(2)

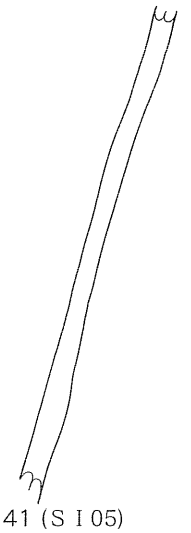


第45図　遺構内出土土器(3)

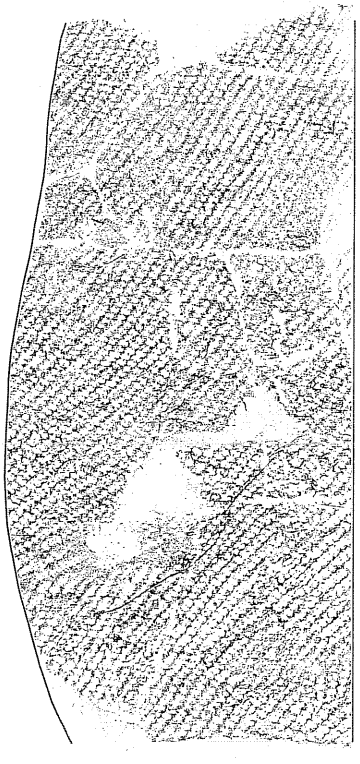




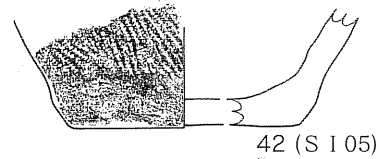
39 (S I 05)



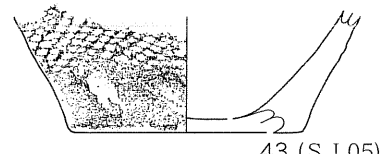
41 (S I 05)



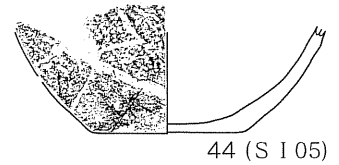
40 (S I 05)



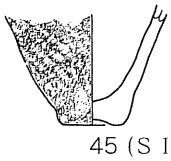
42 (S I 05)



43 (S I 05)

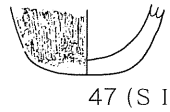


44 (S I 05)



45 (S I 05)

46 (S I 05)

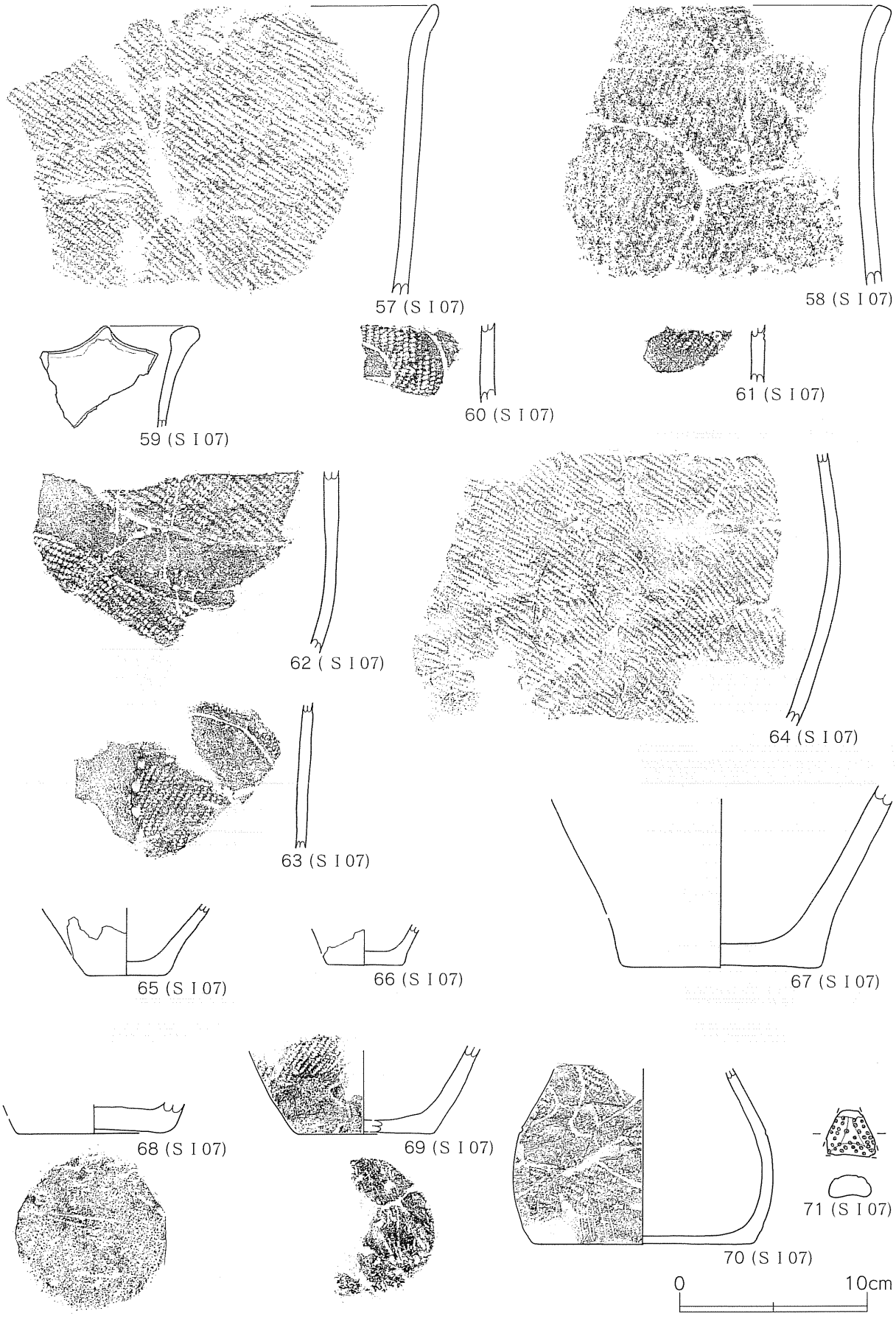


47 (S I 05)

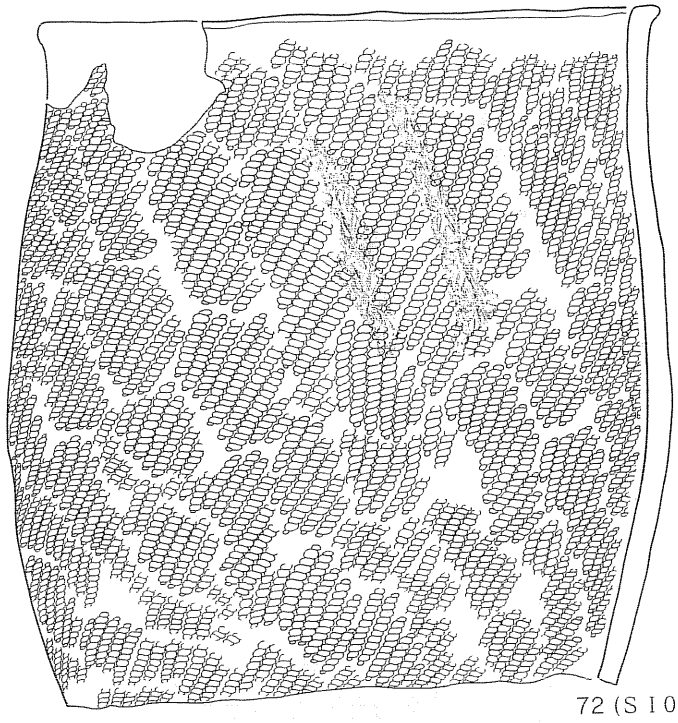
0　10cm

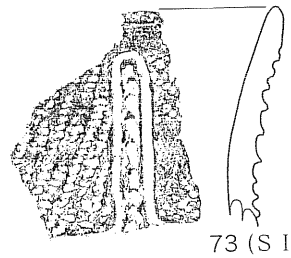
第46図　遺構内出土土器(4)

第47図　遺構内出土土器(5)

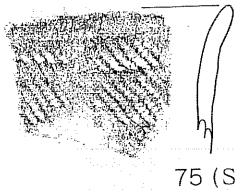


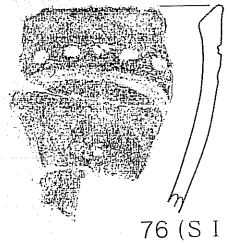
第48図　遺構内出土土器(6)

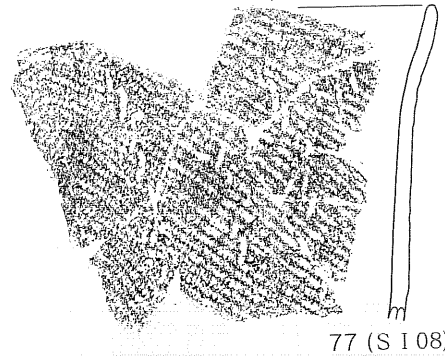

72 (S I 08)

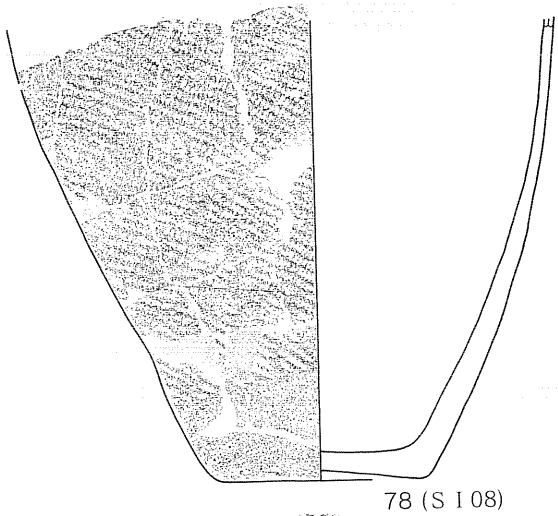

73 (S I 08)

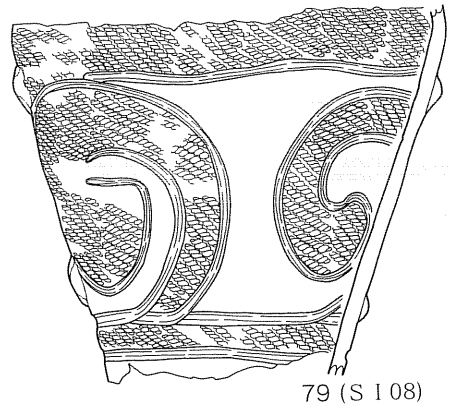
74 (S I 08)

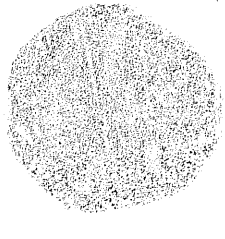

75 (S I 08)

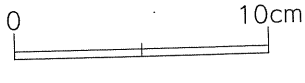

76 (S I 08)


77 (S I 08)

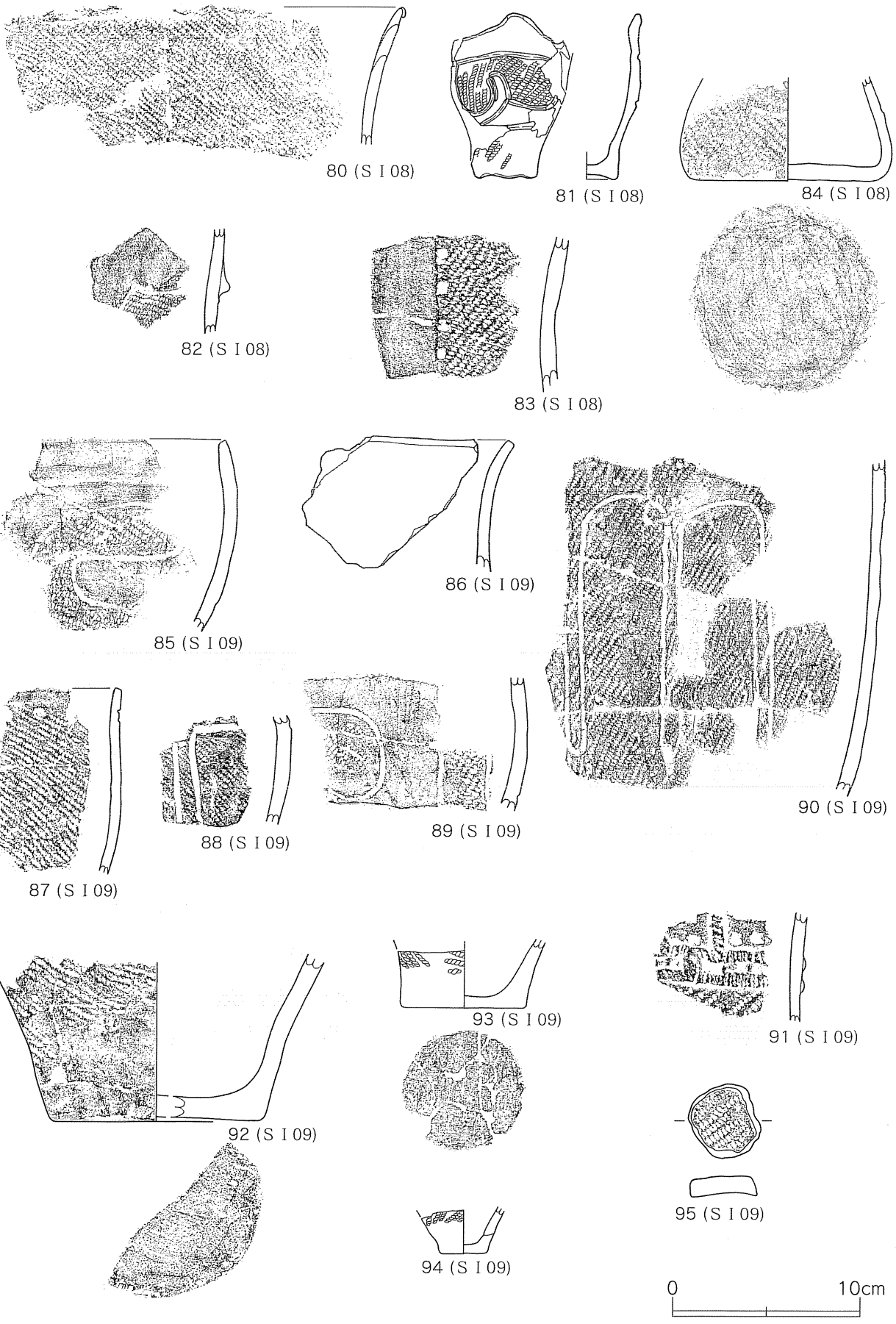

78 (S I 08)


79 (S I 08)



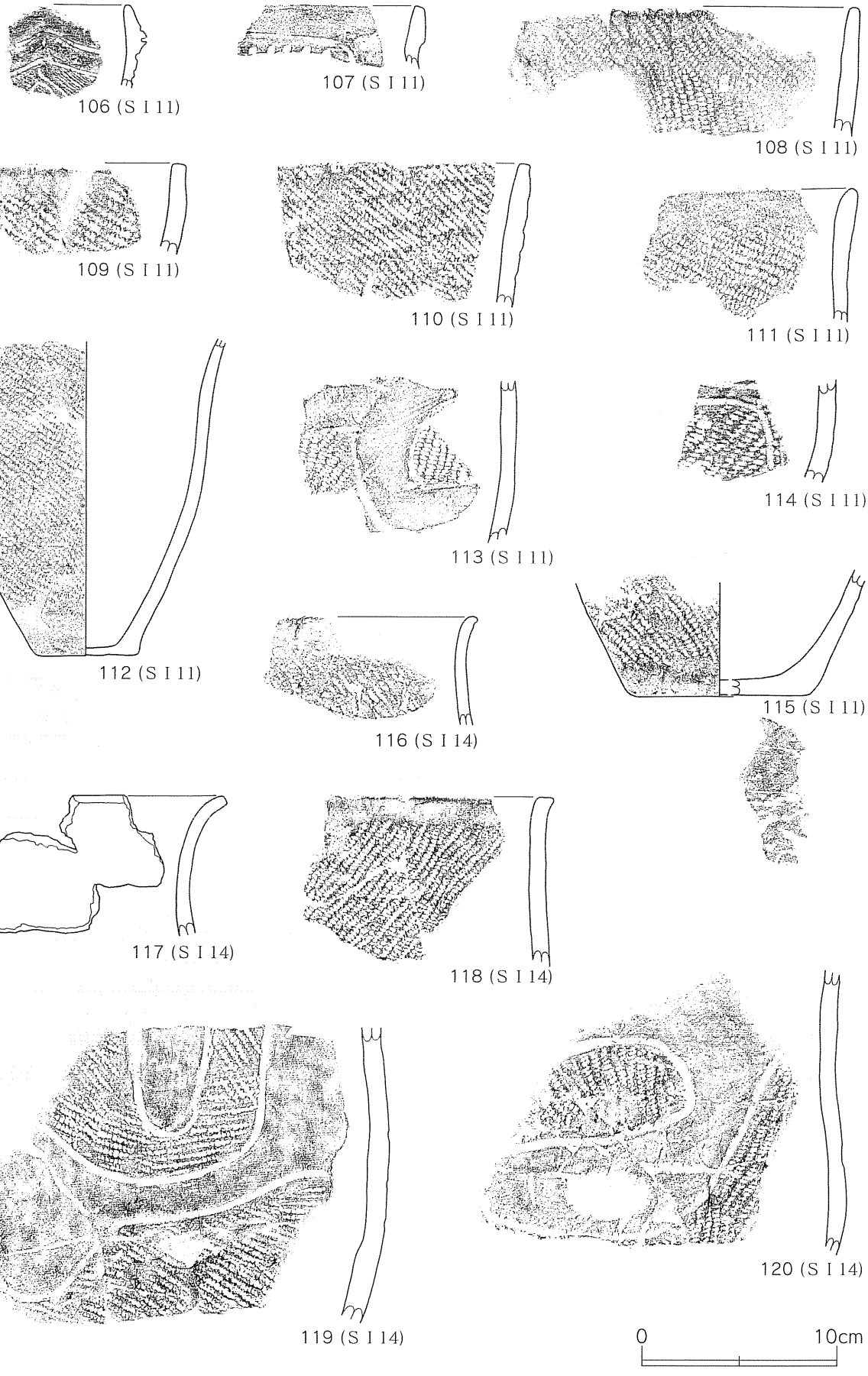


第49図　遺構内出土土器(7)

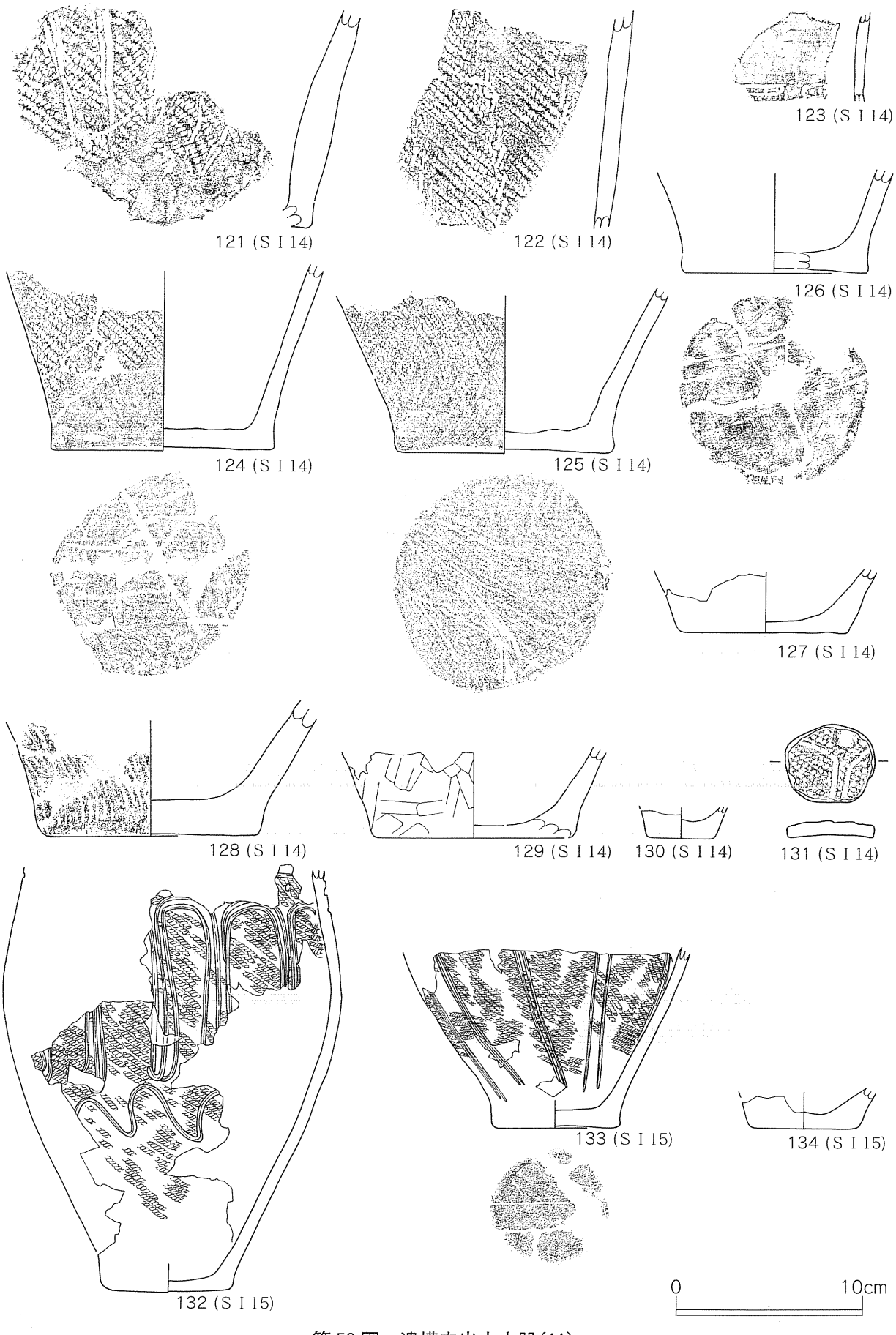


第50図　遺構内出土土器(8)

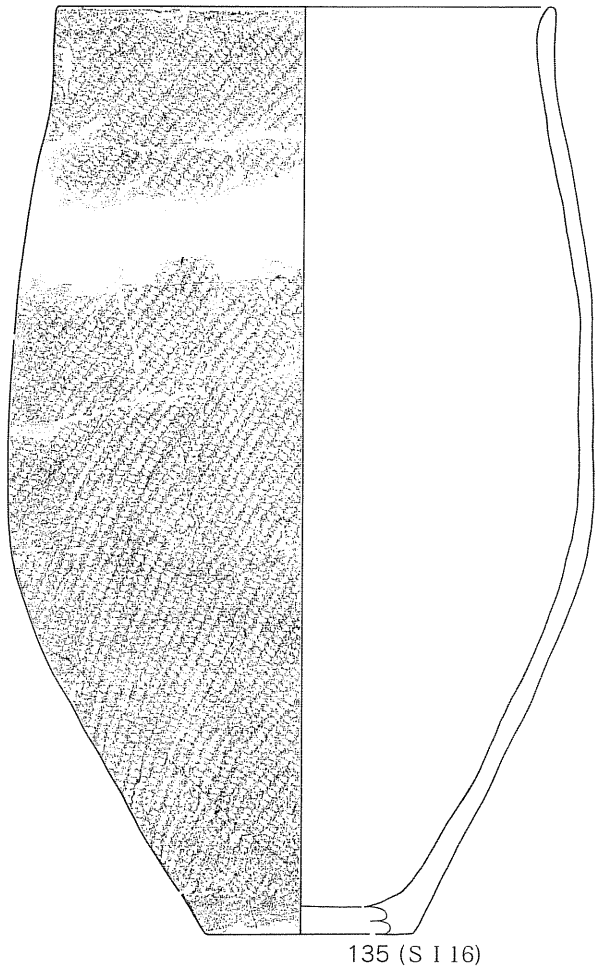
第51図　遺構内出土土器(9)

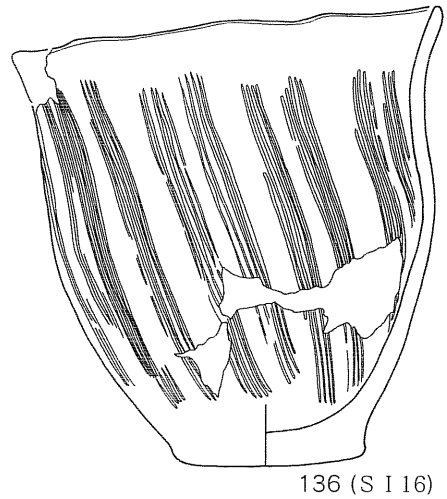


第52図　遺構内出土土器(10)



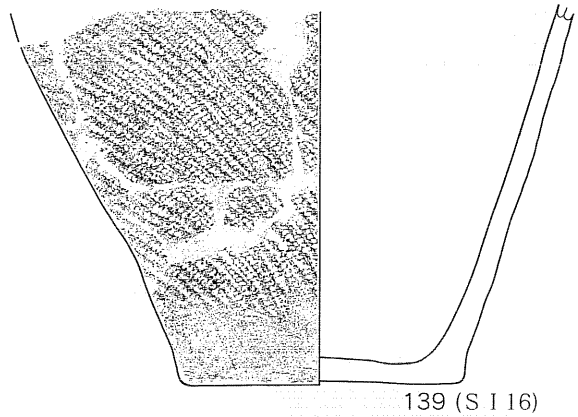
第53図　遺構内出土土器(11)

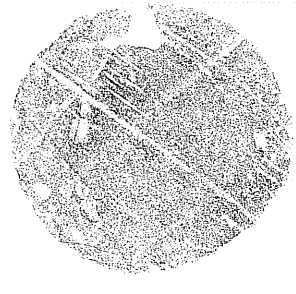

135 (S I 16)

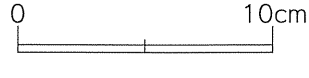

136 (S I 16)

137 (S I 16)

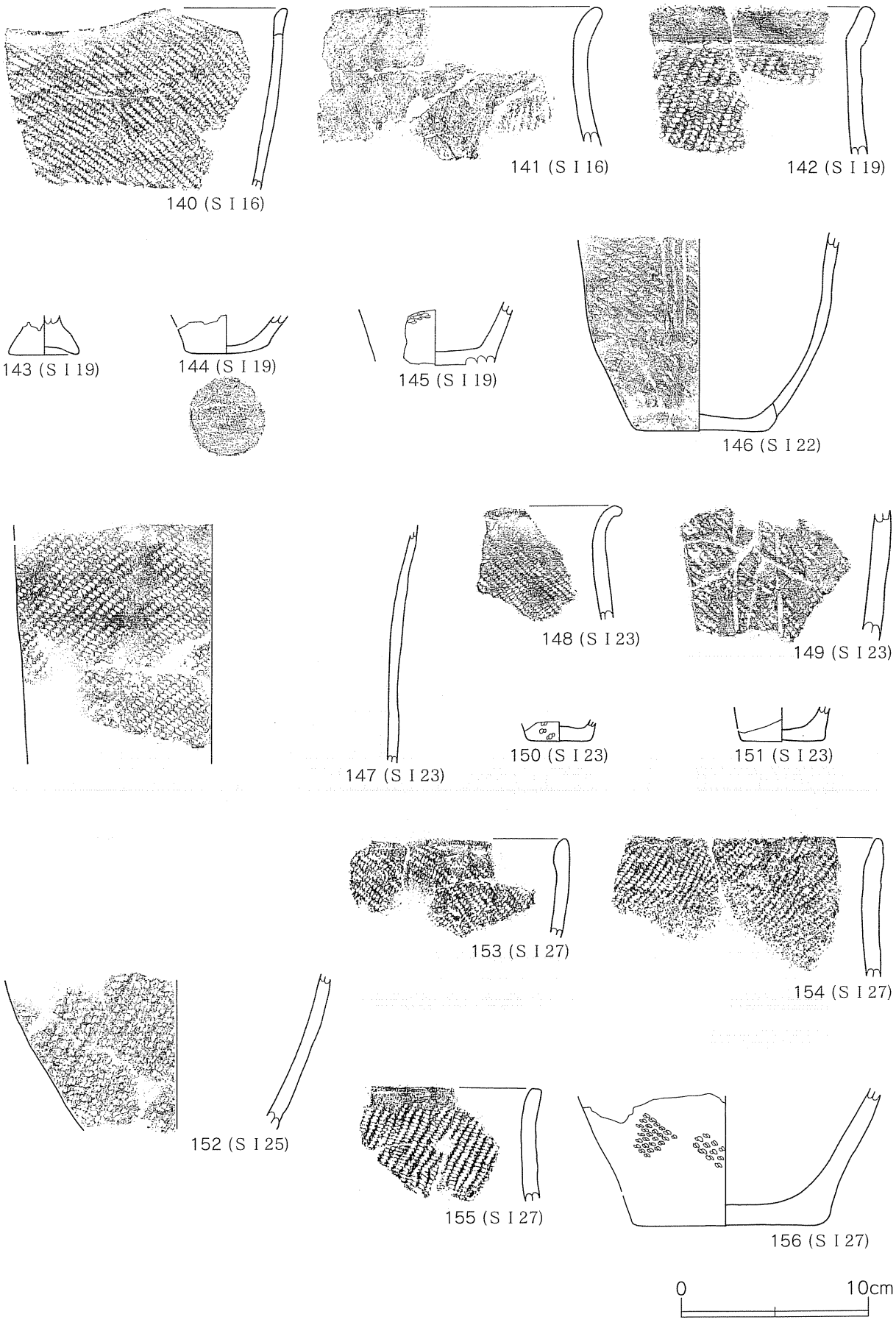
138 (S I 16)


139 (S I 16)

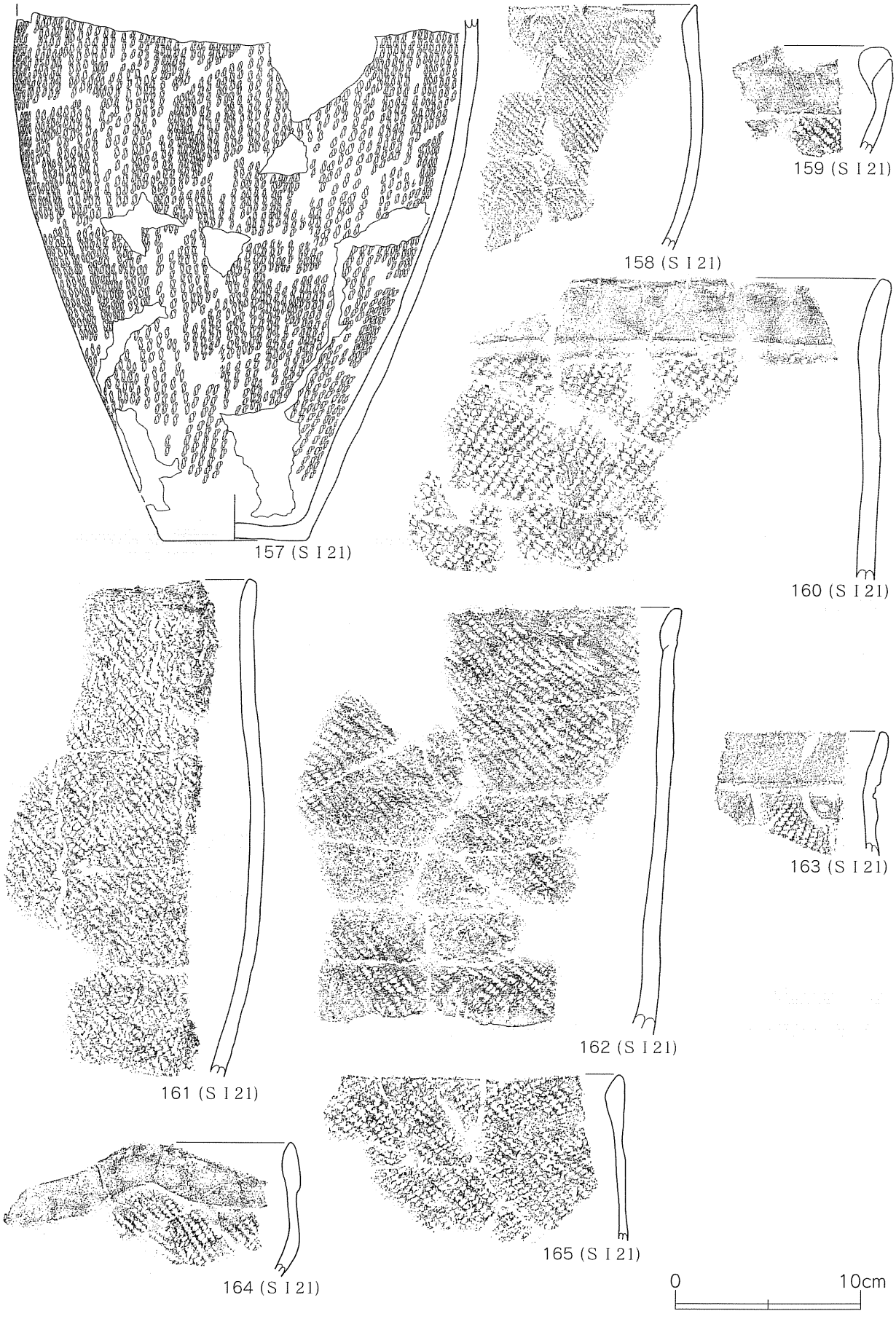




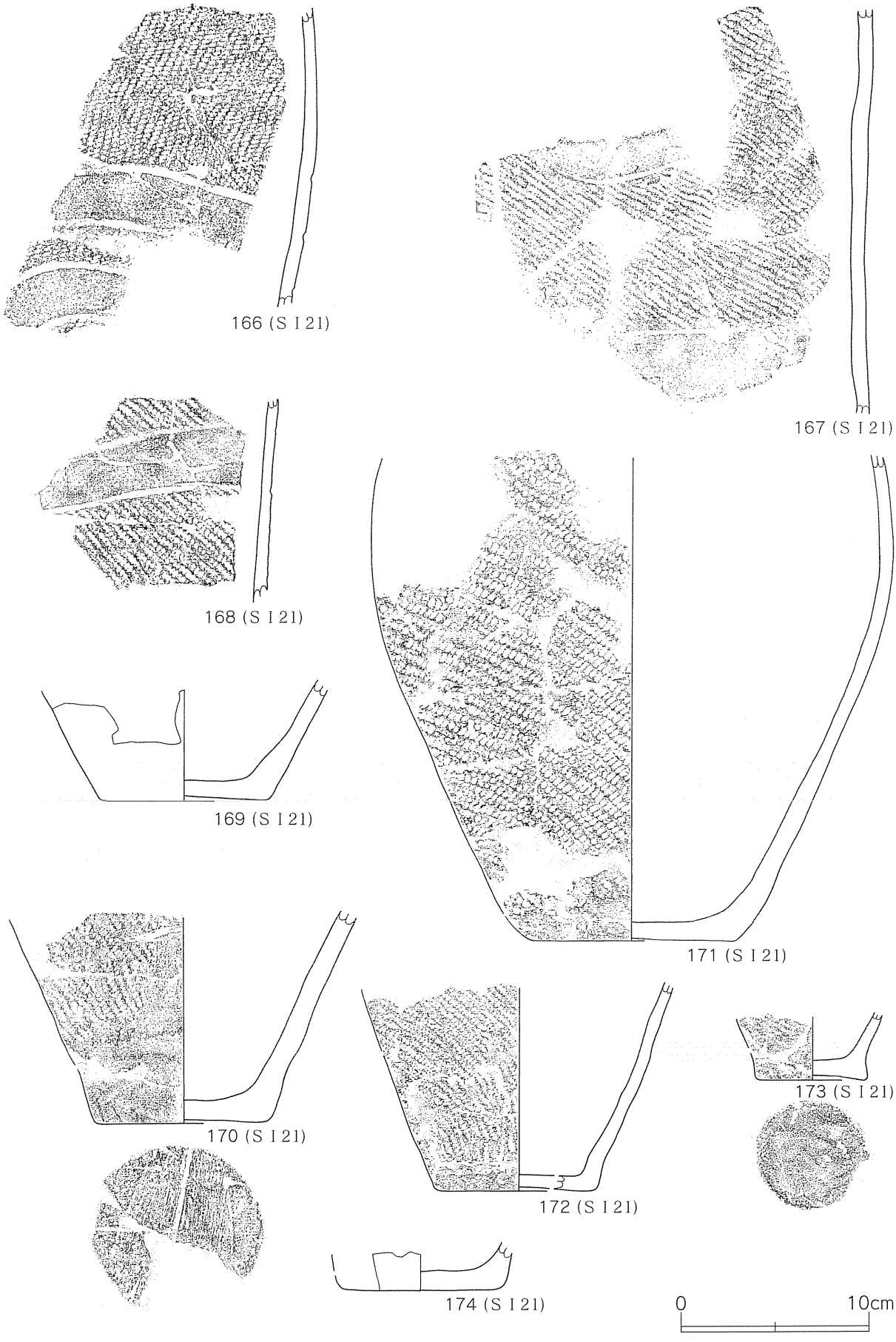
第54図　遺構内出土土器(12)



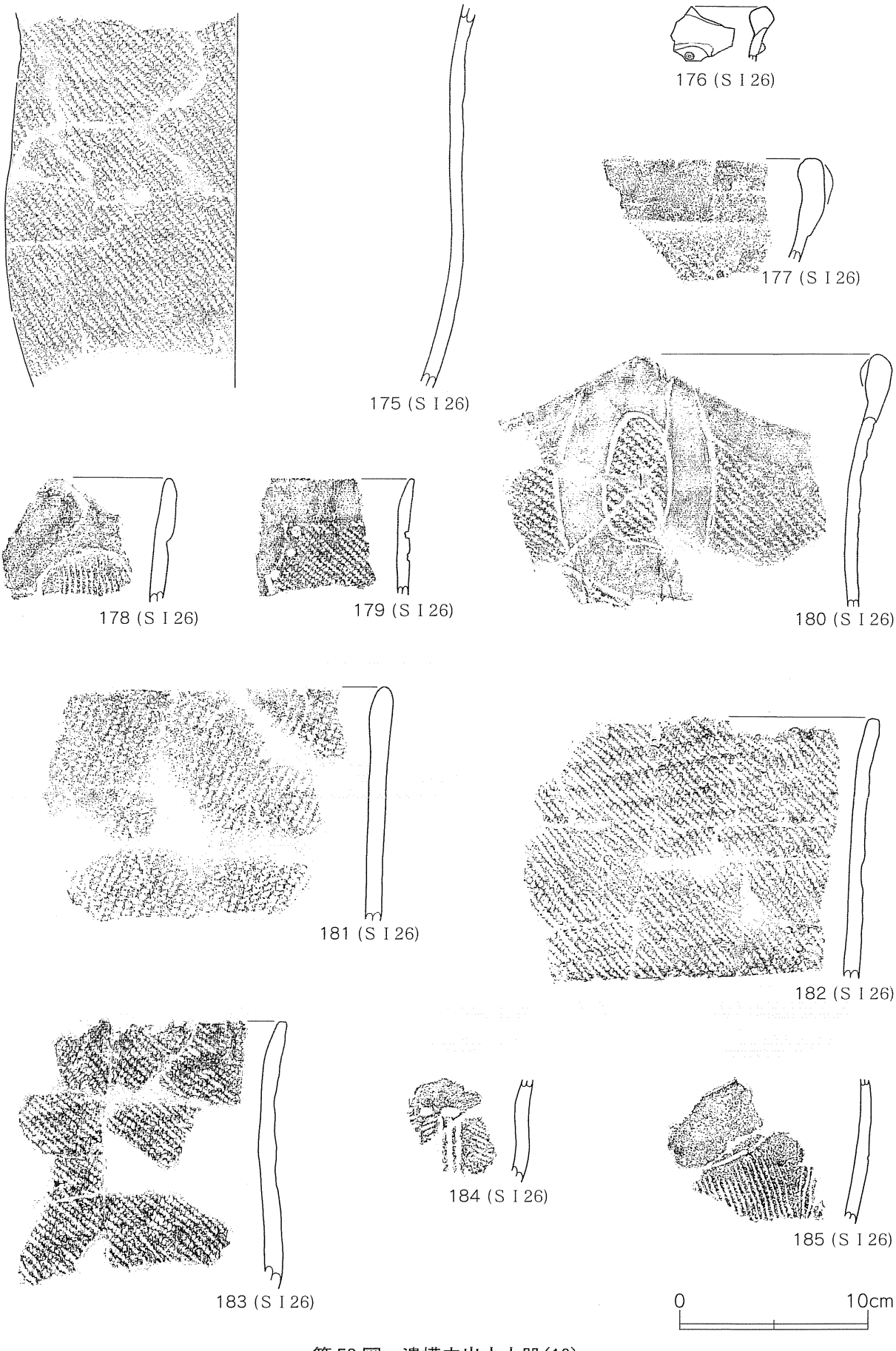
第55図　遺構内出土土器(13)



第56図　遺構内出土土器(14)



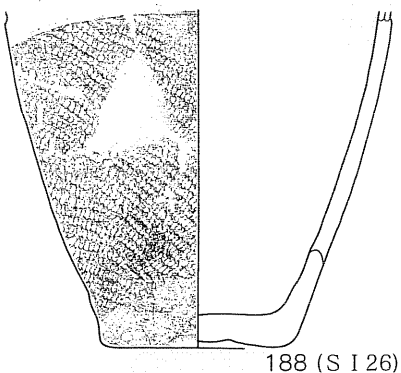
第57図　遺構内出土土器(15)

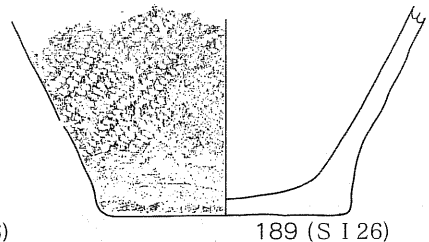


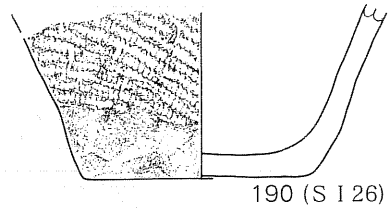
第58図　遺構内出土土器(16)

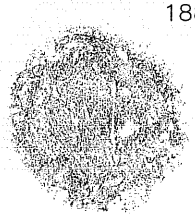
186 (S I 26)

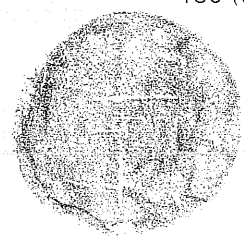
187 (S I 26)

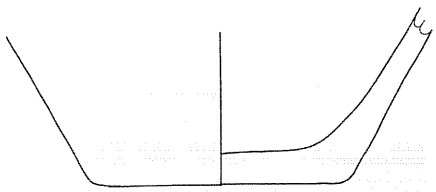

188 (S I 26)

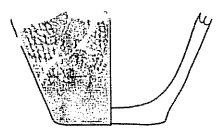

189 (S I 26)

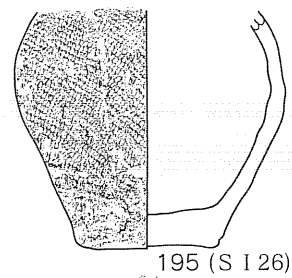

190 (S I 26)

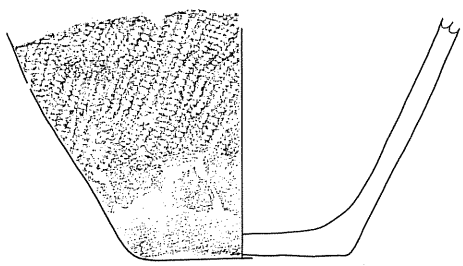


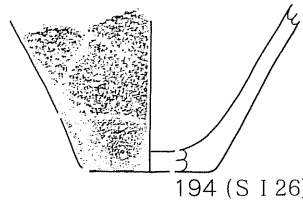


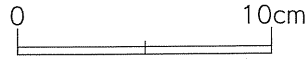

191 (S I 26)


193 (S I 26)

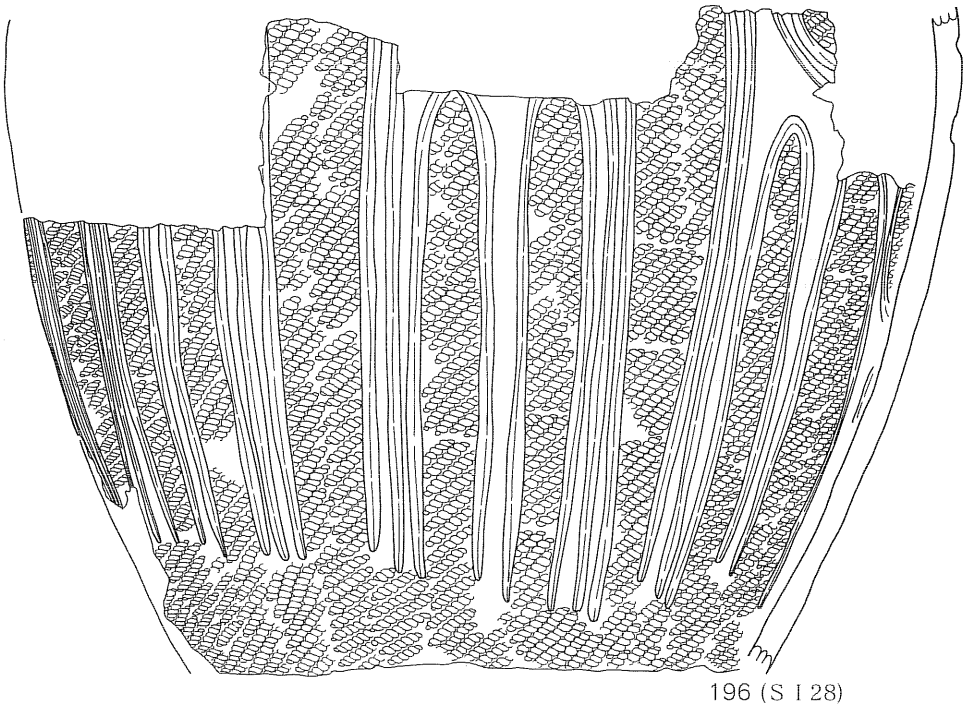

195 (S I 26)


192 (S I 26)

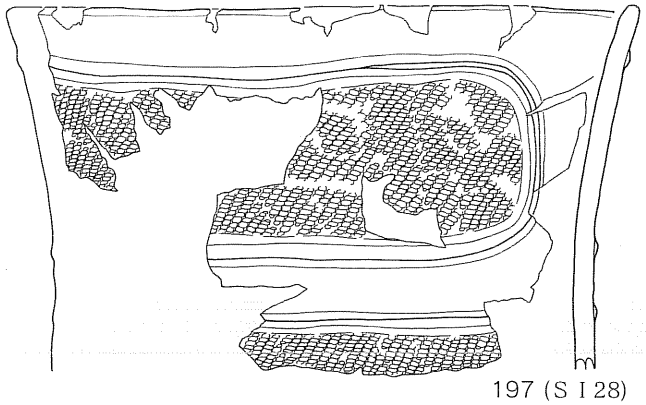

194 (S I 26)



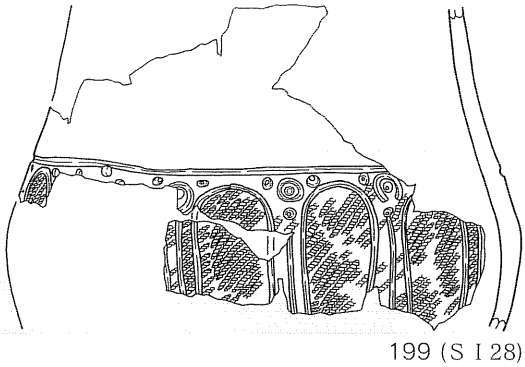
第59図　遺構内出土土器(17)



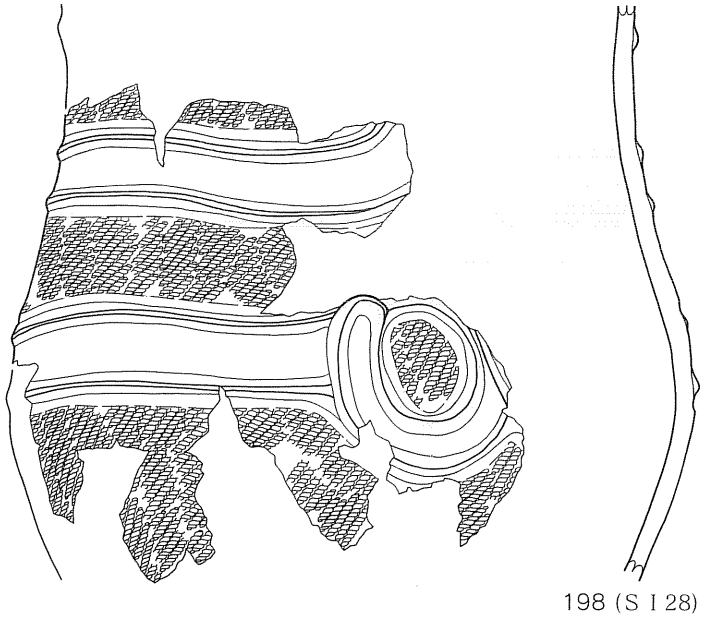
196 (S I 28)



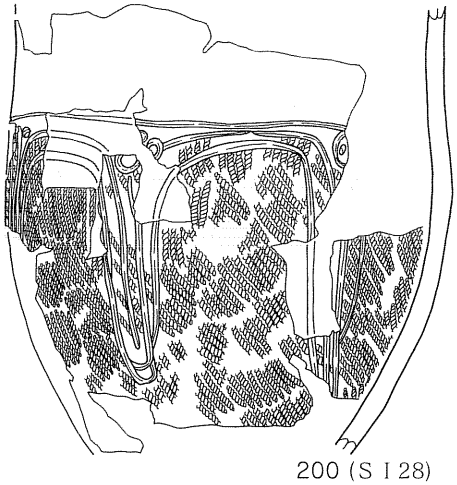
197 (S I 28)



199 (S I 28)



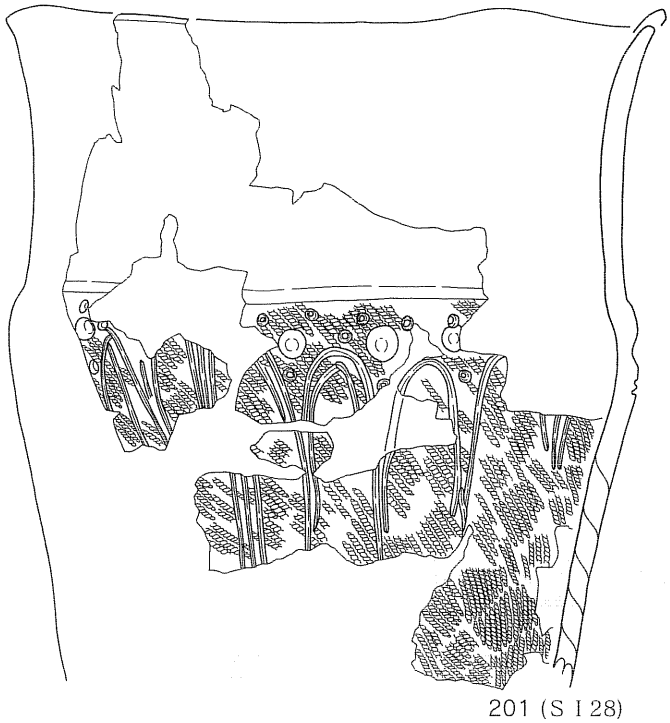
198 (S I 28)

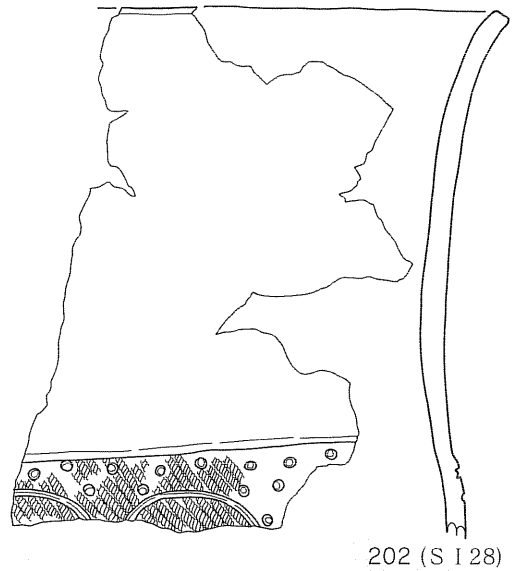


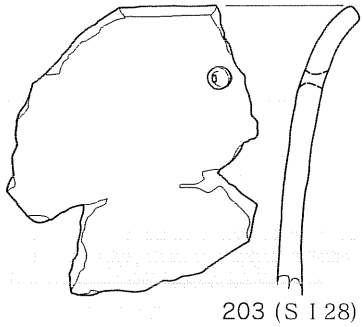
200 (S I 28)

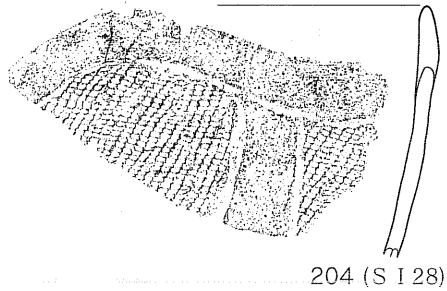
0　10cm

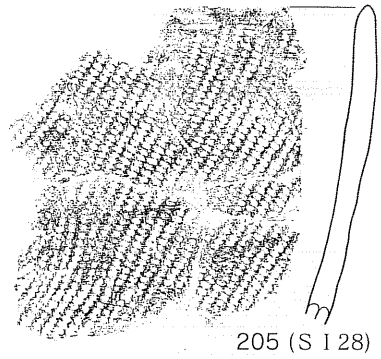
第60図　遺構内出土土器(18)

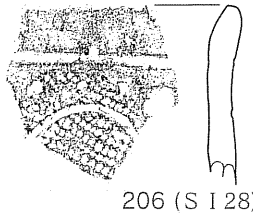

201 (S I 28)

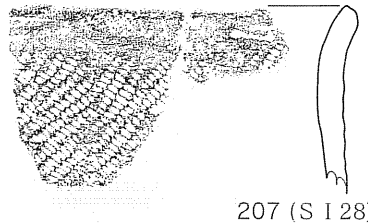

202 (S I 28)

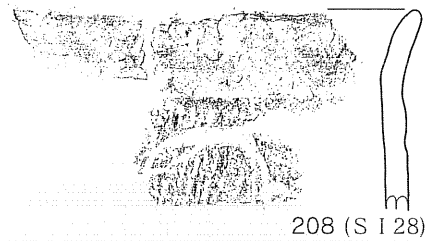

203 (S I 28)

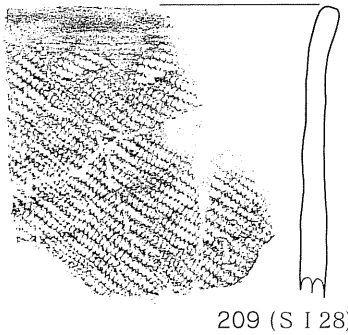

204 (S I 28)

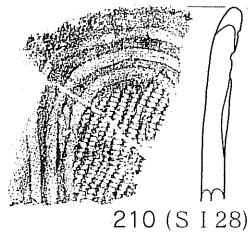

205 (S I 28)

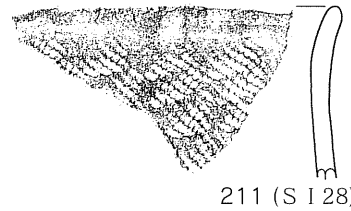

206 (S I 28)


207 (S I 28)


208 (S I 28)

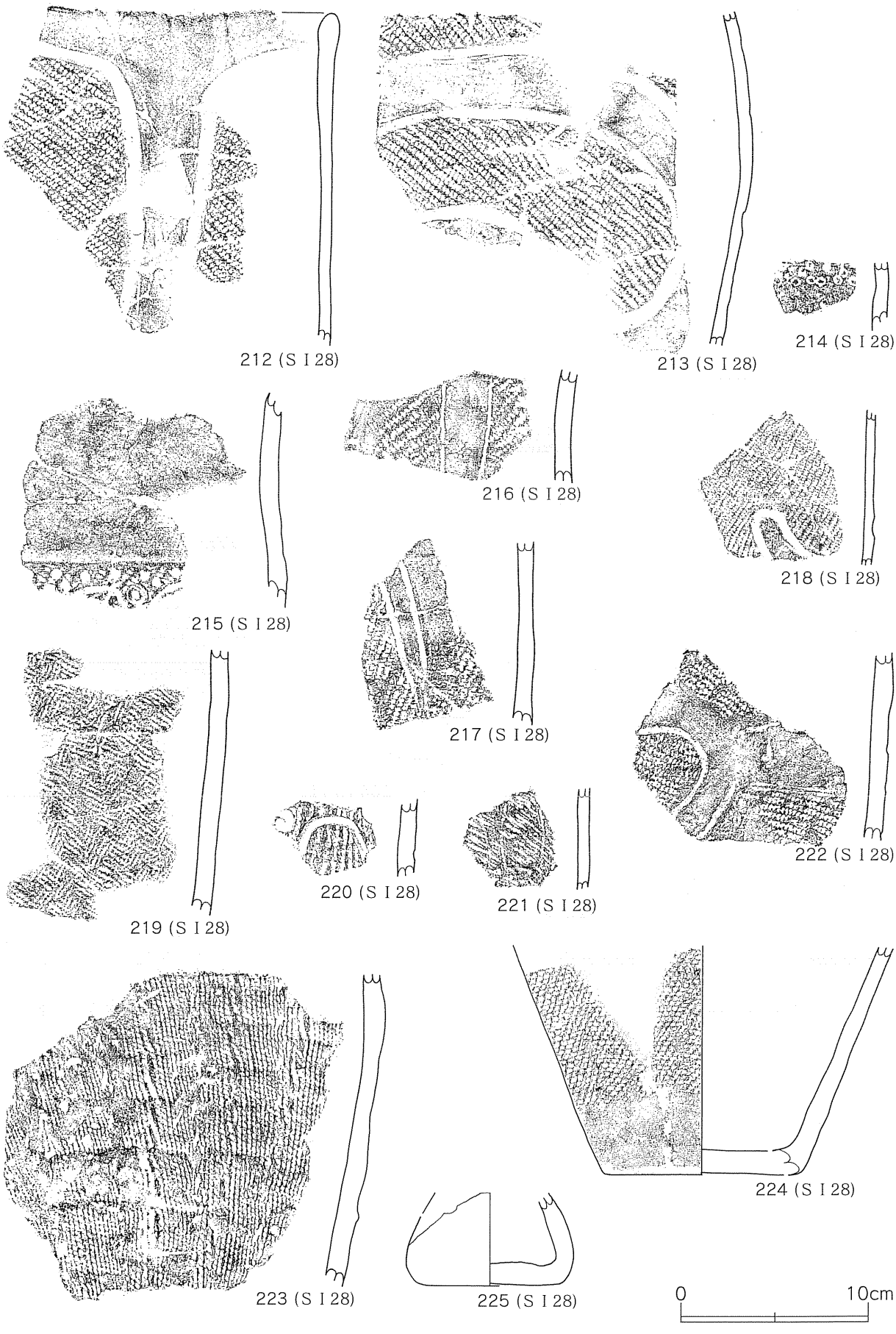

209 (S I 28)


210 (S I 28)

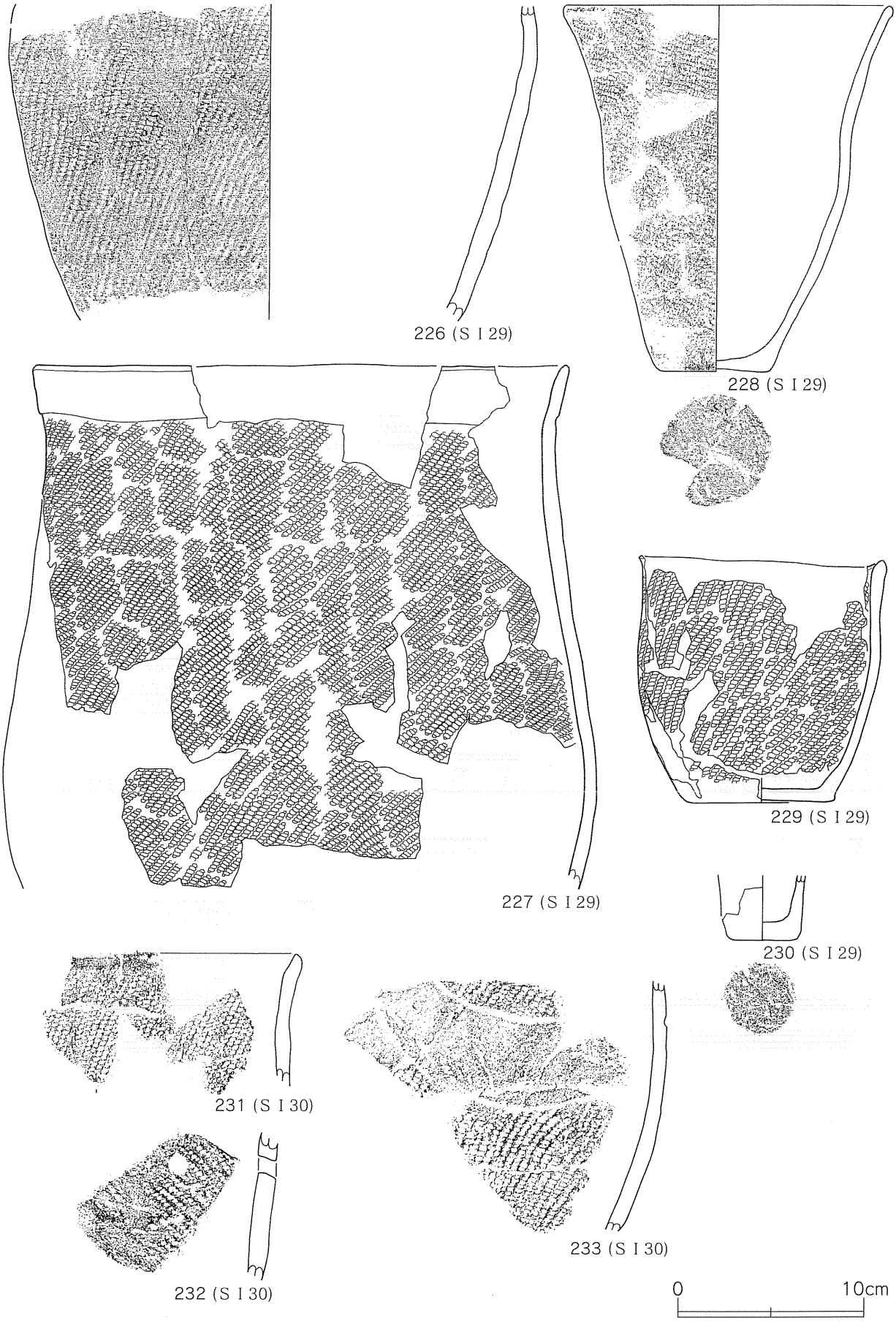

211 (S I 28)

0　10cm

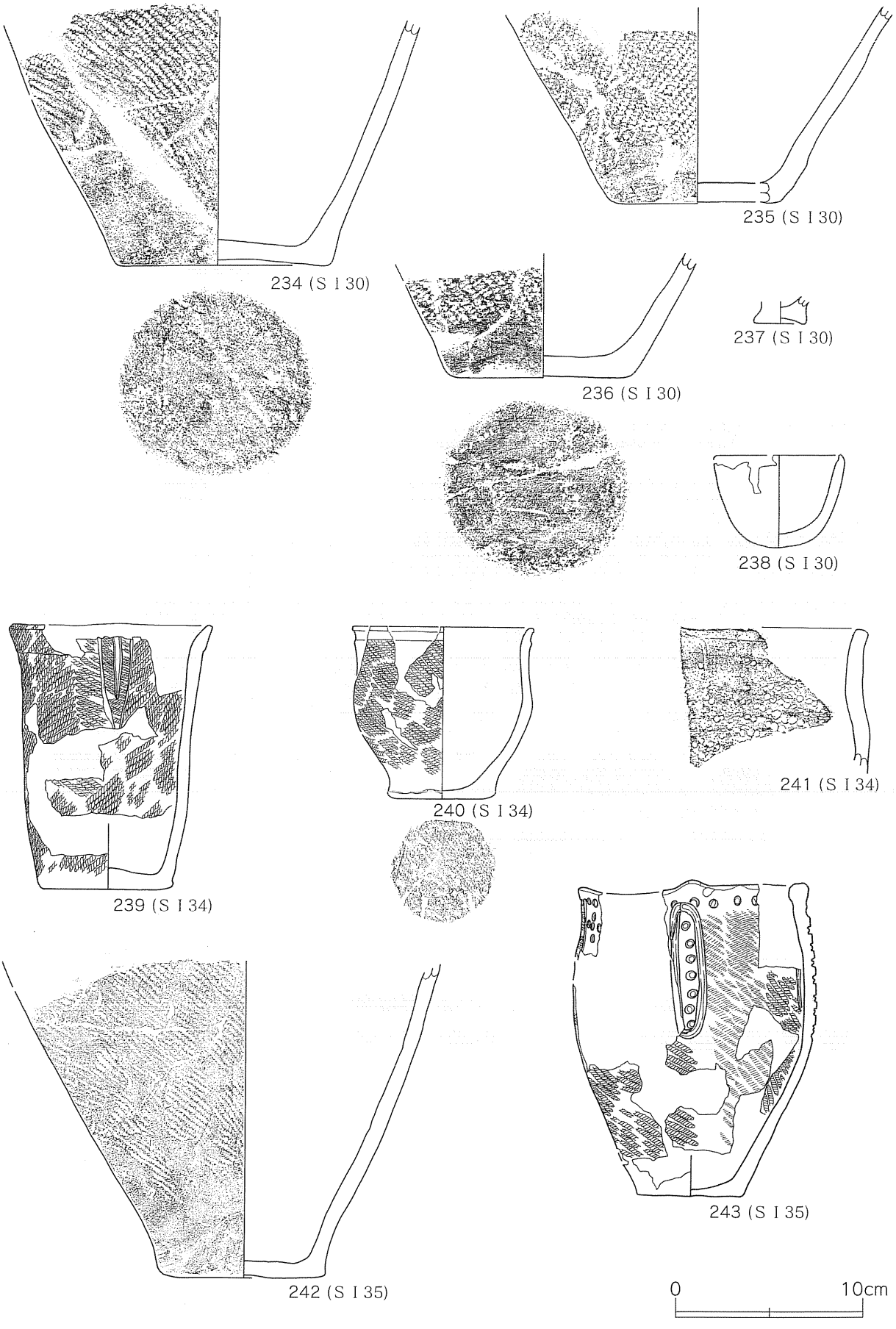
第61図　遺構内出土土器(19)



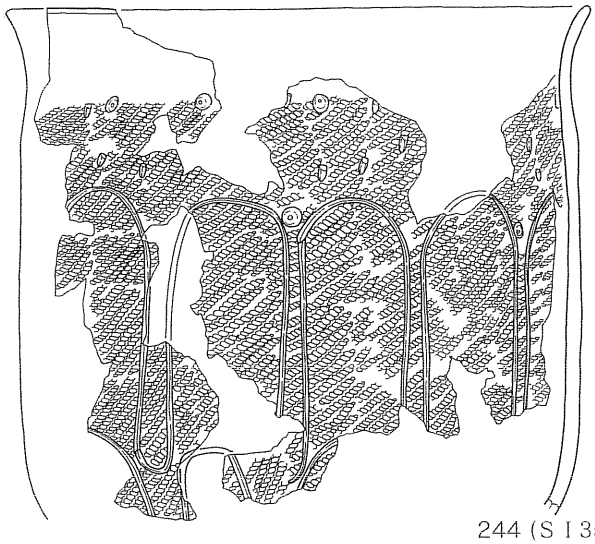
第62図　遺構内出土土器(20)

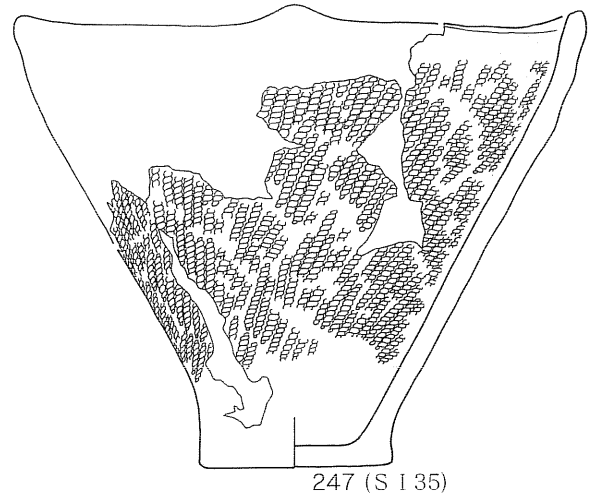


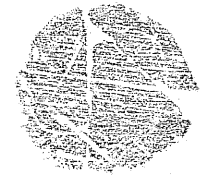
第63図　遺構内出土土器(21)

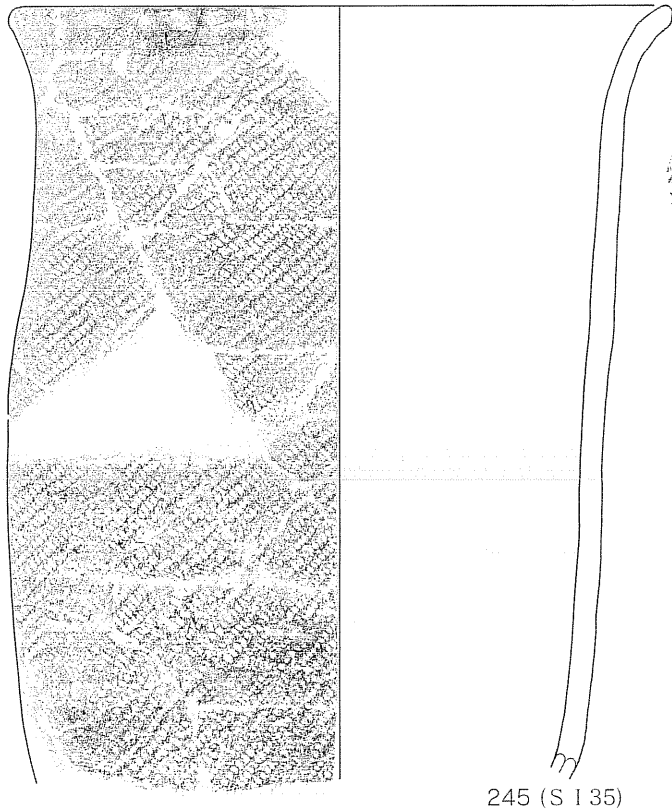


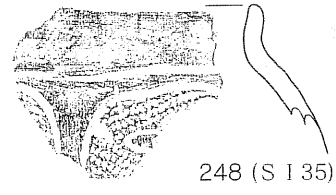
第64図　遺構内出土土器(22)

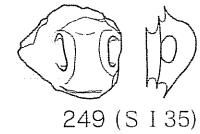

244 (S I 35)


247 (S I 35)

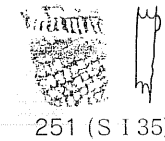



245 (S I 35)

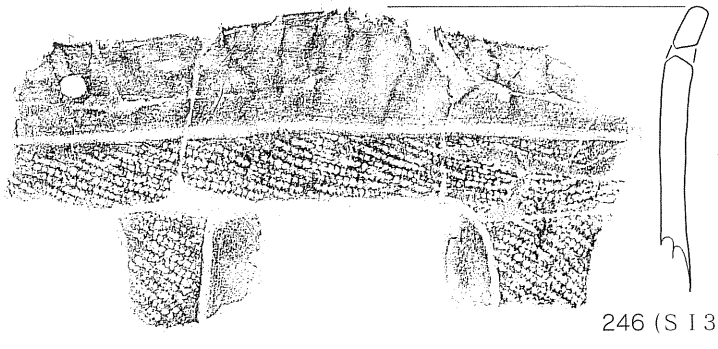

248 (S I 35)


249 (S I 35)

250 (S I 35)

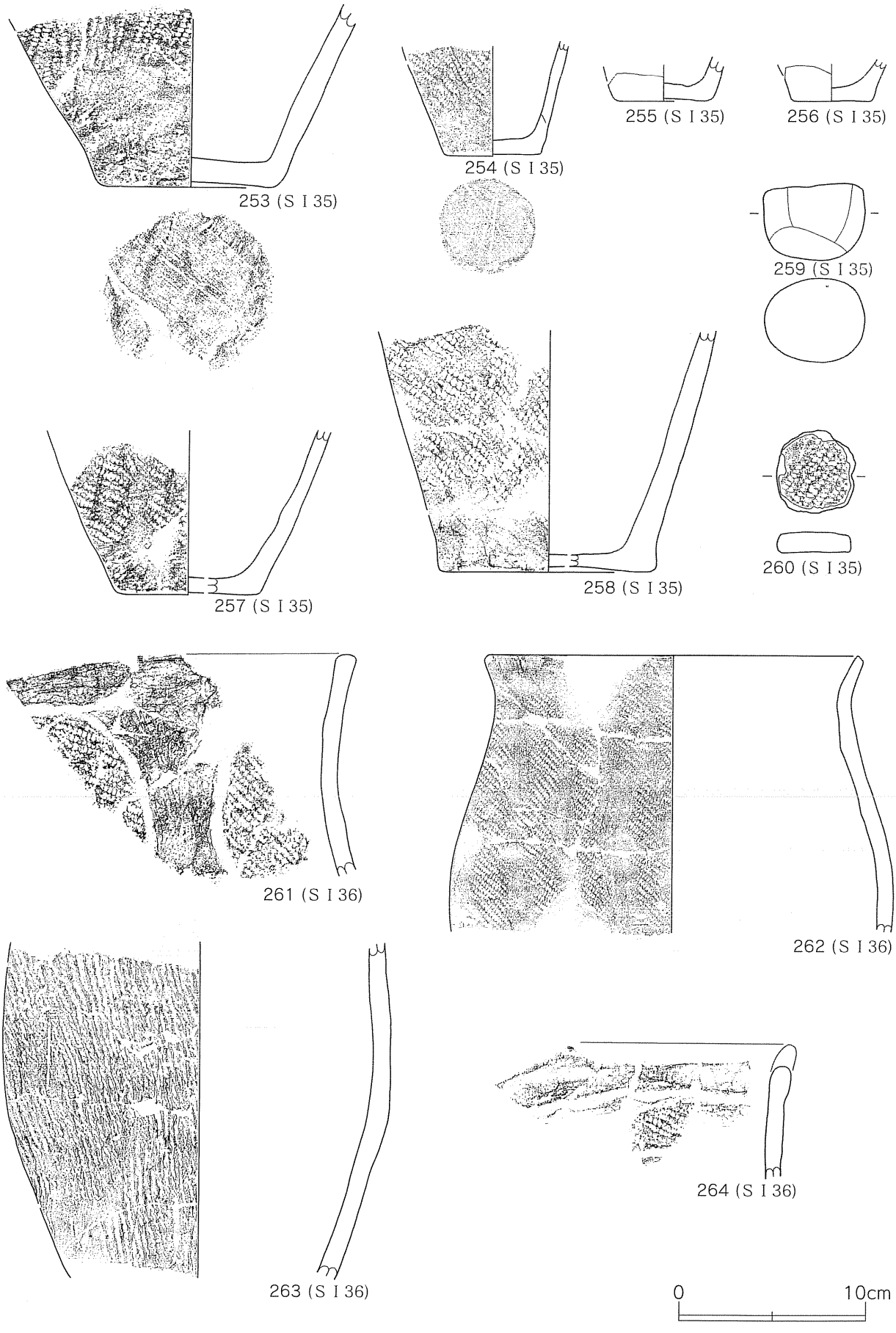

251 (S I 35)

252 (S I 35)

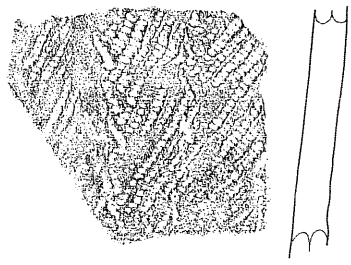

246 (S I 35)

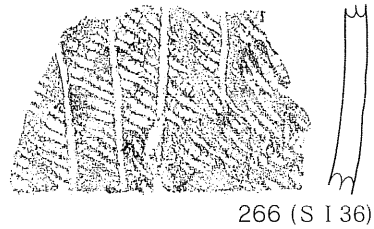
0　10cm

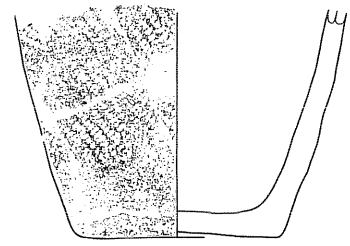
第65図　遺構内出土土器(23)

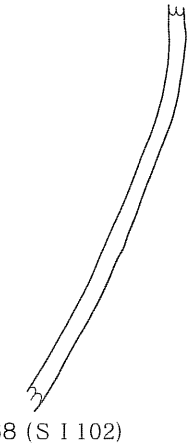


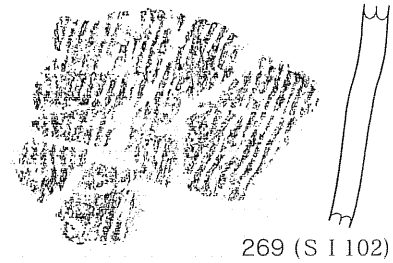
第66図　遺構内出土土器(24)

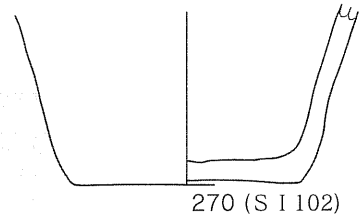

265 (S I 36)

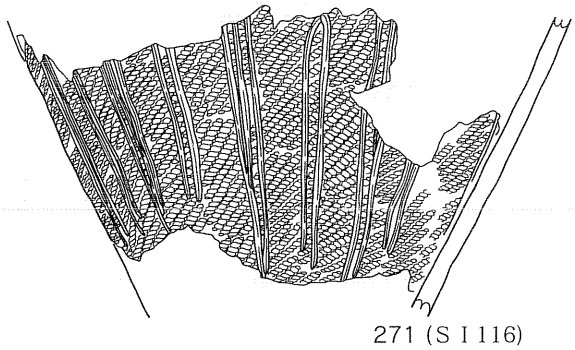

266 (S I 36)

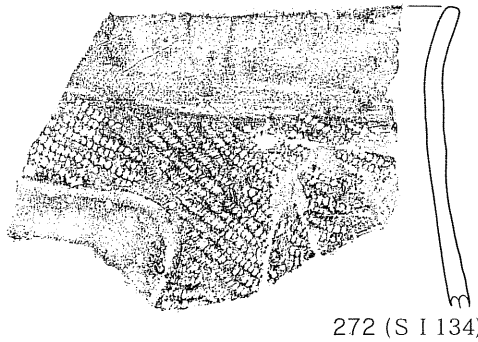

267 (S I 36)

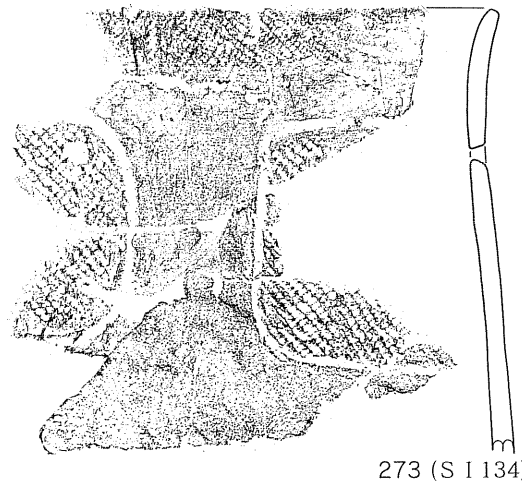

268 (S I 102)

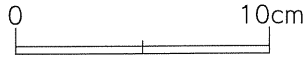

269 (S I 102)


270 (S I 102)


271 (S I 116)


272 (S I 134)

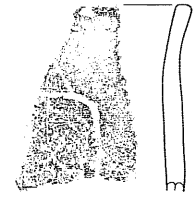

273 (S I 134)

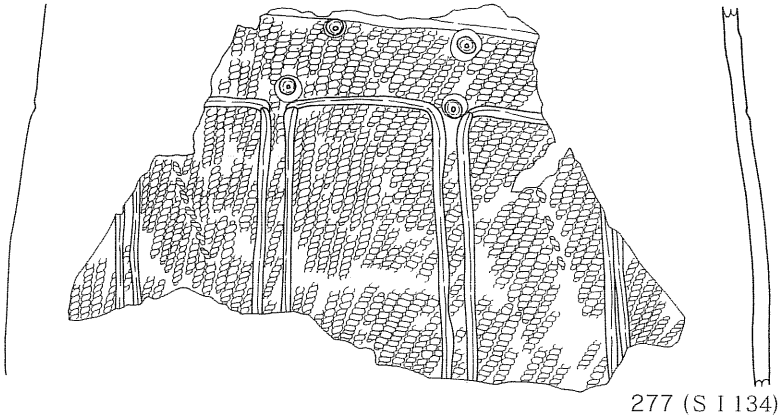


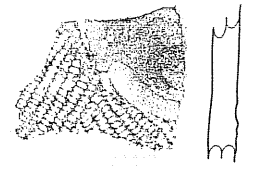
第67図　遺構内出土土器(25)

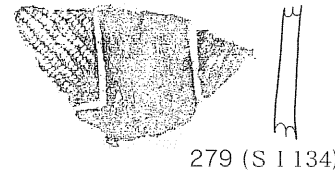
274 (S I 134)

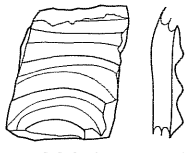
275 (S I 134)

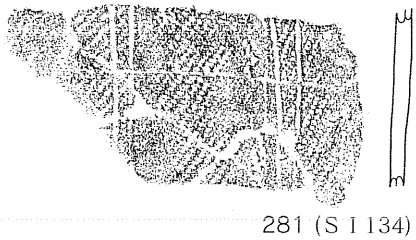

276 (S I 134)

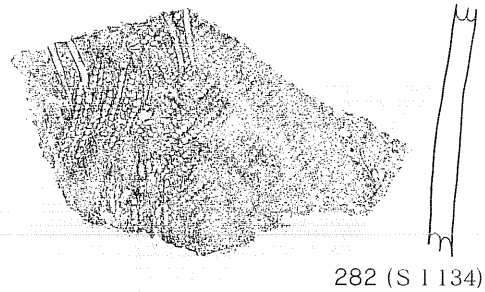

277 (S I 134)

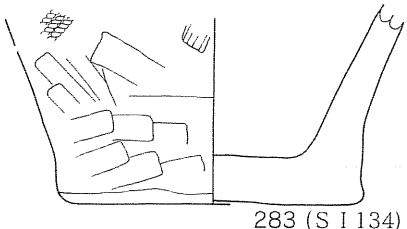

278 (S I 134)

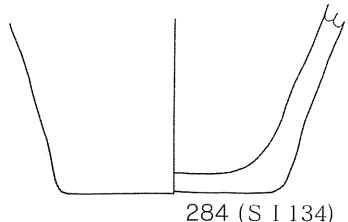

279 (S I 134)

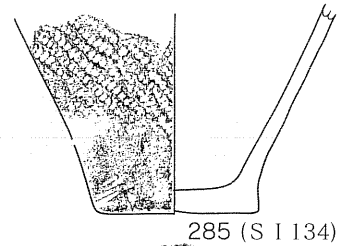

280 (S I 134)


281 (S I 134)


282 (S I 134)

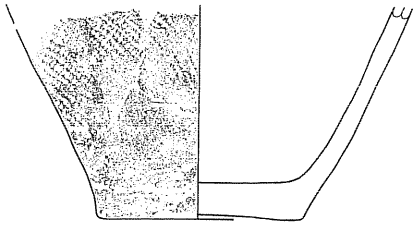

283 (S I 134)

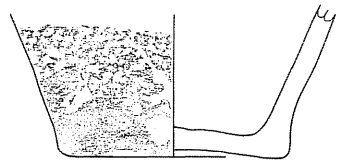

284 (S I 134)

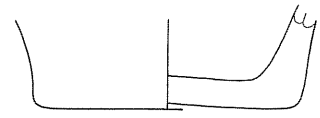

285 (S I 134)

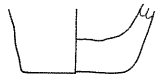
0　10cm

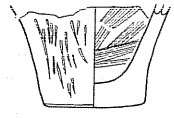
第68図　遺構内出土土器(26)

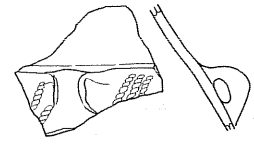

286 (S I 134)

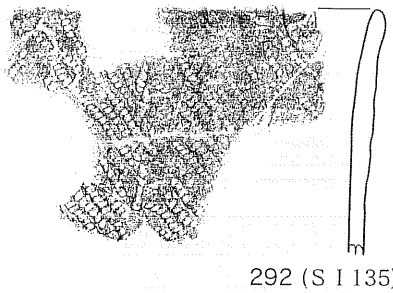

287 (S I 134)

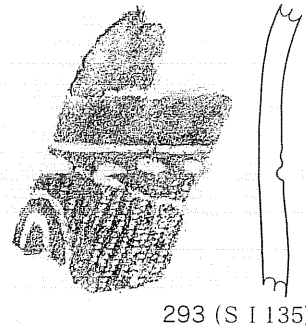

288 (S I 134)

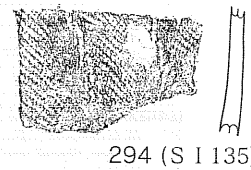

289 (S I 134)

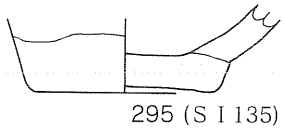

290 (S I 134)

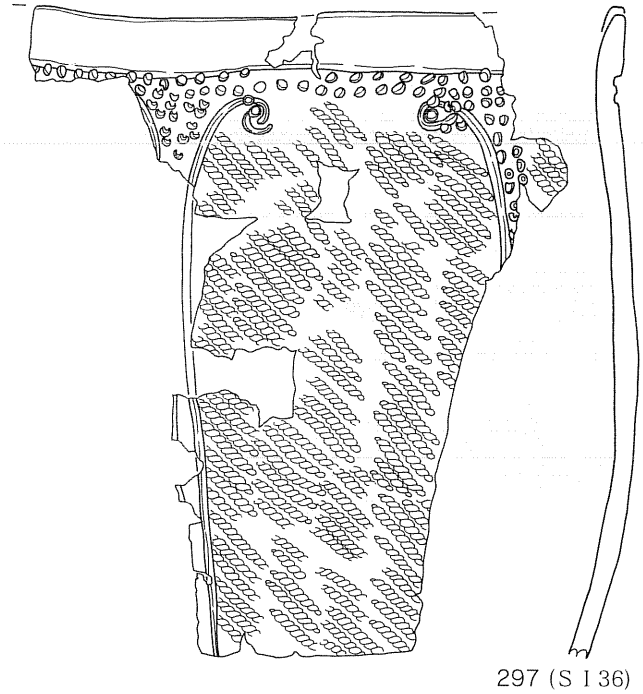

291 (S I 134)

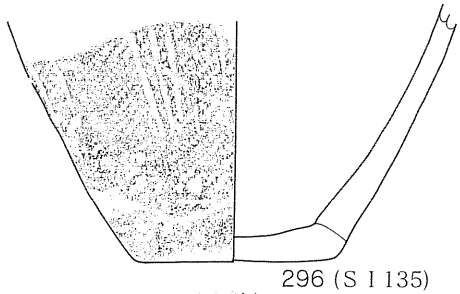

292 (S I 135)

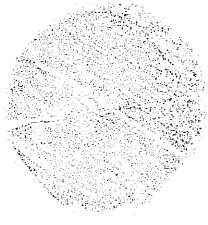

293 (S I 135)

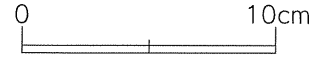

294 (S I 135)


295 (S I 135)

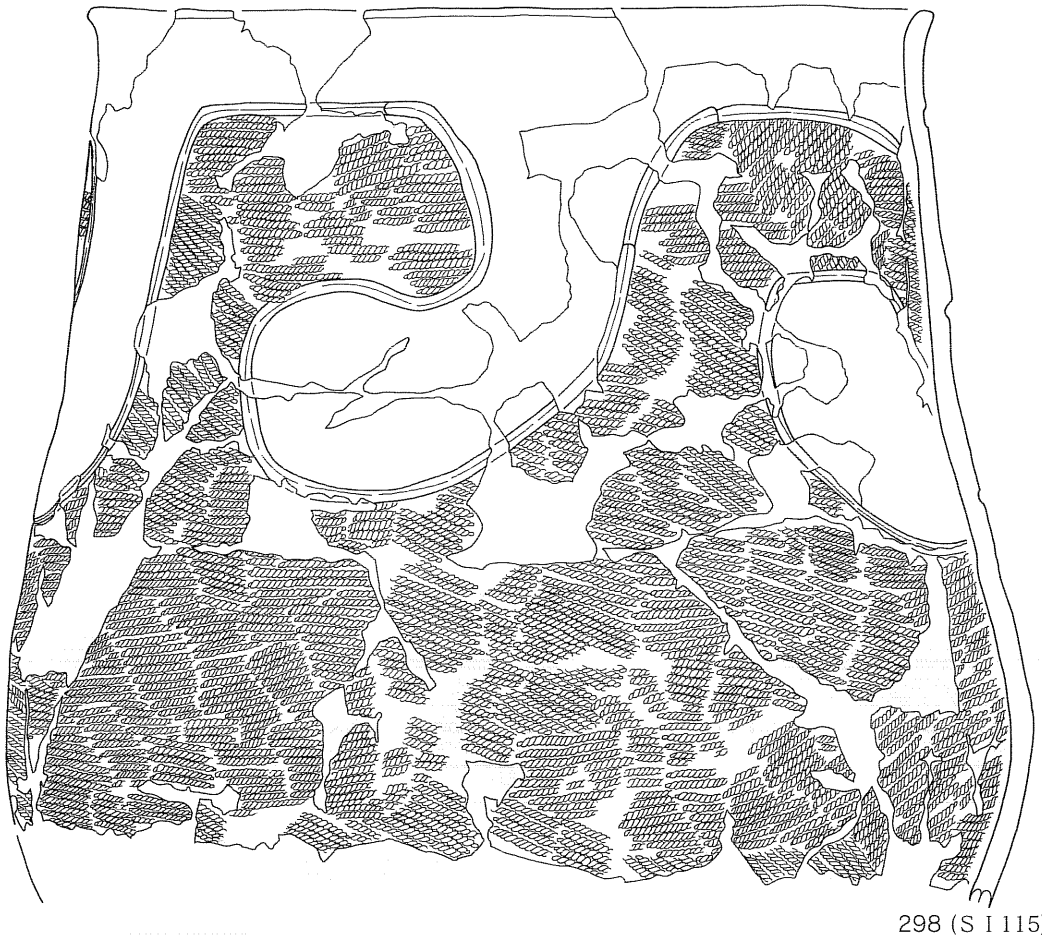

297 (S I 36)


296 (S I 135)

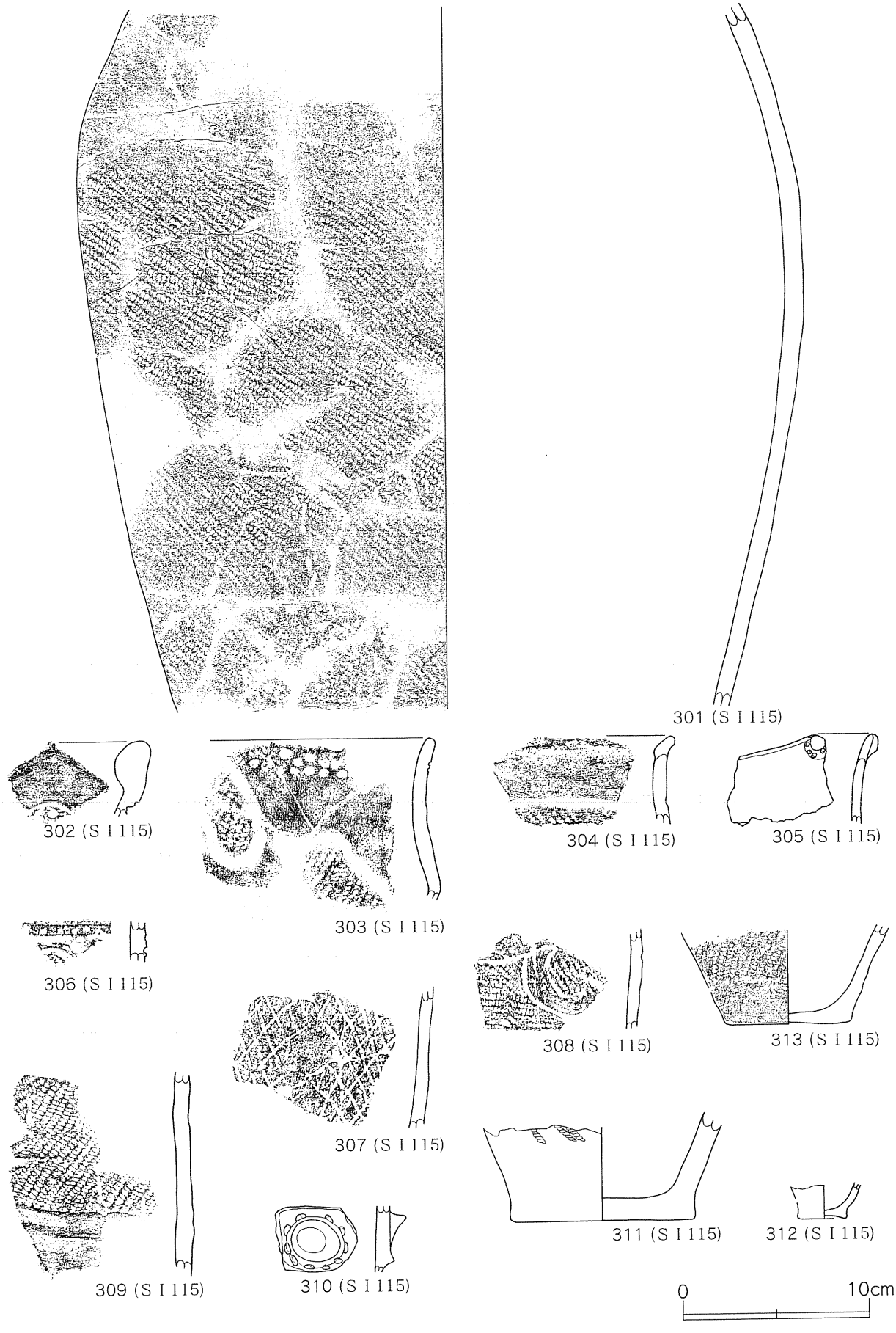




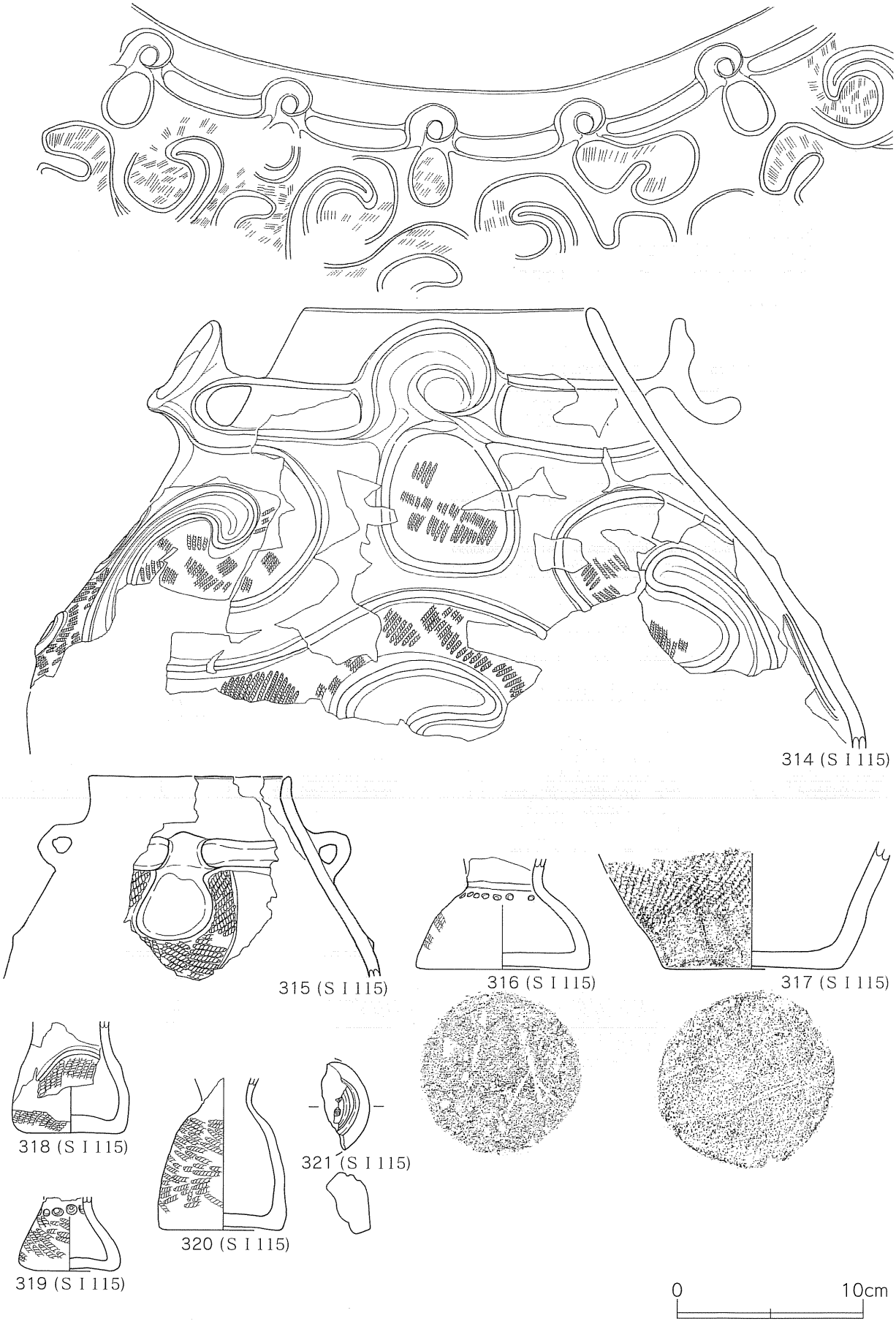
第69図　遺構内出土土器(27)



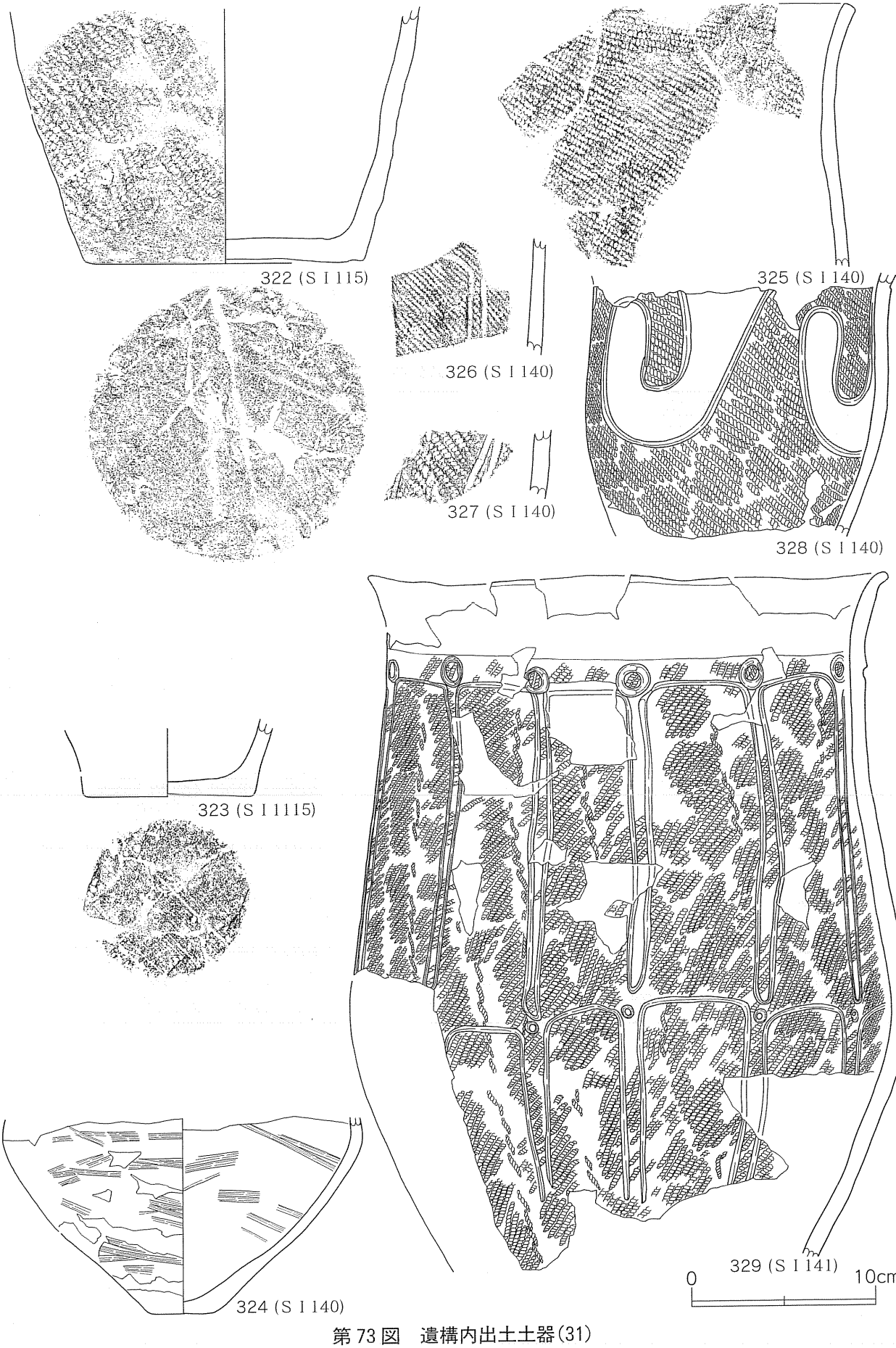
第70図　遺構内出土土器(28)



第71図　遺構内出土土器(29)



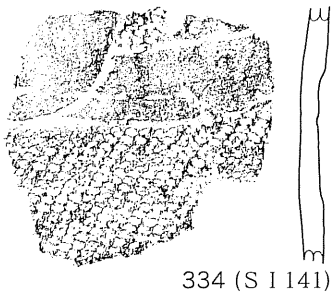
第72図　遺構内出土土器(30)



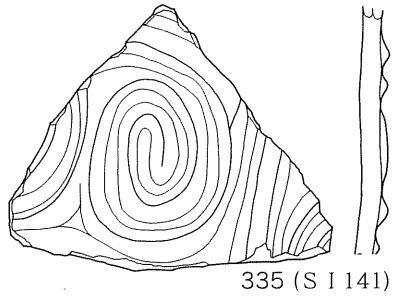
第73図　遺構内出土土器(31)

第74図　遺構内出土土器(32)

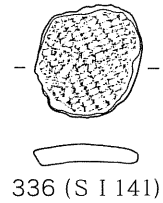
333 (S I 141)



334 (S I 141)



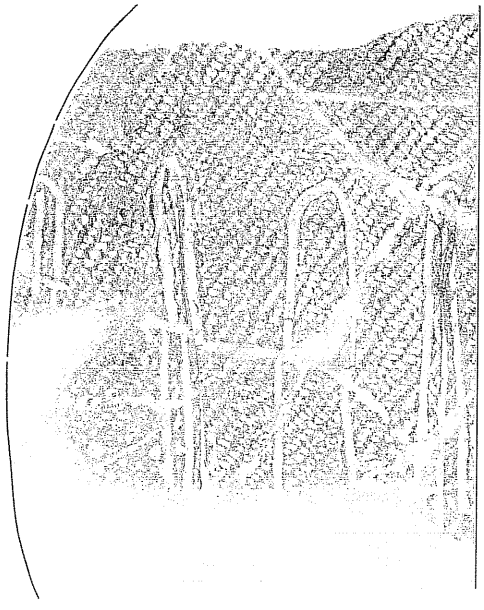
335 (S I 141)

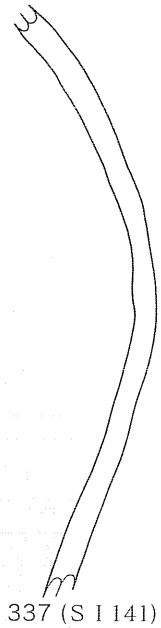


336 (S I 141)

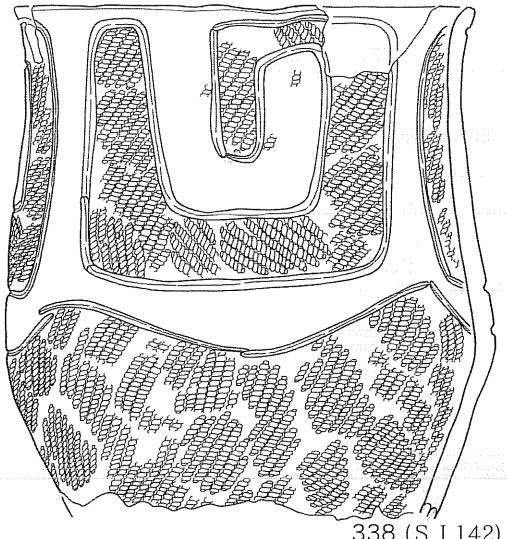
0　10cm

第75図　遺構内出土土器(33)



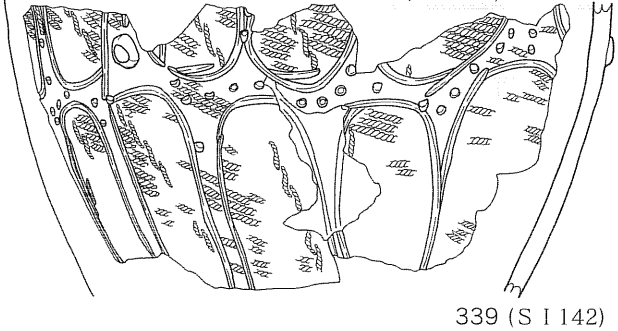


337 (S I 141)

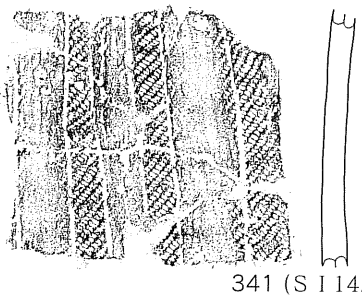


338 (S I 142)

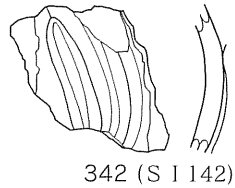
340 (S I 142)



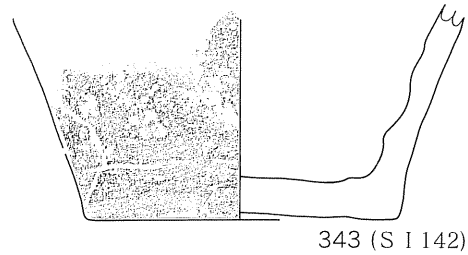
339 (S I 142)



341 (S I 142)



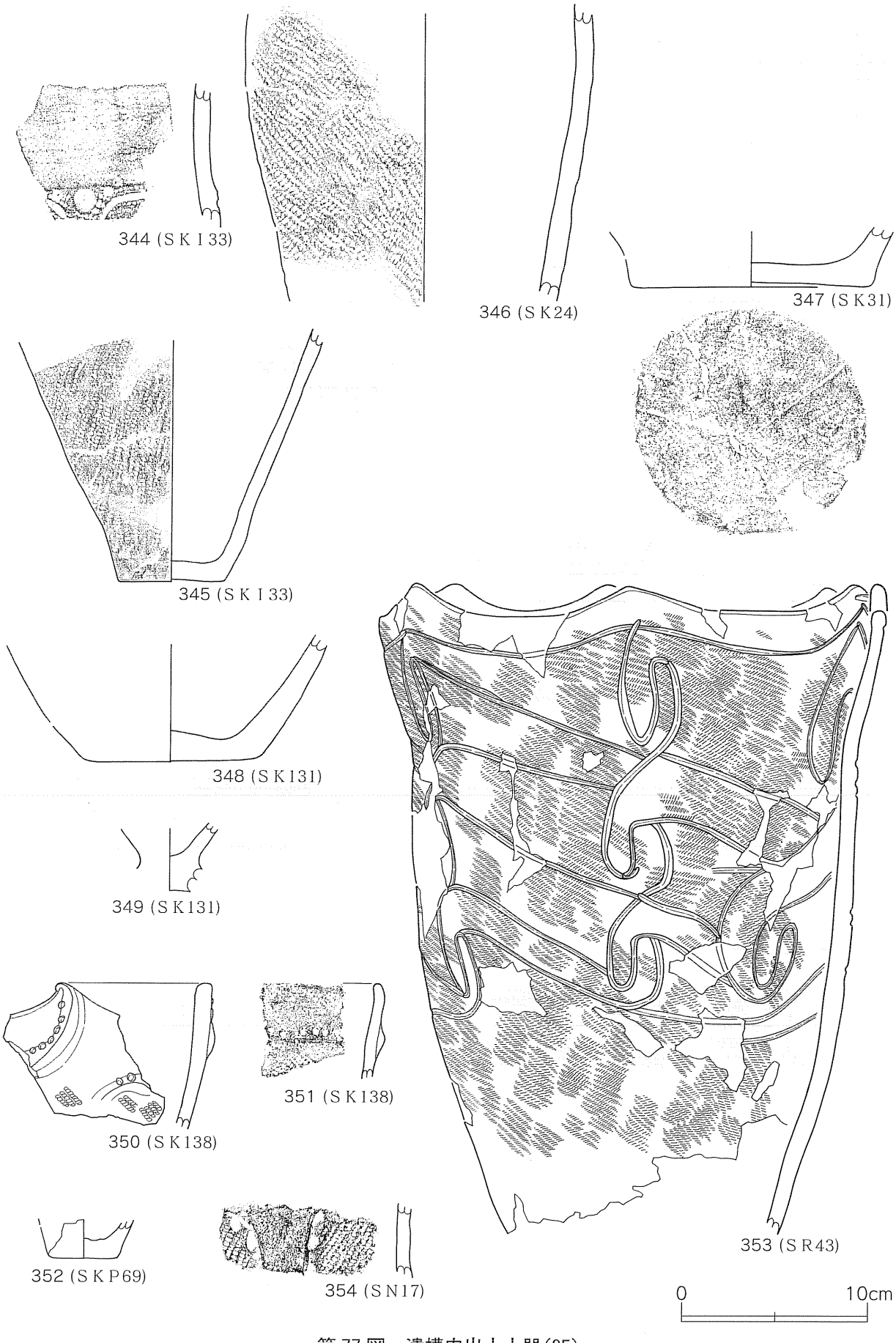
342 (S I 142)



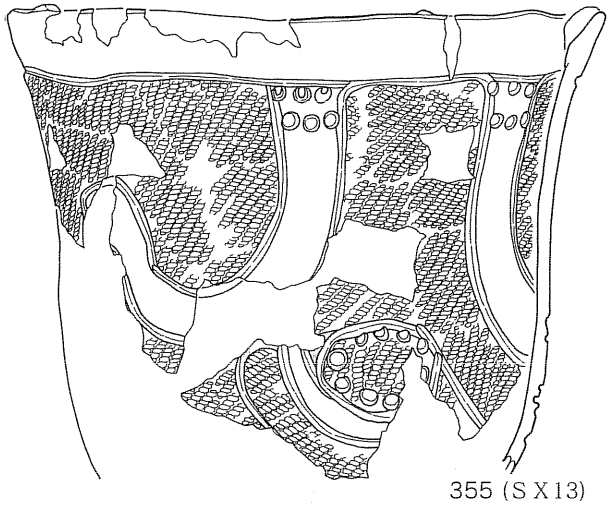
343 (S I 142)

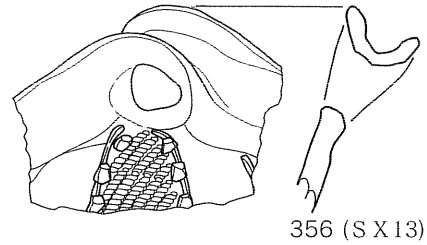
0　10cm

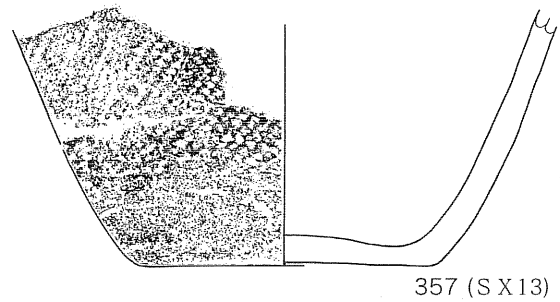
第76図　遺構内出土土器(34)

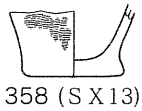


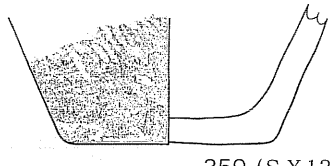
第77図　遺構内出土土器(35)

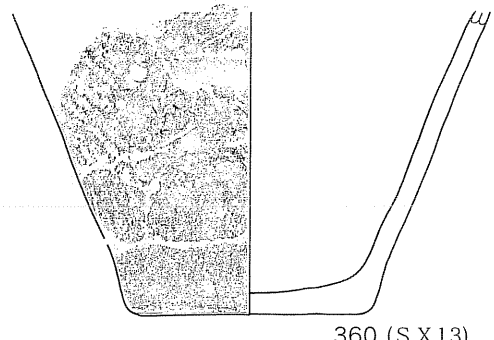

355 (S X13)

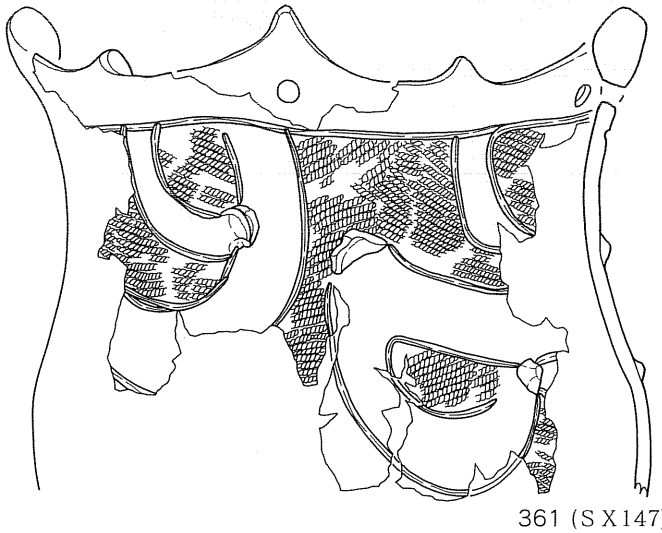

356 (S X13)

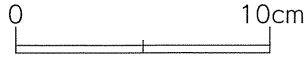

357 (S X13)


358 (S X13)

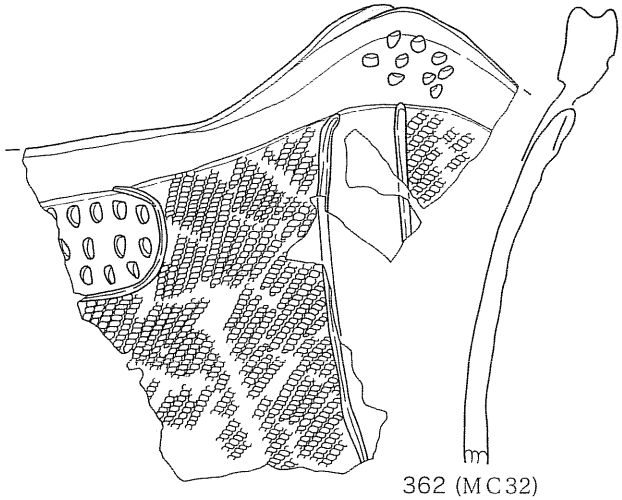

359 (S X13)

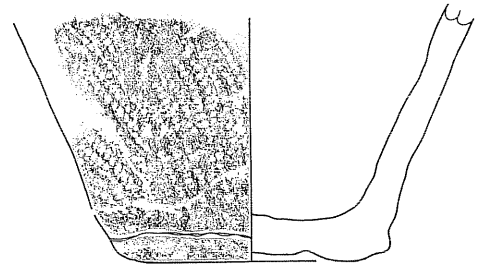

360 (S X13)

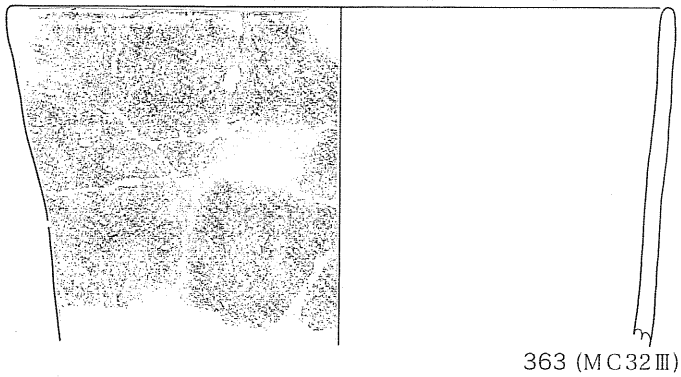

361 (S X147)

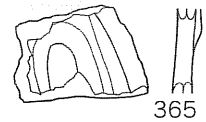


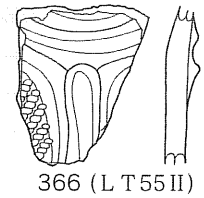
第78図　遺構内出土土器(36)

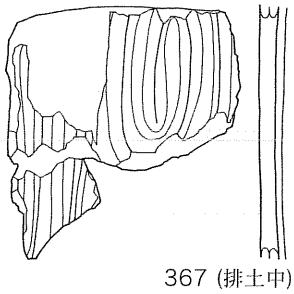

362 (MC32)

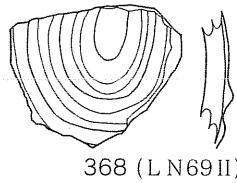

364 (LT46II)

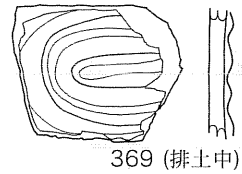

363 (MC32III)

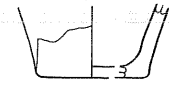

365
範囲確認調査時の試掘トレンチ

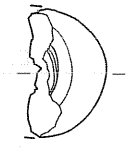

366 (LT55II)


367 (排土中)


368 (LN69II)

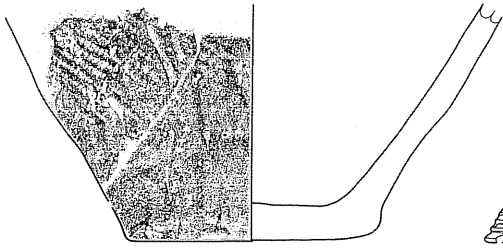

369 (排土中)

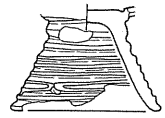

370 (排土中)

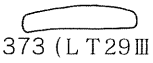


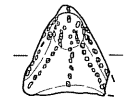
375 (MD34III)

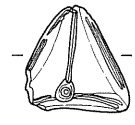
374 (排土中)


371 (LT27III)

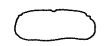

372 (LT25)

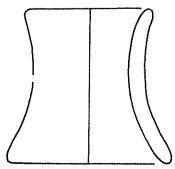

373 (LT29III)

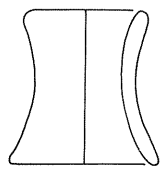


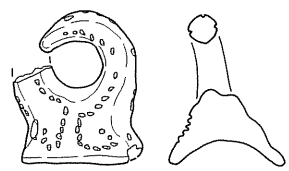


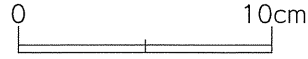
379 (MC31III)


380 (MB51II)

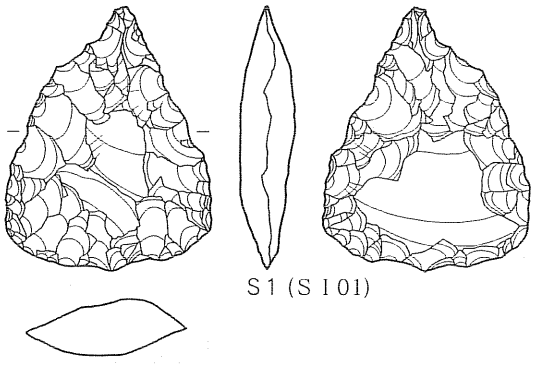

376 (MC30III)

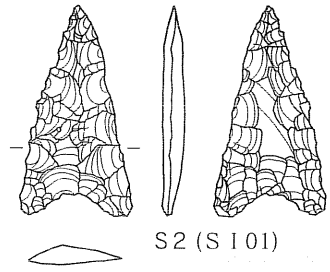

377 (MC30III)

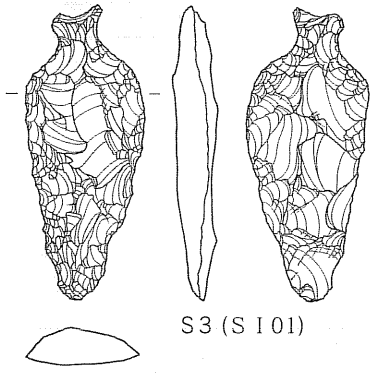

378 (MB32I)

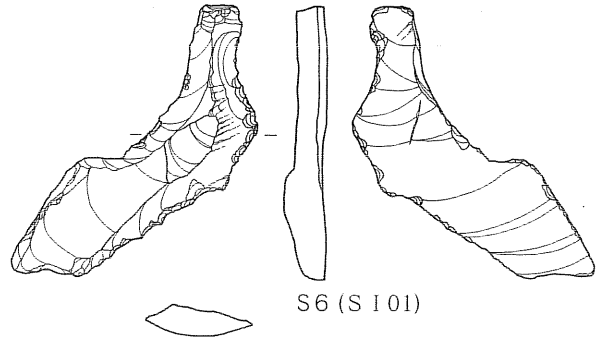


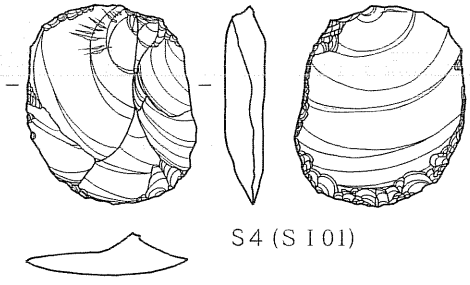
第79図　遺構外出土土器

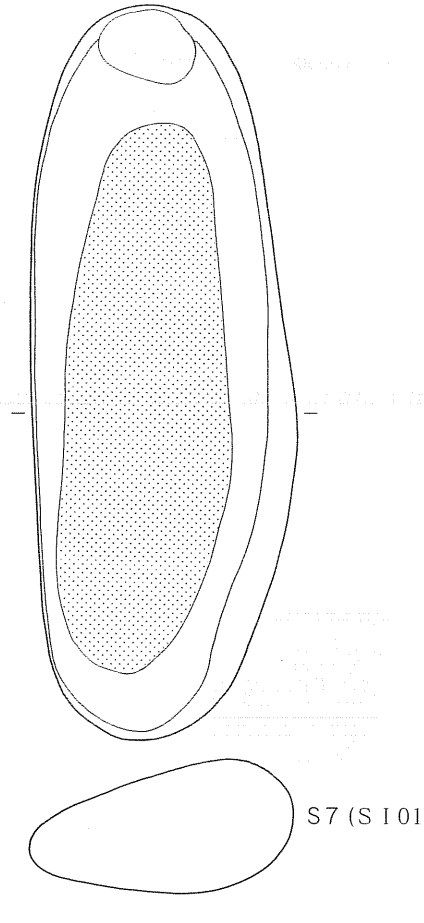

S1 (S I 01)

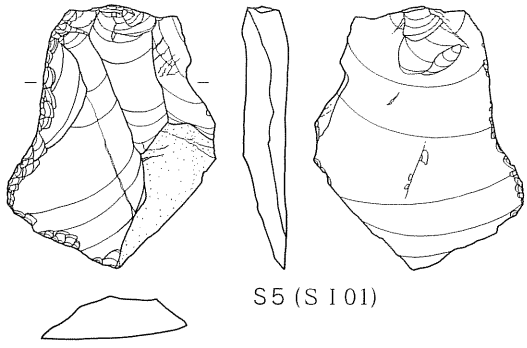

S2 (S I 01)

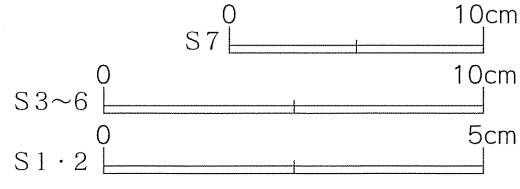

S3 (S I 01)


S6 (S I 01)

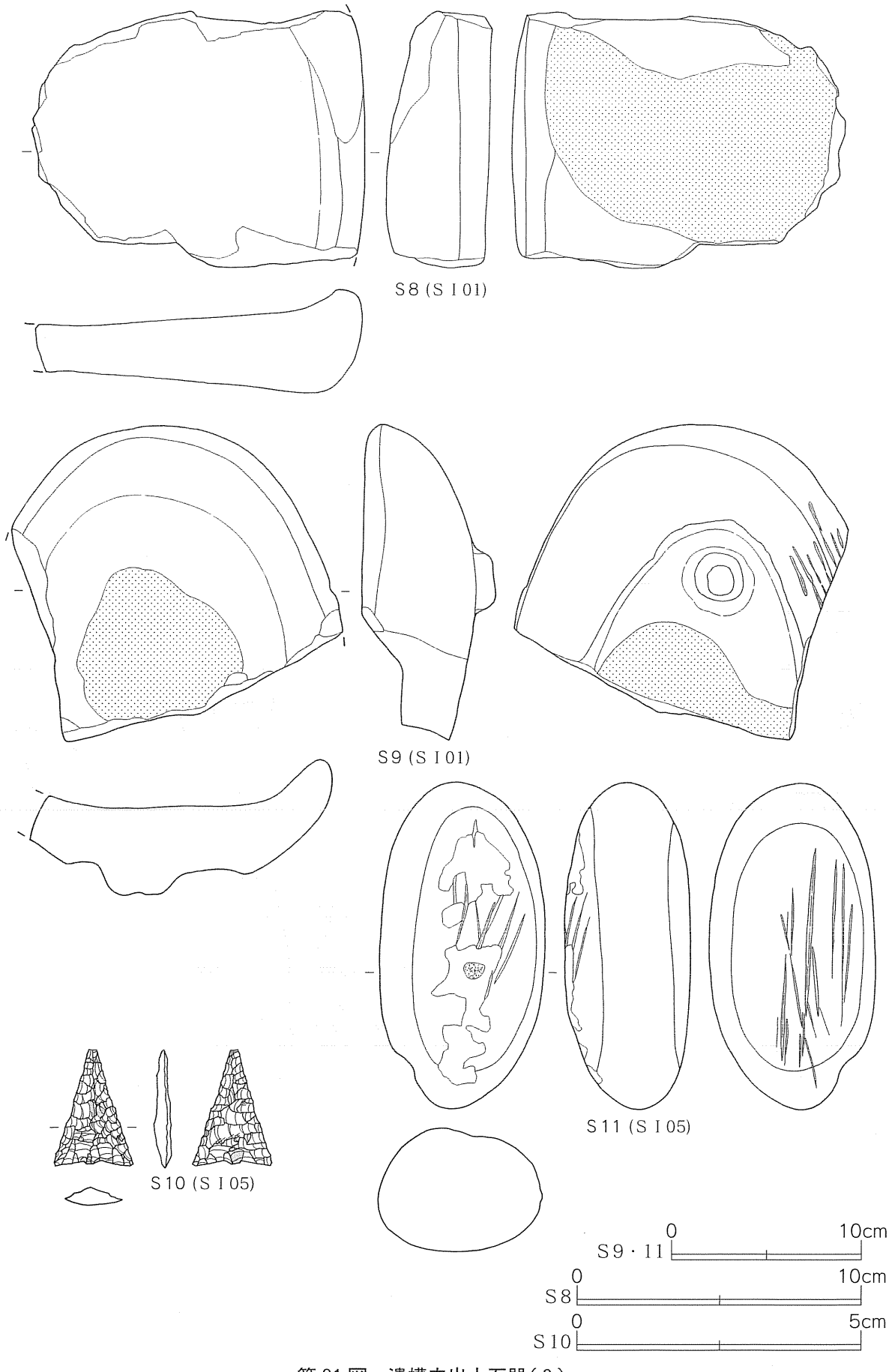

S4 (S I 01)


S7 (S I 01)

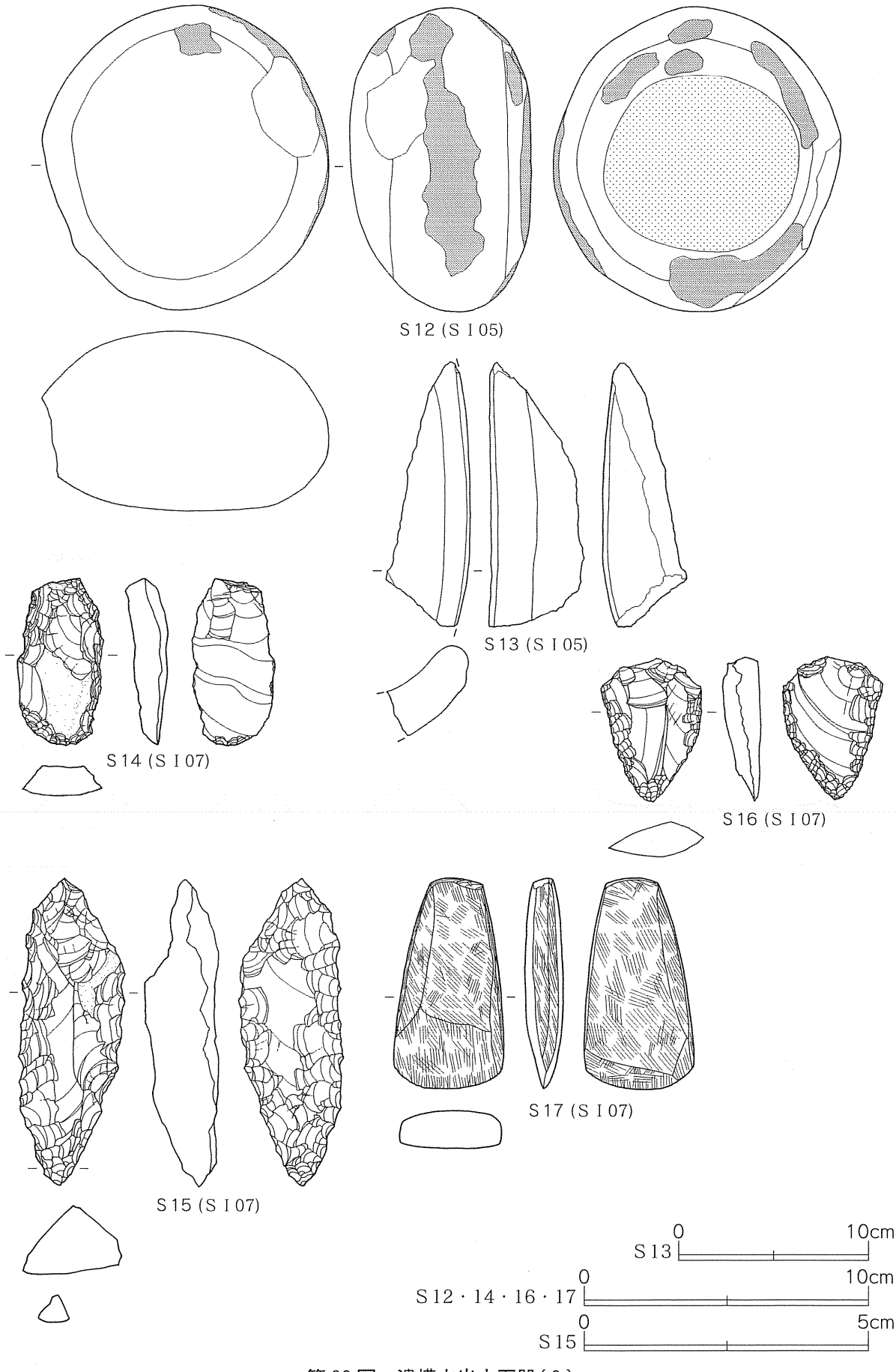

S5 (S I 01)



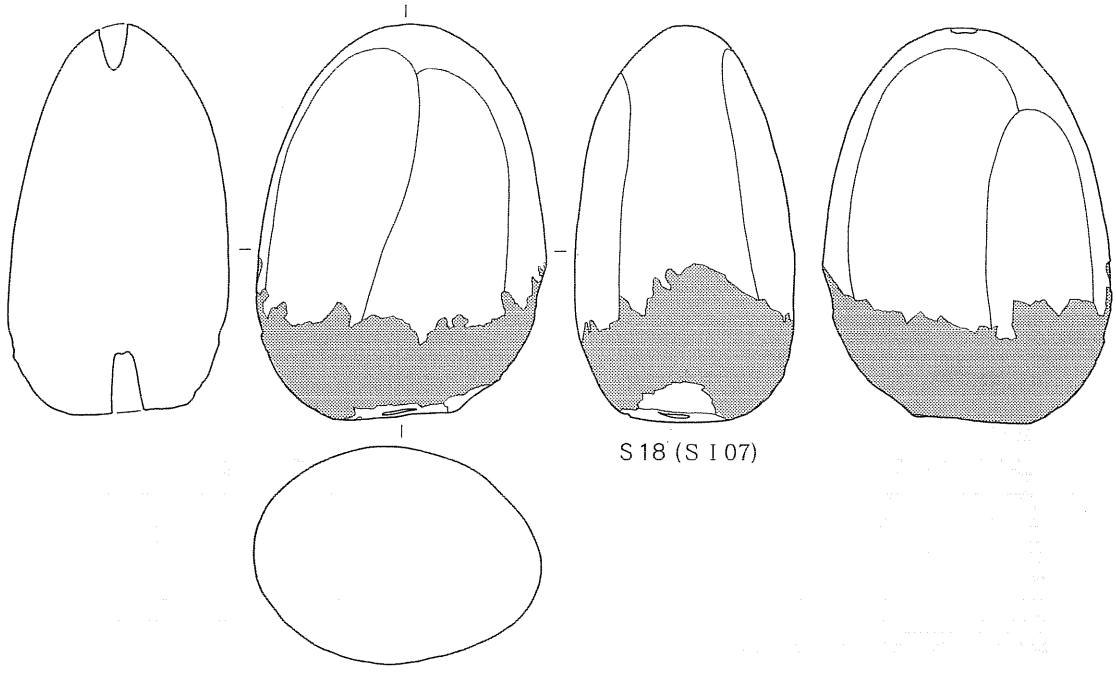
第80図　遺構内出土石器（1）



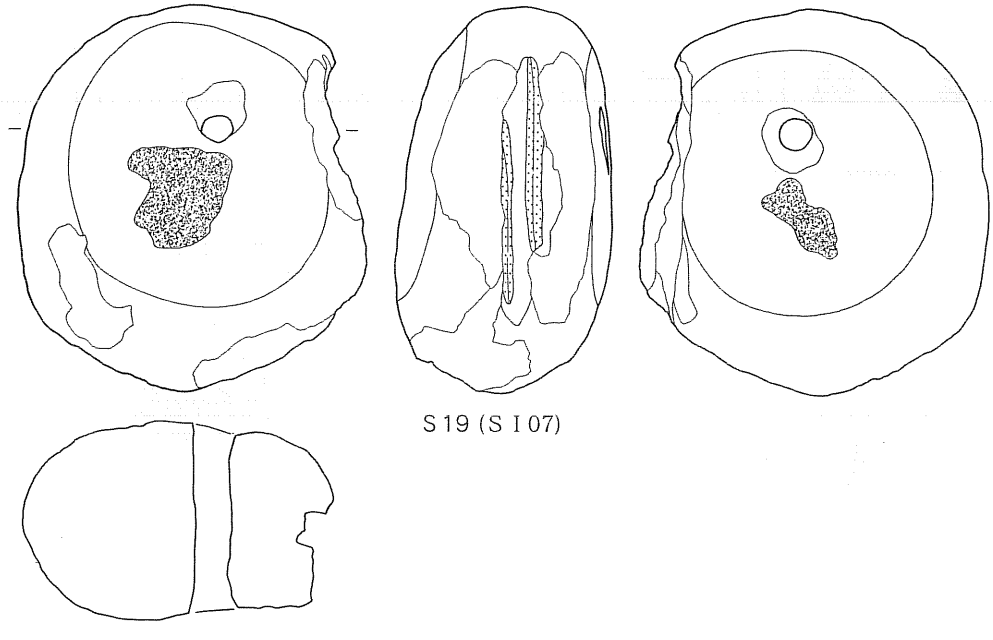
第81図　遺構内出土石器(2)



第82図　遺構内出土石器(3)



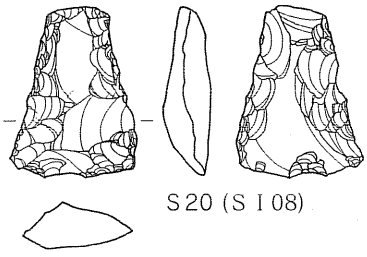
S18 (S I 07)

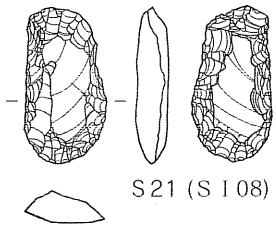


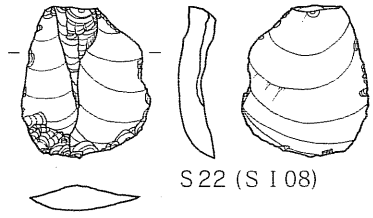
S19 (S I 07)

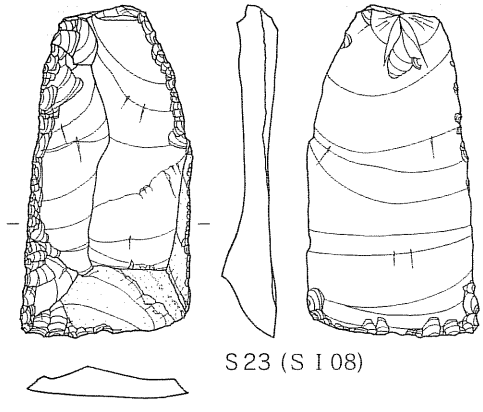
0　10cm

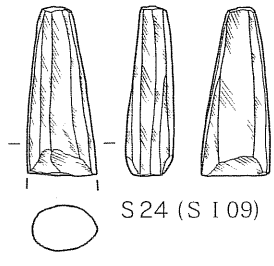
第83図　遺構内出土石器(4)

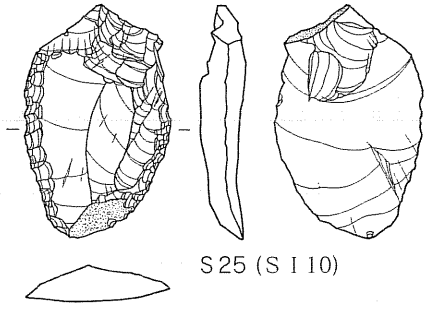

S20 (S I 08)

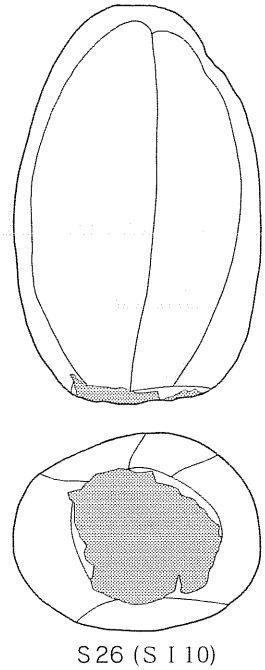

S21 (S I 08)

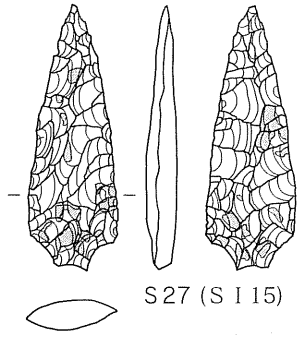

S22 (S I 08)

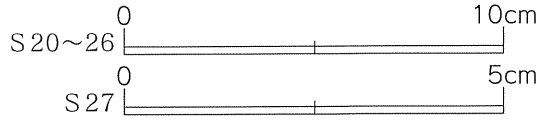

S23 (S I 08)


S24 (S I 09)

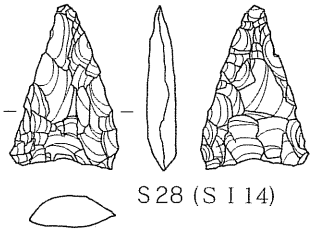

S25 (S I 10)

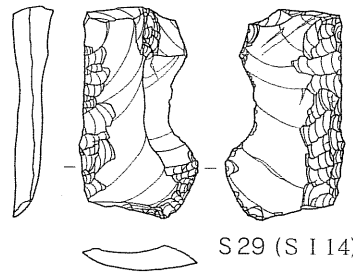

S26 (S I 10)

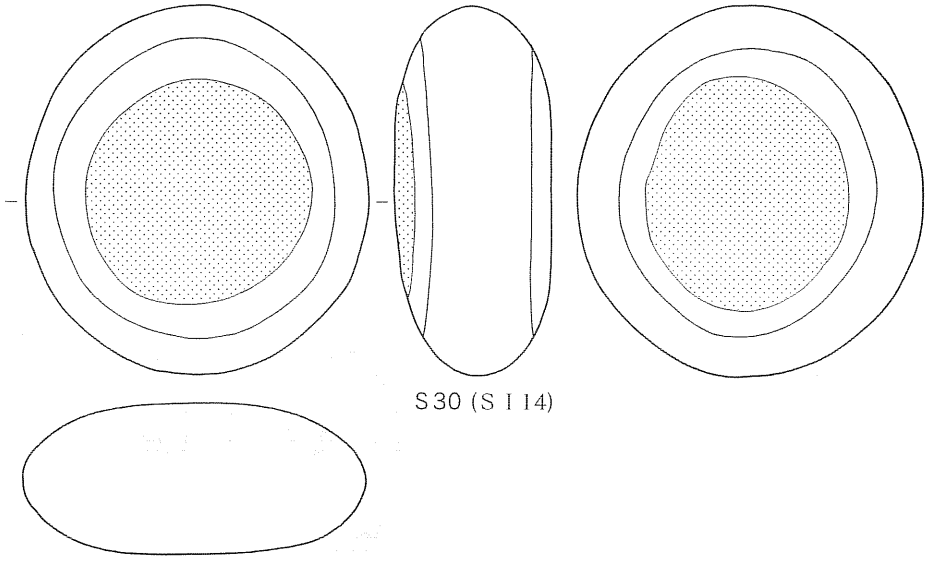

S27 (S I 15)

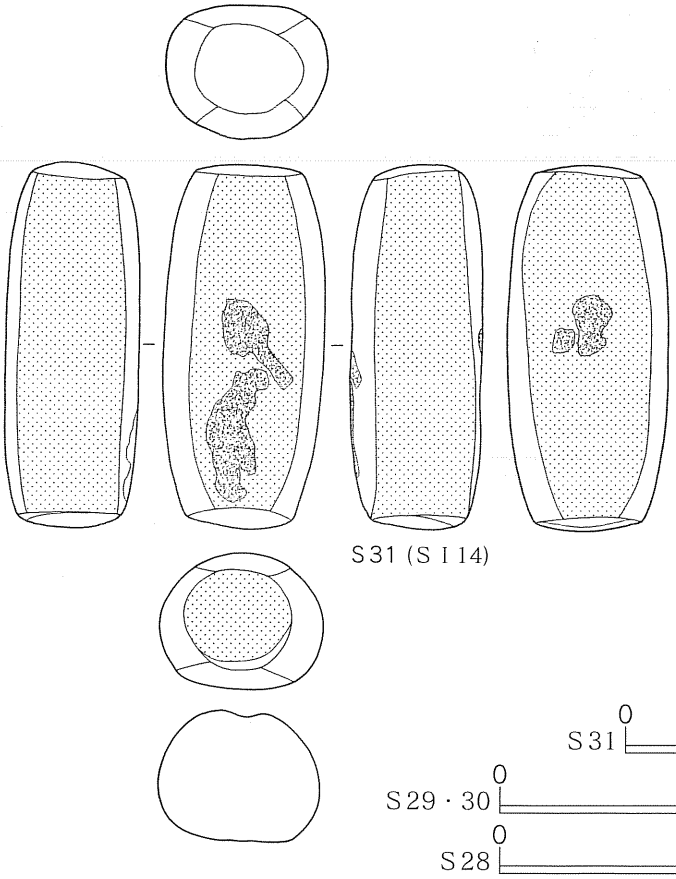


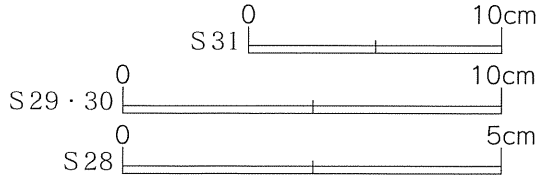
第 84 図　遺構内出土石器（５）


S28 (S I 14)

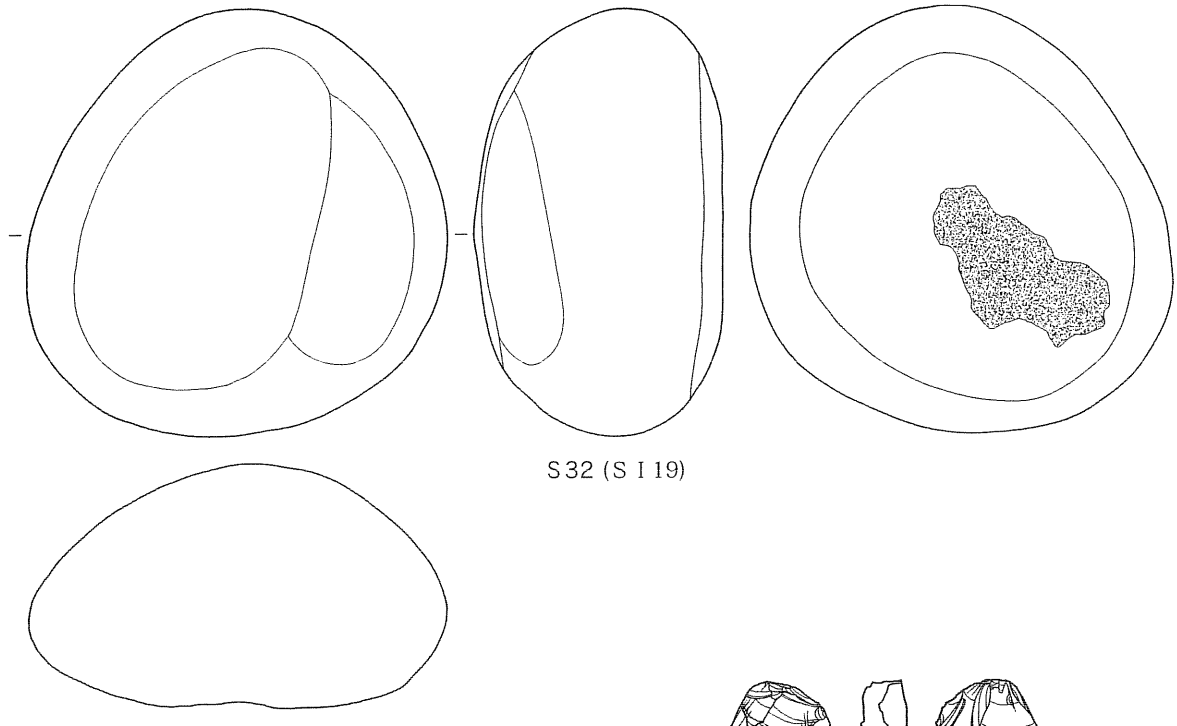

S29 (S I 14)

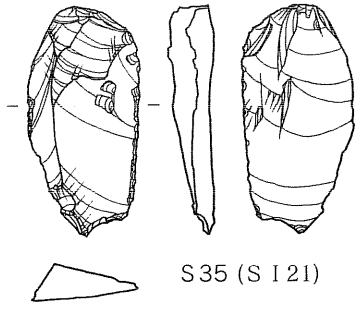

S30 (S I 14)

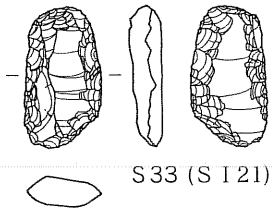

S31 (S I 14)

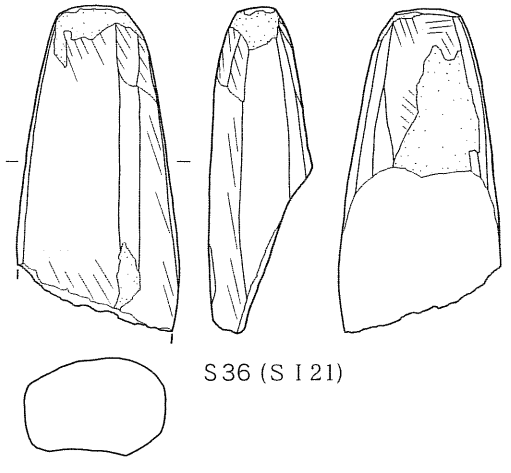


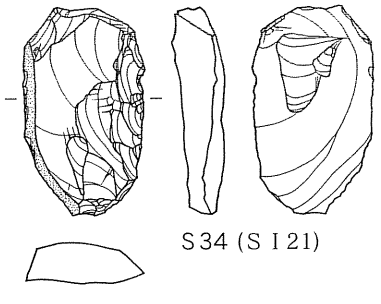
第85図　遺構内出土石器(6)

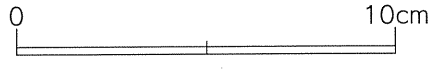




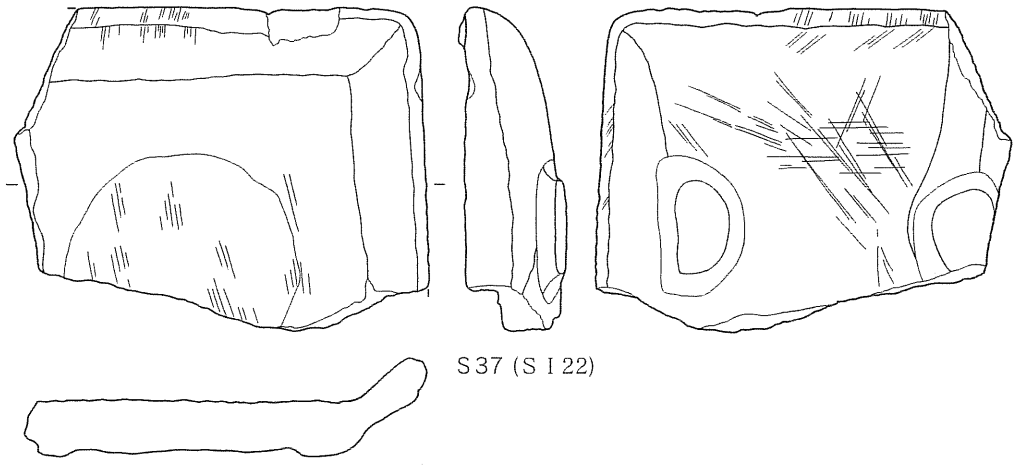


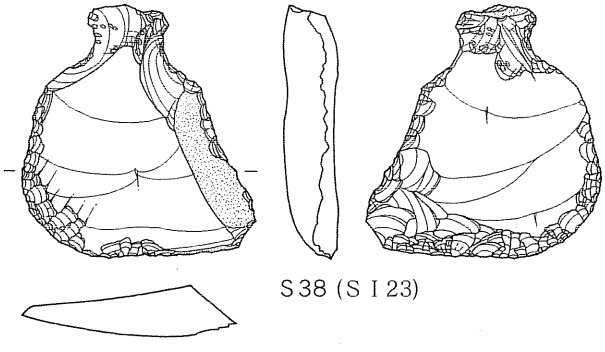


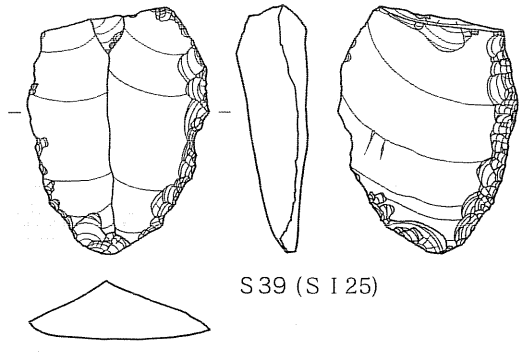


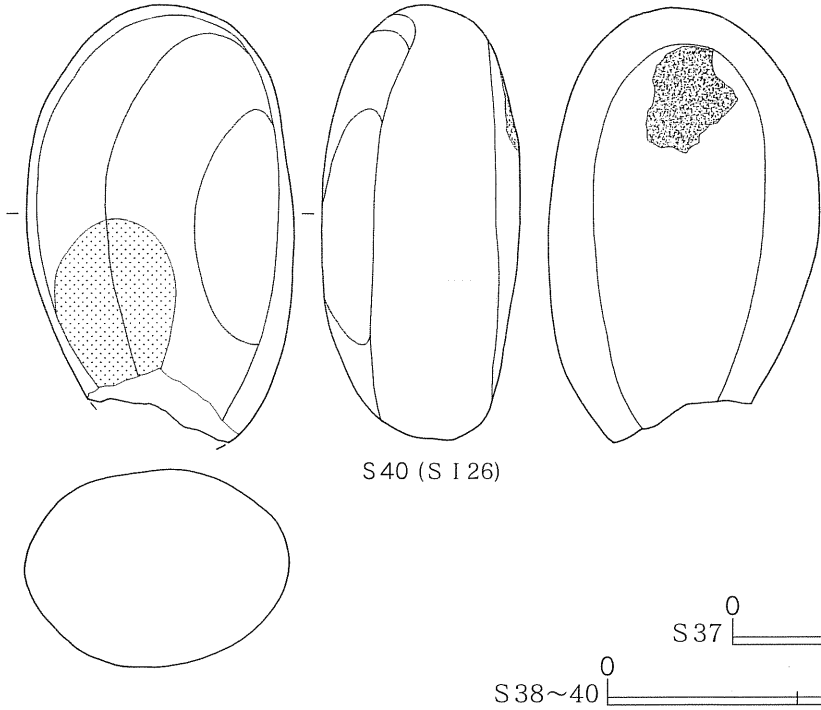


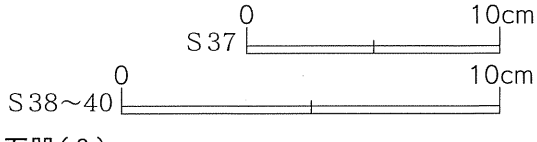
第86図　遺構内出土石器（7）



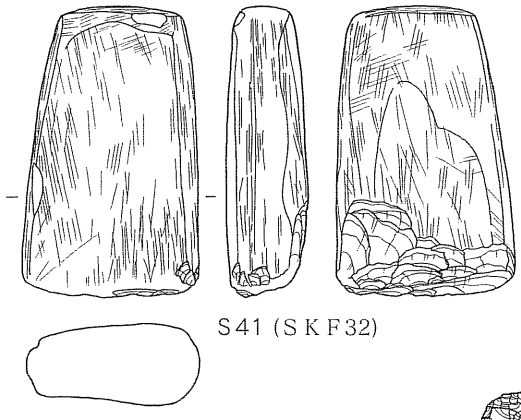


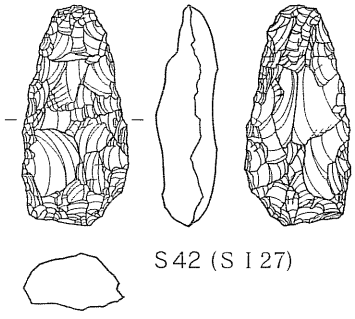


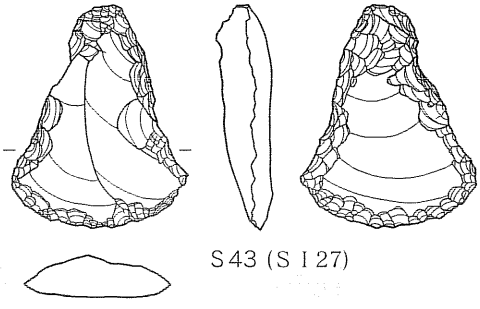


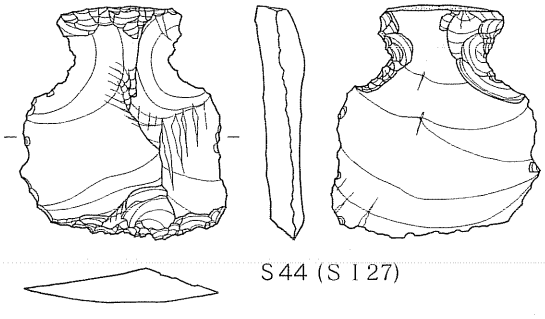


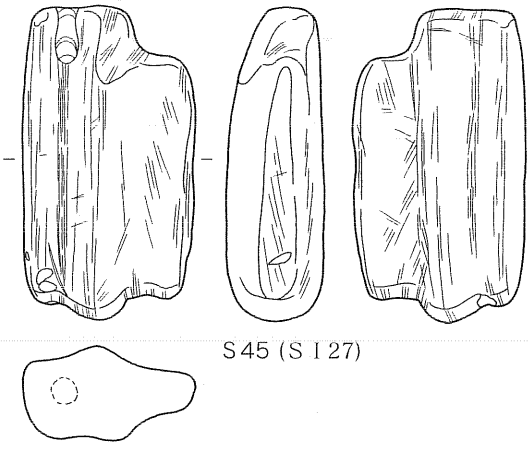
第87図　遺構内出土石器(8)

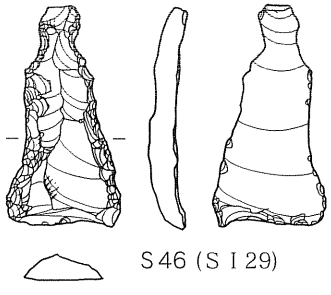


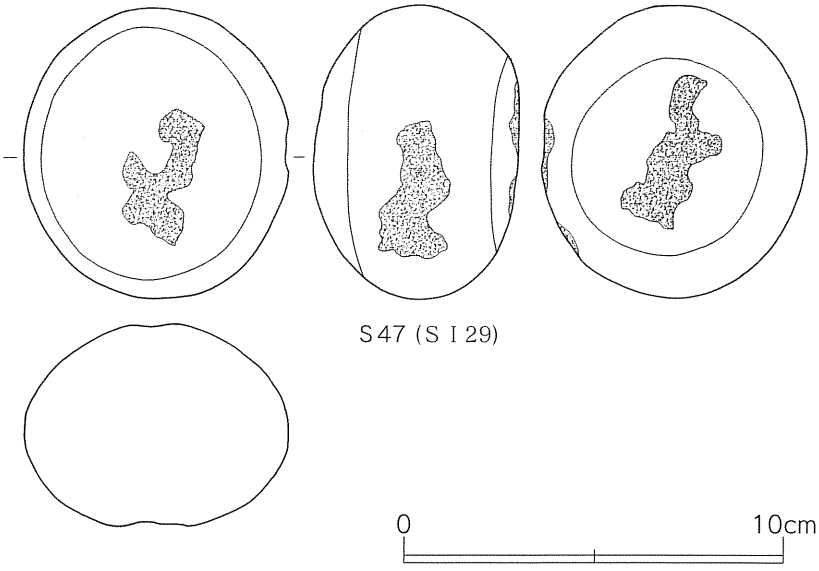




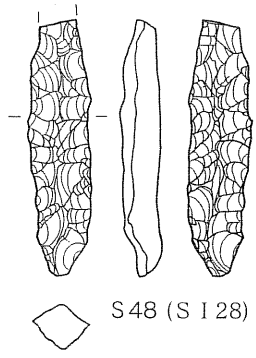


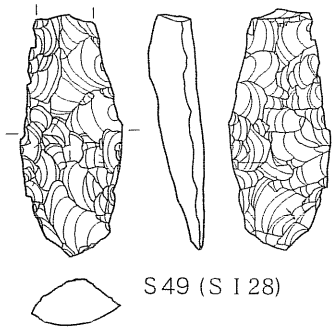


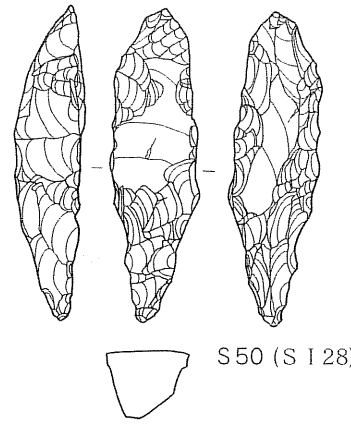


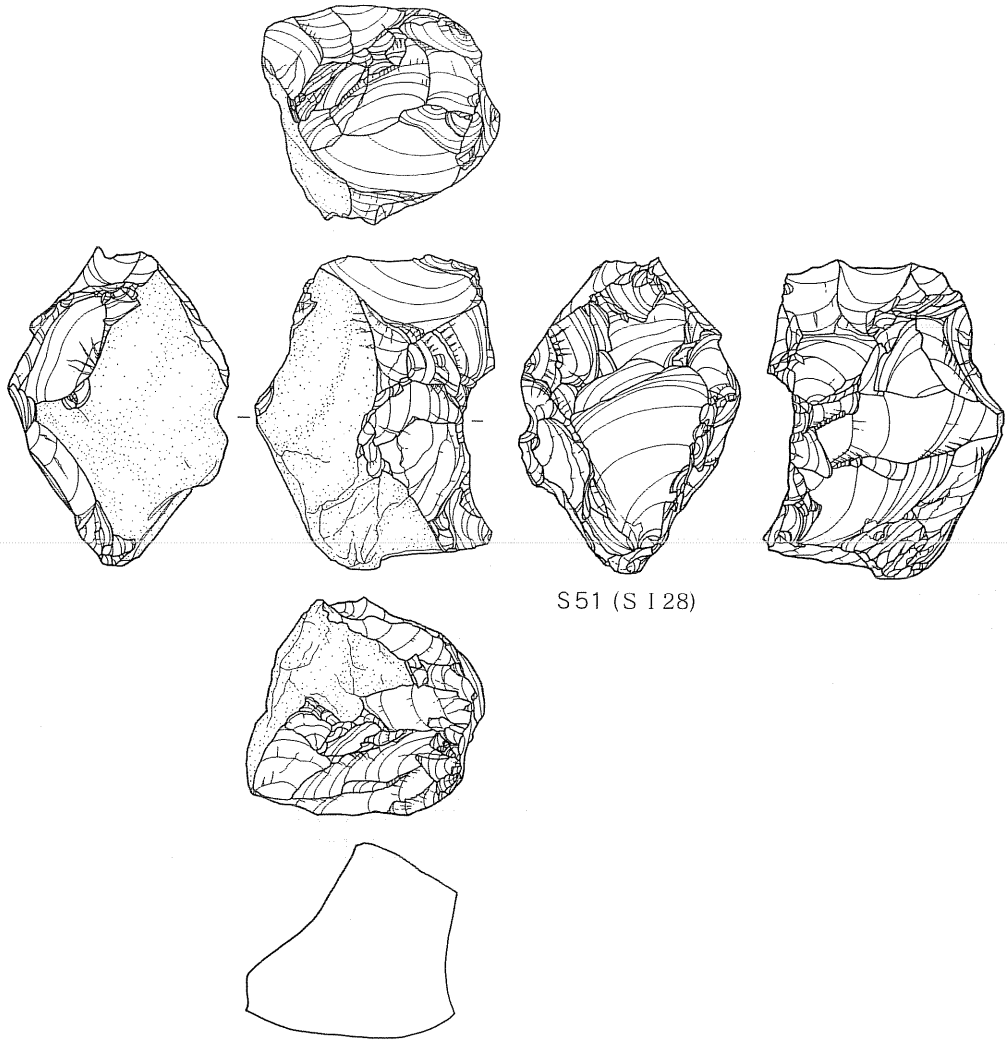


第88図　遺構内出土石器(9)


S48 (S I 28)


S49 (S I 28)

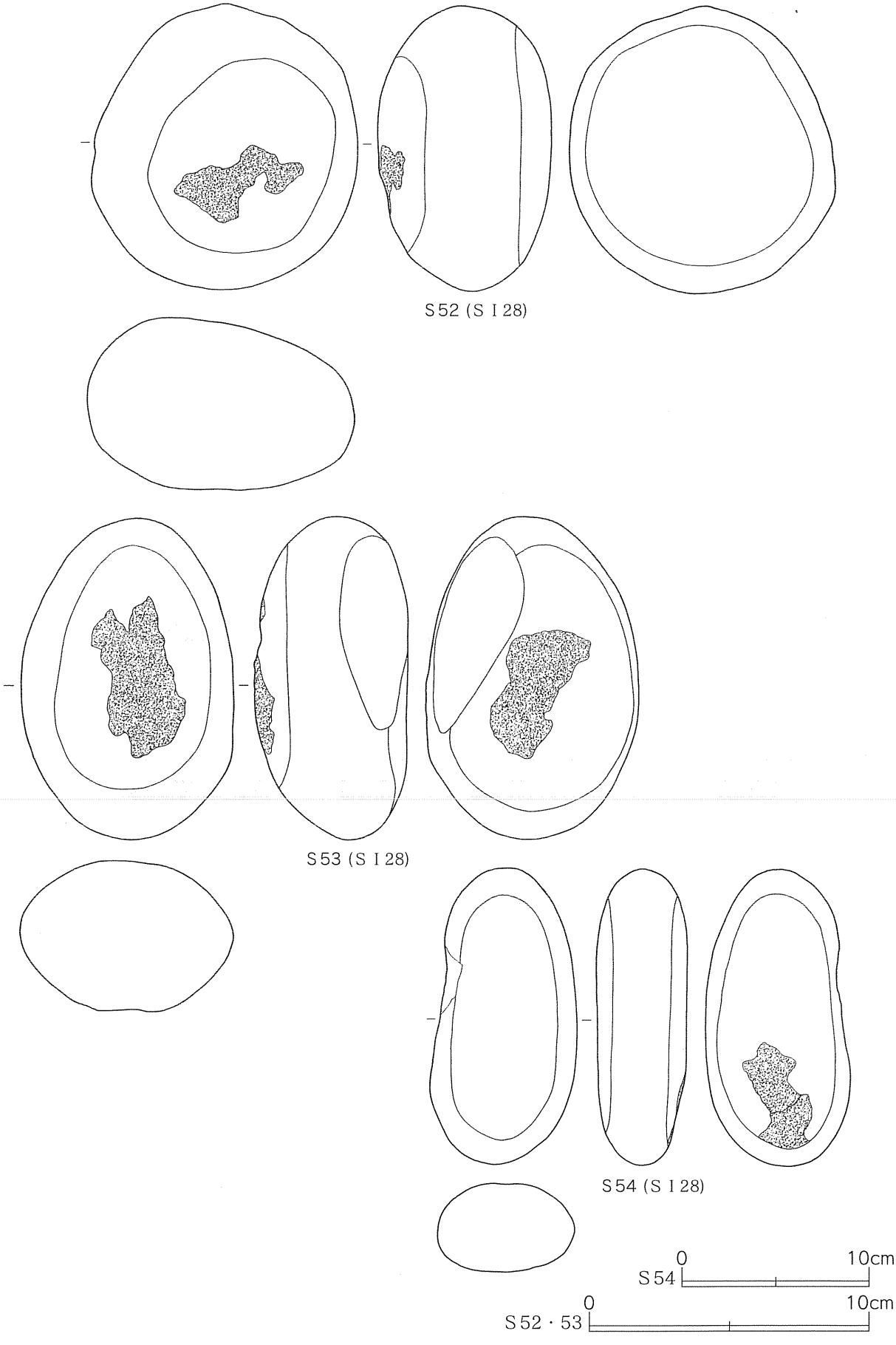

S50 (S I 28)


S51 (S I 28)

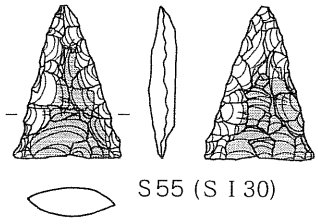
S51　0　10cm

S49～50　0　5cm

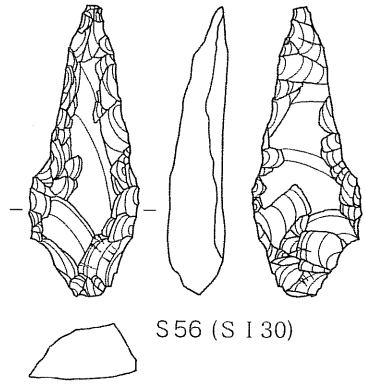
第89図　遺構内出土石器(10)



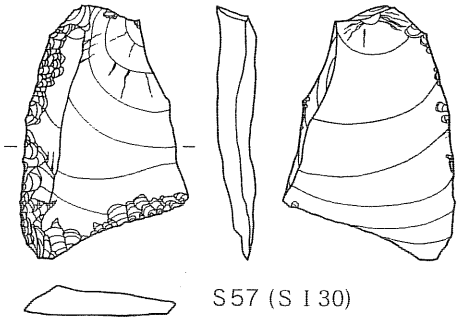
第90図　遺構内出土石器(11)



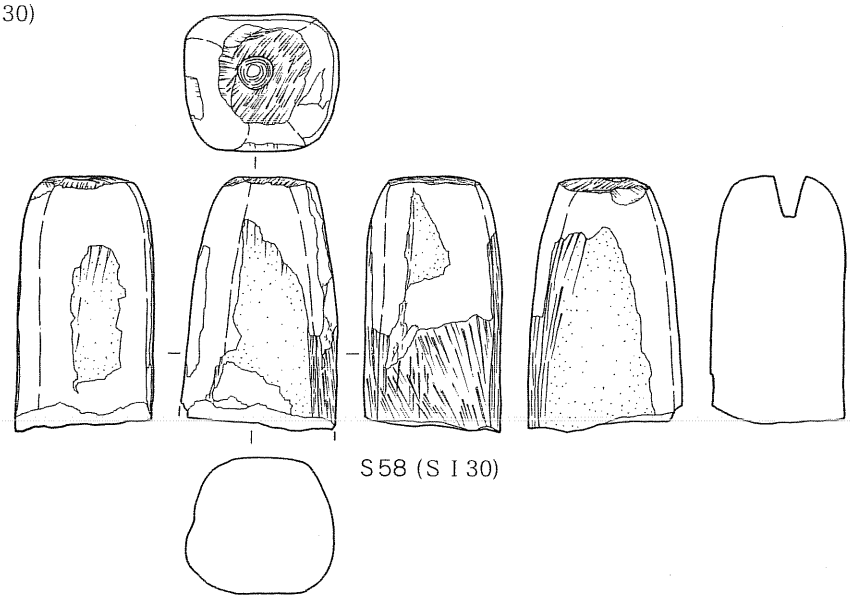
S55 (S I 30)



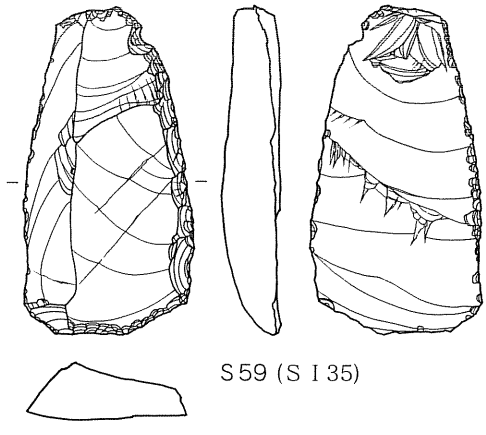
S56 (S I 30)



S57 (S I 30)



S58 (S I 30)

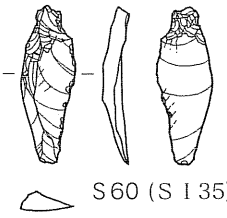


S59 (S I 35)

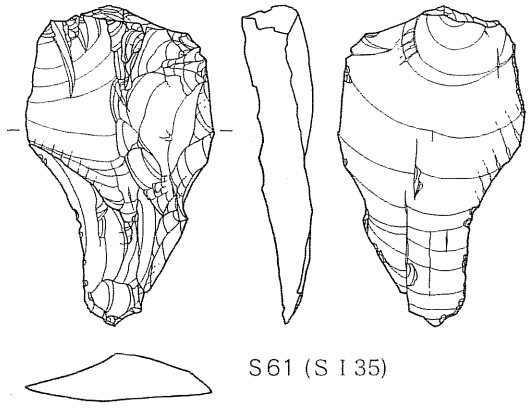
S57～59　0　10cm

S55・56　0　5cm

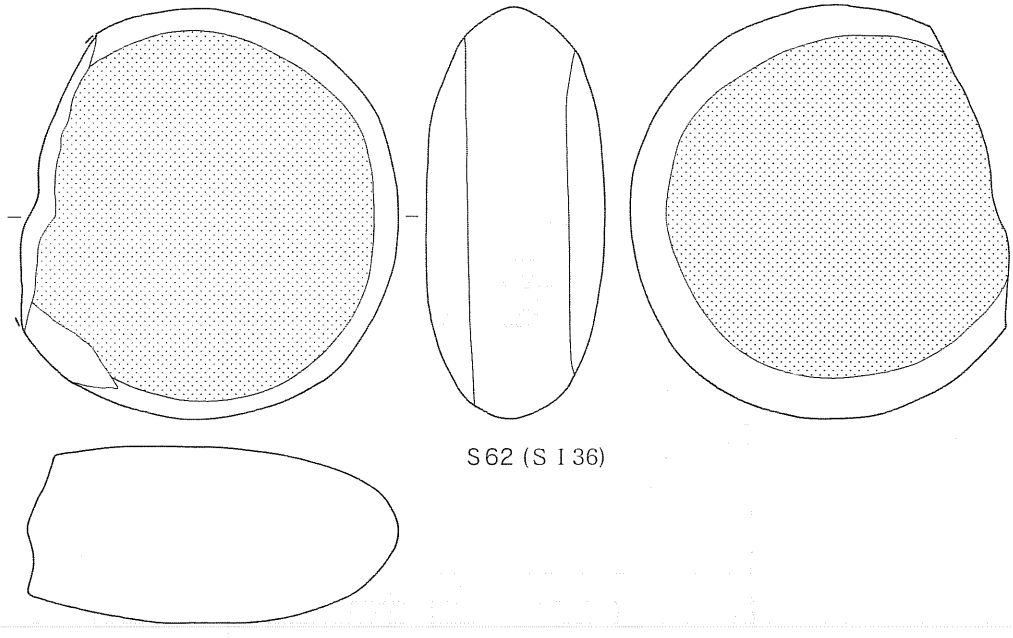
第91図　遺構内出土石器(12)



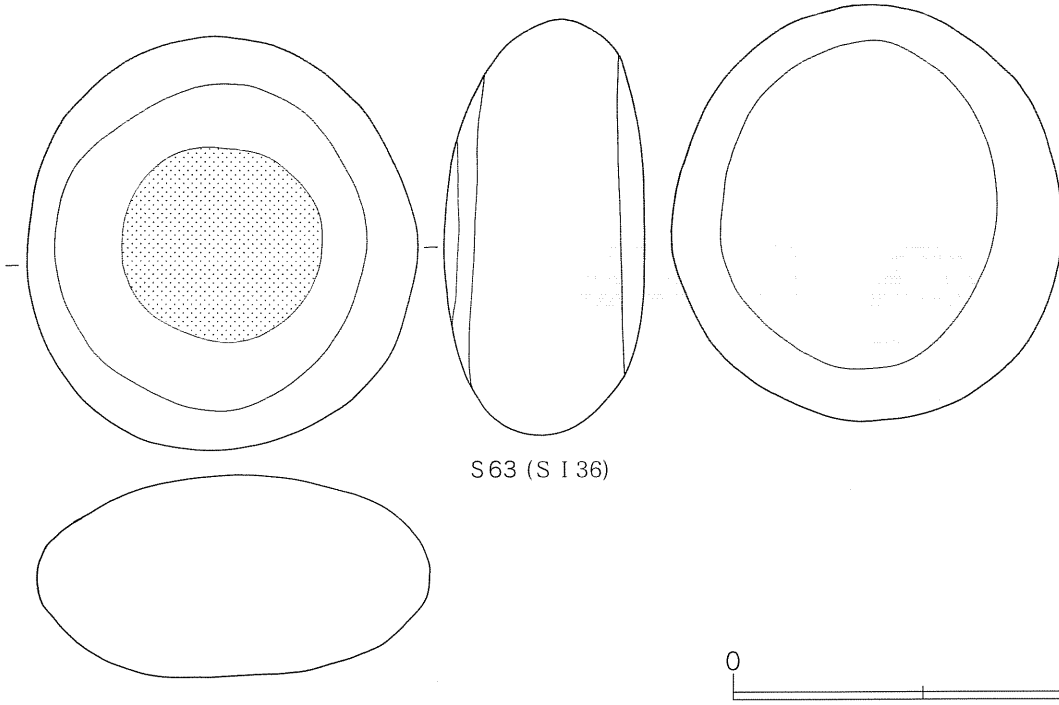
S60 (S I 35)



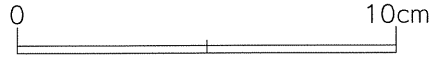
S61 (S I 35)



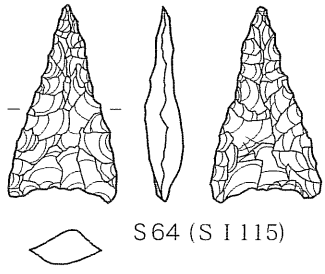
S62 (S I 36)

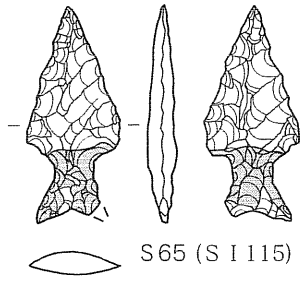


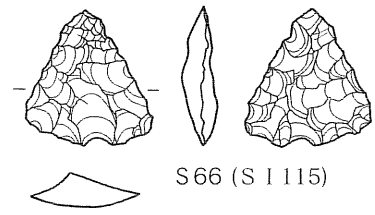
S63 (S I 36)

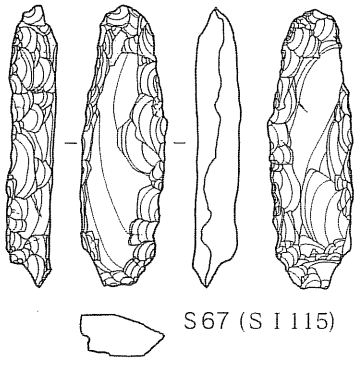


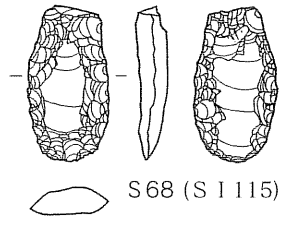
第92図　遺構内出土石器(13)

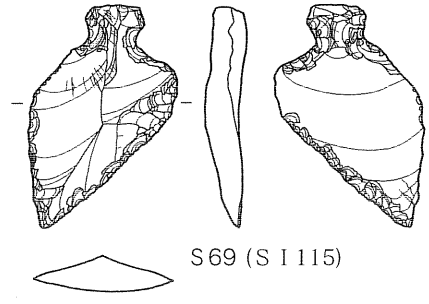

S64 (S I 115)

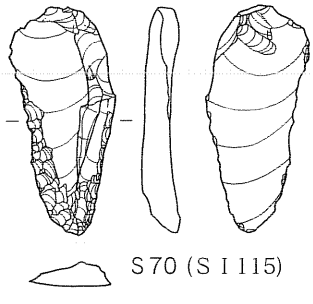

S65 (S I 115)

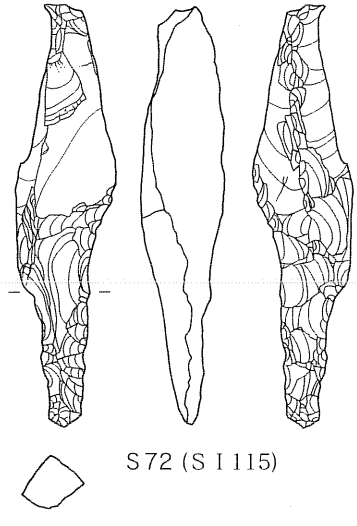

S66 (S I 115)

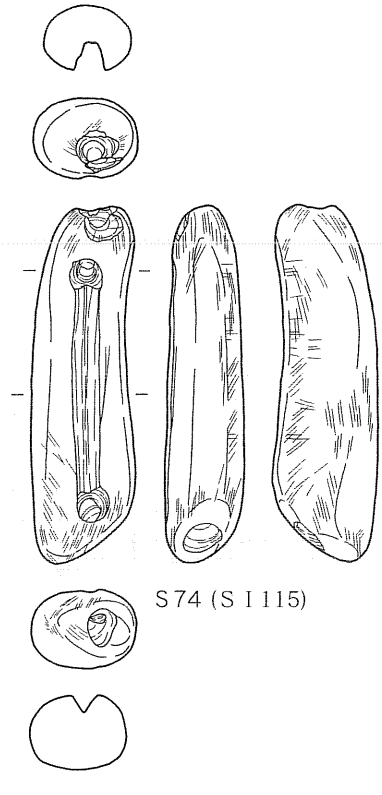

S67 (S I 115)

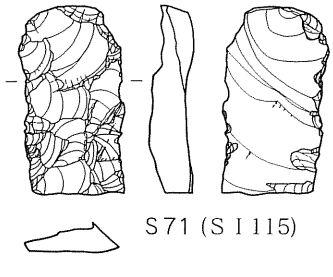

S68 (S I 115)

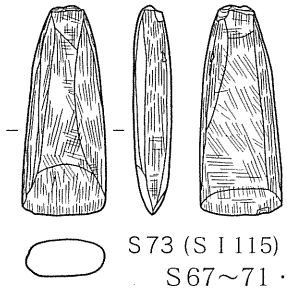

S69 (S I 115)

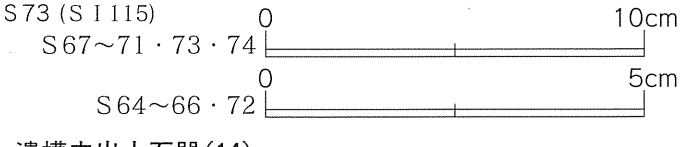

S70 (S I 115)


S72 (S I 115)

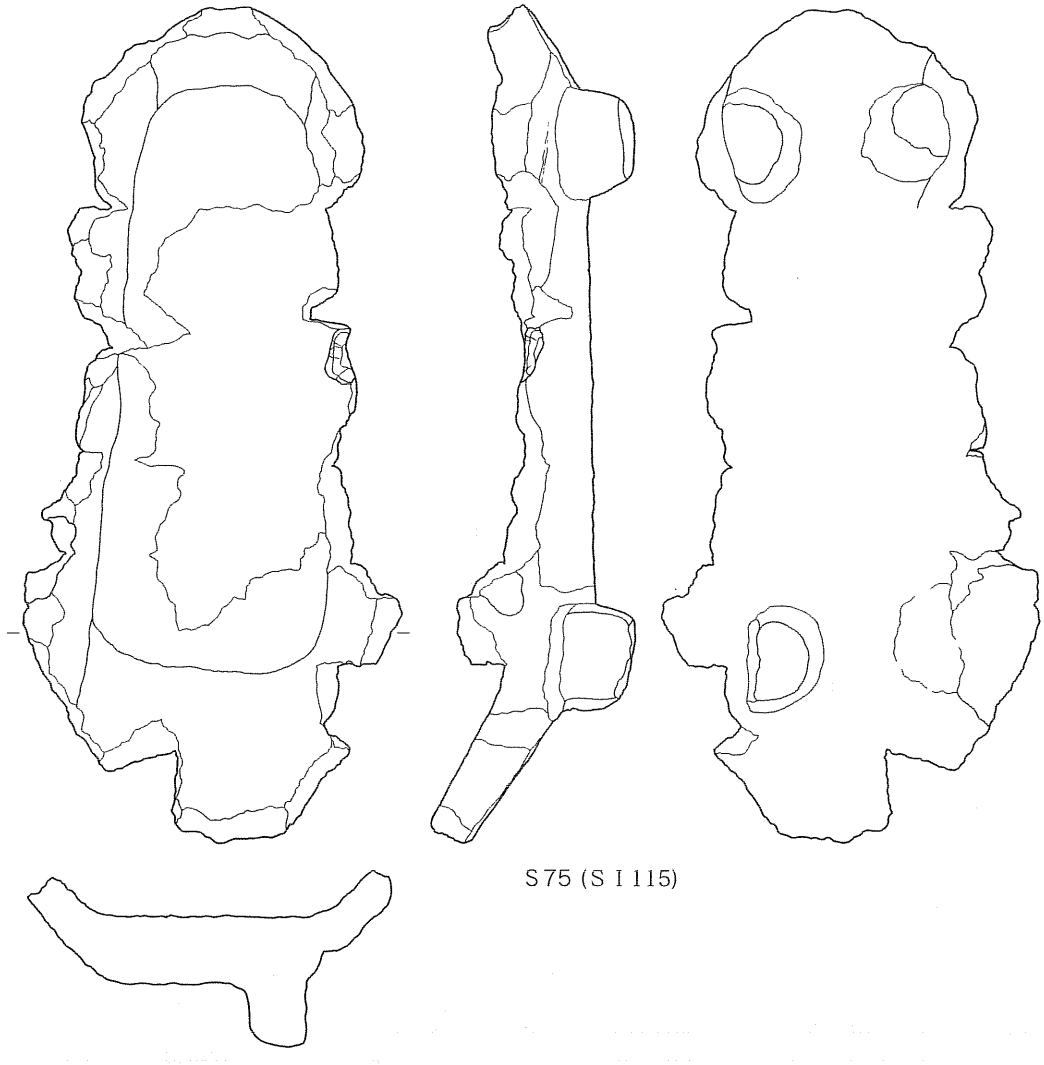

S74 (S I 115)

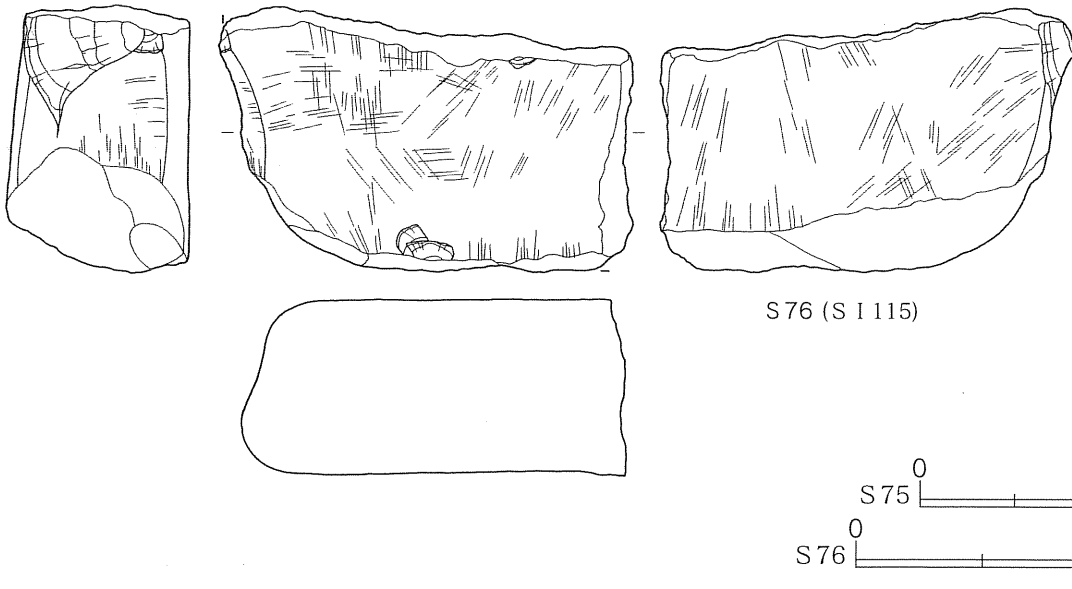

S71 (S I 115)


S73 (S I 115)

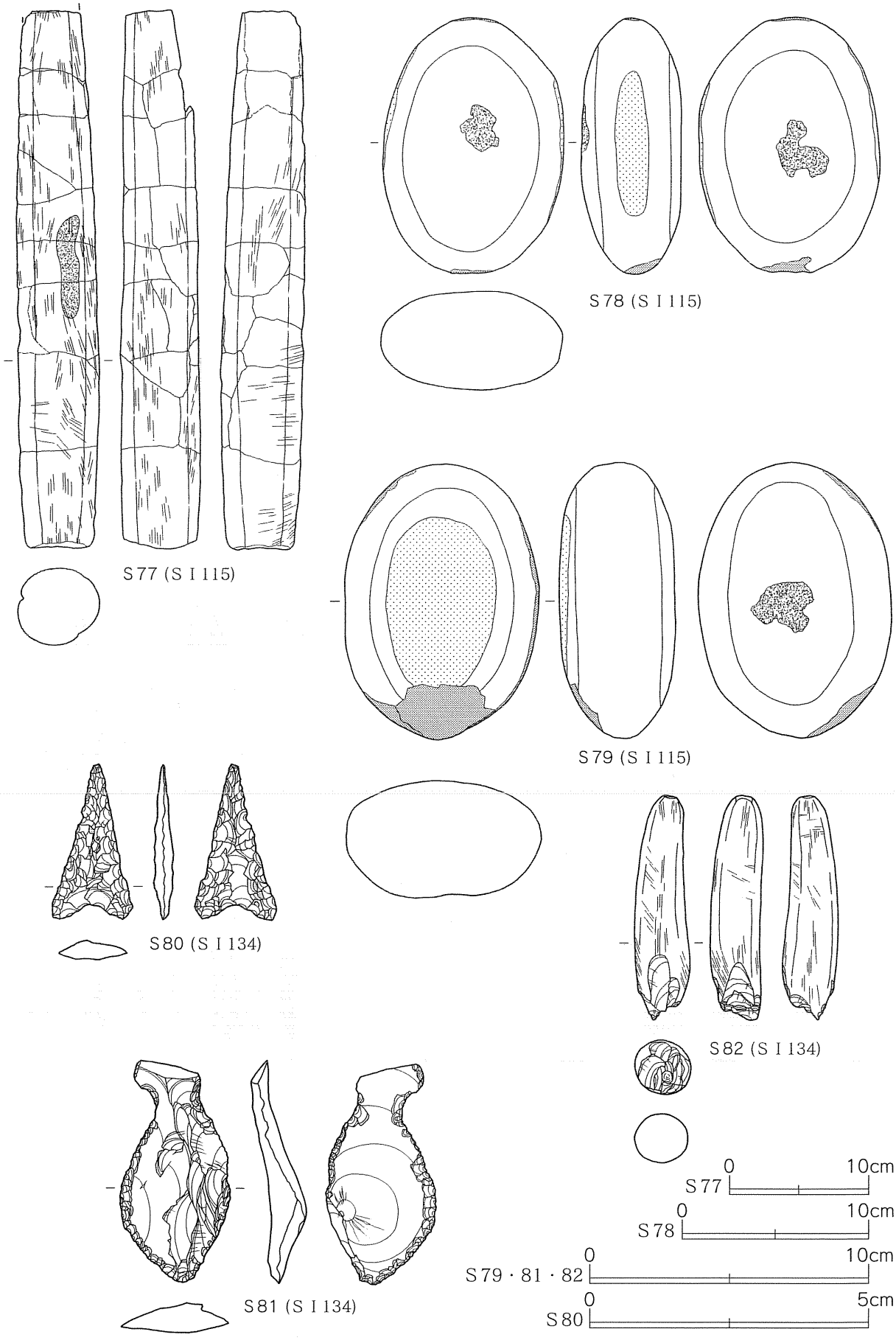


第93図　遺構内出土石器(14)

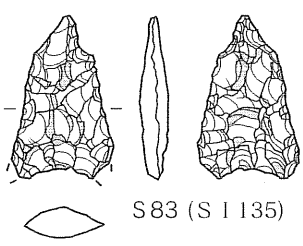


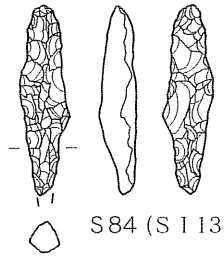


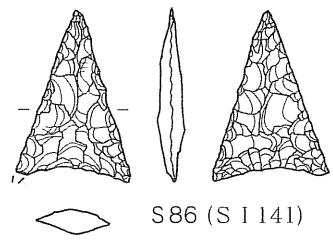
第94図　遺構内出土石器(15)

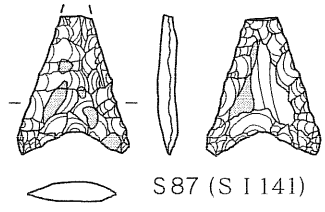


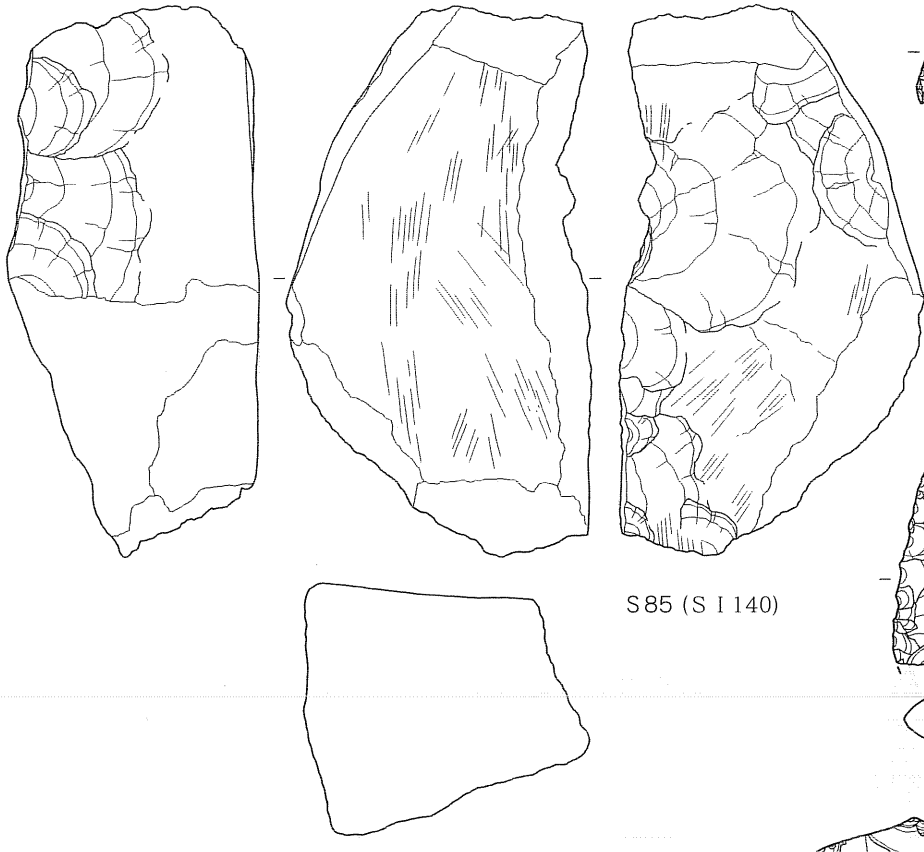
第95図　遺構内出土石器(16)

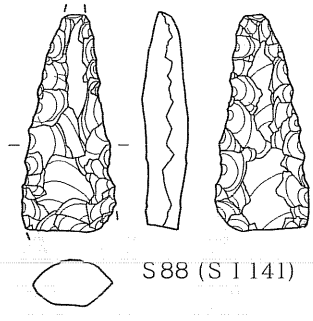

S83 (S I 135)

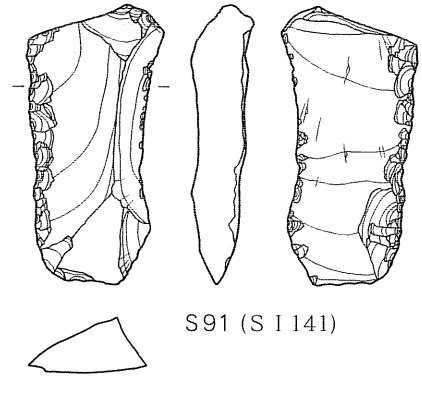

S84 (S I 135)

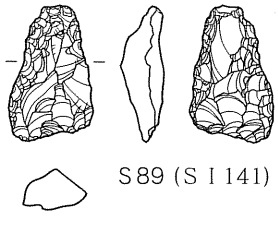

S86 (S I 141)

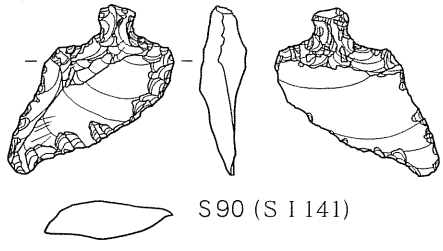

S87 (S I 141)

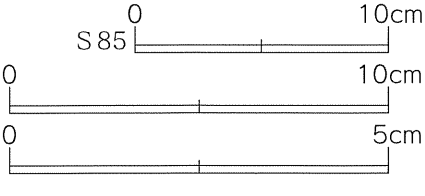

S85 (S I 140)


S88 (S I 141)

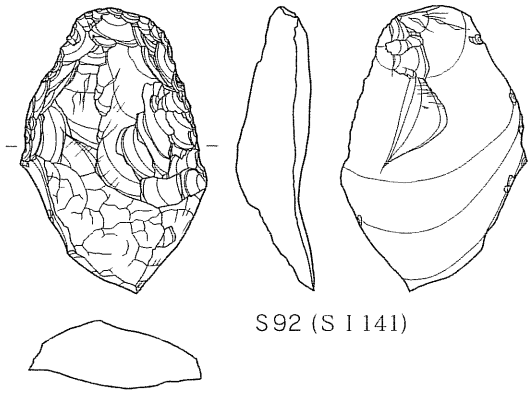

S91 (S I 141)


S89 (S I 141)

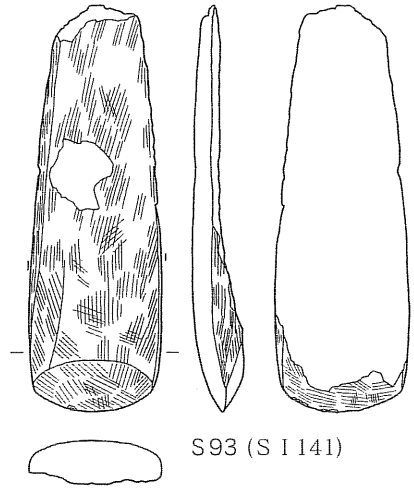

S90 (S I 141)



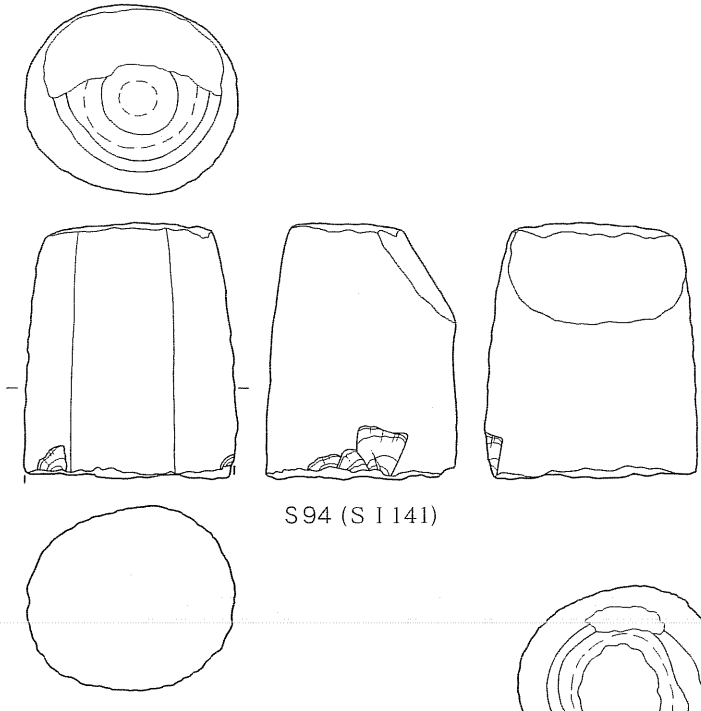
第96図　遺構内出土石器(17)



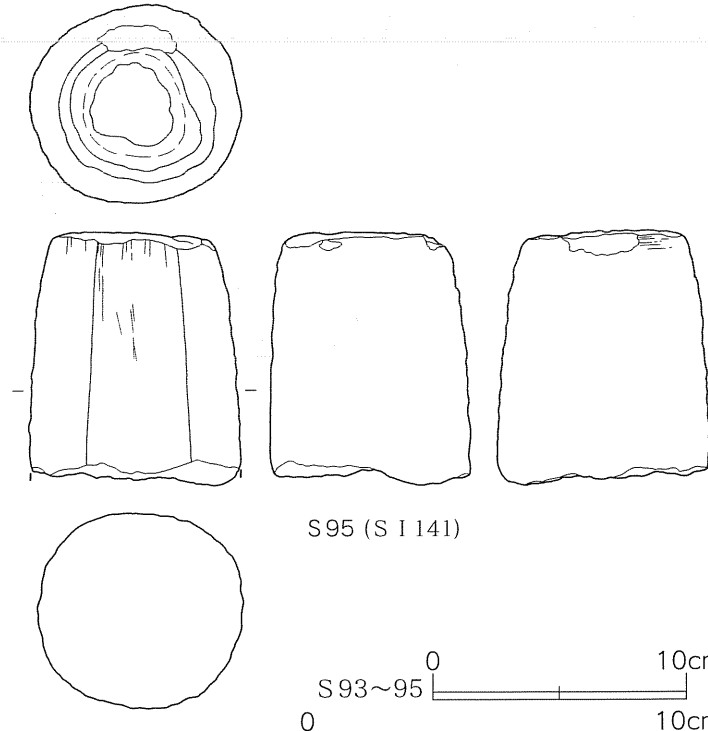
S92 (S I 141)



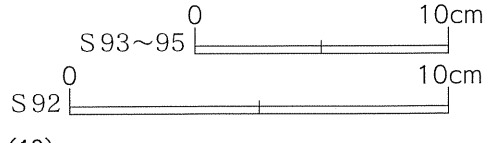
S93 (S I 141)



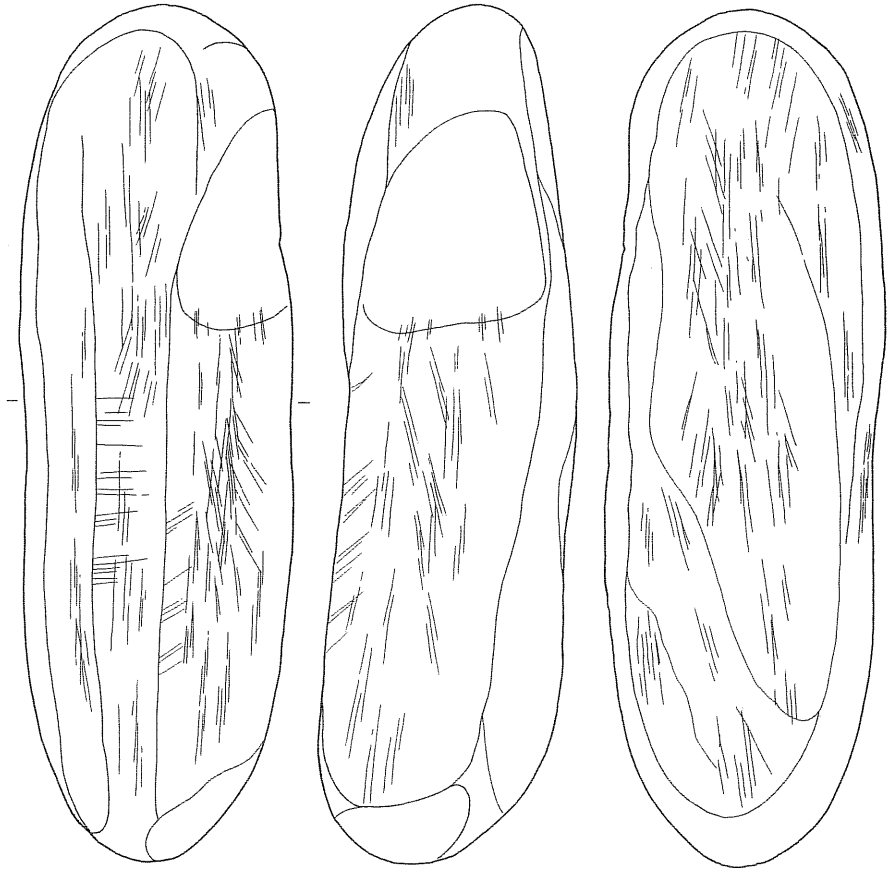
S94 (S I 141)



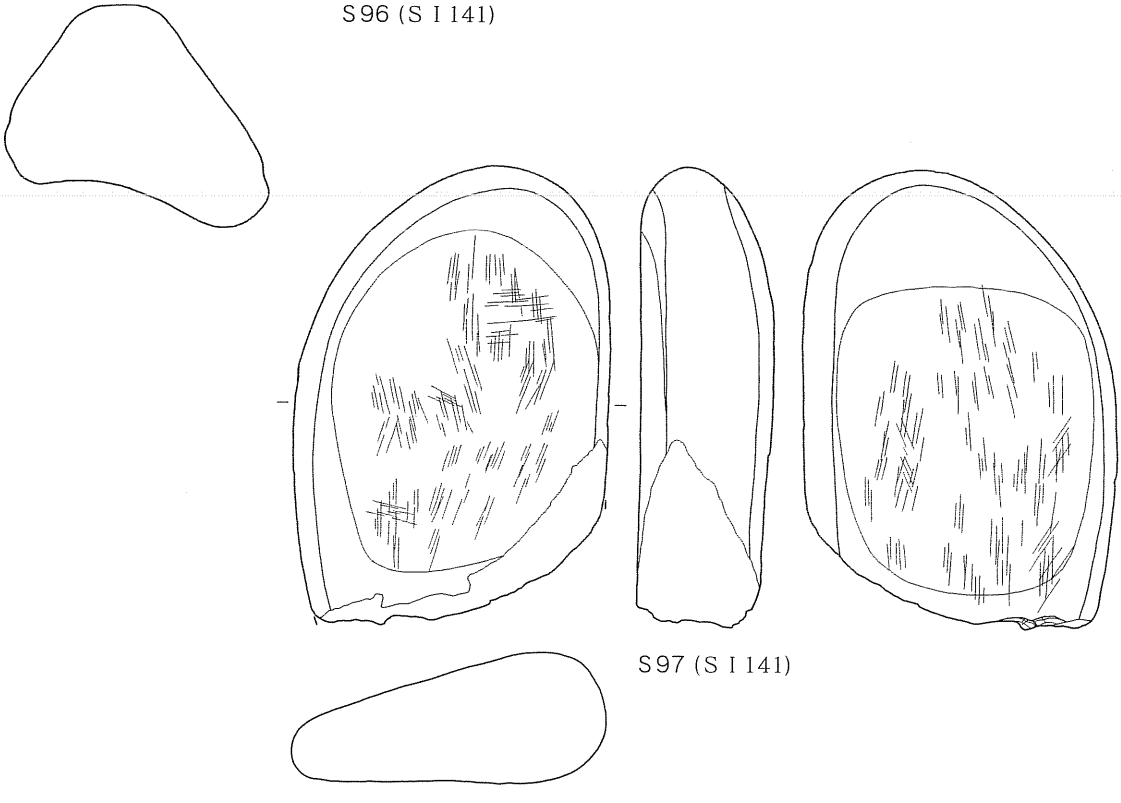
S95 (S I 141)



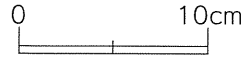
第97図　遺構内出土石器(18)



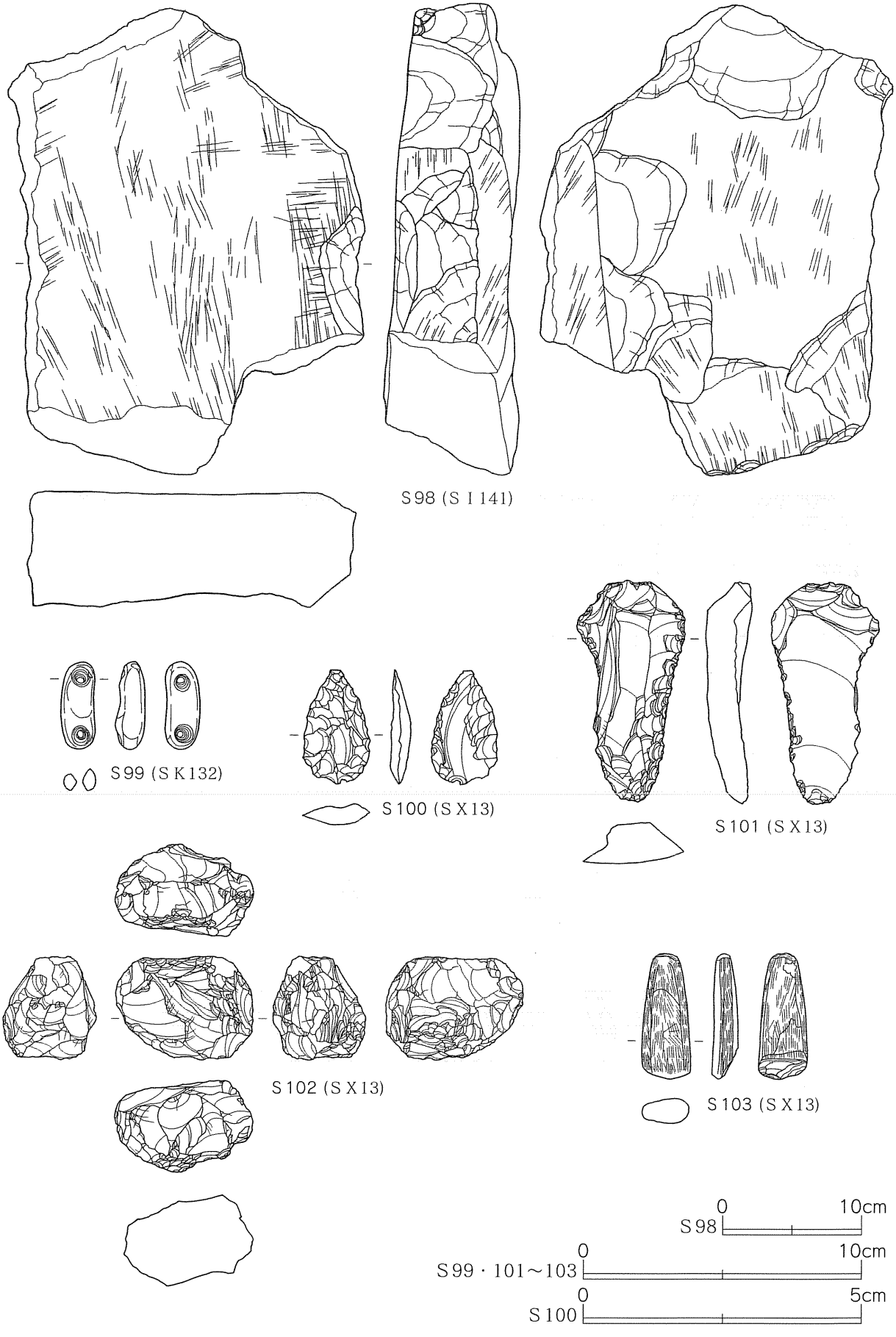
S96 (S I 141)



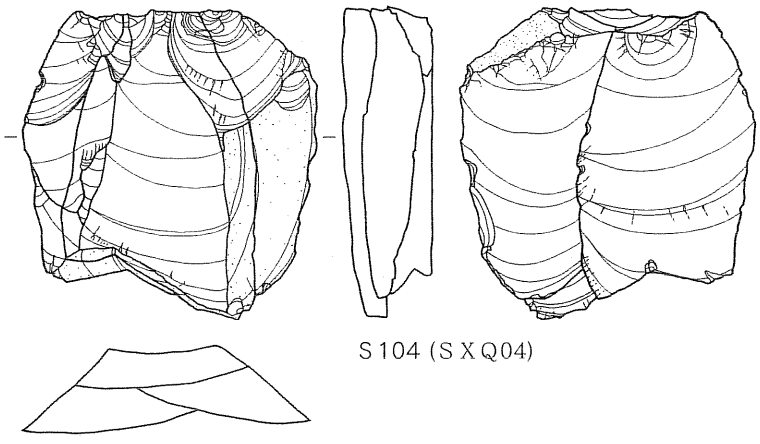
S97 (S I 141)



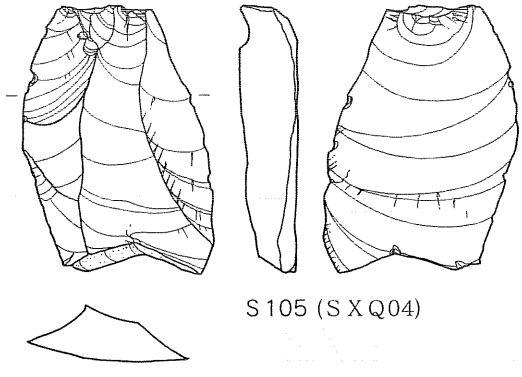
第98図　遺構内出土石器(19)



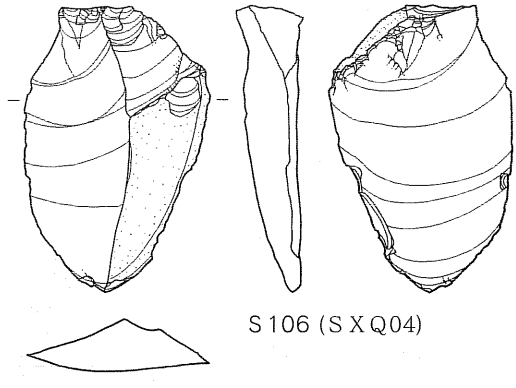
第99図　遺構内出土石器(20)



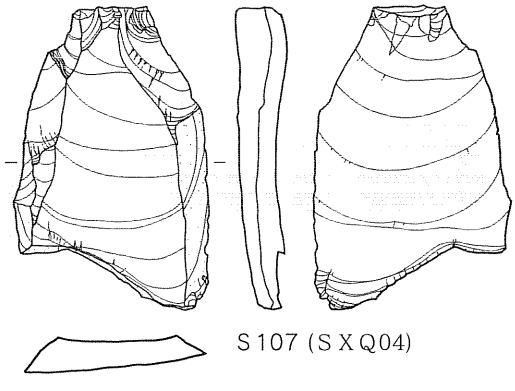
S104 (SXQ04)



S105 (SXQ04)



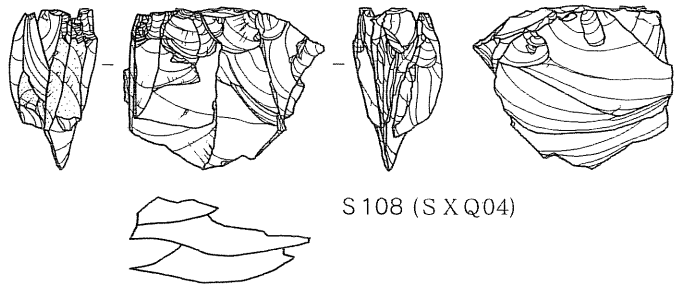
S106 (SXQ04)

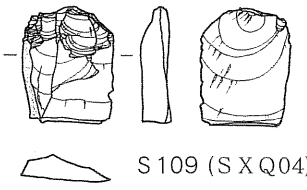


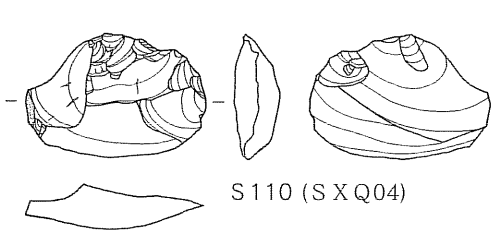
S107 (SXQ04)

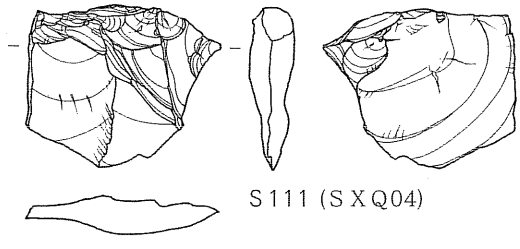
0　10cm

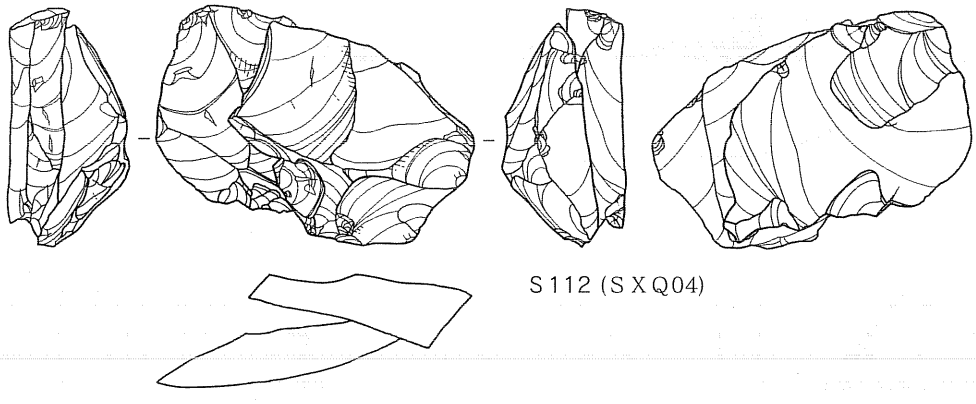
第100図　遺構内出土石器(21)

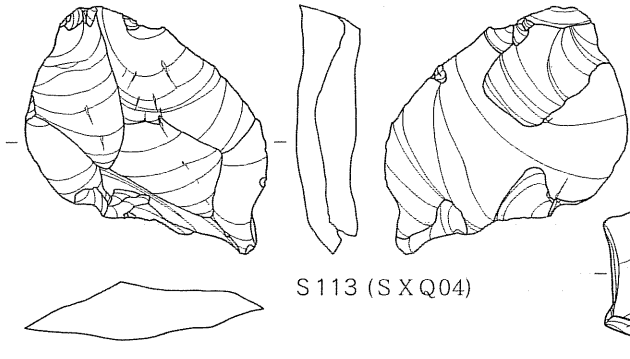

S108 (SXQ04)

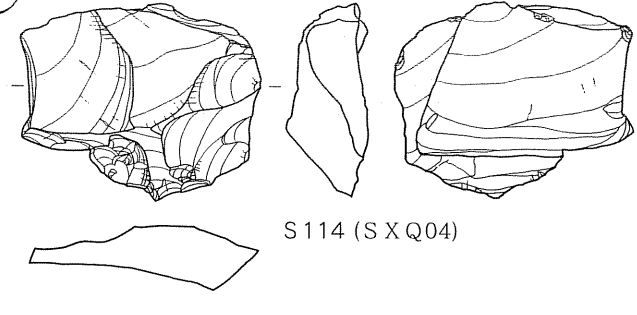

S109 (SXQ04)

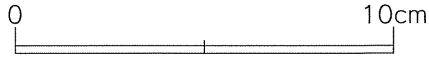

S110 (SXQ04)


S111 (SXQ04)

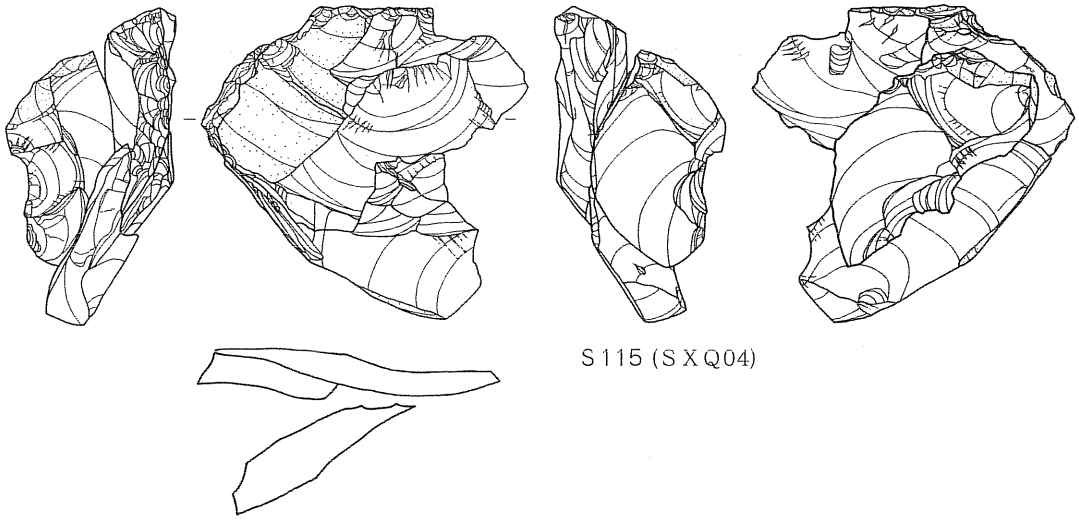

S112 (SXQ04)

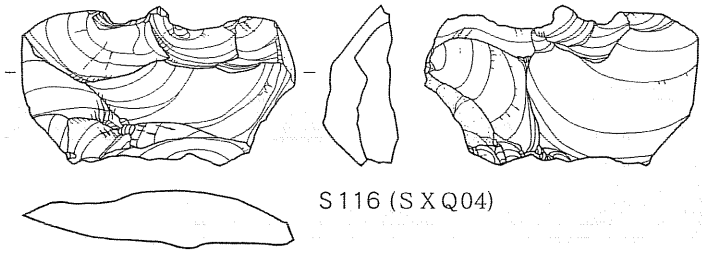

S113 (SXQ04)

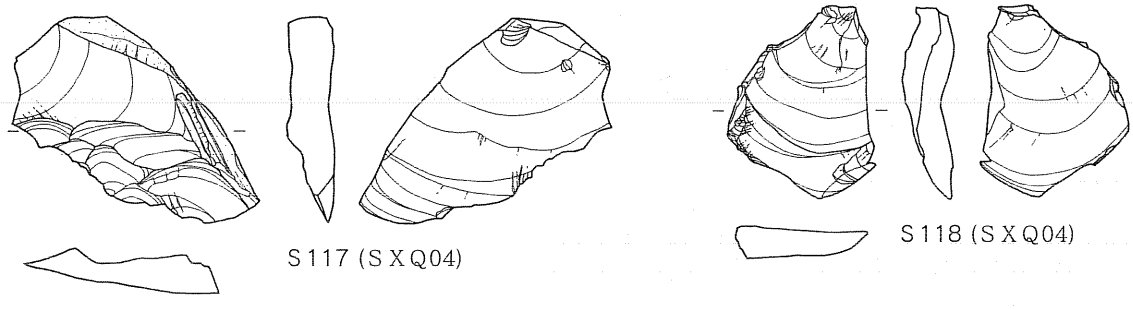

S114 (SXQ04)

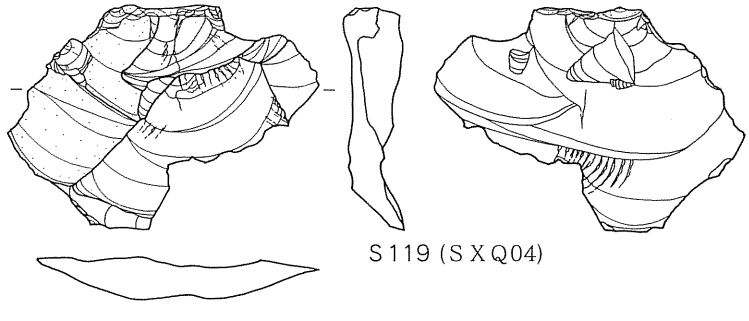


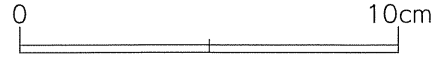
第101図　遺構内出土石器(22)



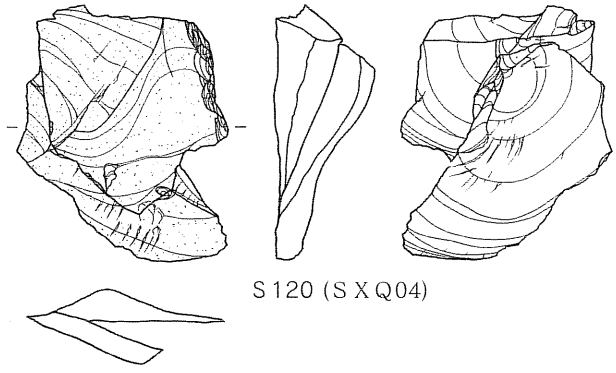


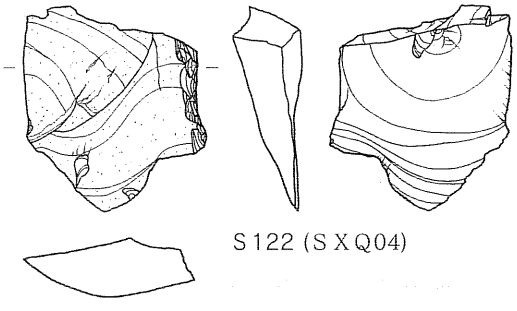


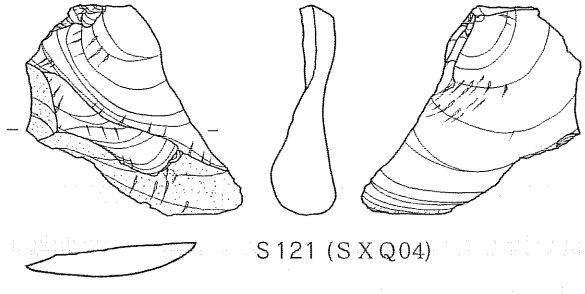


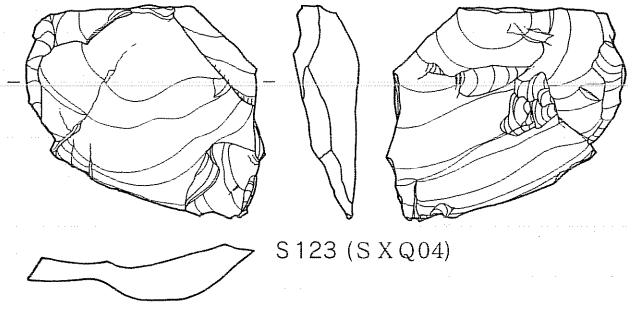


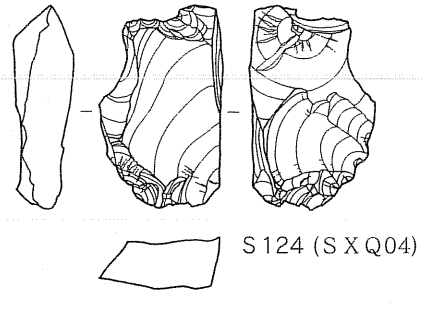
第102図　遺構内出土石器(23)

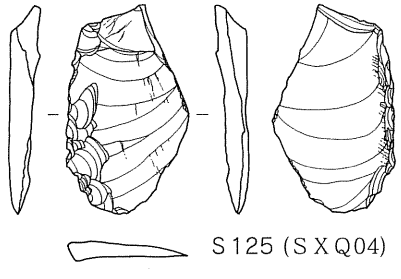

S120 (SXQ04)

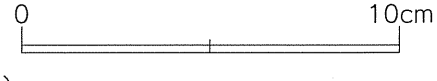

S122 (SXQ04)


S121 (SXQ04)


S123 (SXQ04)


S124 (SXQ04)


S125 (SXQ04)



第103図　遺構内出土石器(24)

ある。無文帯と全面に施す縄文を平行沈線で区画する。この下には、無文帯を曲線文で区画した文様が展開する。無文帯の端部には、鰭状の突起をもつ。

11　柱穴様ピット（第41・42図）

56基を検出したが、調査区全域では大きく2つのまとまりがある。1つは、調査区南側の東西ＭＡ～ＭＥ・南北29～35までの範囲、もう1つは東西ＬＴ～ＭＢ・南北55～59までの範囲である。

ＳＫＰ69（第41・77図）

出土遺物には、第77図の土器がある。ミニチュア土器（352）が出土した。352は深鉢である。

第3節　遺構外出土遺物

1　遺構外出土土器（第79図、図版59）

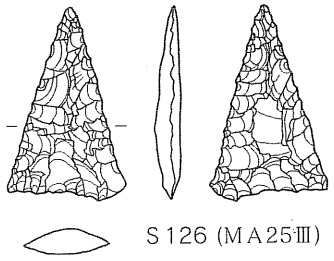
遺構外出土の土器として、深鉢（362～371）10点、高杯（372）1点、ミニチュア土器(374)　1点、円盤状土製品(373)1点、土製品（375～380）6点を掲載した。

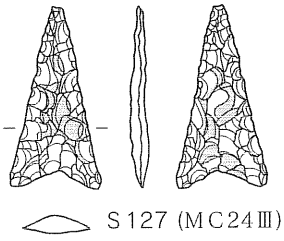
深鉢は362・363が口縁部、365～369が胴部、364・370・371が底部破片である。362は波状口縁で口縁部は外反する。口縁は無文帯で縄文との境に低い段をもつ。波頂部に刺突文を施し、裏面波頂部には鰭状突起を作る。口縁の下には、無文帯を沈線で区画した文様や、沈線で囲った刺突文がある。363の口縁は直線的に外傾し、全面に縄文を施す。胴部の365～369は、断面が三角形の隆帯で、渦巻き文や直線文を描く。高杯の372は、脚部に重畳する平行沈線や変形工字文をもつ。杯部底面の中央に円形の沈線文を描く。ミニチュア土器の374は、底面の丸い鉢である。円盤状土製品の373は、縄文土器の破片を円形に仕上げたものである。土製品の375は、円筒状の一部で平坦な頭部に弧状の沈線をもつ。376・377は鼓状の形態で、それぞれ器高6.1cm・最大幅6.5cm、器高6.1cm・最大幅5.9cmである。378は隅丸方形状の台部に、双頭状に湾曲する角状部分が付随したものである。器高は6.1cmである。角状部分の直下には、内面に貫通した穿孔部が2つづつ存在する。表裏に細かな刺突文が連続する。379は、隅丸三角形の台部頂点に円錐状の突出部がある。最大長3.6cm・最大幅3.4cm・最大厚1.25cmである。頂点には刺突が施され、そこから四方に細かな刺突文が連続する。380は隅丸三角形で、形に沿うように浅い沈線を描く。最大長4.3cm・最大幅4.1cm・最大厚1.2cmである。さらに、刺突文のある頂点から垂下した沈線は、底辺の沈線と交わりそこに刺突文を作る。

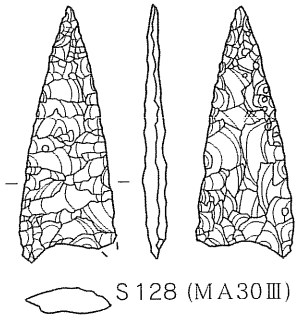
2　遺構外出土石器（第104～108図、図版62）

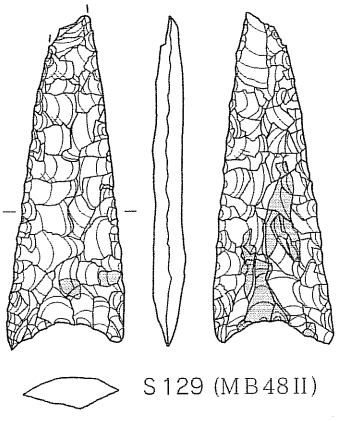
遺構外出土の石器として、石鏃（Ｓ126～Ｓ135）10点、石錐（Ｓ136）1点、石匙（Ｓ137～Ｓ147）11点、石篦（Ｓ148～Ｓ156）9点、削器（Ｓ157～Ｓ161）5点、掻器（Ｓ162～Ｓ165）4点、石箆（Ｓ166）1点、石製品（Ｓ167～Ｓ170）4点 、石斧（Ｓ171～Ｓ173）3点を掲載した。

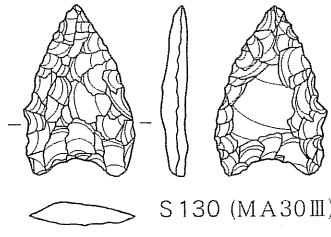
Ｓ126～Ｓ135の石鏃は、全面的に丁寧な調整を施し、Ｓ132・Ｓ133を除いて薄く仕上げる。Ｓ126Ｓ132は基部は平で 、Ｓ127～Ｓ131は凹み、Ｓ133は丸く膨らみ、Ｓ134・Ｓ135は、突起をもつ。Ｓ130～Ｓ132・Ｓ134・Ｓ135は、主要剝離面を顕著に残す。Ｓ127・Ｓ129・Ｓ134・Ｓ135は、表裏面の一部にアスファルトが付着する。Ｓ136の石錐は、先端側を細く仕上げ、その断面は三角形を呈

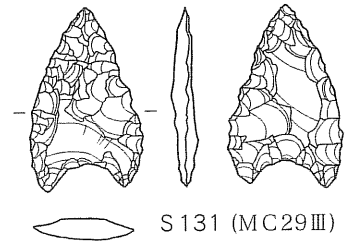

S126 (MA25Ⅲ)

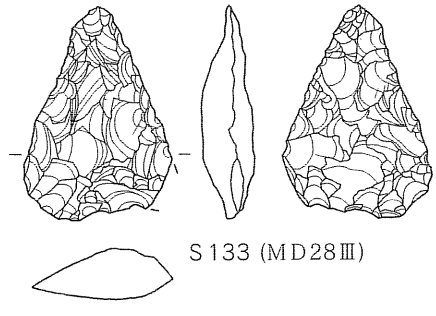

S127 (MC24Ⅲ)

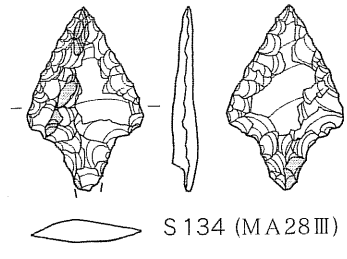

S128 (MA30Ⅲ)

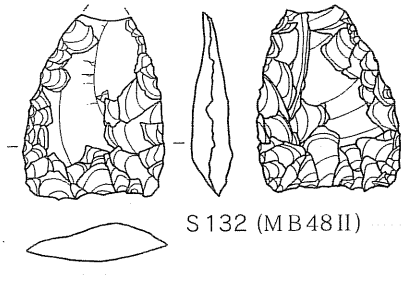

S129 (MB48Ⅱ)

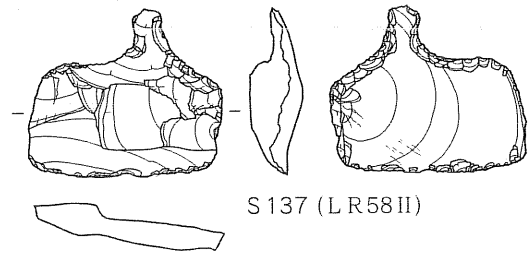

S130 (MA30Ⅲ)

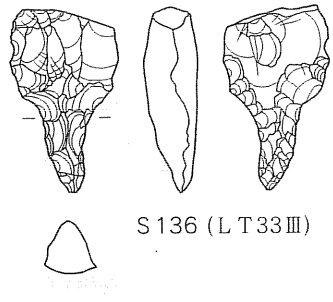

S131 (MC29Ⅲ)

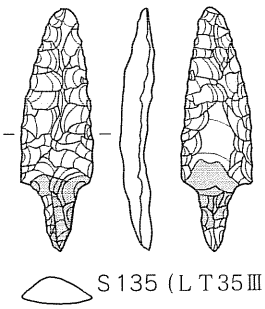

S133 (MD28Ⅲ)

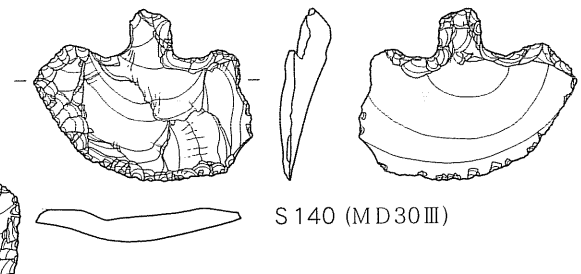

S134 (MA28Ⅲ)

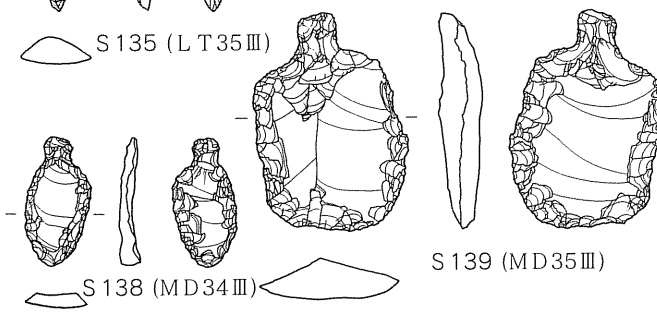

S132 (MB48Ⅱ)


S137 (LR58Ⅱ)


S136 (LT33Ⅲ)


S135 (LT35Ⅲ)


S140 (MD30Ⅲ)

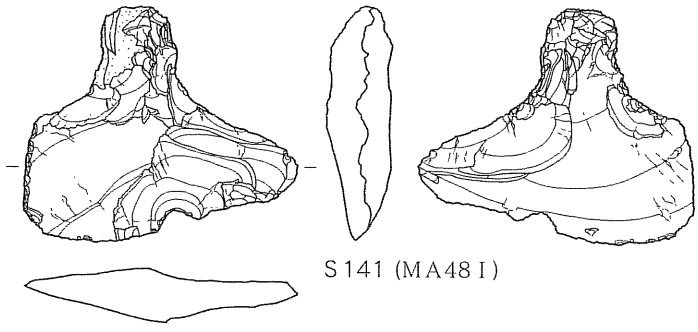

S138 (MD34Ⅲ)

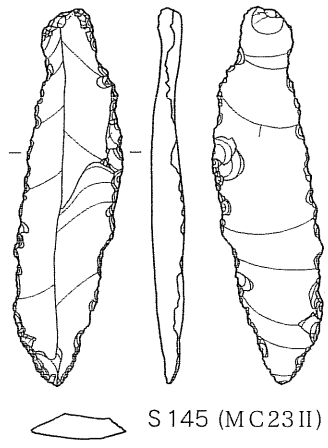
S139 (MD35Ⅲ)

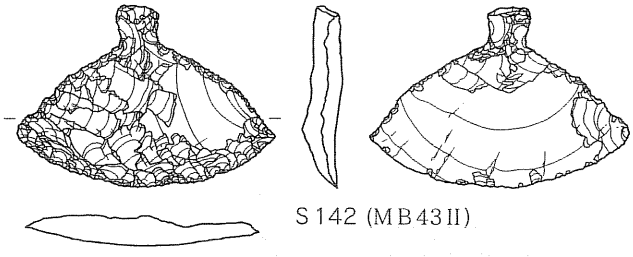
S137～140　0　10cm

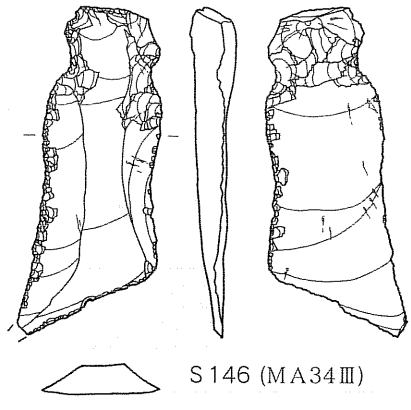
S126～136　0　5cm

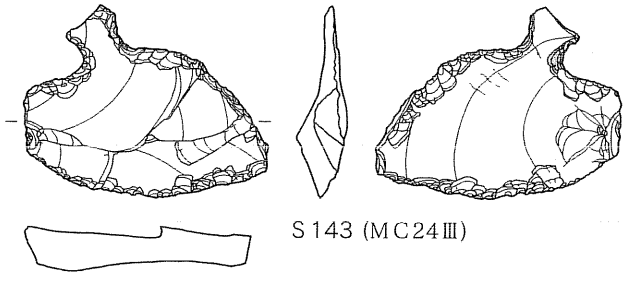
第104図　遺構外出土石器(1)

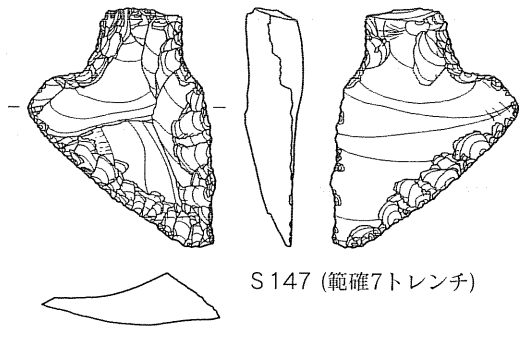

S141 (MA48Ⅰ)

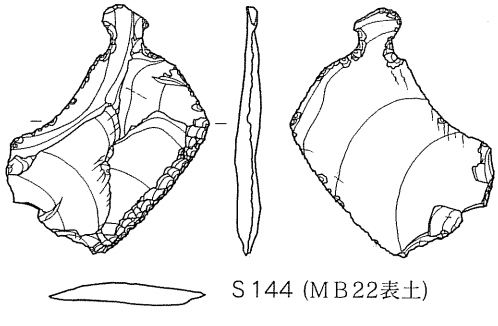

S145 (MC23Ⅱ)

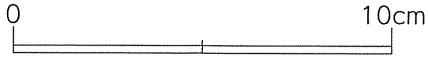

S142 (MB43Ⅱ)


S146 (MA34Ⅲ)

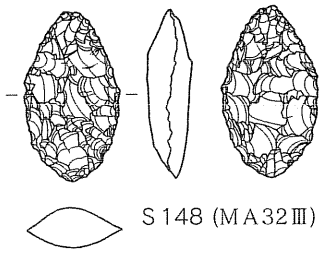

S143 (MC24Ⅲ)

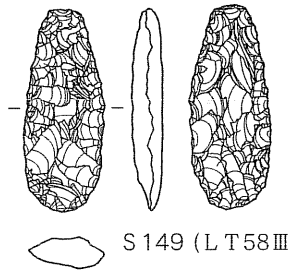

S147 (範確7トレンチ)

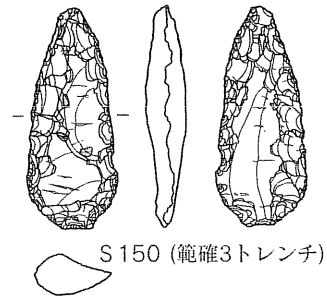

S144 (MB22表土)

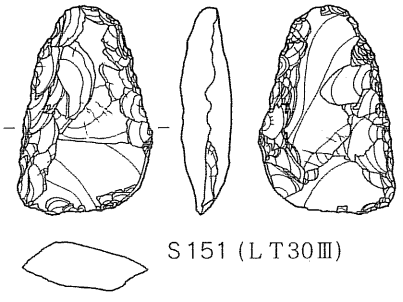


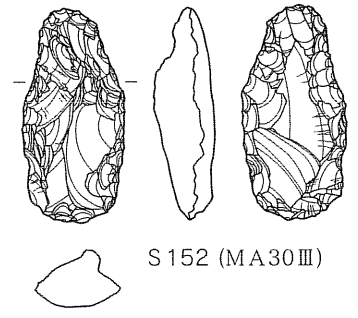
第105図　遺構外出土石器(2)

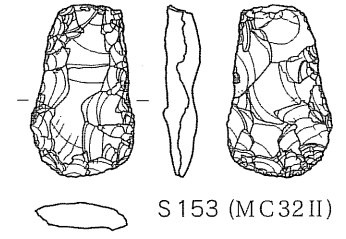

S148 (MA32Ⅲ)

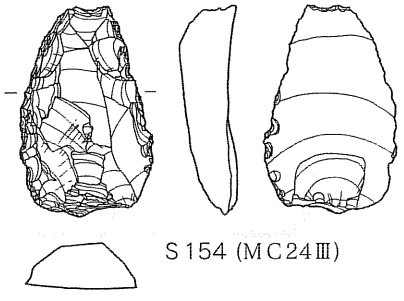

S149 (LT58Ⅲ)

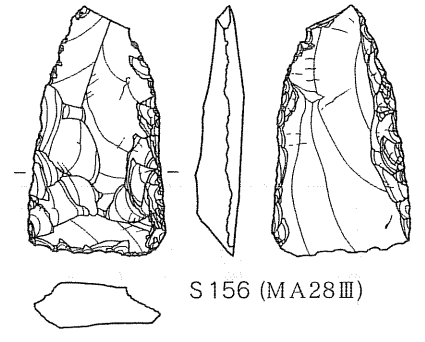

S150 (範確3トレンチ)

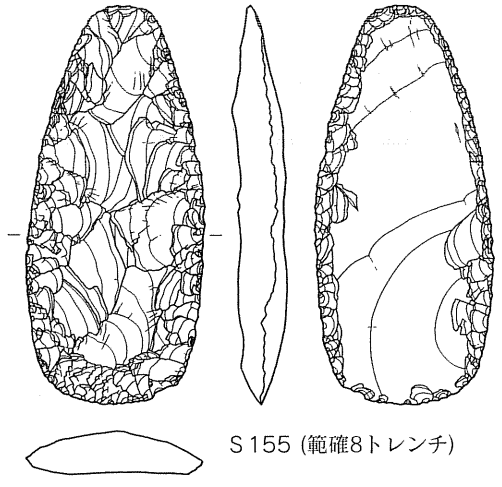

S151 (LT30Ⅲ)

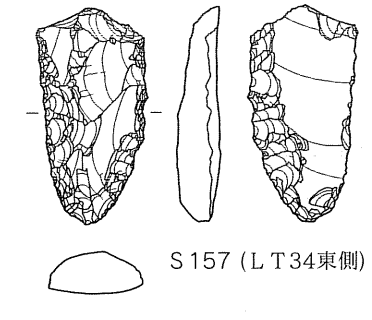

S152 (MA30Ⅲ)

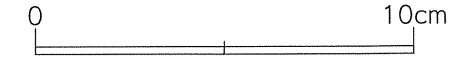

S153 (MC32Ⅱ)


S154 (MC24Ⅲ)

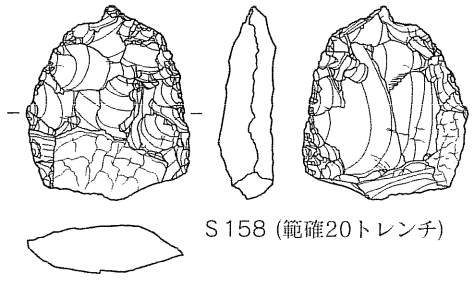

S156 (MA28Ⅲ)

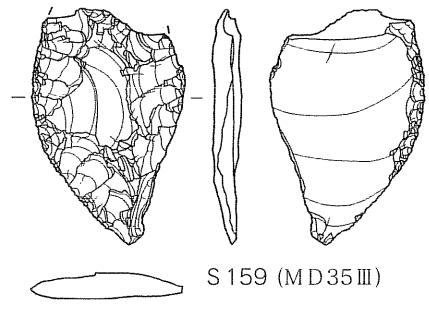

S155 (範確8トレンチ)

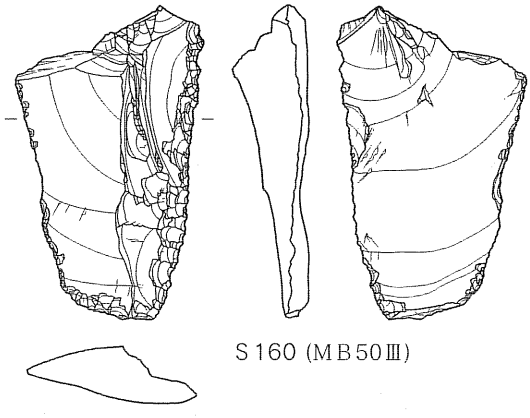

S157 (LT34東側)

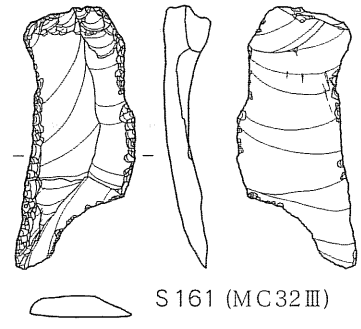


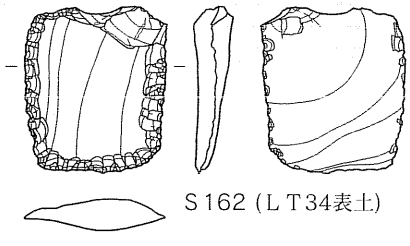
第106図　遺構外出土石器(3)

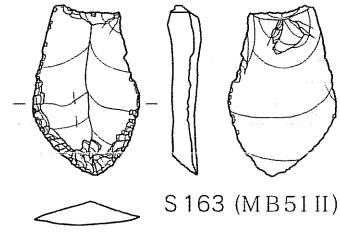

S158 (範確20トレンチ)

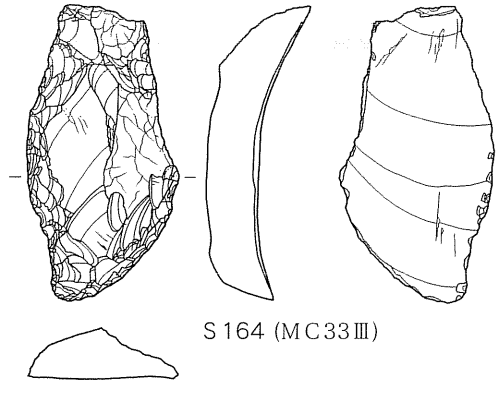

S159 (MD35Ⅲ)

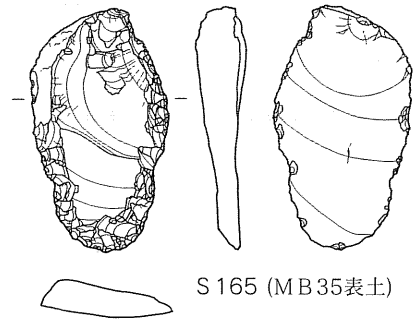

S160 (MB50Ⅲ)

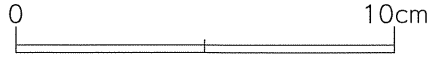

S161 (MC32Ⅲ)


S162 (LT34表土)

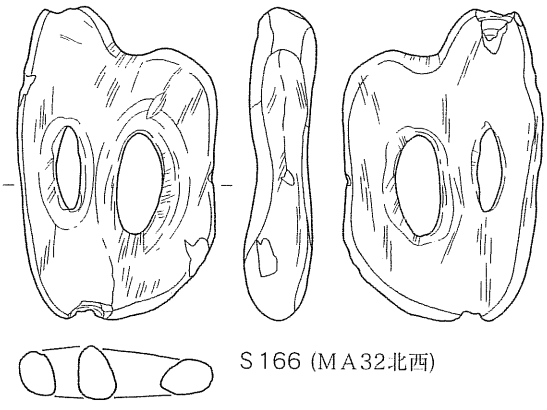

S163 (MB51Ⅱ)

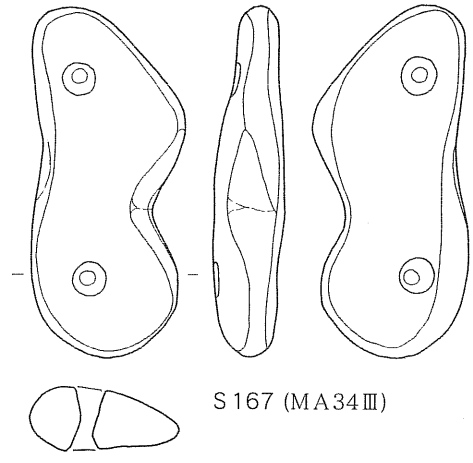

S164 (MC33Ⅲ)

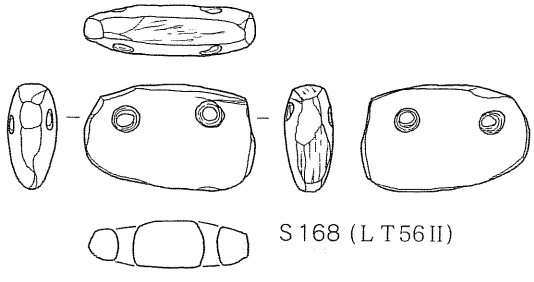

S165 (MB35表土)

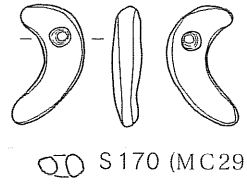


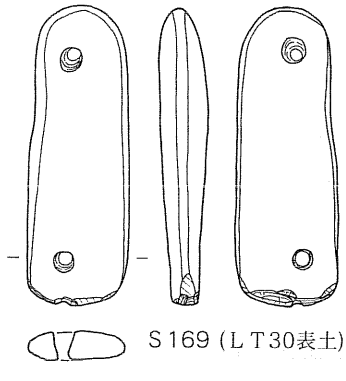
第 107 図　遺構外出土石器（４）

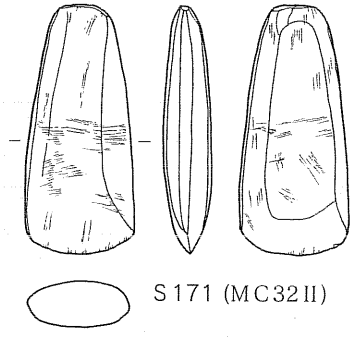

S166 (MA32北西)

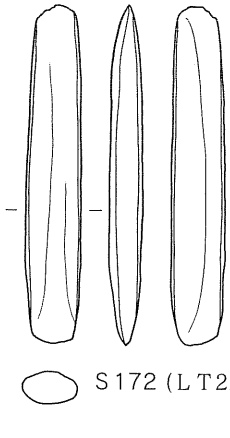

S167 (MA34Ⅲ)

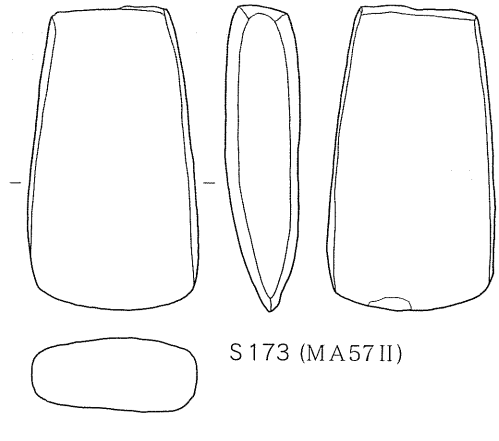

S168 (LT56Ⅱ)

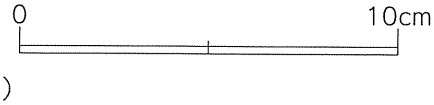

S170 (MC29Ⅲ)


S169 (LT30表土)


S171 (MC32Ⅱ)


S172 (LT22)


S173 (MA57Ⅱ)



第108図　遺構外出土石器(5)

する。S137～S147の石匙は、横長剥片素材（S137・S139～S141・S142～S144）が多く、縦長剥片素材（S138・S145・S146）が少ない。S142は、表面に丁寧な調整を施す精巧な作りである。S141・S146・S147は、摘み部が大きい特徴をもつ。S148～S156の石篦には、全面的に調整を施すもの（S148・S149)、かなりの範囲に調整が及ぶもの（S150～S153)、主要剥離面を大きく残すもの（S154～S155 ）がある。S148は、両端が尖り気味で尖頭器とすべきかもしれない。S156は、刃部に礫皮面を残し、トランシェ様石器に形態が類似する。S155は、縁片に丁寧な調整を施す精巧な作りである。S157～S161の削器は、主要剥離面を大きく残す例が多い。S158を除いたものには、1側縁もしくは2側縁に丁寧な調整を施す。S162～S165掻器は、S162の横長剥片素材以外は縦長剥片である。S162の刃部が平に仕上がる以外は、丸く収める。これらは、刃部及び両側縁に丁寧な調整を施す。S166の石笛は、中央部に大きな楕円形の2つの孔が開いている扁平な礫を素材にしている。長辺に沿って、かつ長辺の孔と連続するように、径1cmの穿孔を施す。長辺側の楕円形の孔を、指でふたして使用したものであろう。S168～S170の石製品は、小さな礫に2つ（S167～S169）もしくは1つ（S170)の穿孔を、両面から円錐状に施したものである。S167は径8～9mm、S168は径7mm、S169は径5～6mm,、S170は径6mmである。S168は、4つの側縁に擦られた痕跡を認める。紐を通して、垂飾品等に利用したものだろう。S171～S173の石斧は、全体に丁寧に磨かれている。S171とS173の基部は平坦であるが、S172は両端を蛤歯状に仕上げる。

遺物番号	器　種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石　質	推定産地
1	石鏃	SI 01	3.50	2.80	0.80	6.21	珪質頁岩	在地性
2	石鏃	SI 01	2.80	1.50	0.30	1.02	珪質頁岩	在地性
3	石匙	SI 01	7.75	3.20	1.20	24.97	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
4	掻器	SI 01	5.30	4.50	1.10	23.43	珪質頁岩	在地性
5	削器	SI 01	7.00	5.50	1.10	39.06	珪質頁岩	在地性
6	削器	SI 01	7.30	6.50	1.10	21.65	珪質頁岩	在地性
7	擦石	SI 01	39.10	14.00	7.10	5000.00	輝石安山岩	在地性
8	石皿	SI 01	9.10	11.70	3.70	329.32	凝灰質砂岩(粗粒)	在地性
9	石皿	SI 01	16.60	17.50	7.10	1130.24	凝灰岩	在地性
10	石鏃	SI 05	2.05	1.40	0.30	0.55	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
11	凹石	SI 05	17.20	8.80	6.60	1398.23	輝石安山岩	在地性
12	擦石	SI 05	10.80	10.10	6.40	985.43	凝灰質砂岩(細粒)	在地性
13	石皿	SI 05	13.45	4.40	5.00	161.11	凝灰質砂岩(粗粒)	在地性
14	掻器	SI 07	5.90	3.00	1.50	24.85	珪質頁岩	在地性
15	石錐	SI 07	5.40	1.85	1.30	10.96	珪質頁岩	在地性
16	削器	SI 07	5.10	3.50	1.30	20.49	珪質頁岩	在地性
17	磨製石斧	SI 07	7.50	3.90	1.45	67.96	変質凝灰質砂岩(緑色)	異地性
18	敲石	SI 07	10.50	7.60	5.80	305.28	凝灰岩	在地性
19	凹石(有孔)	SI 07	10.20	9.20	5.70	9244.00	軽石	異地性
20	石篦	SI 08	4.50	3.30	1.30	15.42	珪質頁岩	在地性
21	石篦	SI 08	4.15	2.15	0.90	9.04	珪質頁岩	在地性
22	掻器	SI 08	4.00	3.10	1.00	9.29	珪質頁岩(含化石)	在地性
23	削器	SI 08	8.80	4.40	1.50	42.02	珪質頁岩	在地性

第3表　石器計測一覧（1）

遺物番号	器　　種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石　　質	推定産地
24	磨製石斧	SI 09	4.50	1.80	1.30	15.81	変質凝灰質砂岩(緑色)	異地性
25	掻器	SI 10	6.20	3.90	1.20	24.90	珪質頁岩	在地性
26	敲石	SI 10	10.60	6.50	5.30	506.35	花崗閃緑岩	在地性
27	石鏃	SI 15	3.50	1.20	0.40	1.53	珪質頁岩(玉髄質・アスファルト付着)	在地性
28	石鏃	SI 14	2.20	1.40	0.40	1.08	珪質頁岩	在地性
29	削器	SI 14	5.60	3.10	1.10	14.16	珪質頁岩(含化石)	在地性
30	凹石(擦り)	SI 14	9.80	9.05	4.10	525.39	輝石安山岩	在地性
31	凹石(擦り)	SI 14	14.30	6.35	5.20	625.24	デイサイト	準在地性
32	凹石	SI 19	11.35	11.10	6.60	1119.17	輝石安山岩	在地性
33	石篦	SI 21	3.70	2.00	0.90	7.44	珪質頁岩(含化石)	在地性
34	二次加工剥片	SI 21	5.50	3.20	1.40	25.31	珪質頁岩(含化石)	在地性
35	削器	SI 21	6.05	2.90	1.20	18.45	珪質頁岩(含化石)	在地性
36	磨製石斧	SI 21	8.60	4.30	2.70	129.25	変質凝灰質砂岩(緑色縞状)	異地性
37	石皿	SI 22	12.90	16.50	4.40	564.61	凝灰質砂岩(粗粒・やや緑色変質)	在地性
38	石匙	SI 23	6.70	6.15	1.40	47.19	珪質頁岩(含化石・アスファルト付着)	在地性
39	削器	SI 25	6.55	4.80	1.90	47.00	珪質頁岩(縞状)	在地性
40	凹石(擦り)	SI 26	11.50	7.10	5.30	564.12	珪長岩	準在地性
41	磨製石斧	SKF32	7.70	4.80	2.20	160.01	変質凝灰質砂岩(緑色)	異地性
42	石篦	SI 27	5.90	2.80	1.60	26.85	珪質頁岩	在地性
43	石篦	SI 27	5.90	4.60	1.50	30.78	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
44	石匙	SI 27	6.15	5.50	1.30	33.76	珪質頁岩	在地性
45	石笛	SI 27	8.30	4.65	2.70	63.00	凝灰岩	在地性
46	石匙	SI 29	5.90	3.00	1.00	11.38	珪質頁岩	在地性
47	凹石	SI 29	7.80	7.00	5.40	378.96	輝石安山岩	在地性
48	尖頭器	SI 28	3.40	0.85	0.60	1.67	珪質頁岩(含化石)	在地性
49	尖頭器	SI 28	3.15	1.30	0.70	2.55	珪質頁岩	在地性
50	石錐	SI 28	4.15	1.20	0.90	4.43	珪質頁岩	在地性
51	石核	SI 28	8.40	6.20	5.80	270.98	珪質頁岩(一部縞状)	在地性
52	凹石	SI 28	10.25	9.45	6.50	723.41	輝石安山岩(含かんらん石)	在地性
53	凹石	SI 28	11.55	7.60	5.45	574.68	デイサイト	準在地性
54	凹石	SI 28	15.85	7.80	4.80	841.75	輝石安山岩	在地性
55	石鏃	SI 30	2.00	1.40	0.40	0.79	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
56	石鏃	SI 30	3.85	1.45	0.80	3.28	珪質頁岩	在地性
57	削器	SI 30	6.70	4.50	1.10	25.61	珪質頁岩	在地性
58	石製品(有孔)	SI 30	6.80	4.10	3.60	128.25	凝灰岩	在地性
59	削器	SI 35	8.70	4.50	1.50	60.60	珪質頁岩	在地性
60	二次加工剥片	SI 35	4.20	1.50	0.70	2.11	珪質頁岩	在地性
61	使用痕のある剥片	SI 35	8.50	4.90	1.90	47.26	珪質頁岩(縞状)	在地性
62	擦石	SI 36	10.90	9.90	4.75	768.62	輝石安山岩	在地性
63	擦石	SI 36	10.90	10.30	5.30	903.86	輝石安山岩	在地性
64	石鏃	SI 115	2.65	1.50	0.55	1.24	珪質頁岩	在地性
65	石鏃	SI 115	2.90	1.30	0.40	0.93	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
66	石鏃	SI 115	1.80	1.75	0.50	0.92	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
67	石篦	SI 115	7.40	2.30	1.20	25.46	珪質頁岩(縞状)	在地性
68	石篦	SI 115	4.10	2.15	0.90	8.06	珪質頁岩	在地性
69	石匙	SI 115	5.90	4.00	1.70	15.95	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
70	掻器	SI 115	6.00	2.80	1.00	11.22	珪質頁岩	在地性
71	削器	SI 115	5.00	2.80	1.20	14.89	珪質頁岩(縞状)	在地性
72	石錐	SI 115	5.60	1.30	1.10	5.84	珪質頁岩	在地性
73	磨製石斧	SI 115	5.55	2.30	1.05	22.80	玄武岩	在地性

第4表　石器計測一覧(2)

遺物番号	器　　種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石　　質	推定産地
74	石製品(有孔)	SI 115	9.60	2.80	2.15	66.59	凝灰岩	在地性
75	石皿	SI 115	44.50	20.10	10.80		火山礫凝灰岩	準在地性
76	台石	SI 115	10.50	16.60	7.25	2091.97	輝石安山岩	在地性
77	石棒	SI 115	38.90	6.10	5.70	1717.65	凝灰岩	在地性
78	凹石	SI 115	13.65	9.60	5.30	1012.58	輝石安山岩	在地性
79	凹石	SI 115	9.90	7.00	4.20	414.06	輝石安山岩	在地性
80	石鏃	SI 134	2.80	1.50	0.40	0.88	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
81	石匙	SI 134	8.00	4.00	2.05	29.40	珪質頁岩(縞状)	在地性
82	石製品(有孔)	SI 134	8.20	2.00	1.90	31.17	凝灰岩	在地性
83	石鏃	SI 135	2.20	1.40	0.40	0.96	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
84	石錐	SI 135	2.55	0.70	0.55	0.72	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
85	台石	SI 140	21.90	12.10	10.00		デイサイト	準在地性
86	石鏃	SI 141	2.30	1.60	0.40	0.70	珪質頁岩	在地性
87	石鏃	SI 141	1.90	1.55	0.30	0.62	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
88	石鏃	SI 141	2.90	1.30	0.70	2.02	珪質頁岩	在地性
89	石錐	SI 141	3.60	2.30	1.20	7.38	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
90	石匙	SI 141	4.55	4.40	1.30	11.08	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
91	削器	SI 141	7.45	3.65	1.80	38.89	珪質頁岩	在地性
92	削器	SI 141	7.60	5.00	2.10	57.57	珪質頁岩(縞状)	在地性
93	磨製石斧	SI 141	16.20	5.40	2.20	190.11	変質安山岩(緑色)	準在地性
94	石棒	SI 141	10.20	8.50	7.50	911.17	デイサイト	準在地性
95	石棒	SI 141	10.10	8.40	7.90	945.78	デイサイト	準在地性
96	台石	SI 141	45.80	14.50	13.50		火山礫凝灰岩	準在地性
97	台石	SI 141	24.40	16.70	7.50	4890.00	輝石安山岩	在地性
98	台石	SI 141	37.80	28.20	10.80		多孔質輝石安山岩	在地性
99	有孔石製品	SK 132	3.20	1.40	1.10	3.93	凝灰岩	在地性
100	石鏃	SX 13	2.10	1.25	0.40	0.82	珪質頁岩	在地性
101	掻器	SX 13	8.00	4.00	11.70	41.38	珪質頁岩	在地性
102	石核	SX 13	3.80	5.00	3.40	71.54	珪質頁岩(縞状)	在地性
103	磨製石斧	SX 13	4.60	1.80	1.00	13.39	緑色千枚岩	異地性
104	RQ9・13・17	SXQ 04	8.25	7.70	2.35	137.03	珪質頁岩	在地性
105	RQ17	SXQ 04	7.10	5.10	1.50		珪質頁岩	在地性
106	RQ9	SXQ 04	7.60	4.90	1.75		珪質頁岩	在地性
107	RQ13	SXQ 04	8.00	5.20	1.30		珪質頁岩	在地性
108	RQ12・15・18	SXQ 04	4.30	5.25	2.40	39.14	珪質頁岩(縞状)	在地性
109	RQ18	SXQ 04	3.15	2.40	0.85		珪質頁岩(縞状)	在地性
110	RQ15	SXQ 04	3.30	4.75	1.20		珪質頁岩(縞状)	在地性
111	RQ12	SXQ 04	4.30	5.10	1.20		珪質頁岩(縞状)	在地性
112	RQ2・22	SXQ 04	6.35	8.35	3.25	103.27	珪質頁岩(縞状)	在地性
113	RQ22	SXQ 04	6.55	6.30	1.60		珪質頁岩(縞状)	在地性
114	RQ2	SXQ 04	5.15	6.35	2.10		珪質頁岩(縞状)	在地性
115	RQ6・10・19・20	SXQ 04	8.40	9.10	4.50	85.38	珪質頁岩	在地性
116	RQ20	SXQ 04	4.20	7.20	2.00		珪質頁岩	在地性
117	RQ6	SXQ 04	5.45	6.55	1.20		珪質頁岩	在地性
118	RQ19	SXQ 04	5.10	3.85	1.40		珪質頁岩	在地性
119	RQ10	SXQ 04	5.90	8.20	1.60		珪質頁岩	在地性
120	RQ7・11	SXQ 04	6.75	5.60	2.70	44.05	珪質頁岩	在地性
121	RQ7	SXQ 04	5.50	5.80	1.80		珪質頁岩	在地性
122	RQ11	SXQ 04	5.40	4.85	1.80		珪質頁岩	在地性
123	RQ21	SXQ 04	5.65	6.40	1.75	41.81	珪質頁岩(縞状)	在地性

第5表　石器計測一覧(3)

遺物番号	器　種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石　質	推定産地
124	RQ8	SXQ 04	5.35	3.30	1.60	27.72	珪質頁岩	在地性
125	RQ1	SXQ 04	5.55	3.20	0.85	10.83	珪質頁岩	在地性
126	石鏃	MA25Ⅲ	2.60	1.60	0.40	0.98	珪質頁岩(含化石)	在地性
127	石鏃	MC24Ⅲ	2.40	1.25	0.30	0.50	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
128	石鏃	MA30Ⅲ	3.40	1.30	0.40	1.07	珪質頁岩	在地性
129	石鏃	MD30Ⅲ	4.45	1.60	0.50	2.66	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
130	石鏃	MA30Ⅲ	2.30	1.50	0.40	0.99	玉髄	在地性
131	石鏃	MC29Ⅲ	2.50	1.55	0.40	0.85	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
132	石鏃	MB48Ⅱ	2.50	1.90	0.60	2.31	珪質頁岩(含化石)	在地性
133	石鏃	MD28Ⅲ	2.80	2.00	0.80	3.18	珪質頁岩(縞状)	在地性
134	石鏃	MA28Ⅲ	2.50	1.60	0.40	0.85	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
135	石鏃	LT35Ⅲ	3.20	1.00	0.50	1.04	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
136	石錐	LT33Ⅲ	2.50	1.50	0.70	2.06	珪質頁岩	在地性
137	石匙	LR58Ⅱ	4.50	5.20	1.45	18.49	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
138	石匙	MD34Ⅲ	3.40	1.75	0.65	2.58	珪質頁岩	在地性
139	石匙	MD35Ⅲ	5.80	4.10	1.70	22.74	珪質頁岩	在地性
140	石匙	MD30Ⅲ	4.60	5.80	1.40	16.49	珪質頁岩	在地性
141	石匙	MA48Ⅰ	6.30	7.40	1.80	49.45	玉髄	在地性
142	石匙	M843Ⅱ	4.80	7.00	1.10	22.99	珪質頁岩	在地性
143	石匙	MC24Ⅲ	5.10	6.60	1.40	29.18	珪質頁岩(含化石)	在地性
144	石匙	MB22 表土	6.60	5.50	0.70	16.50	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
145	石匙	MC23Ⅱ	10.10	3.00	0.90	20.05	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
146	石匙	MA34Ⅲ	8.70	3.80	1.30	28.96	珪質頁岩(縞状・含化石)	在地性
147	石匙	7トレ10m	6.35	5.05	1.60	35.22	珪質頁岩	在地性
148	石篦	MA30Ⅰ	4.55	2.60	1.25	13.24	珪質頁岩(縞状・含化石)	在地性
149	石篦	LT58Ⅲ	5.40	2.20	0.90	10.90	珪質頁岩(縞状)	在地性
150	石篦	3トレ 20m	5.85	2.50	1.10	13.72	珪質頁岩(アスファルト付着)	在地性
151	石篦	LT30Ⅲ	5.50	3.65	1.40	26.97	珪質頁岩	在地性
152	石篦	MA30Ⅲ	5.65	2.80	1.65	23.98	珪質頁岩(含化石)	在地性
153	石篦	MC32Ⅱ	4.55	2.85	1.00	12.30	珪質頁岩(縞状)	在地性
154	石篦	MC24Ⅲ	5.60	3.60	1.55	30.01	珪質頁岩	在地性
155	石篦	8トレ 10m	10.70	4.70	1.50	71.69	珪質頁岩(玉髄質)	在地性
156	石篦	MA28Ⅲ	6.70	3.70	1.40	28.45	珪質頁岩(含化石)	在地性
157	削器	LT34東側	5.80	3.00	1.30	20.89	珪質頁岩(縞状・含化石)	在地性
158	削器	20トレ	5.10	4.40	1.50	34.61	珪質頁岩	在地性
159	削器	MD35Ⅲ	6.30	4.10	0.85	20.44	珪質頁岩	在地性
160	削器	MB50Ⅱ	8.30	5.10	2.10	49.12	珪質頁岩(縞状・含化石)	在地性
161	削器	MC32Ⅲ	7.00	3.10	1.30	15.18	珪質頁岩	在地性
162	掻器	LT34 表土	4.40	3.90	1.10	15.32	珪質頁岩(含化石)	在地性
163	掻器	MB51Ⅱ	4.50	2.90	0.90	9.32	珪質頁岩	在地性
164	掻器	MC33Ⅲ	7.80	4.10	2.80	53.38	珪質頁岩(含化石)	在地性
165	掻器	MB35 表土	6.50	3.70	1.40	23.83	珪質頁岩	在地性
166	石笛	MA23 北西	8.30	5.40	2.00	48.07	凝灰岩	在地性
167	石製品(有孔)	MA34Ⅲ	9.30	4.00	1.95	78.81	デイサイト	準在地性
168	石製品(有孔)	LT56Ⅱ	2.85	4.50	1.30	15.42	凝灰岩	在地性
169	石製品(有孔)	LT30 表土	7.90	2.60	1.30	32.95	凝灰岩	在地性
170	石製品(有孔)	MC29Ⅲ	3.20	1.90	0.80	3.31	凝灰岩	在地性
171	磨製石斧	MC32Ⅱ	6.60	2.90	1.30	38.88	緑色岩	異地性
172	磨製石斧	LT22	9.00	1.50	0.90	23.15	黒色千枚岩	異地性
173	磨製石斧	MA57Ⅱ	8.10	4.50	2.00	135.80	輝緑岩	異地性

第6表　石器計測一覧(4)

第5章　自然科学分析

第1節　放射性炭素年代測定

1．放射性炭素年代測定について

古館堤頭Ⅱ遺跡から出土した炭化物試料5点の放射性炭素年代をAMS法にて測定した。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析器(AMS)にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別の補正を行ったあと、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代値(yrBP: AD1,950年から何年前かを示した値)を算出した。

なお、年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用して年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料の^{14}C計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の^{14}C計数率の比が$^{14}C_{(Sample)}／{}^{14}C_{(Modern)} \geqq 1$の時は、Modernと表示する。

2．同位体分別の補正について

表示した同位体比(‰)は標準値からのずれを示し、$\delta^{13}C$の値は、試料炭素の$^{13}C／{}^{12}C$比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて、$\delta^{13}C=[\{(^{13}C／{}^{12}C)_{(sample)}-(^{13}C／{}^{12}C)_{(PDB)}\}／(^{13}C／{}^{12}C)_{(PDB)}]\times1000$によって算出された値である。試料の$\delta^{13}C$値を-25.0‰に規格化することにより、測定された$\delta^{13}C$の値を用いて^{14}C濃度を補正し、これを用いて^{14}C年代値を算出した。したがって、表示した^{14}C年代値は同位体分別効果による測定誤差を補正した年代値である。

3．暦年代較正について

暦年代較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代値(yrBP)に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を補正し、より正確な年代を求めるために^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の^{14}C年代の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代値を算出する。較正暦年代値の算出にRadiocarbon Calibration Program* CALIB rev. 4.3 {Reference for datasets used: Stuiver,M., Reimer, P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk,M. (INTCAL98 : Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40 : 1041-1083}を使用した。なお、交点年代値は^{14}C年代値に相当する較正曲線上の年代値であり、1σ年代幅は^{14}C年代誤差に相当する較正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で1σ年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代への較正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては較正暦年代値を*****またはModernと表示する。また、AD1,955*はModernを意味する。但し、一万年以前のデータはまだ不完全であるため注意する必要がある。

較正暦年代値に関しては、^{14}C年代値の参考として記載しているものである。

測定番号 (測定方法)	試料データ	δ13C PDB(‰)	14C年代値 (yrBP±1σ)	較正暦年代値	
				交点年代値	1σ年代幅
PLD-811 (AMS)	炭化物 No.1 (ヒノキ科) SI01 炉深鉢③下	-25.0	4,135±25	cal BC2,845 cal BC2,815 cal BC2,675	cal BC2,860to2,830 cal BC2,825to2,810 cal BC2,775to2,775 cal BC2,755to2,720 cal BC2,705to2,660 cal BC2,650to2,625 cal BC2,605to2,605
PLD-812 (AMS)	炭化物 No.4 (クリ) SI22 炉深鉢	-26.4	4,180±30	cal BC2,865 cal BC2,805 cal BC2,780 cal BC2,770 cal BC2,760 cal BC2,715 cal BC2,710	cal BC2,875to2,860 cal BC2,810to2,745 cal BC2,725to2,700
PLD-813 (AMS)	炭化物 No.7 (クリ) SI36 炉深鉢	-26.3	4,050±30	cal BC2,575 cal BC2,510 cal BC2,505	cal BC2,620to2,610 cal BC2,595to2,595 cal BC2,580to2,560 cal BC2,525to2,495
PLD-814 (AMS)	炭化物 No.8 (トネリコ属) SI115 南東床	-26.2	3,960±25	cal BC2,470	cal BC2,545to2,545 cal BC2,490to2,480 cal BC2,475to2,460
PLD-815 (AMS)	炭化物 No.9 (クリ) SI115 P12覆土	-26.0	4,050±30	cal BC2,575 cal BC2,510 cal BC2,505	cal BC2,620to2,610 cal BC2,595to2,595 cal BC2,580to2,565 cal BC2,520to2,495

引用文献
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代、p.3-20.
Stuiver,M.andReimer,P.J.(1993)ExtendedI4CDatabaseandRevisedCALIB3.014CAgeCalibrationProgram,Radiocarbon,35,p.215-230.

第7表　放射性炭素年代測定結果

第2節　出土炭化材の樹種同定

1．はじめに

ここでは、当遺跡の竪穴住居跡(SI01・07・14・22・28・35・36・115)から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。SI01・22・36・115については、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定が行われている(第1節)。

2．炭化材樹種同定の方法

樹種同定は、炭化材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柾目)の組織を走査電子顕微鏡で観察し決定した。横断面(木口)は材の軸方向(伸長方向)に直交する面で、炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出した。接線断面(板目)は年輪線に平行する縦方向の面であり、放射断面(柾目)は樹芯を通る直線方向で縦に割った面である。接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出した。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、走査電子顕微鏡(日本電子株式会社製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。残りの炭化材試料は、秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

3．結果

10試料からは、針葉樹のヒノキ科(ヒノキ属に類似)、落葉広葉樹のクリ・ケヤキ・トネリコ属が検出された(第8表)。SI22とSI36の炉深鉢から出土した炭化材はいずれもクリであった。クリはこのほかにもほとんどの竪穴住居跡から検出された。試料6(炉前庭部)は、炭化材では無く粘土塊のようであった。その表面には炭化した非常に細い草の茎状のものが見られたが、それ以上は不明であった。

試料	遺構	検出樹種	備考	AMS用試料
1	SI01　竪穴住居跡 炉深鉢③下	ヒノキ科	小破片複数 ヒノキ属に類似する	r:1cm 約8年輪破片使用
2	SI07　竪穴住居跡 褐色西側	ケヤキ	r:0.5～2.0cm 破片複数	－
3	SI1　4竪穴住居跡 覆土	クリ	r:1.0cm 以下破片複数 樹芯部や節部破片	－
4	SI22　竪穴住居跡 炉深鉢	クリ	r:1.0～1.5cm 破片複数	1破片の外側5年輪使用
5	SI28　竪穴住居跡 ベルト南床	クリ	r:1.0cm(6年輪)破片	
6	SI35　竪穴住居跡 炉前庭部	－	粘土塊	－
7	SI36　竪穴住居跡 炉深鉢	クリ	r:1.8cm 以下破片複数	r:1.8cm 7年輪破片使用
8	SI115　竪穴住居跡 南東床	クリ	φ2.5cm(3年輪)と φ3.5cm(6年輪)の丸木	－
		トネリコ属	φ3cm(5年輪)丸木	トネリコ属を使用
9	SI11　5竪穴住居跡 P12 覆土	クリ	r:3.5cm 以下破片複数	r:3.5cm(約25年輪)の 外側7年輪使用
10	SI115　竪穴住居跡 南北ベルト南	クリ	r:1.5cm(24年輪)破片	－

第8表　出土炭化材樹種同定結果

同定された樹種の材組織の記載

ヒノキ科　Cupressaceae　図版63　1a-1c(試料1)

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は少なく、晩材部の仮道管の肥厚はあまり厚く無い。放射仮道管の壁は平滑である。早材部の分野壁孔は1分野に主に2個が水平に並び、壁孔の輪郭は丸い。このような特徴からヒノキ科の材と同定した。早材部の分野壁孔は輪郭が大きく2個が水平に配列していることから、ヒノキ属の材に類似していた。しかし、破片が小さく土が染み込んでいるなど保存も悪いので十分に観察できたとはいえず、属まで特定はできなかった。

ヒノキ科には、ネズミサシ属・アスナロ属・ネズコ属・ヒノキ属がある。このうちヒノキは福島県以南に、サワラは岩手県以南に自然分布しており、現在では秋田県内にヒノキ属は自然分布していない。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版63　2a-2c(試料4)

年輪の始めに中型または大型の管孔からなる孔圏部があり、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

ケヤキ　Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ニレ科　図版63　3a-3c(試料2)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では小型の管孔が集合し接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～6細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅い。

トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科　図版64　4a-4c(試料8)

年輪の始めに中型の管孔が数層配列し徐々に径を減じ、晩材部は単独または2個が放射方向に複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材組織から種類を識別することはできていない。材は重硬で弾力性があり折れ難くい。

4．まとめ

複数の竪穴住居跡から出土した炭化材破片の多くは、クリであった。関東地方から東北地方の縄文時代の遺構からは、クリの出土例が多いことはすでによく知られているが、当遺跡においてもクリが多く認められることが確認された。

SI01の炉深鉢③下から出土した炭化材はヒノキ科であった。この試料は、小破片で保存もあまり良くなかったが、ヒノキ科の材であり分野壁孔の大きさとその配置や壁孔数などから、ヒノキ属に最も類似ていた。多くの図鑑類によるとヒノキ科のうち、ヒノキの分布は福島県以南であり、サワラは岩手県以南と記され、当地域にはヒノキ属は自然分布していない。しかし、青森県の三内丸山遺跡においても、第6鉄塔地区のVIb層(円筒下層a式土器を包含)からごく僅かであるがヒノキの種子の破片が報告されている(南木ほか、1998)。従って縄文時代にはヒノキ属は少ないながら生育していた時期があった可能も考えられ、今後も注意して遺物を検討する必要が感じられた。

引用文献

南木睦彦・辻　誠一郎・住田雅和、1998、三内丸山遺跡第6鉄塔地区VIa，VIb層から産出した大型植物遺体（化石）、35-51、「三内丸山遺跡IX」、青森県教育庁文化課

第6章　まとめ

古館堤頭Ⅱ遺跡は、八郎潟残存湖北東岸の森岳段丘が開析されてできた台地上に、縄文時代中期末葉に営まれた集落跡である。

調査対象区域は、幅20m、長さ275mと南北に細長く、中央部南寄りを横断するように上幅約30mの浅い沢地形が、東側の現在堰止められて「古館堤」となっている大きな沢地形に流入するように傾斜して開析していた。

「古館堤」となっている大きな沢地形に流入する、この沢地形の南側は、2本の沢地形に挟まれて比高差が小さく、狭小な台地状を呈しており、中小規模の竪穴住居跡が集中していた。また、北側は広範な台地状を呈しており、大型の竪穴住居跡や小規模な竪穴住居跡が疎らに分布していた。

沢地形の南側では竪穴住居跡が、西側が屈曲する弧状に分布しているように観察されることから、地形をも考慮すると、環状に配置されているように考えられる。南側の竪穴住居跡群を所謂「環状集落」の一部とすると、弧状の内部に検出した掘立柱建物跡・土坑などは、広場とみられる空間に造られた遺構群の一部と解釈することができる。また、北側でも、規模の大きな「環状集落」が形成されていたと考えられる。

竪穴住居跡の平面形は、ほぼ円形を呈する。竪穴住居跡の柱穴配置を観察すると、①方形に6～7本の柱を配置、②亀甲型に6本の柱を配置、③長方形に6本の柱を配置、④凸型に5本の柱を配置、⑤壁面近くに対峙するように2本の柱を配置する形態が見られるが、上部構造を想定できる柱穴配置は少なかった。

竪穴住居跡内部に造られた炉の形態は、①土器埋設部＋燃焼部＋前庭部からなる複式炉、②土器埋設部＋燃焼部からなる複式炉、③石組み部＋燃焼部＋前庭部からなる複式炉、④土器埋設炉、⑤掘り込みのある地床炉の5種類があった。炉への土器の埋設方法は、正立状態が大部分であったが、①と④に分類した炉では、それぞれ1基に横倒状態での埋設がみられた。

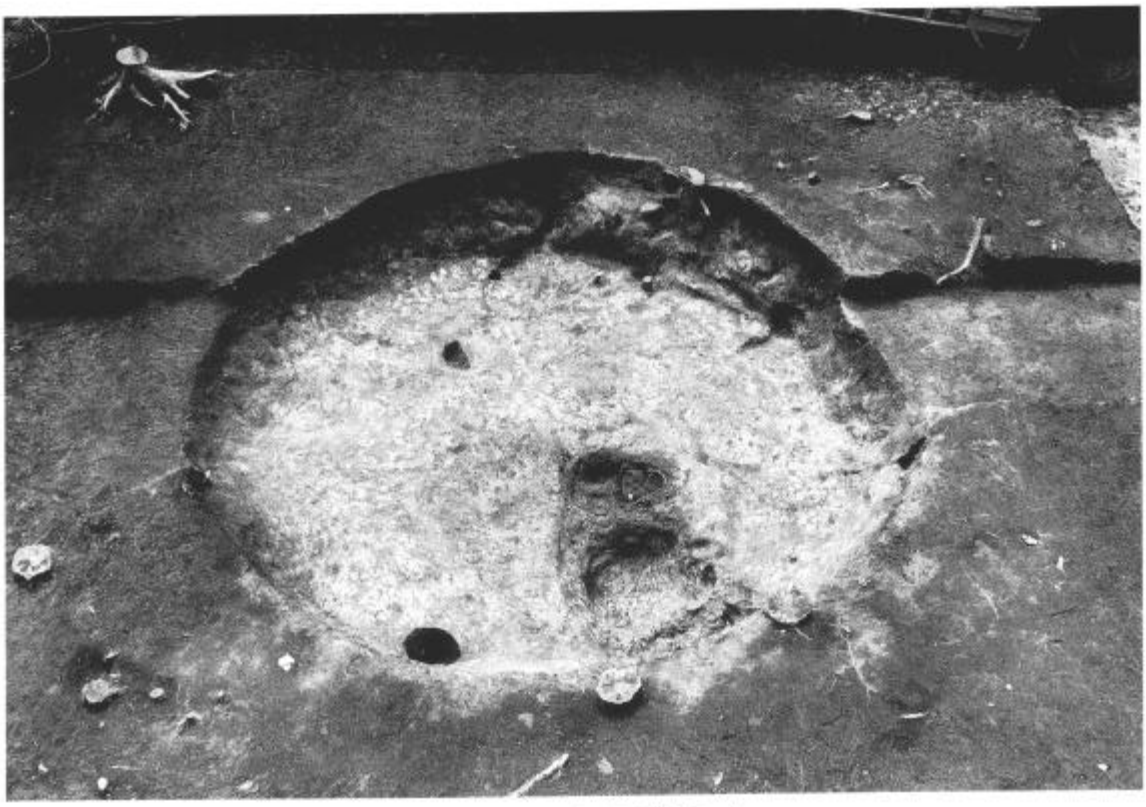
古館堤頭Ⅱ遺跡における炉の形態が、大木10式土器期の中で多様性があったことは、縄文時代中期から後期への過渡期における変化・変容としてとらえることができるのかもしれないが、どのような変遷過程を辿るのかは、発掘調査時の新旧関係把握に甘さがあり、明確にできなかった。

炉の位置、軸線方向を観察すると、広場と見られる空間を向いていたものが多い。住居の出入り口については、複式炉のある竪穴住居跡では岩手県御所野遺跡の復元例のように複式炉の前庭部を出入り口と想定する考えもあるが、明確な論拠となるような知見は得られなかった。

秋田県内では、縄文時代中期の集落が確認された例は多く、明確に環状集落と認識された遺跡や馬蹄形の集落とされている遺跡も存在する。しかし、円筒土器文化圏域となる県北部の米代川流域とその周辺地帯では、環状・馬蹄状を呈する集落は前期と中期前半には検出されず、中期後半の大木8b式土器期のあたりから、広場と見られる空間を有する「環状集落」が形成されたのではないかと考えられている。中期大木式土器文化圏の拡大を象徴するかのように造られる複式炉の形態変容・変遷と、中期から後期への過渡的段階における炉形態の変化追求と、集落研究、土器研究の深化の中で本遺跡資料が供されると考える。

1．ＳＩ01竪穴住居跡(南→)

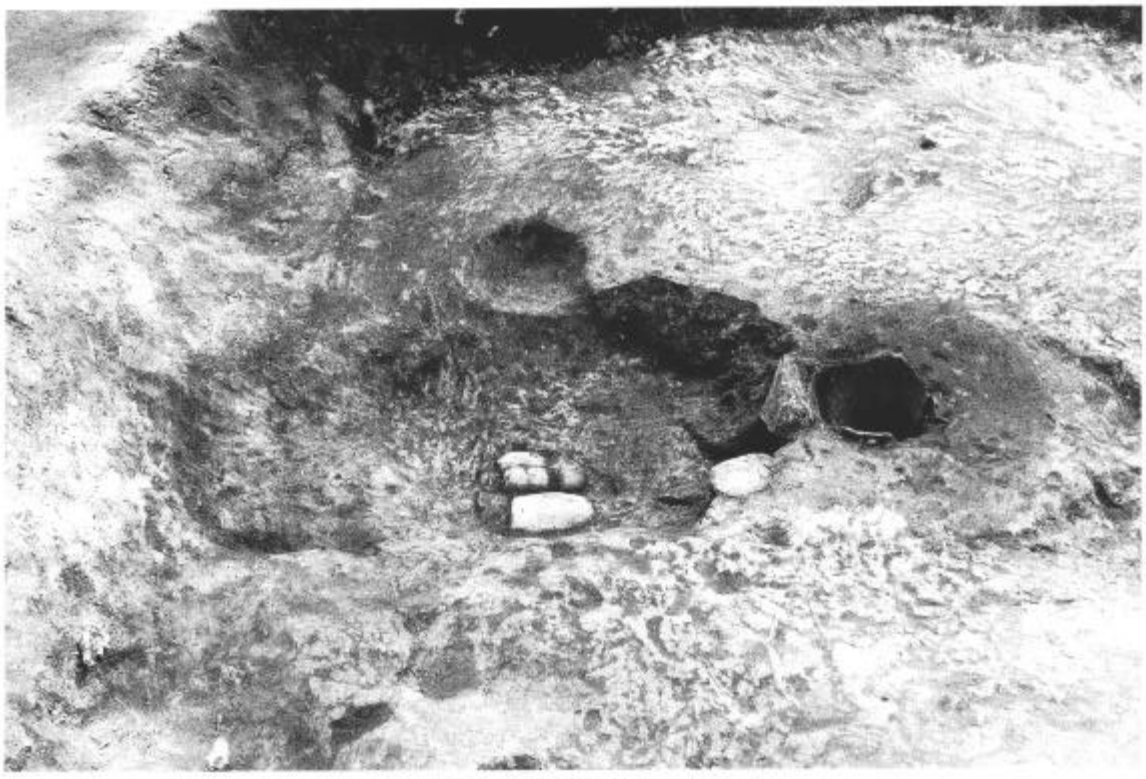
2．ＳＩ01竪穴住居跡炉(東→)



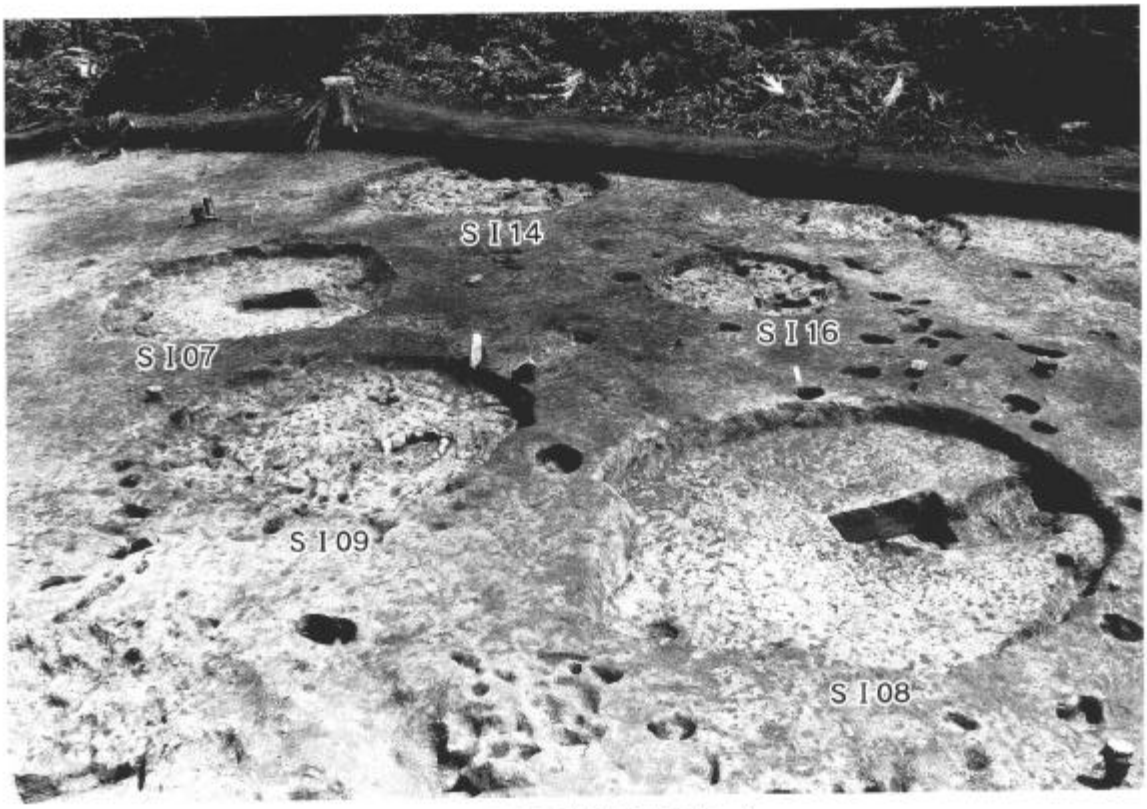
1．ＳＩ05竪穴住居跡(東→)

2．ＳＩ05竪穴住居跡炉(西→)

1．ＳＩ07竪穴住居跡断面(西→)



2．ＳＩ07竪穴住居跡炉(北東→)



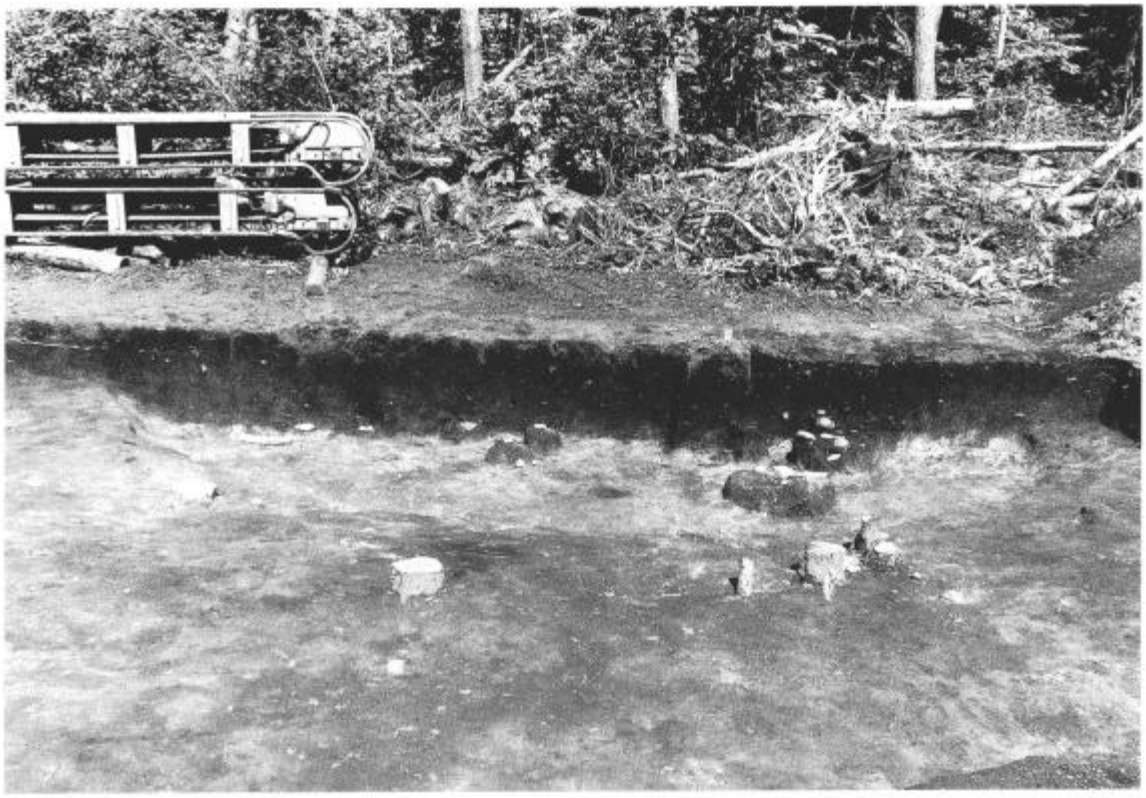
1．ＳＩ08竪穴住居跡(南西→)

2．ＳＩ08竪穴住居跡炉(南西→)

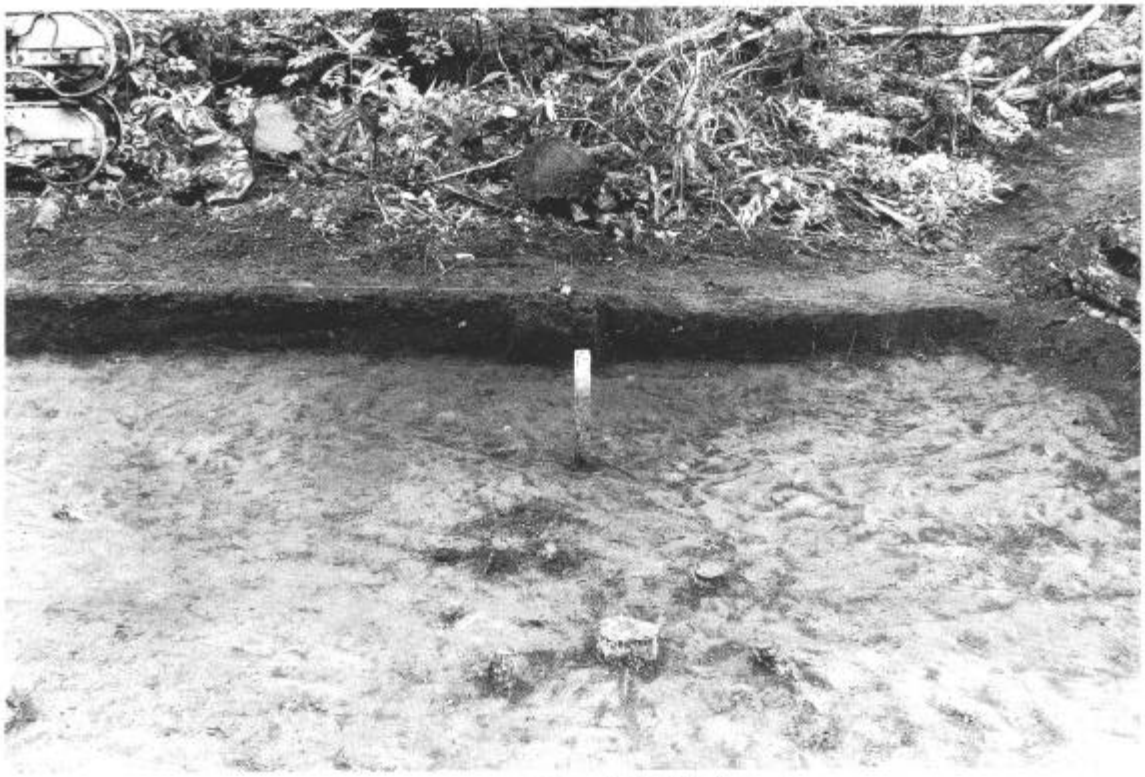
1．ＳＩ09竪穴住居跡(東→)

2．ＳＩ09竪穴住居跡炉(西→)

図版6　古館堤頭Ⅱ遺跡　検出遺構(6)

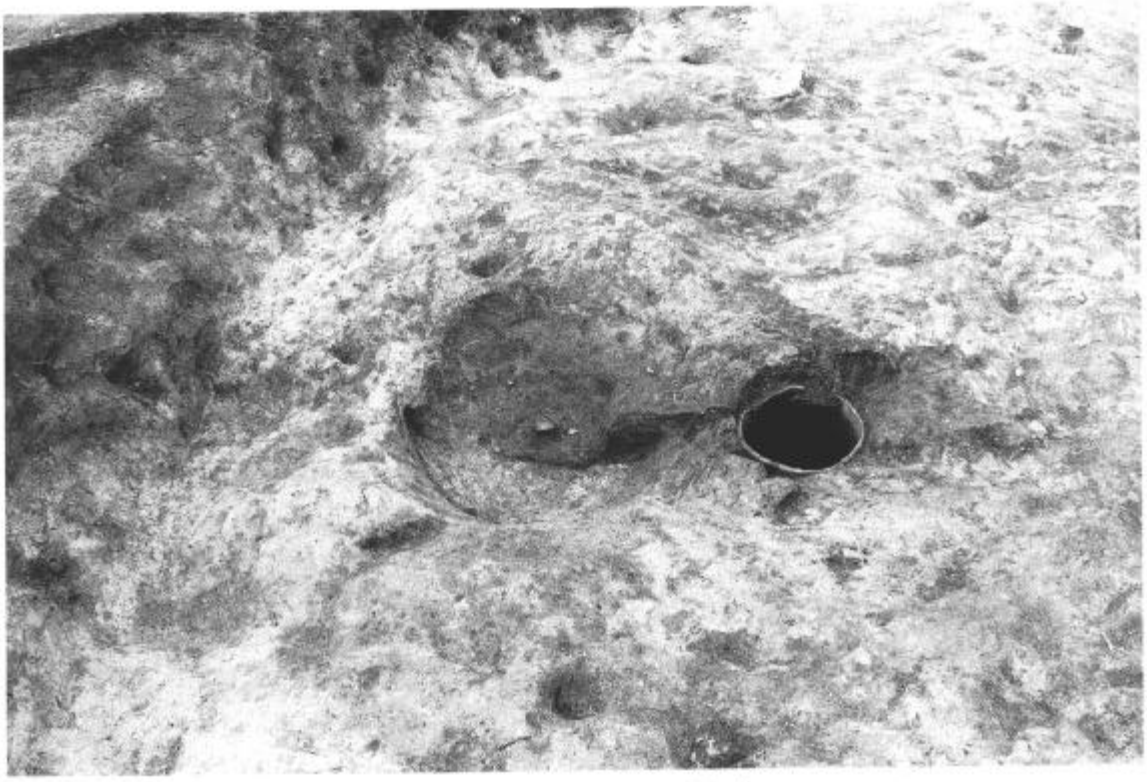


1．ＳＩ10竪穴住居跡(西→)

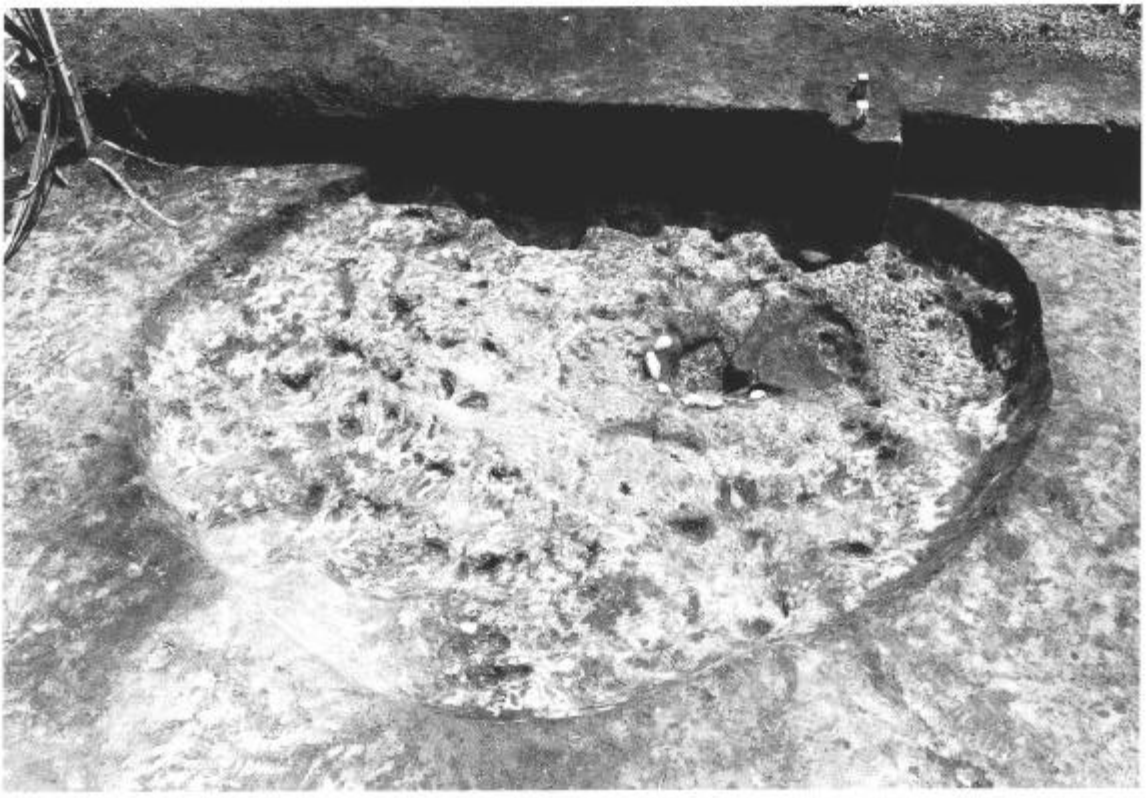


2．ＳＩ10竪穴住居跡確認状況(西→)

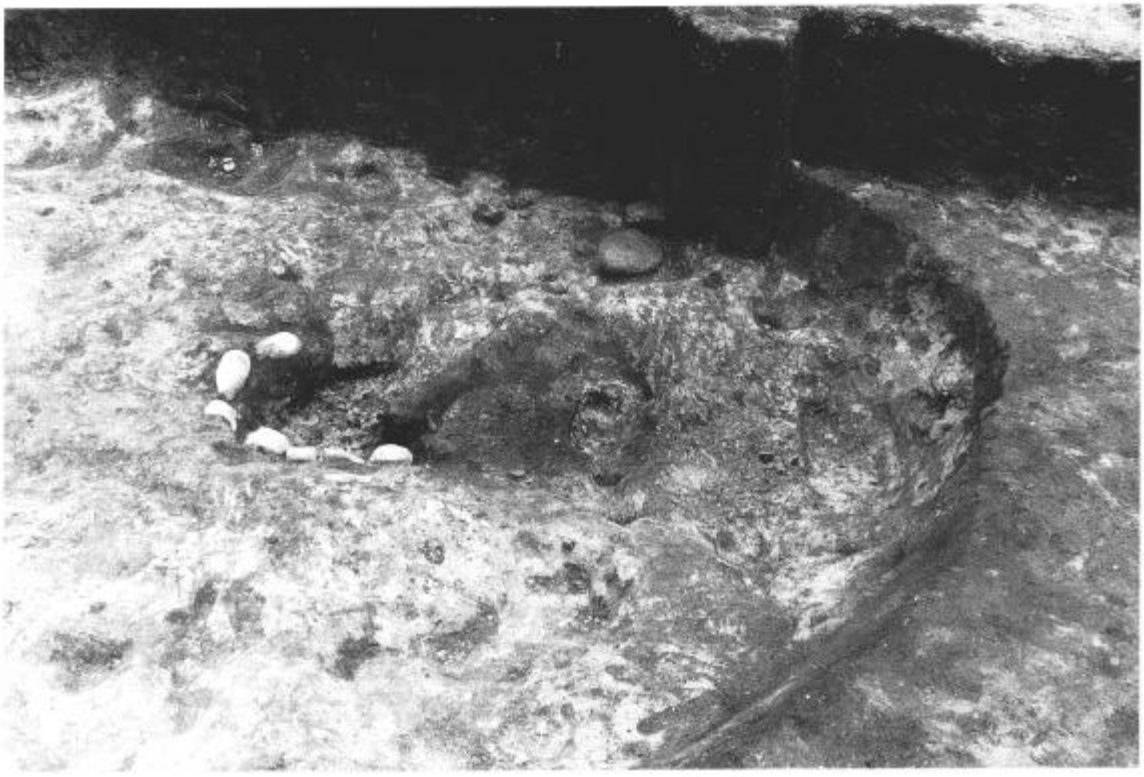
1．ＳＩ11竪穴住居跡遺物出土状況(北→)



2．ＳＩ11竪穴住居跡炉(東→)



1．ＳＩ14竪穴住居跡(西→)

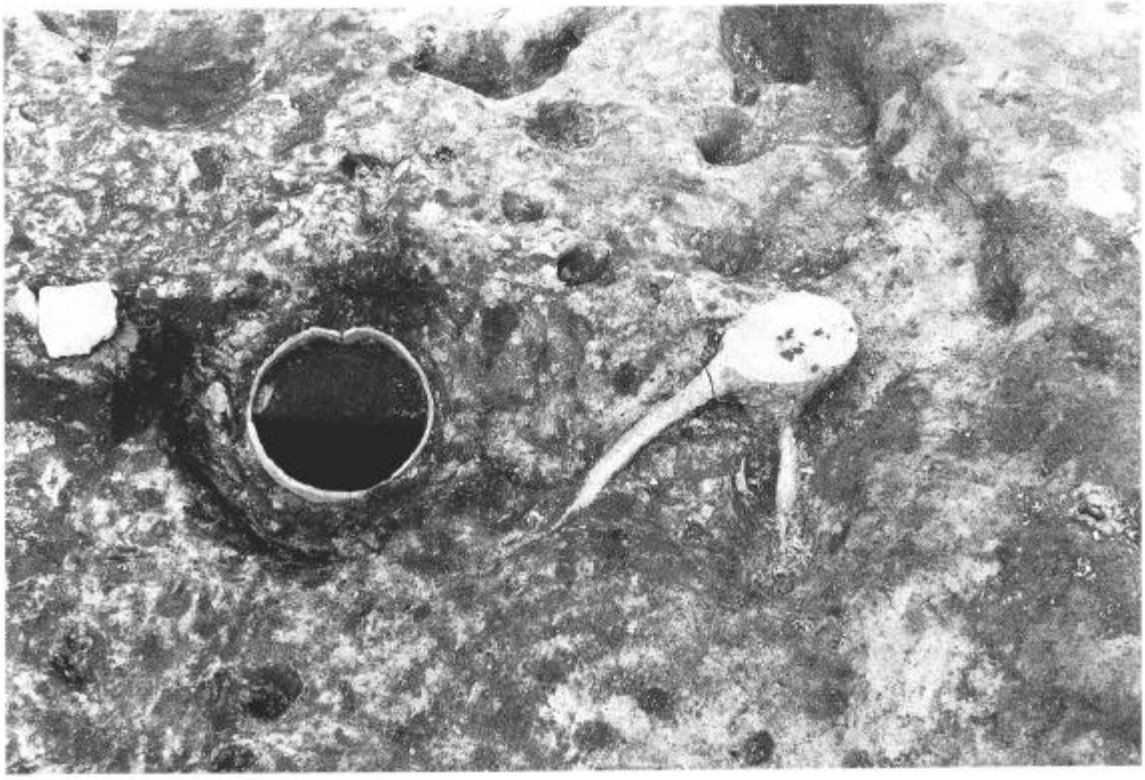


2．ＳＩ14竪穴住居跡炉(西→)

1．ＳＩ15竪穴住居跡断面(西→)

2．ＳＩ15竪穴住居跡炉埋設土器断面(南東→)

1．ＳＩ16竪穴住居跡断面(南→)



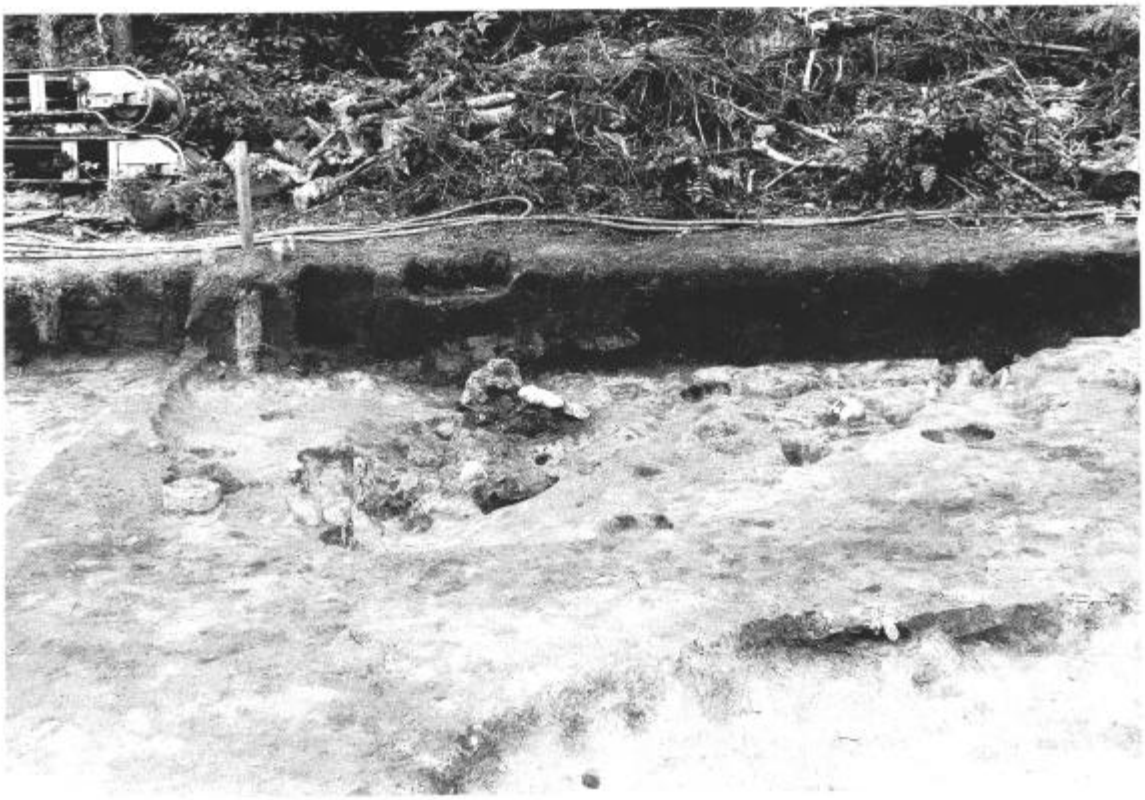
2．ＳＩ16竪穴住居跡炉(西→)

1．ＳＩ19竪穴住居跡遺物出土状況(西→)

2．ＳＩ19竪穴住居跡確認状況(西→)

1．ＳＩ21・110竪穴住居跡(南東→)

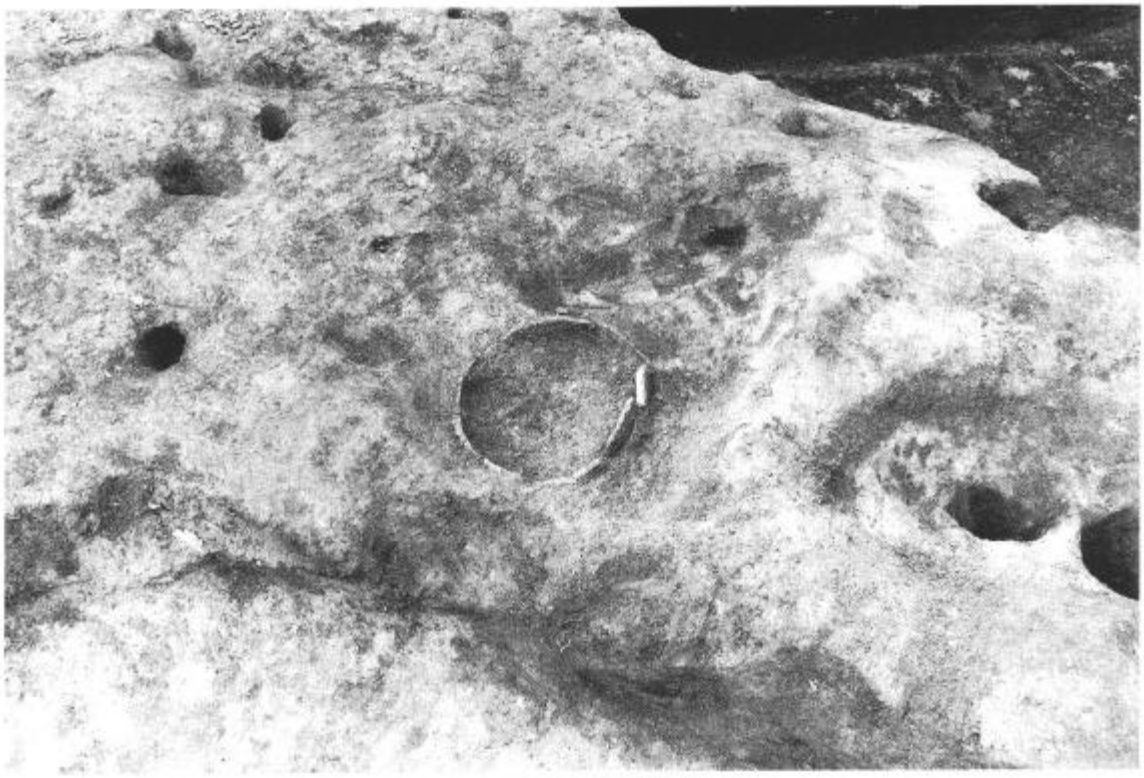
2．ＳＩ21・110竪穴住居跡炉・遺物出土状況(北東→)



1．ＳＩ22竪穴住居跡(東→)

2．ＳＩ22竪穴住居跡炉(東→)

1．ＳＩ23竪穴住居跡およびＳＫＩ33・ＳＫＦ37(北東→)



2．ＳＩ23竪穴住居跡炉(東→)

1．ＳＩ25竪穴住居跡(東→)

2．ＳＩ25竪穴住居跡炉(東→)

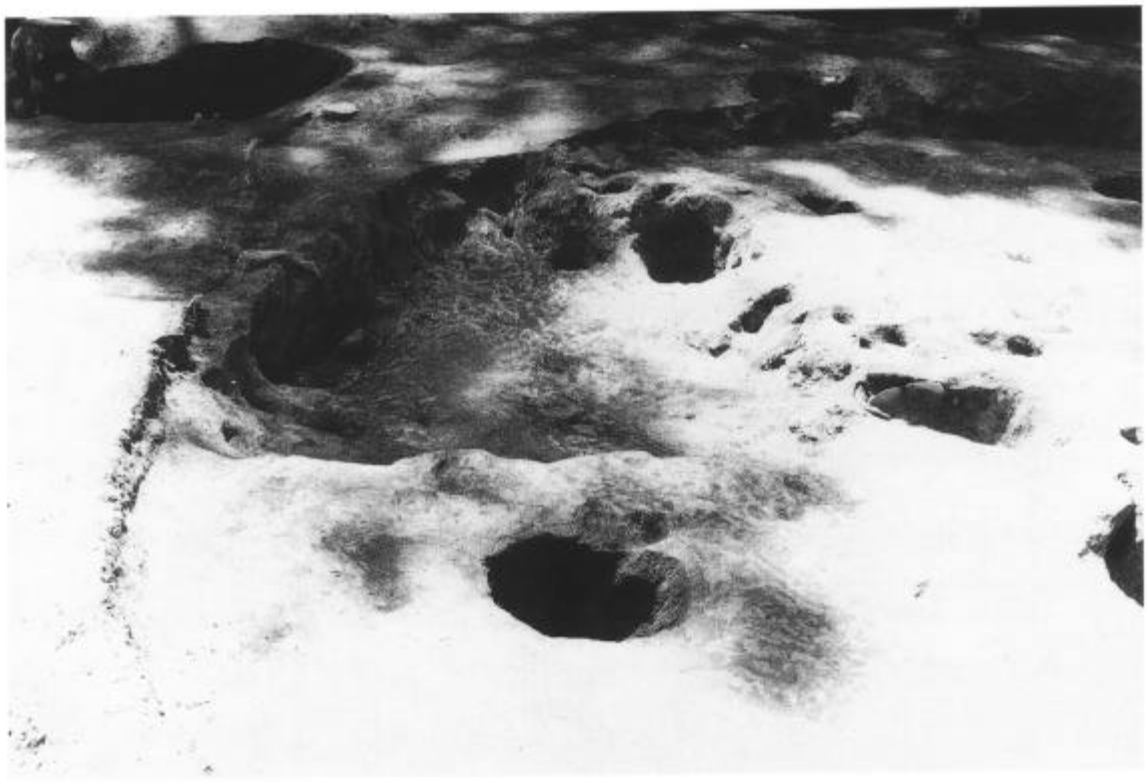
1．ＳＩ26竪穴住居跡およびＳＫ47・109、ＳＫＦ32(南→)

2．ＳＩ26竪穴住居跡炉(東→)

1．ＳＩ27竪穴住居跡(西→)

2．ＳＩ27竪穴住居跡炉(南→)

1．ＳＩ28竪穴住居跡(東→)



2．ＳＩ28竪穴住居跡炉(東→)

1．ＳＩ28竪穴住居跡
炉(北→)

2．ＳＩ28竪穴住居跡
遺物出土状況(南→)

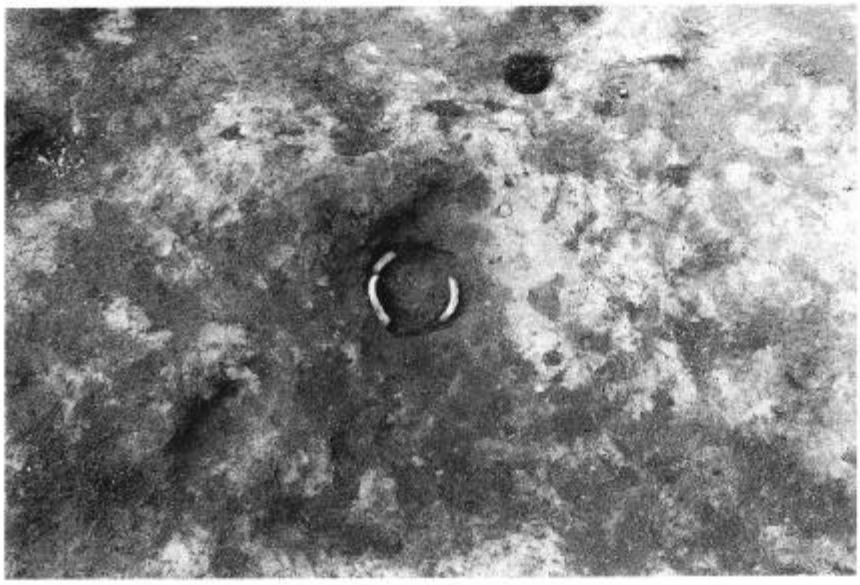
3．ＳＩ28竪穴住居跡
断面(南東→)

1．ＳＩ29竪穴住居跡断面(南→)

2．ＳＩ29竪穴住居跡炉(南西→)

1．ＳＩ30竪穴住居跡(南→)

2．ＳＩ30竪穴住居跡炉(東→)



1．ＳＩ34竪穴住居跡
炉確認状況(北東→)

2．ＳＩ34竪穴住居跡
炉(北東→)

3．ＳＩ34竪穴住居跡
炉断割(北西→)

1．ＳＩ35・36竪穴住居跡(南東→)

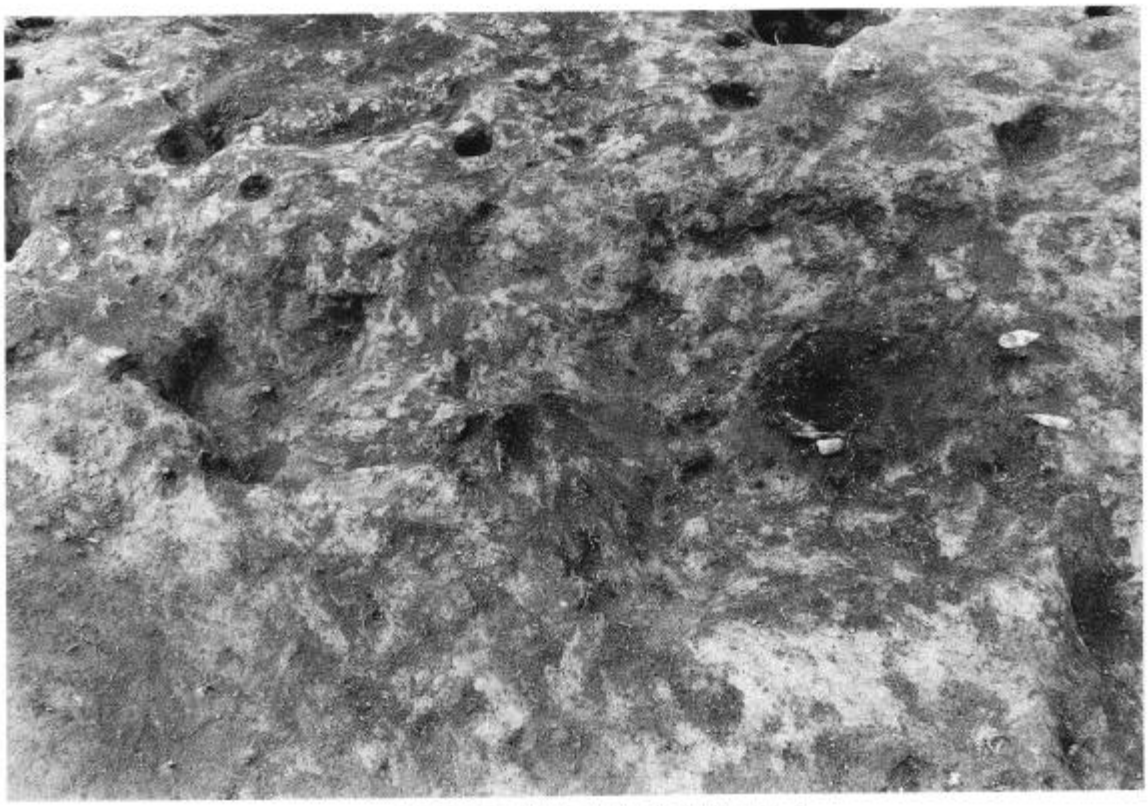
2．ＳＩ35竪穴住居跡炉(北東→)

1．ＳＩ35・36竪穴住居跡断面(南東→)

2．ＳＩ36竪穴住居跡炉(北→)

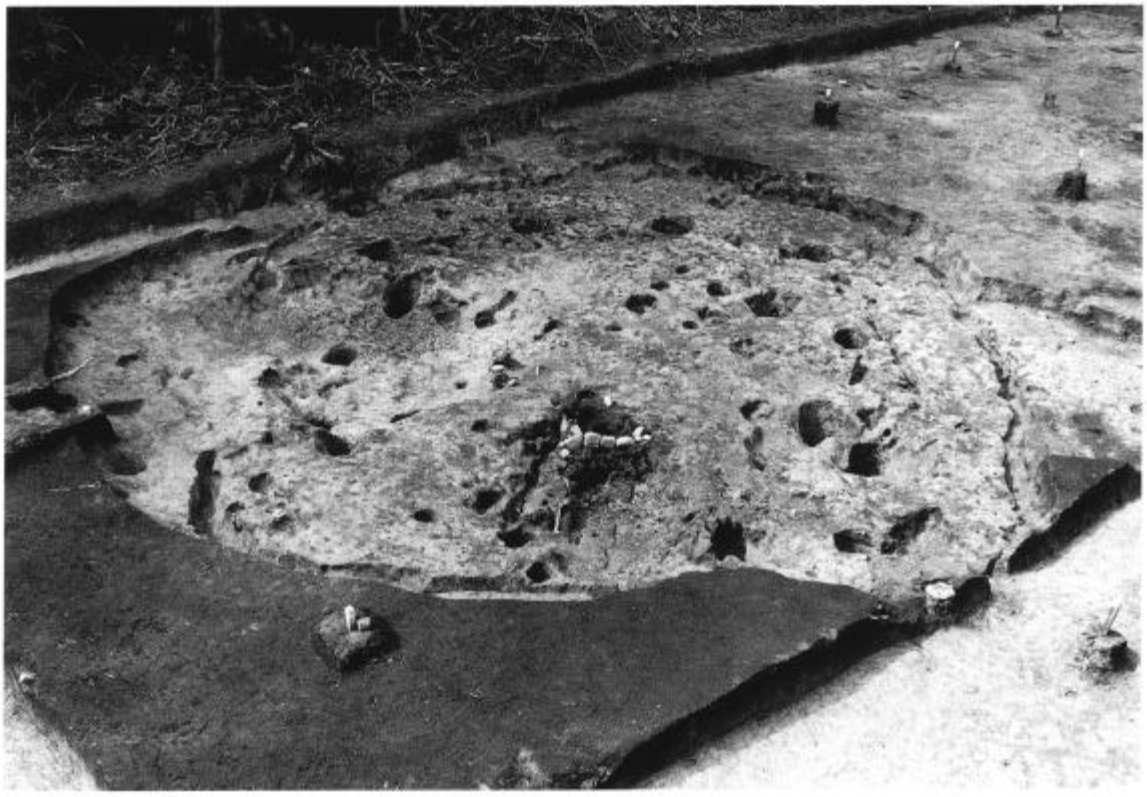
1．ＳＩ89竪穴住居跡(東→)

2．ＳＩ89竪穴住居跡炉(南東→)



1．ＳＩ102竪穴住居跡炉確認状況(東→)

2．ＳＩ102竪穴住居跡炉(南西→)



1．ＳＩ115・143竪穴住居跡(南東→)

2．ＳＩ115竪穴住居跡断面(東→)

1．ＳＩ115竪穴住居跡
炉(北東→)

2．ＳＩ115竪穴住居跡
炉(南東→)

3．ＳＩ115竪穴住居跡
炉埋設土器出土状況
(南西→)

1．ＳＩ116竪穴住居跡(西→)

2．ＳＩ116竪穴住居跡炉(北西→)